

1998年3月

『援助交際』に対する女子高校生の 意識と背景要因

報告書

研究代表者 福 富 護
(東京学芸大学教授)

(財)女性のためのアジア平和国民基金

無断転載を禁じます。

(財)女性のためのアジア平和国民基金

1998年3月発行

目 次

第Ⅰ部 調査結果の概要	1
1. 尺度	3
2. 『援助交際』に対する抵抗感や経験	12
3. 『援助交際』の背景要因－環境的背景	14
4. 『援助交際』の背景要因－心理的背景	20
5. 『援助交際』の背景要因－社会的意識と行動	25
6. 男女平等意識と『援助交際』	30
7. 男女平等意識の背景要因	32
第Ⅱ部 調査結果の概要	33
第1章 調査目的と実施状況	35
第1節 本研究の目的	35
第2節 調査の枠組み	36
第3節 調査の実施状況	39
1. 調査地域と標本抽出方法	39
(1)調査地域	39
(2)調査対象者	39
(3)標本抽出法	39
2. 調査方法と期間	39
(1)調査方法	39
(2)調査実施期間	39
(3)調査実施機関	39
3. 調査数と回収数	39
(1)調査数	39
(2)有効回収数と未回収票の内訳	39
第4節 回答者の構成	40
第2章 尺度の作成	43
第1節 マスコミ鵜呑み尺度	43
1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量	43
2. 尺度の作成過程	43
3. 尺度得点の分布と類型化	43
第2節 社会観に関する尺度	44
1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量	44
2. 尺度の作成過程	45
第3節 流行意識に関する尺度	45
1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量	45
2. 尺度の作成過程	45
3. 尺度得点の分布	46

第4節 金銭感覚に関する尺度(強迫的購買意欲尺度・金銭至上主義尺度)	46
1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量	46
2. 尺度の作成過程	48
第5節 心理尺度	49
1. 賞賛獲得欲求尺度	49
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	49
(2)尺度の作成過程	49
(3)尺度得点の分布	50
2. 公的自意識尺度	50
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	52
(2)尺度の作成過程	52
(3)尺度得点の分布	52
3. 私的自意識尺度	53
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	53
(2)尺度の作成過程	54
(3)尺度得点の分布	54
4. 充実感尺度	54
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	55
(2)尺度の作成過程	55
(3)尺度得点の分布	56
5. 自己認識欲求尺度	58
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	58
(2)尺度の作成過程	58
(3)尺度得点の分布	59
6. 自己存在感のなさ尺度	59
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	59
(2)尺度の作成過程	59
(3)尺度得点の分布	61
7. ぬくもり希求尺度	61
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	61
(2)尺度の作成過程	61
(3)尺度得点の分布	63
8. ミーイズムに関する尺度	63
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	63
(2)尺度の作成過程	63
(3)尺度得点の分布	68
第6節 友人関係に関する尺度	70
1. 友人同調尺度	70
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	70
(2)尺度の作成過程	70

(3)尺度得点の分布	71
2. 友人非干涉尺度	71
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	71
(2)尺度の作成過程	72
(3)尺度得点の分布	72
3. 自己開示傾向	72
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	72
(2)尺度の作成過程	73
(3)尺度得点の分布	73
第7節 加齢への不安尺度	74
1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量	74
2. 尺度の作成過程	74
3. 尺度得点の再カテゴリー化とその分布	75
第8節 女子高校生観（女子高校生ブランド意識）	76
1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量	76
2. 尺度の作成過程	76
3. 尺度得点の再カテゴリー化とその分布	77
第9節 恋愛観	77
1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量	77
2. 尺度の作成過程	78
第10節 男女平等意識に関する尺度	81
1. 男女平等不満尺度	81
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	81
(2)尺度の作成過程	82
(3)尺度得点の分布	83
2. 男女平等関心尺度	84
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	84
(2)尺度の作成過程	84
(3)尺度得点の分布	85
3. 男女平等規範尺度	85
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	85
(2)尺度の作成過程	86
(3)尺度得点の分布	87
4. 性別意識：ダブルモラル度について	87
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量	88
(2)尺度の作成過程	88
(3)ダブルモラル各項目に対する回答頻度の男女差	91
第11節 親に対する態度（親への愛情尺度）	93
1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量	93
2. 尺度の作成過程	96

3. 尺度得点の分布	98
第12節 非行規範に関する尺度	98
1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量	98
2. 尺度の作成過程	98
3. 尺度得点の分布	100
第13節 精神的健康尺度	100
1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量	102
2. 尺度の作成過程	104
3. 尺度得点の分布	106
第3章 『援助交際』に対する態度や経験	110
第1節 『援助交際』に対する抵抗感	110
1. 項目の構成	110
2. 女子高校生の『援助交際』に対する抵抗感	110
3. 『援助交際』の抵抗感の構造	111
4. 『援助交際』に対する抵抗感の尺度化	113
第2節 『援助交際』に対する態度	113
1. 項目の構成と基礎統計量	113
2. 尺度の作成過程	114
3. 尺度得点による類型化	117
第3節 『援助交際』の経験	117
1. 『援助交際』経験の実態	117
2. 友達からの体験談	118
3. 『援助交際』をする時の気持ちと理由	119
4. 『援助交際』経験後の気持ち	121
第4節 『援助交際』に対する抵抗感・態度・経験との関連	121
1. 『援助交際』に対する抵抗感・経験と『援助交際』態度との関連	121
2. 『援助交際』の経験と抵抗感	126
第4章 『援助交際』の背景要因	128
第1節 環境的背景	128
1. 家庭環境	128
(1)同居家族	128
① 同居家族の実情	128
② 『援助交際』に対する抵抗感・経験と同居家族	129
(2)親に対する態度	130
①親への愛情尺度	130
② 『援助交際』に対する抵抗感・経験と親への愛情	130
③親に対する感じ方	131
④ 『援助交際』に対する抵抗感・経験と親に対する感じ方	131
(3)家庭への感じ方	134
① 家庭への感じ方	134

②『援助交際』に対する抵抗感・経験と家庭への感じ方	134
(4)男女問題に関する親との話し合い	135
① 男女問題に関する親との話し合い	135
②『援助交際』に対する抵抗感・経験と男女問題に関する親との 話し合い	135
(5)親の属性	135
① 親の属性	135
②『援助交際』に対する抵抗感・経験と母親の就労状況	136
2. 学校環境	137
(1)『援助交際』に対する抵抗感・経験と学校属性および学年	137
(2)学校に対する感じ方	139
① 学校に対する感じ方	139
②『援助交際』に対する抵抗感・経験と学校への感じ方	141
③学校の楽しさ	142
④『援助交際』に対する抵抗感・経験と学校の楽しさ	143
(3)授業やホームルームでの話し合い	143
①「授業やホームルームで異性交際について話し合った」	144
②「授業などで『援助交際』について話し合った」	144
③「教師から女らしくしなさいと言われた」	146
(4)『援助交際』に対する抵抗感・経験と学歴社会や受験戦争に対する 考え方	147
3. 友人環境	147
(1)『援助交際』に対する抵抗感・経験と友人関係に関する尺度との関連	147
①友人同調尺度と友人非干渉尺度	147
②同調傾向・非干渉傾向の4類型化	148
③友人自己開示尺度	149
(2)周囲の『援助交際』経験との関連	150
4. 経済環境や経済的な意識との関連	151
(1)高校生の経済環境	151
(2)『援助交際』に対する抵抗感・経験と経済環境との関連	153
(3)『援助交際』に対する抵抗感・経験と経済的な意識との関連	154
5. 情報環境	156
(1)『援助交際』に対する抵抗感・経験とマスコミに流されない態度 との関連	156
(2)通信機器の所有	156
①通信機器の所有の状況	156
②『援助交際』に対する抵抗感や経験と通信機器の所有	157
第2節 心理的背景	158
1. 自己意識	158
(1)女子高校生の自己意識の状況	158

(2)『援助交際』に対する抵抗感・経験と自己意識との関連	161
2. 問題行動念慮と非行規範	164
(1)問題行動念慮	164
①問題行動念慮	164
②『援助交際』に対する抵抗感・経験と問題行動念慮	165
(2)非行規範意識	166
①非行規範意識尺度	166
②『援助交際』の抵抗感・経験と非行規範意識	166
③『援助交際』の抵抗感・経験と『援助交際』に対する規範意識	167
3. 精神的健康	168
(1)精神的健康尺度	168
(2)『援助交際』に対する抵抗感・経験と精神的健康	169
第3節 社会的意識と行動	171
1. 社会に対する意識との関連	171
(1)社会観	171
(2)流行意識と女子高校生観	172
(3)『援助交際』に対する抵抗感・経験との関連	172
①社会観との関連	172
②流行意識・女子高校生ブランド意識との関連	174
2. 異性交際との関連	174
(1)異性交際の実態	175
(2)『援助交際』に対する抵抗感・経験と異性交際との関連	175
3. 性意識や性的行動との関連	178
(1)性意識や性的行動の実態	178
(2)『援助交際』に対する抵抗感・経験と性意識や性的行動との関連	179
4. 性風俗との接触	182
(1)性風俗や性的情報への接触の実態	182
(2)『援助交際』に対する抵抗感・経験と性風俗や性的情報接触との関連	182
第5章 男女平等意識と『援助交際』	184
第1節 性差の認識と『援助交際』	184
1. 性差の認識	184
2. 『援助交際』に対する抵抗感・経験と性差の認識との関連	186
3. 『援助交際』否定・不安尺度と性差の認識との関連	188
第2節 男女の行動に対するダブルモラルの認識と『援助交際』	189
1. 「服装やおしゃれにお金と時間をかける」	189
2. 「家事や育児よりも仕事を優先する」	190
3. 「街で酔っぱらう」	192
4. 「街でナンパする」	193
5. 「告白する（1対1の交際を申し込む）」	194
6. 「セックスの経験が豊富である」	195

7.まとめ	197
第3節 将来の進路と『援助交際』	197
1. 卒業後の進路希望と『援助交際』	197
2. 将来の仕事希望と『援助交際』	199
第4節 男女平等不満・男女平等関心・男女平等規範と『援助交際』	200
1. 男女平等不満と『援助交際』	201
2. 男女平等関心と『援助交際』	201
3. 男女平等規範と『援助交際』	202
4. まとめ	202
第5節 男女平等意識の背景要因	203
1. 学校種別と学年別	205
2. 小遣いの額	205
3. 母親の就業状況	206
4. 家庭構成(兄弟姉妹の有無と祖父母との同居の有無)	206
5. 家庭内での親のしつけ	207
6. 家庭内での父母の立場や役割	209
7. 学校での男女平等教育	210
8. 友達と男女平等を話し合う	211
9. 性被害の経験	212
10. まとめ	213
第6章 総合的考察	215
第1節 『援助交際』に対する抵抗感と経験	215
第2節 『援助交際』の環境的背景要因	216
第3節 『援助交際』の心理的背景要因	217
第4節 その他の背景要因	218
第5節 男女平等意識と『援助交際』	219
第6節 今後への提言	220
第III部 個別プロフィールと時系列変化	221
第1章 『援助交際』経験者と男女平等意識が高く『援助交際』に抵抗感を持つもののプロフィール	223
第1節 対象の選択	223
第2節 環境的背景の比較	224
1. 家庭環境について	224
2. 学校環境について	225
3. 友人環境について	226
4. 経済環境について	227
5. 情報環境について	227
第3節 心理的背景の比較	227
1. 自己意識について	227

2. 問題行動念慮と非行規範について	229
3. 精神的健康について	229
第4節 社会意識と行動の比較	229
1. 社会観について	229
2. 異性交際・性的行動について	230
第5節 『援助交際』に対する態度	231
第6節 男女平等意識	232
第7節 プロフィールのまとめ	233
第2章 時系列変化	235
第1節 比較の対象とした調査および項目	235
第2節 時系列比較の結果	240
1. 環境的背景	240
(1)家庭環境（親・家庭への態度）	240
(2)学校環境（学校への感じ方）	241
(3)友人環境（友人関係に対する態度）	241
(4)経済環境（アルバイトの経験と経済的な意識）	241
(5)情報環境（マスコミに対する態度）	242
2. 心理的背景	242
(1)自己意識（公的自意識）	242
(2)問題行動念慮	242
3. 社会的意識（社会観）	243
4. まとめ	243
引用文献	245
付表(調査票と基本統計)	249

執筆分担

福富 譲（東京学芸大学教授）	第Ⅰ部、第Ⅱ部第1章1節、第Ⅱ部第5章、第6章、 第Ⅲ部第1章
松井 豊（筑波大学助教授）	第Ⅱ部第1章・2節・3節・4節、第2章4節・9節 第3章1節、第4章1節4・3節2・3・4
成田健一（東京学芸大学助教授）	第Ⅱ部第2章10節4・13節、第4章2節3
上瀬由美子（江戸川大学助教授）	第Ⅱ部第2章5節・7節・8節、第4章2節1・3節 1
宇井美代子（東京学芸大学大学院）	第Ⅱ部第2章10節1・2・3、第3章3節・3節・4 節
菊島充子（東京学芸大学大学院）	第Ⅱ部第2章11節、第4章1節1・2、第Ⅲ部第2章
櫻庭隆浩（横浜国立大学大学院）	第Ⅱ部第2章1節・2節・3節・6節・12節、第4章 1節3・5・2節2

第Ⅰ部 調査結果の概要

1. 尺度

(1) マスコミ鵜呑み尺度

「テレビでとりあげる若者の性行動は、誇張が多くて信用できないものが多い」
「テレビや雑誌にのっている高校生の話は、自分とかけはなれている」
「テレビや雑誌などの情報は信用できない」
各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算(3~4点=低群423人、5~6点=高群177人)。高群は、マスコミに流されない態度を示す。

(2) 流行意識尺度

「流行のものは買うようにしている」
「流行を取り入れると個性が失われる」(逆転項目)
「流行を取り入れるのは楽しい」
「流行についての記事や話に関心がある」
「流行に乗り遅れるのはいやだ」
「流行には逆らわない方がよい」
各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算($M=8.4:SD=1.5$)。高得点は、流行を取り入れようとする態度を示す。

(3) 強迫的購買意欲尺度

「いつも何かを買いたい気持ちがする」
「バッグや小物は、他の人よりいいものを持ってみたい」
「お店でいい小物を見つけると、すぐに買いたくなる」
「友人がいいバッグや小物を持っていると、ついつい欲しくなってしまう」
「自分が欲しいもののためならば、何万円使ってもおしくない」
「欲しいものがあると、ついつい衝動買いしてしまう」
「多少無理をしてでもお金が欲しい」
各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算(7点=1点、8点=2点、9点=3点、10~11点=4点、12~14点=5点に再得点 $M=2.7:SD=1.3$)。高得点は、常に商品を買いたいという衝動を抱く。

(4) 金銭至上主義尺度

「大金を得るためならば、多少イヤなことでもガマンする」
「お金があれば、世の中のほとんどのことは困らないと思う」
「人間何をするにも先立つものはお金である」
「やっぱり、世の中はお金次第だと思う」
「お金があれば、心にゆとりができる」

各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算(5点=1点、6点=2点、7~8点=3点、9~10点=4点に再得点 M=2.1:SD=1.0)。高得点は、金銭を重要視する態度を示す。

(5)賞賛獲得欲求尺度

- 「みんなの人気ものになりたい」
- 「何か気のきいたことをいって人を感心させたい」
- 「みんなの注目をあびたい」
- 「人まえではいつもかっこよくありたい」

当てはまる5点～当てはまらない1点として単純加算(M=13.1:SD=3.6)。高得点は、人から認められたい、人にほめられたいという傾向を示す。

(6)公的自意識尺度

- 「自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる」
- 「人にみられていると、ついかっこうをつけてしまう」
- 「自分の外見や容姿（ようし）を気にするほうだ」
- 「人まえで何かする時、自分のしぐさや姿が気になる」

当てはまる5点～当てはまらない1点として単純加算(M=14.3:SD=3.2)。高得点は、他者が見た自己の側面に対する意識が強い。自分の外見に常に気を使い、ファッショングに敏感であったり、その場の雰囲気に相応しいように振る舞いを変える。

(7)私的自意識尺度

- 「自分自身の内面のことには、あまり関心がない」（逆転項目）
- 「ふと一步離れた所から自分をながめてみることがある」
- 「他人を見るように自分をながめてみることがある」
- 「つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている」

当てはまる5点～当てはまらない1点として単純加算(M=13.7:SD=3.5)。高得点は、自分の感情の変化に敏感であろうと努め、他者の意見に左右されるよりも自分自身の態度の一貫性を保とうとする。

(8)自己充実感尺度

- 「自分が毎日していることに、大した意味はないと感じる」（逆点項目）
- 「毎日の生活が充実している」
- 「今の生活に満足している」
- 「毎日が同じことのくり返しで退屈（たいくつ）だ」（逆点項目）
- 「生きていて楽しいと感じる時がある」
- 「毎日がなんとなく過ぎていく」（逆転項目）

当てはまる5点～当てはまらない1点として単純加算($M=19.2$ $SD=4.8$)。高得点は、普段の生活を充実感に満ちて送っている。

(9)自己認識欲求尺度

- 「自分についてもっと理解したいと思うことがある」
- 「自分の性格についてもっとくわしく知りたい」
- 「自分が本当にしたいことを見つけたい」
- 「これから的人生で、自分には何ができるのか知りたい」
- 「自分は周囲の人からどうみられているのか知りたい」

当てはまる5点～当てはまらない1点として単純加算($M=19.6$ $SD=4.0$)。高得点は、普段の生活の中で自分自身を知りたいと感じ、自分に関する情報を積極的に取り入れようとする。

(10)自己存在感のなさ尺度

- 「私の代わりは世の中にたくさんいる」
- 「私はかけがえのない存在だ」（逆転項目）
- 「私がいなくても、だれもこまらない」
- 「私がどうなっても悲しむ人はいない」
- 「私のことを心から心配してくれる人はいない」
- 「だれも私を相手にしてくれないような気がする」

当てはまる5点～当てはまらない1点として単純加算($M=13.7$ $SD=4.8$)。高得点は、自分はかけがいのない存在であるという意識が少なく、自分自身を大切にしない。

(11)ぬくもり希求尺度

- 「だれかにそばにいてほしい、と思うことがある」
- 「だれかにやさしくしてほしい、と思うことがある」
- 「異性とふれあっている時は、さびしさを忘れられる」
- 「たまらなくさびしくなることがある」
- 「人のあたたかさがむしように欲しくなることがある」

当てはまる5点～当てはまらない1点として単純加算($M=17.6$ $SD=5.0$)。高得点は、人とのかかわりやぬくもりを求める傾向が強い。

(12)ミーアズム(関心の狭さ・享楽主義・現在重視・将来無関心)尺度

〈関心の狭さ〉

- 「自分が満足していれば人が何をいおうと気にならない」
- 「他人のために時間やエネルギーを使いたくない」

「社会全体のことを考えてもしようがない」
「自分さえよければよいと思う」
「人に迷惑（めいわく）をかけなければ何をしててもよい」
〈享楽主義〉
「自分が楽しいかどうかが、生きていく上で一番大切なことだ」
「いつも楽しいことだけをしてみたい」
「しなくともいい苦労はぜったいに避けたい」
「楽しくなければ生きているかいがない」
〈現在重視〉
「二度と来ない今が大切だ」
「今が大切にできないで将来が大切にできるはずがない」
「自分の気持ちに正直に生きている」
〈将来無関心〉
「今が楽しければそれでよい」
「どうなるかわからない先のことを考えても仕方がない」
「将来のことをいちいち考えて、それにしばられるのは不自由だ」
当てはまる5点～当てはまらない1点として単純加算(関心の狭さ:M=12.3 SD=3.7、享楽主義:M=14.1 SD=3.1、現在重視:M=11.3 SD=2.3、将来無関心:M=8.3 SD=2.9)。
〈関心の狭さ〉高得点は、自己中心性や関心の狭さを示す。
〈享楽主義〉高得点は、楽しみを強く求める傾向を示す。
〈現在重視〉高得点は、現在こそが大切であるとする傾向を示す。
〈将来無関心〉高得点は、将来を考えて現在を努力することがない傾向を示す。

(13)友人同調尺度

「できるだけ仲間と同じように行動したい」
「何をするにもみんなと一緒にだと安心する」
「仲間はずれにされるのはぜったいイヤだ」
「仲間内で流行遅れになるのはイヤだ」

各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算(4～5点=低群196人、6～8点=高群404人)。高群は、友人に同調する傾向が強い。

(14)友人非干渉尺度

「相手の考えていることに口をはさまない」
「おたがいに相手に甘えすぎない」
「おたがいの領分（りょうぶん）にふみこまない」

各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算(3点=低群347人、4～6点=高群253人)。高群は、友人に対して干渉しない傾向を示す。

(15)自己開示尺度

「好きな異性のことについて話している」

「友人に悩み（なやみ）を打ち明けている」

「友人と将来のことについて話している」

各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算($M=4.8:SD=1.1$)。高得点は、友人に對して自分の悩みなどを打ち明ける傾向を示す。

(16)加齢不安尺度

「人生の中で、今が最も楽しい時だと思う」

「高校を卒業したら、流行の先端から外れてしまいそうでさびしい」

「高校生時代は、何をしても許される最後の時期だ」

「歳（とし）をとるにつれ、人生はつまらなくなりそうだ」

「女性にとって若さは、最大の魅力である」

各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算(5点=1点、6点=2点、7=3点、8~10点=4点に再得点 $M=2.2:SD=1.1$)。高得点は、女性の若さを価値づけて、加齢に對して不安を感じる傾向が高い。

(17)女子高校生ブランド尺度

「女子高校生でいると、得をすることが多い」

「女子高校生だからというだけで、ちやほやされている人が多い」

「女子高校生とつきあいたいと考えている男性はたくさんいる」

「女子高校生というだけで、特別の魅力がある」

各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算(4点=1点、5点=2点、6=3点、7~8点=4点に再得点 $M=2.1:SD=1.1$)。高得点は、女子高校生であることの特権意識が高い。

(18)肯定的恋愛態度尺度・否定的恋愛態度尺度

〈肯定的恋愛態度〉

「楽しい」「幸せ」「おもしろそう」「明るい」「あこがれる」「好きならば当然」「あたたかい」「真剣な」「あてはまるものはない」

各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算(9~12点=低群280人、13~18点=高群320人)。

〈否定的恋愛態度〉

「わざらわしい」「しばられる」「こわい」「2人だけの」

各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算(4点=低群437人、5~8点=高群163人)。

2つの尺度の組み合わせから

弱い：肯定的（低）・否定的（低） 恋愛に対するイメージが弱い。
肯定：肯定的（高）・否定的（低） 恋愛の良い面ばかりをイメージしている。
否定：肯定的（低）・否定的（高） 恋愛の責任だけを強く感じ、否定的に受け止めている
両価：肯定的（高）・否定的（高） 恋愛の肯定的側面と否定的側面を共に意識している。

(19)男女平等不満尺度

「合宿などで女子だけが炊事（すいじ）や洗濯（せんたく）をする」
「家で女の子だけが家事を手伝わされる」
「学校の名簿が男女別で、男子の方が先になっている」
「ミス・コンテストなど、容姿（ようし）で女性が評価される」
「すすんで何かをやろうとすると、「女のくせに」と言われる」
「進路指導で「女だから」という理由で進路が限られる」
「マスコミで女教師・女医など、女性であることが強調されて表現されている」
各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算($M=9.0:SD=1.7$)。高得点は、女性差別的な日常の現象に対して不満を感じている。

(20)男女平等関心尺度

「女性問題に关心がある」
「男女平等について友達と話し合うことがある」
「将来の自立した生き方について考えたことがある」
「親と「女性の自立」について話し合うことがある」
「親と「異性との交際」について話し合うことがある」
「仕事と結婚の両立について考えたことがある」
各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算($M=7.3:SD=1.4$)。高得点は、女性問題や男女平等について日頃関心があり、話し合っていることを示す。

(21)男女平等規範尺度

「男性は仕事を中心に、女性は過程を中心生活した方がいい」（逆転項目）
「女性は子どもが生まれても仕事を続けた方がいい」
「女性は社会で活躍するよりも家事や育児をしていた方がいい」（逆転項目）
「女性に高い学歴は必要ない」（逆転項目）
「家事は夫婦で分担した方がいい」
「男女の関係は常に対等であるべきである」
「女性はもっと社会で活躍（かつやく）した方がいい」
「国会など国の方針を決める場で、女性の数が少なすぎる」
各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算($M=13.1:SD=2.0$)。高得点は、男女平等意識を内面化し、社会全体における男女平等を志向する傾向が強い。

(22) 親への愛情尺度

- 「父は私に対して暖かい」
- 「父は私の気持ちをわかろうとしている」
- 「父は頼りがいがある」
- 「将来、父のような生き方をしたい」
- 「父を尊敬している」
- 「母は私に対して暖かい」
- 「母は私の気持ちについてわかろうとしている」
- 「母は頼りになる」
- 「将来、母のような生き方をしたい」
- 「母を尊敬している」
- 「両親の仲はよその家庭にくらべてよい」
- 「親から私は充分（じゅうぶん）愛されていると思う」
- 「将来、両親のような家庭を築きたい」

各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算($M=18.1$: $SD=3.6$)。高得点は、親を尊敬し、親から愛されているという意識が強い。

(23) 非行規範尺度

- 「たばこを吸う」
- 「お酒を飲む」
- 「テレクラに電話をする」
- 「無断外泊をする」
- 「ブルセラショップに下着などを売る」
- 「親の財布（さいふ）からだまって金を持ち出す」
- 「万引きをする」
- 「人のお金や物をおどしてとりあげる」

悪い4点～悪くない1点として単純加算($M=26.7$: $SD=4.3$)。高得点は、各種の非行行為に対して悪いことだとする規範意識が高い。

(24) 精神的健康尺度

〈身体的症状〉

- 「気分や健康状態は」
- 「疲労回復剤（ドリンク・ビタミン剤）を飲みたいと思ったことは」
- 「元気なく疲れを感じたことは」
- 「病気だと感じたことは」
- 「頭痛がしたことは」

「頭が重いように感じたことは」

「からだがほてったり寒気がしたことは」

〈不安と不眠〉

「心配ごとがあつて、よく眠れないようなことは」

「夜中に目を覚ますことは」

「いつも（しょっちゅう）ストレスを感じたことは」

「いろいろして、おこりっぽくなることは」

「たいした理由がないのに、何かがこわくなったりとりみだしたり（落ち着かなくな
り、混乱する）したことは」

「いつもより（ふだんより）いろいろなことを重荷（負担）と感じたことは」

「不安を感じ緊張（きんちょう）したことは」

〈社会的活動障害〉

「いつもより（ふだんより）忙しく活動的な生活を送ることが」

「いつもより（ふだんより）何かするのによけいに時間がかかることが」

「いつもより（ふだんより）すべてがうまくいっていると感じることが」

「毎日している勉強（仕事）は」

「いつもより（ふだんより）自分のしていることに生きがいを感じることが」

「いつもより（ふだんより）容易に（簡単に）物事を決めることができ」

「いつもより（ふだんより）日常生活を楽しく送ることが」

〈うつ状態〉

「自分は役に立たない人間だと考えたことは」

「人生に全く望みを失ったと感じたことは」

「生きていることに意味がないと感じたことは」

「この世から消えてしまいたいと考えたことは」

「ノイローゼ気味で何もすることができないと考えたことは」

「死んだ方がましだと考えたことは」

「自殺しようと考えたことは

各項目に対して、「まったくなかった」「あまりなかった」を0点、「あった」「たびたびあった」を1点として単純加算（身体的症状： $M=3.0$ $SD=2.1$ 、 不安と不眠： $M=2.5$ $SD=2.0$ 、 社会的活動障害： $M=1.7$ $SD=1.8$ 、 うつ状態： $M=1.0$ $SD=1.7$ 総合得点： $M=8.1$ $SD=5.6$ ）。

〈身体的症状〉

〈不安と不眠〉

〈社会的活動障害〉

〈うつ状態〉

(25) 『援助交際』否定・不安尺度

「自分を大事にする人は、援助交際をやらないと思う」

「援助交際は女性の地位を低めると思う」

「援助交際をしたがる男性は気持ち悪い」
「援助交際は女性に対する侮辱(ぶじょく)だと思う」
「援助交際には、暴力をふるわれたり病気を移されたりする等の危険がある」
「援助交際をやると、金銭感覚が狂って(くるって)しまうと思う」
「援助交際をやると、周囲の人に顔向けできなくなってしまう」
「援助交際をやると、まともな生活が送れなくなると思う」
「援助交際は売春のひとつである」

各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算($M=13.3:SD=2.5$)。高得点は、『援助交際』に対する否定的態度や不安を持つ。さらに、13点以下を低群、14点以上を高群とした。

(26) 『援助交際』 積極的許容尺度

「援助交際は楽しそうだ」
「友人がやっていれば、自分も援助交際をしてみたい」
「援助交際をやれば、簡単(かんたん)にお金をもらえると思う」
「援助交際をやっても、すぐにやめることができると思う」
「人には迷惑(めいわく)をかけないのなら援助交際をしてもよい」
「売春はイヤだが、援助交際ならしてもよい」
「援助交際は売春よりかっこいい」
「援助交際は売春ではない」

各項目の選択を2点非選択を1点として単純加算($M=8.9:SD=1.2$)。高得点は、『援助交際』に対して許容的な態度を持つ。さらに、8点を低群、9点以上を高群とした。

2. 『援助交際』に対する抵抗感や経験

(1) 『援助交際』に対する抵抗感

「金品と引き換えにお茶やデートをすること」（以下「お茶」と略記）

「金品と引き換えにセックス（性交）以外の性的行為をすること」（「性交以外」）

「金品と引き換えにセックス（性交）すること」（「性交」）

以上の具体的行動に対して、「あなた自身」（以下「自分」と略記）と「あなた以外の女子高校生」（以下「他者」と略記）に分けて、回答は「抵抗を感じる」「少し抵抗を感じる」「あまり抵抗を感じない」「全く抵抗を感じない」の中から1つ選択。数量化理論III類で解析した結果、

「他者」が「お茶やデートをする『援助交際』に抵抗を感じる」から順に、

「自分」が「お茶やデートをする『援助交際』に抵抗を感じる」

「他者」が「セックス以外をする『援助交際』に抵抗を感じる」

「自分」が「セックス以外をする『援助交際』に抵抗を感じる」

「他者」が「セックスをする『援助交際』に抵抗を感じる」

「自分」が「セックスをする『援助交際』に抵抗を感じる」

「他者」が「お茶やデートをする『援助交際』に抵抗を感じない」

「自分」が「お茶やデートをする『援助交際』に抵抗を感じない」

「他者」が「セックス以外をする『援助交際』に抵抗を感じない」

「自分」が「セックス以外をする『援助交際』に抵抗を感じない」

「他者」が「セックスをする『援助交際』に抵抗を感じない」

「自分」が「セックスをする『援助交際』に抵抗を感じない」まで、

この順番に、『援助交際』への抵抗感が弱まることが明らかになった。

『援助交際』の許容は、『援助交際』でどのような行為をとるかによって異なっている。「セックス」や「セックス以外の性的行為」に対する抵抗感は強いが、「お茶やデート」に対しては許容的である。しかし、これらの行動への許容感は段階的に連続している。『援助交際』において「お茶やデート」を行った者の4分の1が、交際の理由として「セックスさえしなければ問題ないから」と回答しているが、実際には「お茶やデート」が売買春へと結びついている。

「他の高校生が『援助交際』を行うこと」に抵抗感を感じなくなることは、自分がその行動をとることへの抵抗感を失う前段階になっていることも明らかになった。

高校生の中には、「他の高校生が援助交際をやっていても、自分には関係がない」という意識が強いが、実際には他の高校生の非行的行動を許容することが、本人の非行行動を誘発する準備状態になっている。

以下、本研究では「抵抗を感じる」と「少し抵抗を感じる」「あまり抵抗を感じない」「全く抵抗を感じない」との2群に分けて、「他者・お茶」「自分・性交」の抵抗感が分析されている。

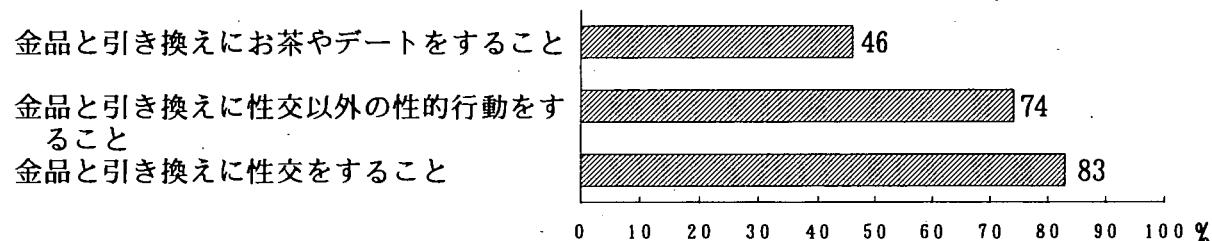
(2)『援助交際』の内容によって異なる抵抗感

- ・自分以外の他の女子高校生が行うことに対して抵抗を感じるもの
「お茶やデート」46%、「性交以外の性的行為」74%、「性交」84%
- ・自分自身が行うことに対して抵抗を感じるもの
「お茶やデート」64%、「性交以外の性的行為」84%、「性交」88%

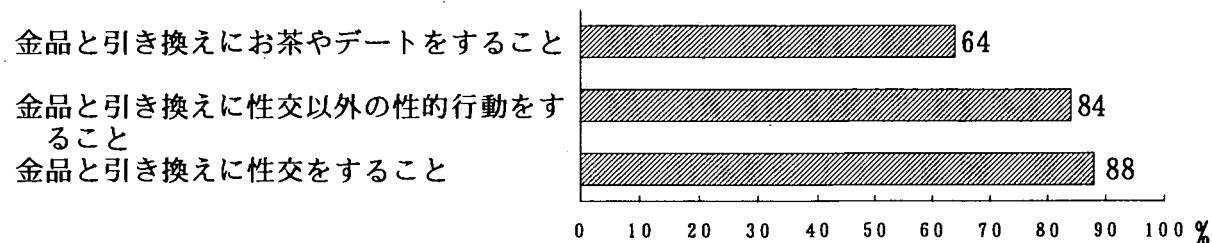
(3)『援助交際』の経験者は5%

『援助交際』の内容別に見ると「お茶やデート」は29人(4.8%)、「性交以外の性的行為」は14人(2.3%)、「性交」は14人(2.3%)が経験ありと回答している。

あなた以外の女子高校生がすることに対して抵抗感を感じるもの割合



あなた自身がすることに対して抵抗感を感じるもの割合



『援助交際』の経験あるもの(600人中の%)

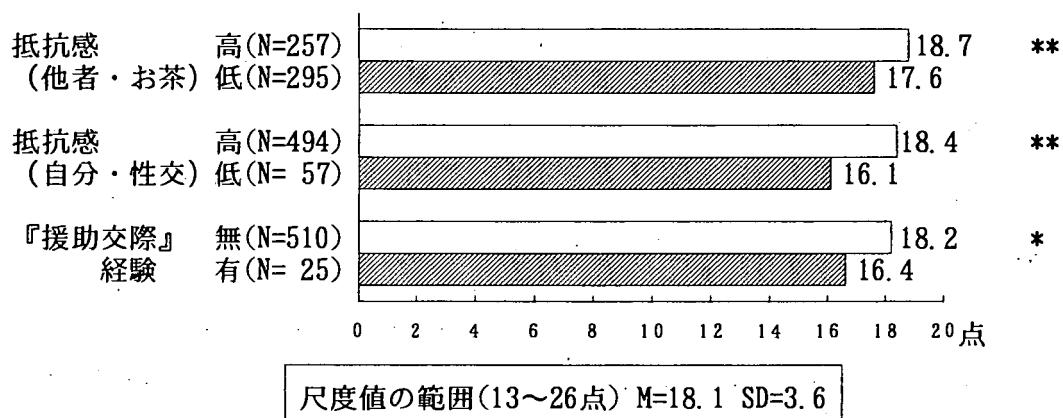
『援助交際』(お茶・デート)	29(4.8%)	内訳	有	有	有	有	無	無	無
『援助交際』(性交以外の性的行動)	14(2.3%)		無	有	無	有	有	有	無
『援助交際』(性交)	14(2.3%)		無	無	有	有	無	有	有
3つのいずれかを経験したもの	30(5.0%)		13	3	2	11	0	0	1

3. 『援助交際』の背景要因－環境的背景

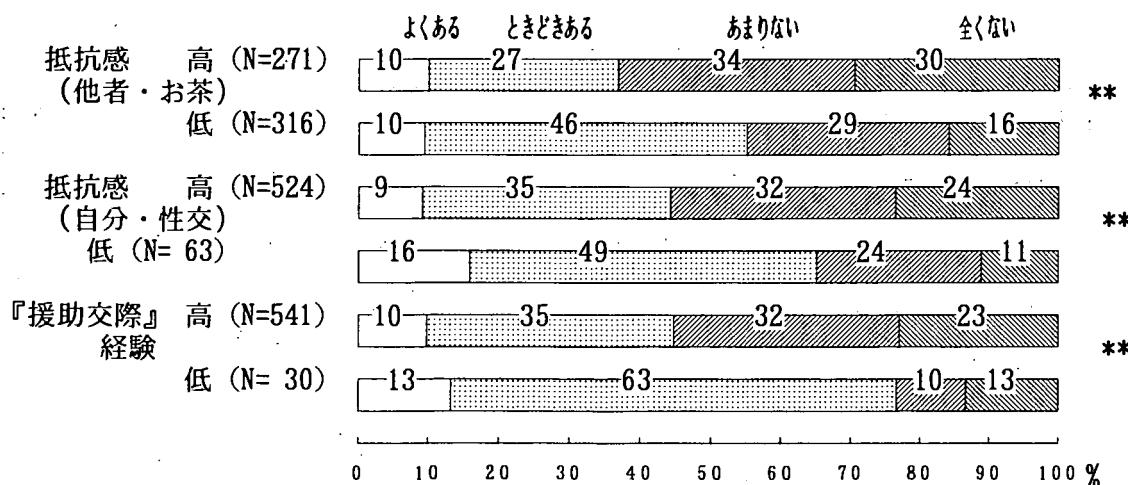
(1)家庭環境:親への愛情と『援助交際』抵抗感は強く結びついている。

『援助交際』に対する抵抗感が高いものや、経験のないものは、親への愛情や信頼感が強い。「この家に生まれてイヤだと思ったこと」に関して、抵抗感の低いものや経験あるものは、「よくある」「ときどきある」の回答が多い。その他、抵抗感の低いものは、父に関して「自分の考えを押しつける」(他者・お茶28%、自分・性交37%)や「顔を合わせることが少ない」(他者・お茶25%)を多く選択、母に関して「私の行動に口をはさむ」(他者・お茶45%)や「自分の考えを押しつける」(他者・お茶21%)を多く選択する。さらに、親に関して「高価なブランド物を買ってくれない」(他者・お茶35%)「女らしく言われる」(他者・お茶29%)を多く選択。『援助交際』経験者は、父に関して「自分の考えを押しつける」(48%)、親に関して「欲しいものは全て買ってくれる」(13%)を多く選択。干渉的な親の態度は『援助交際』と関連があるそうだ。

『援助交際』に対する抵抗感・経験と「親への愛情尺度」得点



『援助交際』に対する抵抗感・経験と「家庭がイヤだと思ったこと」



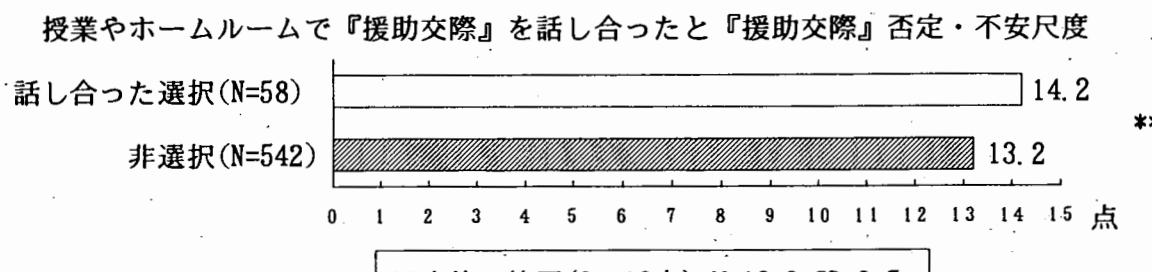
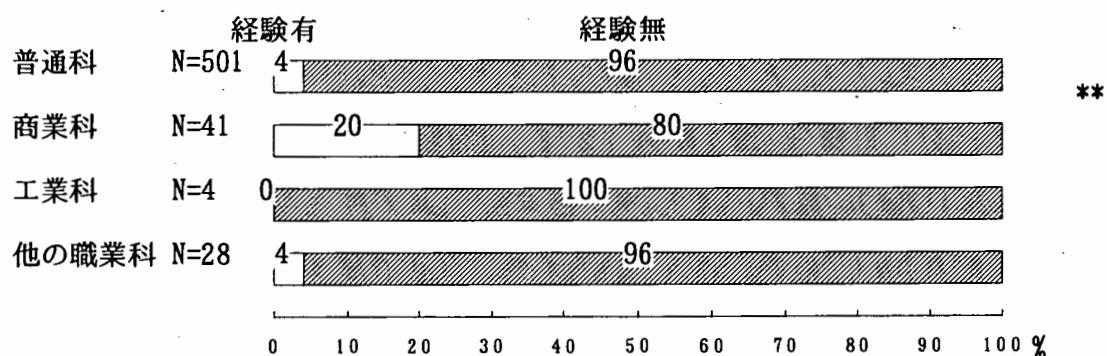
(2)学校環境:『援助交際』経験者と抵抗感の低いものは商業科に多い。

学校種別に比較すると、商業科のものは抵抗感の低い割合が多く(他者・お茶66%、自分・性交27%)、経験率(20%)が高い。公立・私立別や共学・別学別では有意差がなく、学年では3年生(10%)の経験率が高い。学校に対する感じ方で、経験あるものは「ついていけない授業が多い」(30%)を多く選択。抵抗感の低いものは「雰囲気が明るい」(自分・性交35%)、「学級担任は良い先生」(他者・お茶32%)、「友達がたくさんいる」(自分・性交49%)の選択が少ない。

(3)学校環境:教師は『援助交際』の不安を高めるが、抵抗感を高めない。

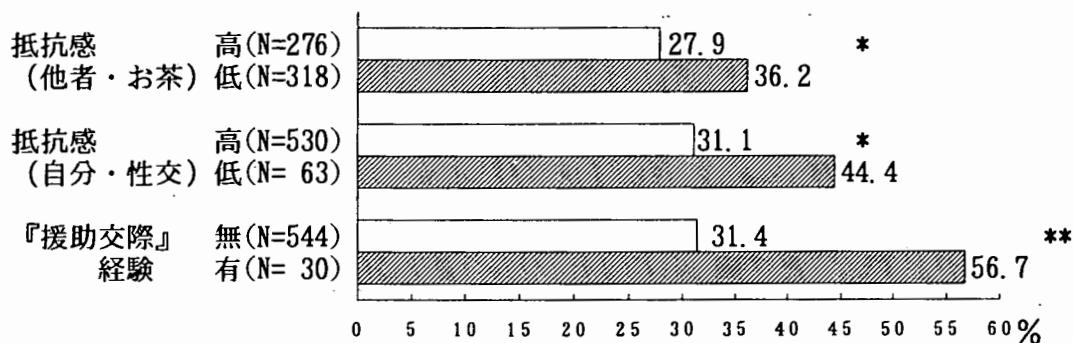
授業やホームルームで「異性交際」や『援助交際』を話し合ったことがあるものは『援助交際』に対する不安が高いが、抵抗感や経験とは関連がみられない。

学校種別に見た『援助交際』の経験

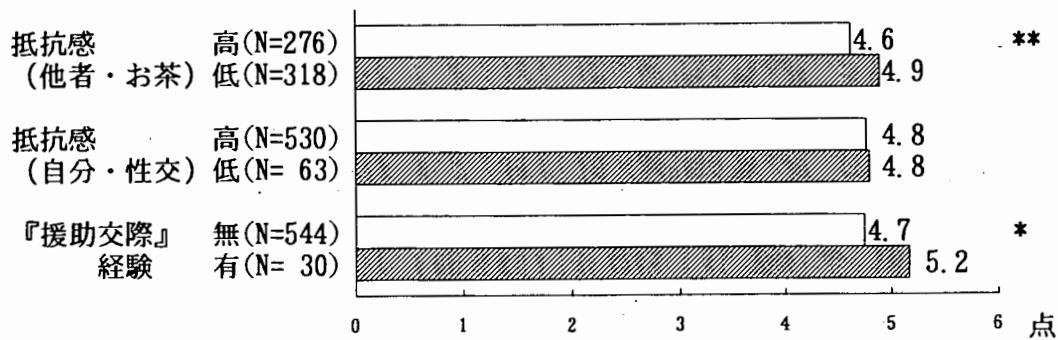


(4)友人環境:経験あるものは友人に対する同調、自己開示が多い。
 経験あるものは、友人に対する同調(57%)が高く、自己開示傾向が(5.2点)が強い。
 抵抗感が低いものは、同調(他者・お茶36%、自分・性交44%)が高く、自己開示傾向
 (他者・お茶4.9点)が強い。さらに、抵抗感(他者・お茶)が低いものは「友人がやつ
 ていれば、自分も『援助交際』をしてみたい」の選択率が高い(4%)。

『援助交際』に対する抵抗感・経験と友人への同調



『援助交際』に対する抵抗感・経験と「友人への自己開示尺度」得点

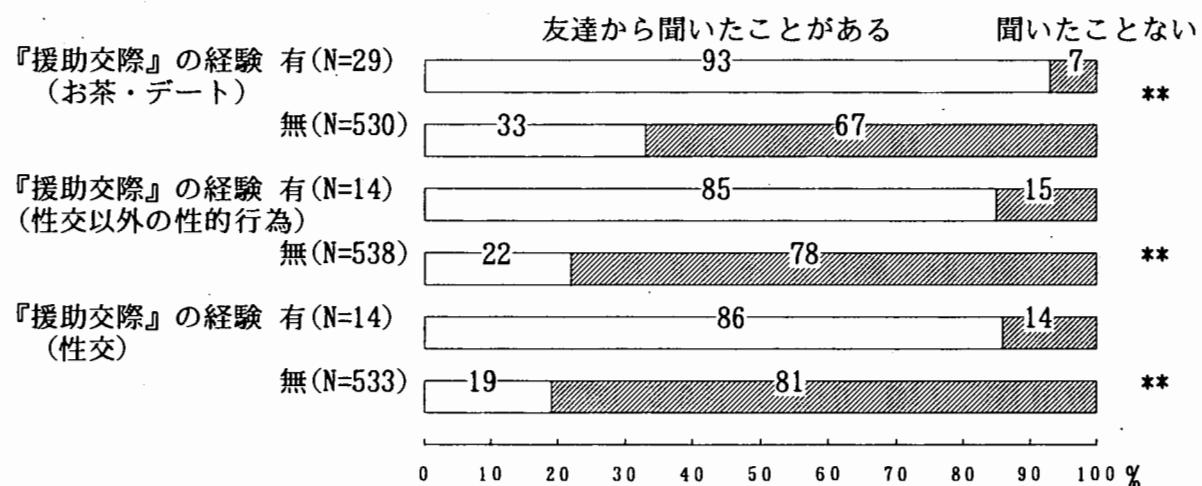


尺度の範囲(3~6点) M=4.8 SD=1.1

(5)友人環境:経験あるものは友人から経験談を聞くことが多い。

経験あるものは、友達から経験談を聞いたことが多い(お茶・デートの経験あるもの93%:性交以外の性的行為の経験あるもの85%:性交の経験あるもの86%)。さらに、抵抗感の低いものも経験談を聞くことが多い(他者・お茶:お茶・デート50%、性交以外33%、性交31% 自分・性交:お茶・デート65%、性交以外54%、性交51%)。自分の経験についても友達に話すことが多い(お茶・デート79%:性交以外の性的行為64%性交64%)。『援助交際』の経験には周囲の友達の影響が強く感じられる。

『援助交際』の経験の有無と友達から聞いたことがあるか



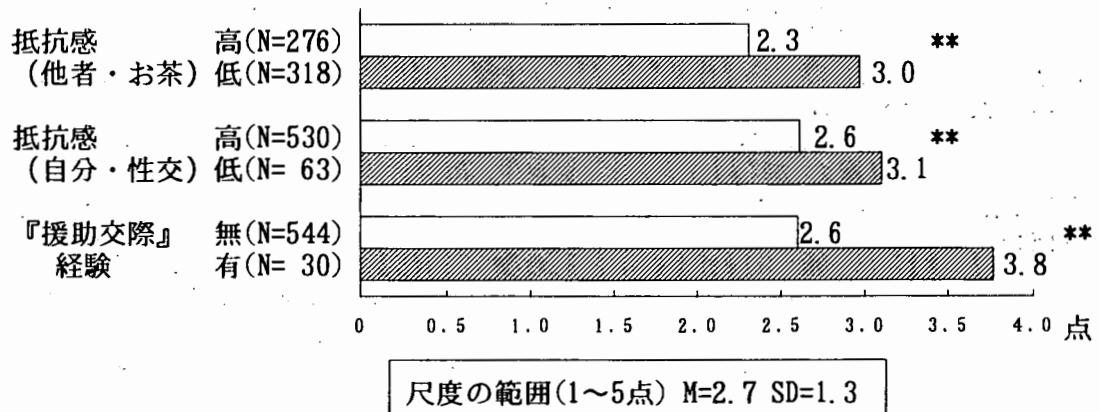
(6) 経済環境: 経験あるものは強迫的購買意欲・金銭至上主義が高い。

経験あるものは、強迫的購買意欲(3.8点)や金銭至上主義(3.0点)の傾向が高い。さらに抵抗感が低いものも強迫的購買意欲(他者・お茶3.0点、自分・性交3.1点)や金銭至上主義(他者・お茶2.3点、自分・性交2.6点)が高い。アルバイトの経験をみると、経験あるもの(73%)や抵抗感の低いもの(他者・お茶60%、自分・性交70%)の経験率が高い。「お金を稼ぐのは大変なことだ」の選択でも、経験あるもの(67%)や抵抗感の低いもの(自分・性交68%)は選択率が低い。

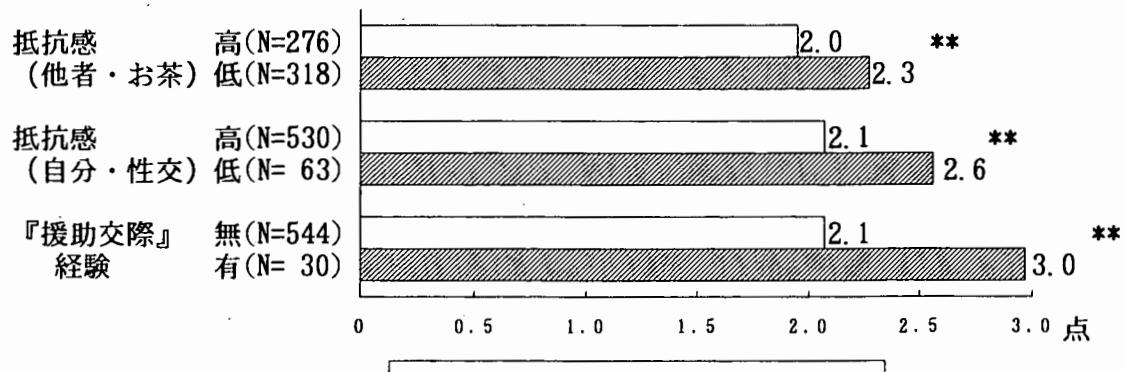
(7) 経済的環境: 『援助交際』の背景には「相対的貧困観」

家庭の貧しさや小遣いの少なさは、『援助交際』の直接的な原因になっていない。むしろ、自分の持ち物や服が「いい」ものであるかどうかという、周囲と比較した相対的な貧困観が『援助交際』の基本的な動機と言えよう。友人と比較した相対的貧困観に動機づけられて、高度消費社会の中で購買に駆り立てられた女子高校生が、簡単に高額な金品を得る手段として『援助交際』を行うという図式が浮かび上がる。

『援助交際』に対する抵抗感・経験と「強迫的購買意欲尺度」得点



『援助交際』に対する抵抗感・経験と「金銭至上主義尺度」得点



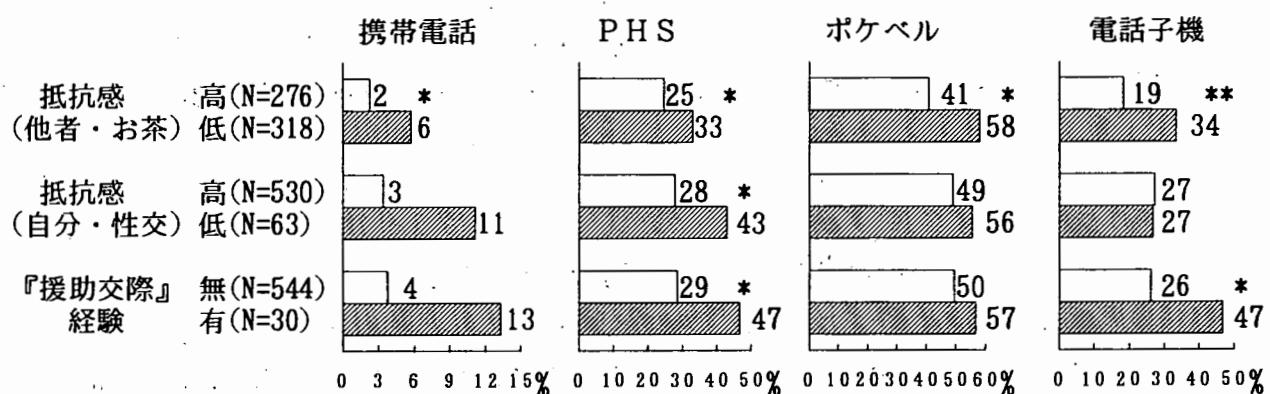
(8)情報環境:経験あるものは移動体通信機器を持つことが多い。

経験あるものは、携帯電話・P H S・ポケベルのいずれかを所有することが多い(90%)。抵抗感の低いものも(他者・お茶76%、自分・性交83%)同様に多い。

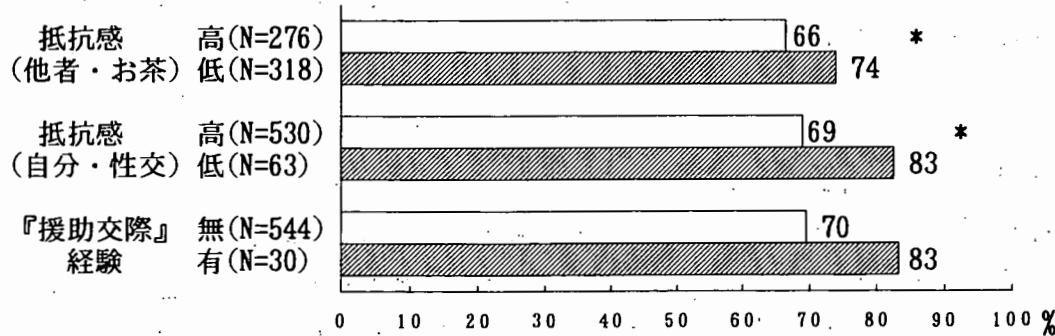
(9)情報環境:抵抗感の低いものはマスコミ鵜呑み傾向が強い。

抵抗感(他者・お茶74%、自分・性交83%)の低いものは、マスコミを鵜呑みにする傾向が高い。マスコミを鵜呑みする傾向が高い女子高校生は、マスコミによる過剰な『援助交際』報道等により、抵抗感を麻痺させていると推測される

『援助交際』に対する抵抗感・経験と各種通信機器の所有



『援助交際』に対する抵抗感・経験とマスコミ鵜呑み群の割合



4. 『援助交際』の背景要因－心理的背景

(1)自己意識：心理尺度からみた特徴

抵抗感(他者・お茶)の低いものは、賞賛獲得欲求・公的自意識・ぬくもり希求・将来無関心・享楽主義・関心の狭さ・加齢不安・自己存在感のなさが高く、自己充実感が低い。抵抗感(自分・性交)の低いものは、自己認識欲求・自己存在感のなさ・将来無関心・享楽主義・関心の狭さ・加齢不安が高い。経験のあるものは、賞賛獲得欲求・公的自意識・将来無関心・享楽主義・関心の狭さ・加齢不安・ぬくもり希求・自己存在感のなさが高い(下線は共通にみられるもの)。

(2)自己意識：『援助交際』の背景に見られるミーイズム。

将来無関心・享楽主義・関心の狭さはミーイズムを構成する側面である。“先のことは考えず”“楽しく”“私が”過ごすことを優先する姿勢でもある。全体的に享楽主義的な傾向が高い女子高校生であったが、『援助交際』を許容する態度の背景にある心理は、ことさら享楽主義的傾向が強く、これに将来への無関心や私事の世界に閉じ籠もるという関心の狭さが結びついているように見える。

(3)自己意識：『援助交際』の背景に“満たされない思い”。

自己存在感のなさ、ぬくもり希求の高さ、自己充実感の低さといった、“満たされない思い”が高いことが、『援助交際』に対する態度と結びついている。毎日の生活で感じる空虚観を、刹那的な享楽によって満たそうとして『援助交際』に向かわせるのだろうか。さらに、賞賛獲得欲求・公的自意識の強さから、他者からよく思われたいという欲求も関連している。空虚な日常の中で、他者に認められる方法、しかも苦労せずに今だけを楽しく過ごしたいという気持ちを満たしうる手段として、『援助交際』に向かわせるのだろうか。

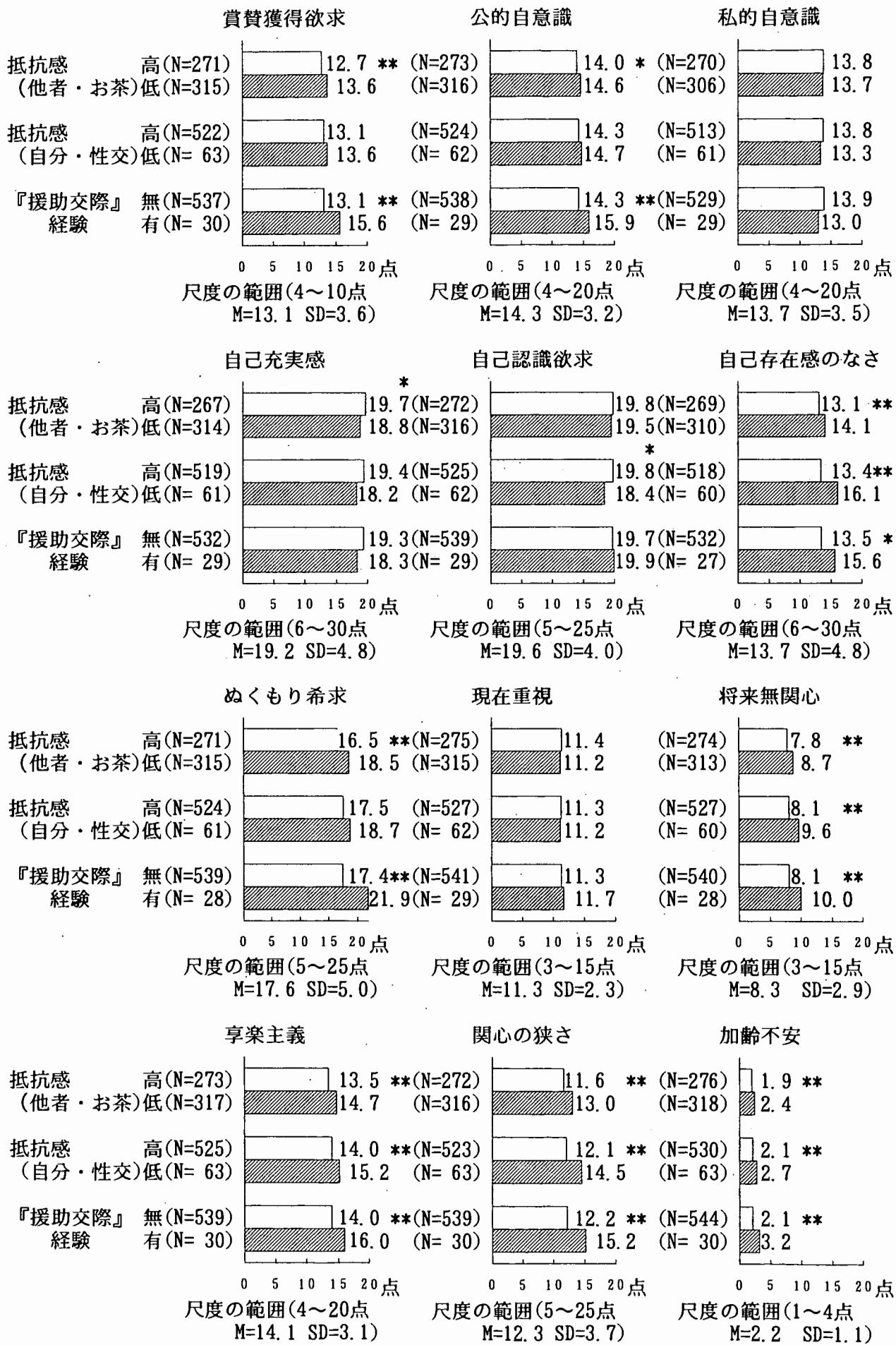
(4)自己意識：女性の価値＝若さ

加齢不安の高さは、「女性の価値＝若さ」といったとらえ方を代弁するもので、若い今が一番楽しい時期であるという考え方には結びつく。この考え方からは、将来を見通しながら今を努力するといった視点を失わせ、楽しむのは今しかないという刹那的な享楽主義と結びついた時、『援助交際』への許容的態度を生み出すかもしれない。

(5)自己意識：生き方に対する姿勢と深く関連している。

時間展望のなさ、若さへの執着、享楽的生活志向の生活態度を背景に、自己充実感や存在感を持たないものが、他者から認められようと『援助交際』に向かうのか。

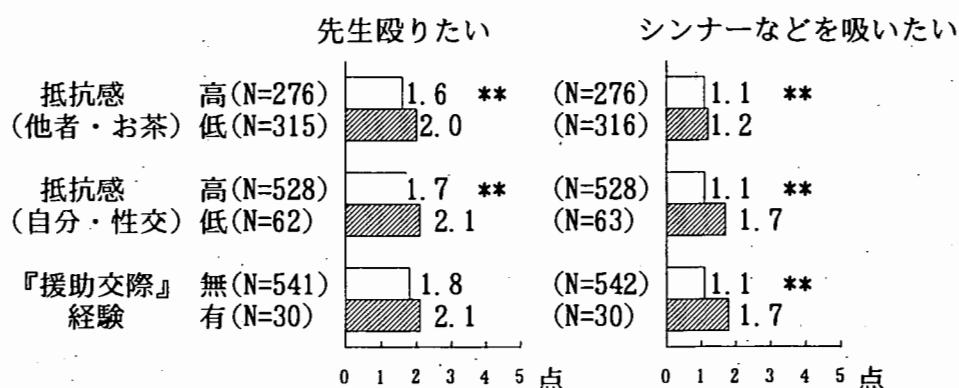
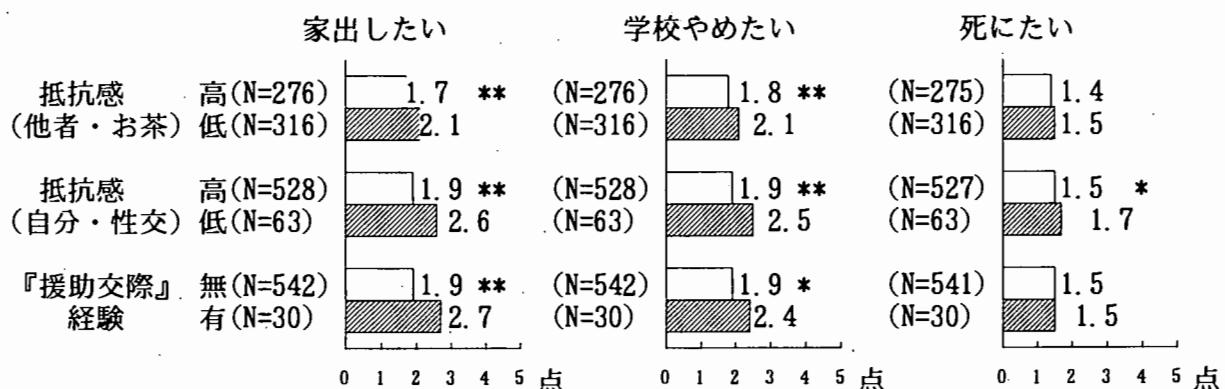
『援助交際』に対する抵抗感・経験と各種心理尺度



(6)問題行動念慮:抵抗感や経験と各種問題行動念慮が関連。

家出したい、学校やめたい、死にたい、先生なくなりたい、シンナー等やってみたいという問題行動念慮に関して、抵抗感（他者・お茶）や経験と死にたい、経験と先生なくなりたいを除いて、全てにおいて抵抗感や経験と関連が見られた。抵抗感の低いものや経験のあるものは、各種問題行動念慮の傾向が高いことが示された。

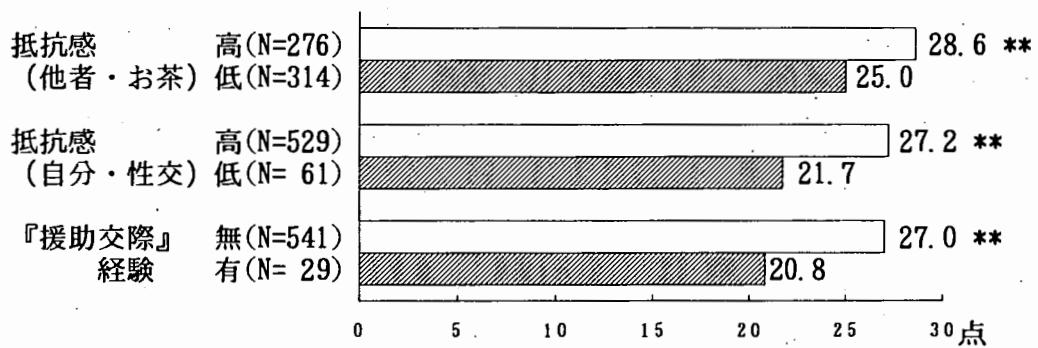
『援助交際』に対する抵抗感・経験と各種問題行動念慮得点(得点範囲1~5点)



(7) 非行規範: 非行規範意識との結びつきは強い。

抵抗感の低いもの(他者・お茶25.0点、自分・性交21.7点)、経験のあるもの(21点)は、たばこを吸う・お酒を飲む・テレクラに電話する・無断外泊する・ブルセラで下着などを売る・親の財布からお金を持ち出す・万引きする・お金やものを脅し取る・等からなる非行規範意識が低い。

『援助交際』に対する抵抗感・経験と「非行規範尺度」得点

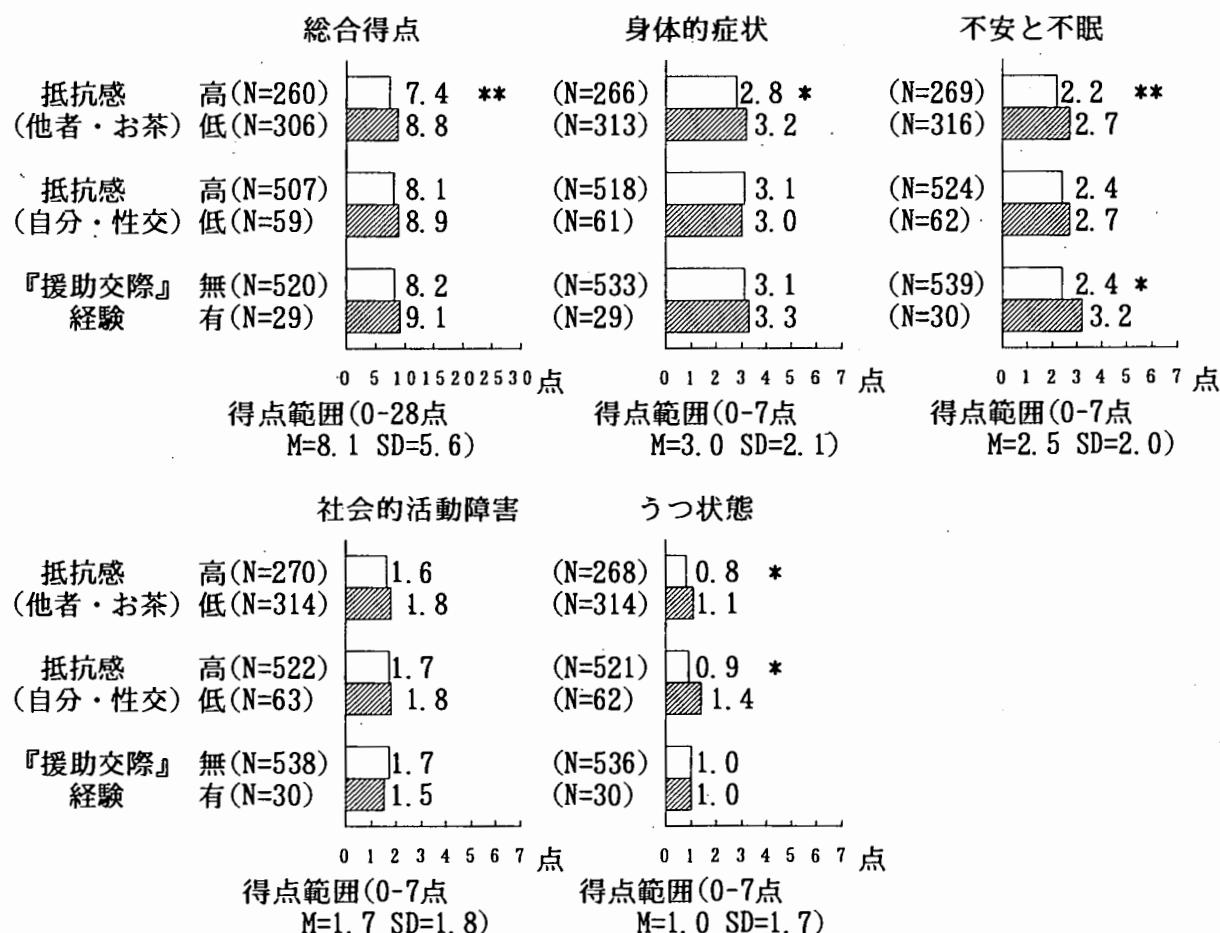


尺度値の範囲(8~32点) M=26.7 SD=4.3

(8)精神的健康:経験あるものは精神的健康度が低い。

経験のあるものは、不安と不眠(3.2点)傾向が高い。抵抗感(他者・お茶)の低いものは総得点(8.8点)、身体的症状(3.2点)、不安と不眠(2.7点)、うつ状態(1.1点)が高くて、抵抗感(自分・性交)の低いものはうつ状態(1.4点)が高い。全体的に抵抗感の低いものや経験のあるものは、精神的に不健康な状態にある。

『援助交際』に対する抵抗感・経験と「精神的健康尺度」得点

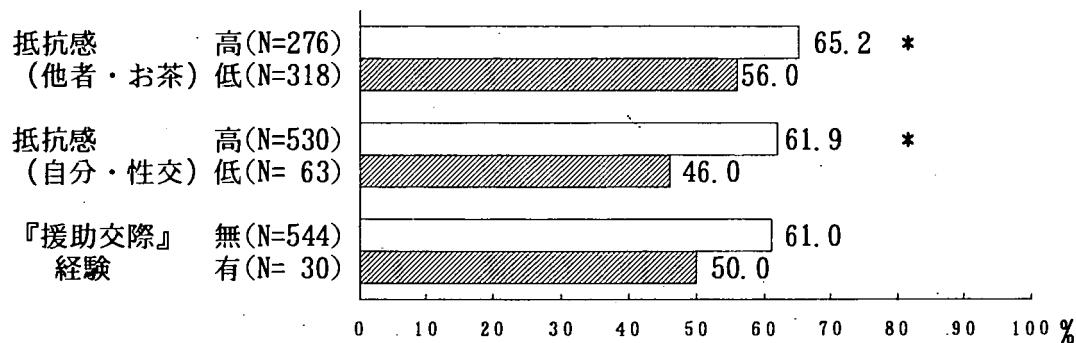


5. 『援助交際』の背景要因－社会的意識と行動

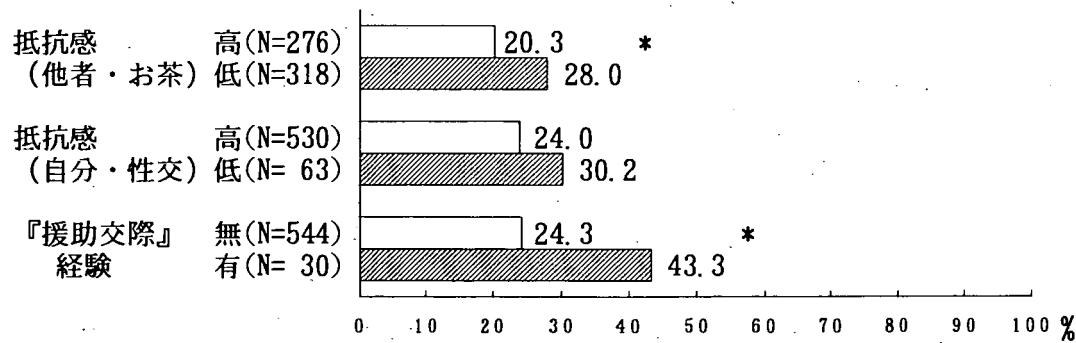
(1) 抵抗感の低いものは社会的視点に欠ける。

抵抗感の低いものは、「自分たちの力では社会のしくみは変わらない」といった社会に対する無力感が高く、「社会をよくするには、一人一人が努力しなければならない」「社会をよくするために、自分も何かしたい」といった社会的視点から自分を捉えることが少ない。社会と自分を切り離して自分を捉える傾向は女子高校生全体に見られるが、『援助交際』を肯定するものは特に強い。

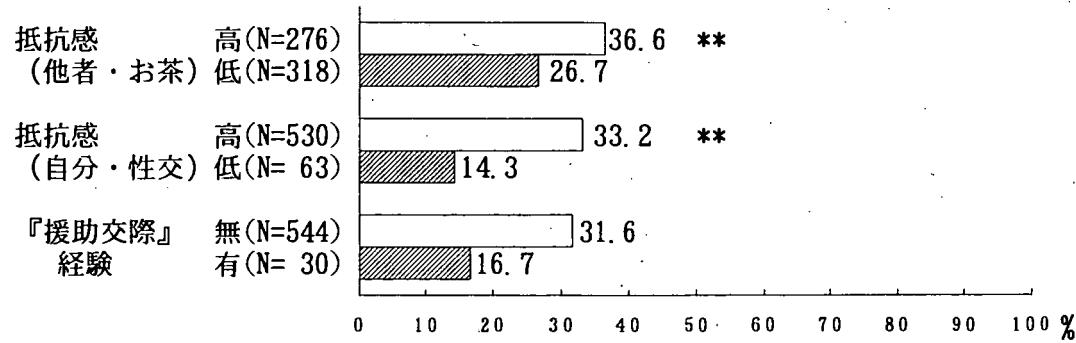
『援助交際』に対する抵抗感・経験と「社会をよくするために一人一人が努力しなければ」



『援助交際』に対する抵抗感・経験と「自分たちの力では社会の仕組みは変わらない」



『援助交際』に対する抵抗感・経験と「社会を良くするために自分も何かしたい」

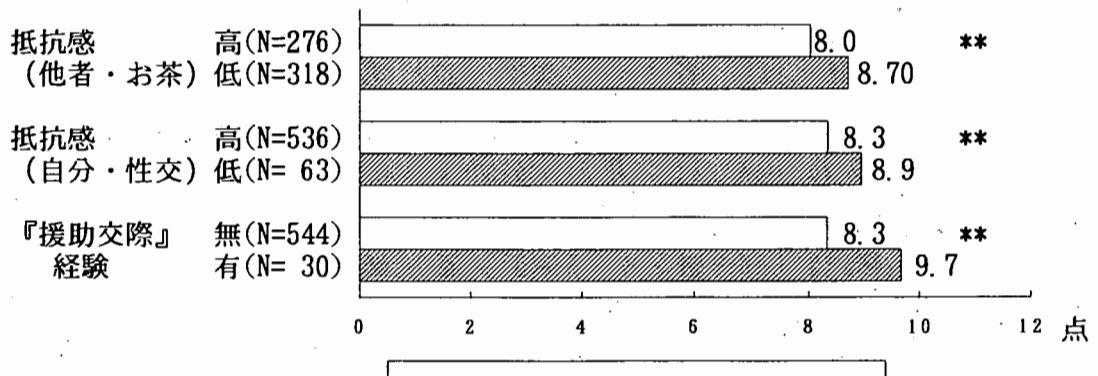


(2) 抵抗感の低いものや経験のあるものは流行意識が高い。

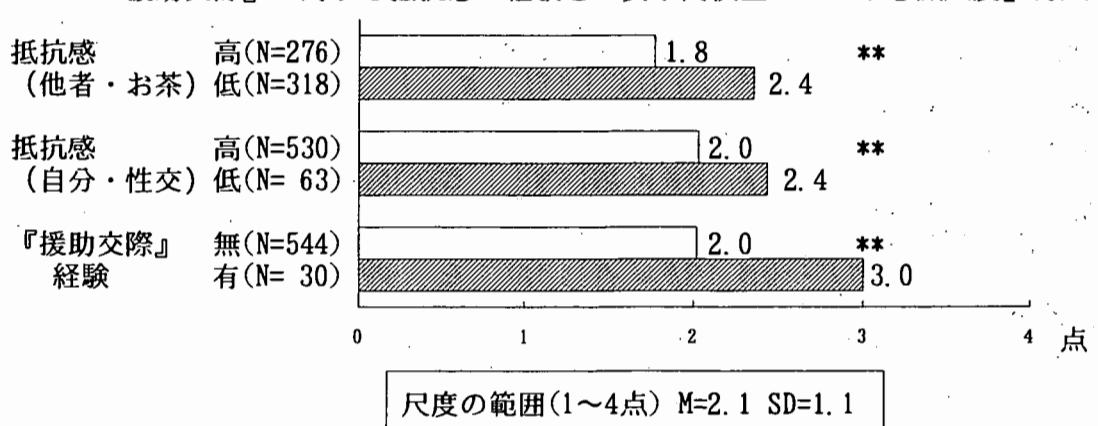
抵抗感の低いもの(他者・お茶8.7点、自分・性交8.9点)や経験のあるもの(9.7点)といずれも、流行意識が高い。賞賛獲得欲求の高さを合わせてみると、流行としての『援助交際』を行うことで周囲からの賞賛を得たり、お金を得て自分を飾ることで他者からの賞賛を得ようとする図式が想定される。

(3) 抵抗感の低いものや経験のあるものは女子高校生ブランド意識が高い
抵抗感の低いもの(他者・お茶2.4点、自分・性交2.4点)や経験のあるもの(3.0点)といずれも、女子高校生ブランド意識が高い。流行意識の高さとともに、メディアが作る女子高校生ブランドという価値観が、『援助交際』を肯定させる意識を促しているのかもしれない。

『援助交際』に対する抵抗感・経験と「流行意識尺度」得点



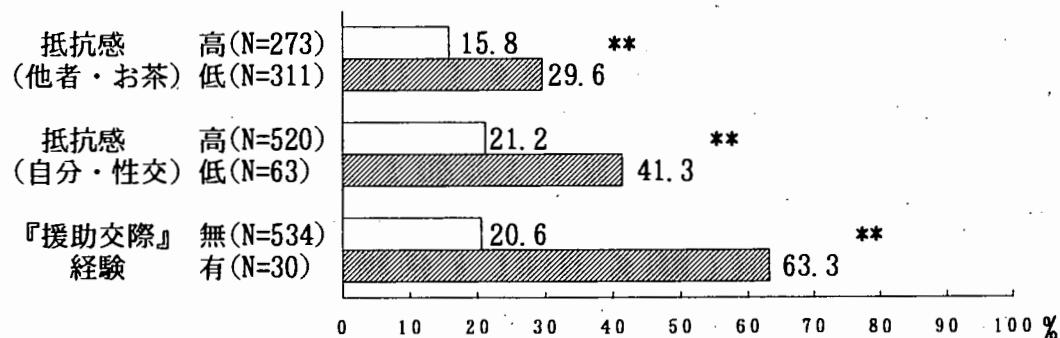
『援助交際』に対する抵抗感・経験と「女子高校生ブランド意識尺度」得点



(4)『援助交際』経験者の3人に2人は、彼氏がいる。

抵抗感の低いもの(他者・お茶30%、自分・性交41%)や経験のあるもの(63%)は、現在つきあっている彼氏がいる割合が高い。さらに、抵抗感の低いもの(他者・お茶58%、自分・性交74%)や経験のあるもの(100%)は、キスの経験も高い。異性交際を行っていることが、性への抵抗感を和らげているためか、対人的な積極性の反映であると推測できる。恋愛のイメージも、良い面と同時に責任が重くて大変だという両面的な態度をもっている。

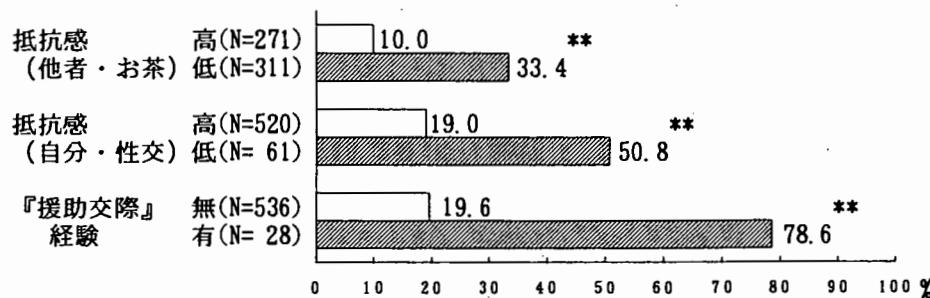
『援助交際』に対する抵抗感・経験とつきあっている彼氏がいる割合



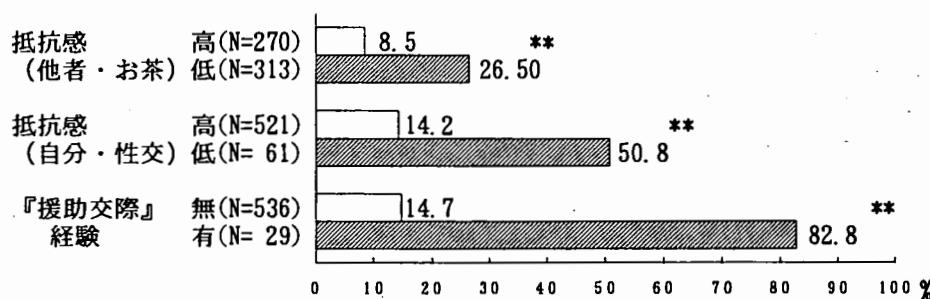
(5)抵抗感の低いものや経験のあるものは、性的行為の経験も高い。

抵抗感の低いもの（他者・お茶27%、自分・性交51%）や経験のあるもの（83%）は、性交経験の割合が高く、性交以外の性的行為（他者・お茶33%、自分・性交51%、経験あり79%）や自慰行為（他者・お茶18%、自分・性交28%、経験あり35%）の割合も高い。性意識に関しても、結婚や婚約にこだわらない性意識を持っている。特に、経験あるものは「愛がなくても」を肯定する割合が40%と高く、性規範のゆるみを感じさせる。

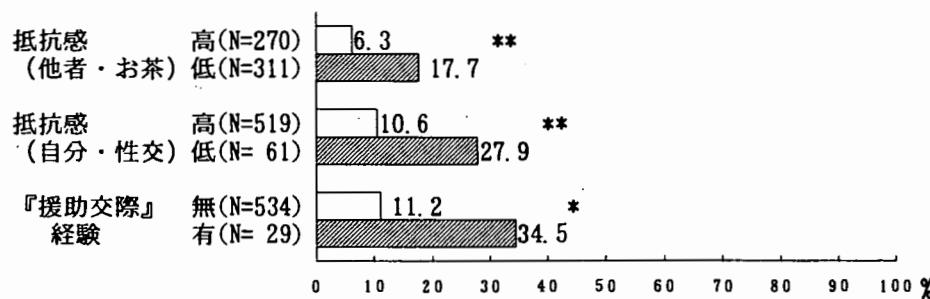
『援助交際』に対する抵抗感・経験と性交以外の性的行為の経験率



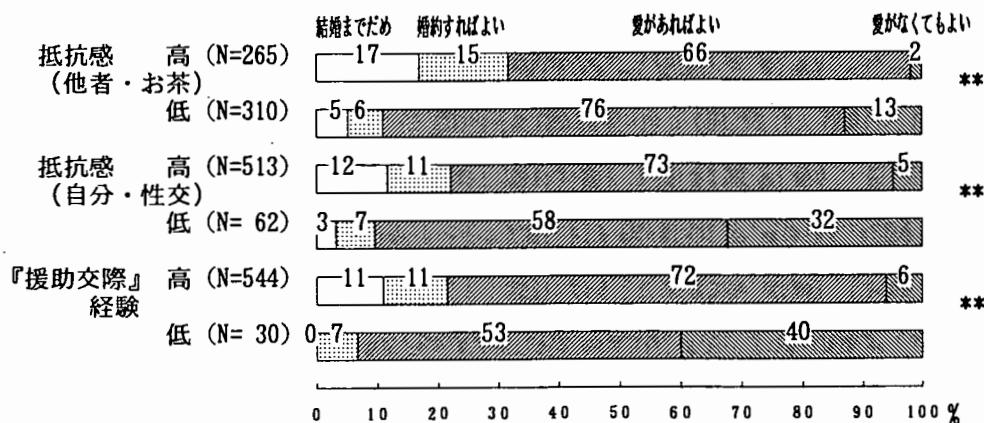
『援助交際』に対する抵抗感・経験と性交の経験率



『援助交際』に対する抵抗感・経験と自慰行為の経験率



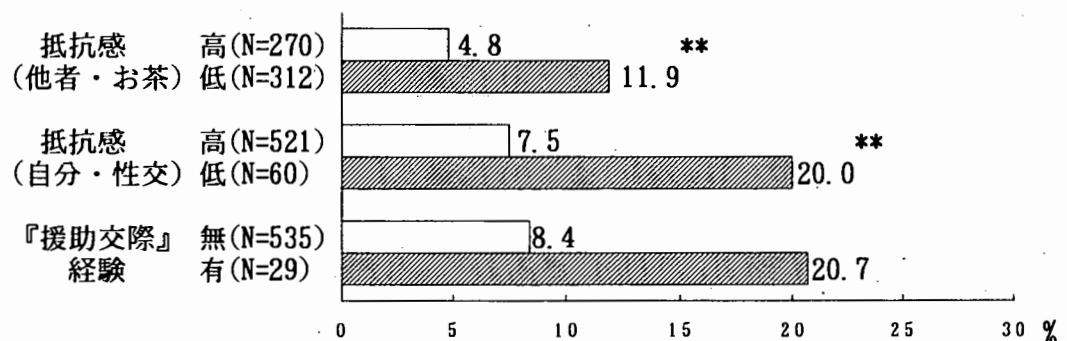
『援助交際』に対する抵抗感・経験と性意識



(6) 抵抗感の低いものは教師によるセクハラの経験率が高い。

痴漢などの性被害経験やナンパされたり、『援助交際』に誘われた経験と同様、抵抗感の低いもの（他者・お茶12%、自分・性交20%）は、「教師に体をさわられたり、性的な言葉でからかわれたりして不快な思いをした」経験が多い。彼女たちの性的成熟により外見的に目立つため、性的被害を被りやすく、ナンパなどの誘いも多くなるという可能性も残るが、性的被害や性的誘いを受けたことによって、性に対する意識が崩壊し『援助交際』などの性的行為に許容的になったという可能性も大きい。

『援助交際』に対する抵抗感・経験と教師から不快な思いをさせられた割合

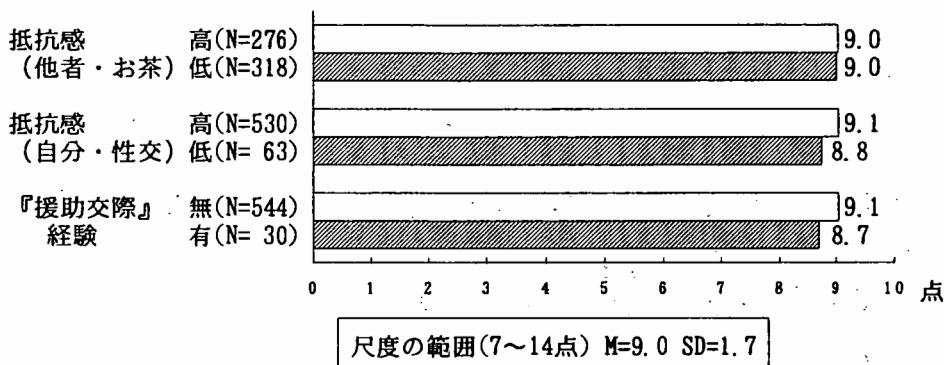


6. 男女平等意識と『援助交際』

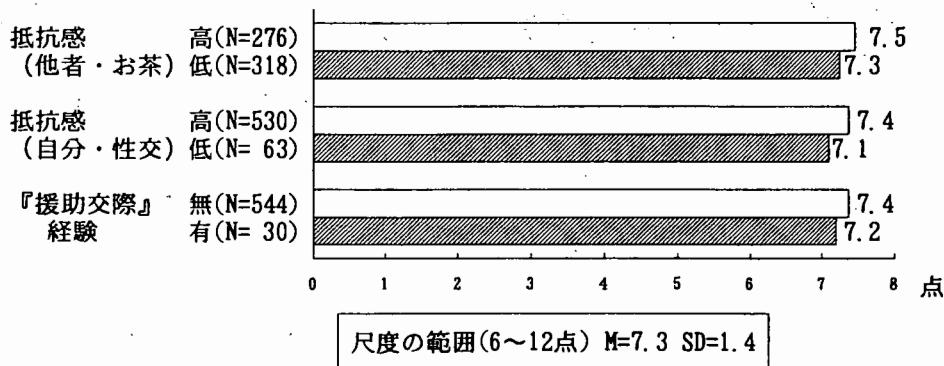
(1) 『援助交際』に対する態度と男女平等規範意識が結びつく。

男女平等不満意識・男女平等関心意識・男女平等規範意識という3つの男女平等意識の中で、男女平等規範意識が『援助交際』（自分・性交）に関連しており、抵抗感の低いものは男女平等規範意識が低かった（12.4点）。総じて女子高校生たちは、個別的な男女差別に対して不満を表現しても、男女平等規範として社会的な視点から捉えることが少ない。『援助交際』（自分・性交）だけであったが、抵抗感と男女平等規範が関連していたことは、今後の対応の有り様を示唆している。ちなみに、男女平等不満と男女平等規範との相関は.42で、男女平等関心と男女平等規範の相関は.40と有意な相関を示している。不満をきっかけに規範にまで高めることが有効であろう。

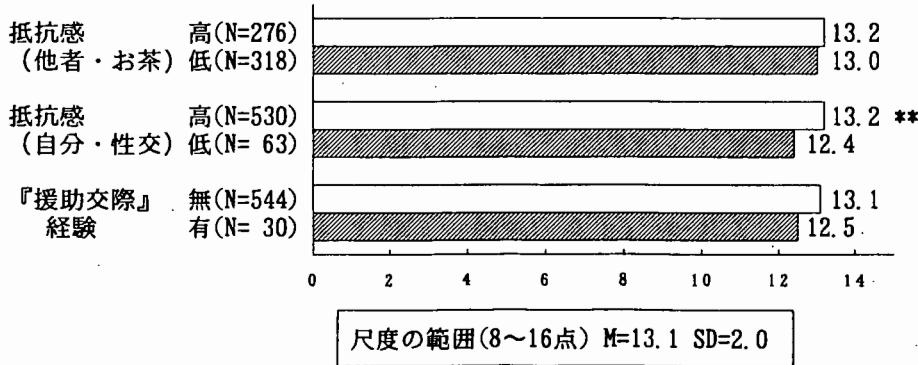
『援助交際』に対する抵抗感・経験と「男女平等不満尺度」得点



『援助交際』に対する抵抗感・経験と「男女平等関心尺度」得点



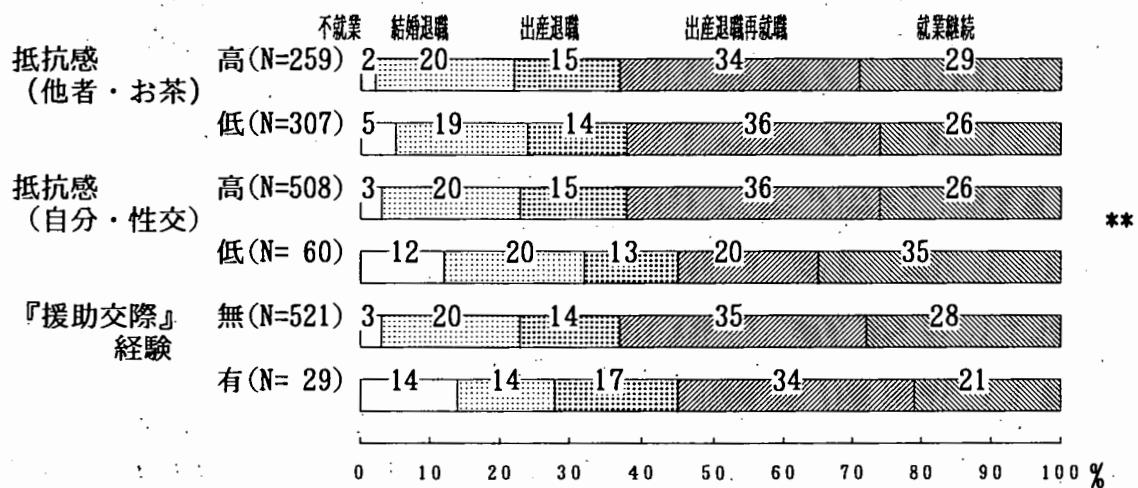
『援助交際』に対する抵抗感・経験と「男女平等規範尺度」得点



(2)抵抗感の低いものは、卒業したら仕事につきたくないものが多い。

女性の就業として「仕事につきたくない(不就業)」「結婚したら仕事をやめる(結婚退職)」「子どもが生まれたら仕事をやめる(出産退職)」「子どもが大きくなったら再び仕事をする(出産退職再就業)」「結婚しても子どもが生まれても仕事を続ける(就業継続)」に分けてみると、抵抗感(自分・性交)の低いものは不就業(12%)と就業継続(12%)が多く、出産退職再就業(20%)が少ない。

『援助交際』に対する抵抗感・経験と将来の仕事希望



7. 男女平等意識の背景要因

(1) 男女平等規範意識に関連する背景要因

普通科(13.1点)>商業科(12.5点)、1ヶ月の小遣い:1万円以上(12.7点)<5千円~1万円(13.1点)・5千円未満(13.3点)、親と女性の自立を話すを選択(14.1点)>非選択(13.0点)、父は家事を手伝うを選択(13.4点)>非選択(12.9点)、友達と男女平等を話し合うを選択(13.9点)>非選択(12.9点)、痴漢の経験あり(13.2点)>なし(12.8点)。(下線を付したものは特に関連が強いもの)

(2) 男女平等関心意識に関連する背景要因

3年生(7.5点)>1年生(7.1点)、母親の就業:フルタイム(7.7点)>パートタイム(7.1点)、祖父母と同居有り(7.6点)>無し(7.2点)、親は異性交際に理解あるを選択(7.8点)>非選択(7.1点)、親に女らしく言われるを選択(7.5点)>非選択(1.3点)、父は家事を手伝うを選択(7.5点)>非選択(7.3点)、母は欲求を抑えて家族に尽くしているを選択(7.5点)>非選択(7.2点)、授業等で異性交際を話し合うを選択(8.0点)>非選択(7.3点)、授業等で援助交際を話し合うを選択(7.9点)>非選択(7.3点)、教師から女らしく言われるを選択(7.8点)>非選択(7.2点)、痴漢の経験あり(7.5点)>なし(7.1点)、ナンパされた経験あり(7.5点)>なし(7.2点)、教師から不快な思いされた(7.9点)>なし(7.1点)。(下線を付したものは特に関連が強いもの)

(3) 男女平等関心意識に関連する背景要因

母親の就業:専業主婦(9.4点)>パートタイム(8.8点)、親に女らしく言われるを選択(9.2点)>非選択(8.9点)、親と女性の自立を話すを選択(9.9点)>非選択(8.9点)、授業等で異性交際を話し合うを選択(9.4点)>非選択(9.0点)、授業等で援助交際を話し合うを選択(9.5点)>非選択(9.0点)、教師から女らしく言われるを選択(9.4点)>非選択(8.9点)、友達と男女平等を話し合うを選択(9.9点)>非選択(8.9点)。(下線を付したものは特に関連が強いもの)

第Ⅱ部 調査結果の詳細

第1章 調査目的と実施状況

第1節 本研究の目的

1980年代の前半頃から、いわゆる『援助交際』という用語が主にマスメディアの中で用いられるようになってきた。当時、いわゆる性風俗の世界での「愛人契約」を結ぶことを意味して用いられた用語であった。1990年代の半ばになると、ルーズソックスに代表されるような独自な女子高校生ファッショニ世間の耳目が集まるとともに、女子高校生自体の様態に関心が寄せられるようになり、マスメディアは盛んに「女子高校生ブーム」を煽り立てた。こうした社会状況の中で、彼女たちの独特な行動として『援助交際』が扱われるようになり、最近では、主に女子中高生が金品と引き換えに性的行為を行ったり、デートすることを指して用いられるようになってきた。

ところで『援助交際』は、性的行為を伴うものであれ、デートだけであれ、金品を媒介に性的サービスを提供するものである以上、本質的に「売買春」と何ら変わらない。特に経済を媒介に一方が他方を性的に支配するという「支配－被支配」の関係は、男女間の差別的格差を助長するもので、女性の性的自尊感情の剥奪、性と生殖の健康と権利の侵害等の女性差別に結びつく行為でもある。さらに対象を女子中高生に限定することは、「女性の価値＝若さ」といった伝統的差別構造の再生産にも通じる。その意味でも『援助交際』は、「性の商品化」の対象として女性を位置づけることになり、男女平等社会実現に抗う行為と言えよう。

こうした問題を含む行為を『援助交際』と表現することは、そこに内包されている問題性を覆い隠してしまう危険がある。従って、『援助交際』という用語の使い方には常に慎重でなければならない。本研究では、いわゆる『援助交際』として『』付きで用いることにする。

1996年の東京都生活文化局の調査によると(「中学生・高校生の生活と意識に関する調査」中学1年から高校3年までの1291人を対象に1996年7月～9月郵送法で実施、回収率23.5%)、『援助交際』の経験者は高校生4.6%と報告されている。さらに深谷他(1998)は、1997年6月～7月に東京都と埼玉県の公立高校普通科の男女1725人(男子857人、女子868人)を対象とした調査で、『援助交際』経験のある女子高校生は4.4%と報告している(よくある0.5%、ときどきある1.0%、今までに1、2回ある2.9%)。

しかしながらこれらの調査では、回答者が『援助交際』をどのようにとらえているのかについて明らかでない。性的行為を伴うかどうかは本質的な問題でないにしろ、回答者自身がどのように『援助交際』をとらえているかによって経験率も異なってくる。本研究に先立ってなされた女子高校生30人の面接調査においても、女子高校生たちの考える『援助交際』の定義はかなりのばらつきが見られた。『援助交際』は「売買春」であると明言する女子高校生もいれば、お茶やデートだけなら別に問題ないとする女子高校生も存在していた。『援助交際』という表現に伴う問題もある。

果たして、女子高校生たちは『援助交際』の持つ問題をどのように考えているのだろうか。売買春や女性の性が性的欲望の対象として商品化されている現状についてどのように考えているのだろうか。さらに、性的成熟を果たしつつある女子高校生たちは、社会の中

で「女性」という自らの立場をどのように位置づけ、とらえているのだろうか。こうした問いかけは、男女平等そのものに対する問い合わせに帰結する。

『援助交際』を単に女子中高生の今日的な社会現象として特定化し論ずるだけでは、問題は解決されない。『援助交際』が男女平等社会の実現に抗う社会的病理現象とするならば、その病根を断ち切る努力を生み出すためにも、『援助交際』そのものに内包されている問題性を明らかにしなければなるまい。そのためには、一方の当事者である女子高校生たちの『援助交際』に対する意識の把握が不可欠となる。その際の切り口と目的は、あくまでも男女平等社会の実現に結びつくものでなければならない。もちろん、もう一方の当事者である買う側の意識の分析が不可欠であることは言うまでもない。

本研究は、以上の問題意識を基に現代社会の一つの病理現象の表れとして『援助交際』を見据え、『援助交際』に対する女子高校生たちの意識を生み出している背景要因を分析することによって、男女平等社会の実現に向けての努力の一助にすることを目的とする。

第2節 調査の枠組み

本研究では、『援助交際』に関する既存の評論、性行動や非行に関する心理学の知見、および面接調査や予備調査の結果を基にして、Fig. 1-2-0-1に示す調査枠組みを設定し、調査票を構成した。調査枠組みには、『援助交際』と男女平等意識を調査の中核に据え、これらの主要概念を規定すると考えられる諸要因が整理されている。個々の要因の詳細な説明は以下の章に譲り、本節では調査枠組みの概略を説明する。

『援助交際』の態度を規定する要因について、環境的背景と心理的背景に分けて捉えた。

環境的背景としては、家族構成や親の属性（年齢や学歴など）を含む基本的属性と、家庭環境、学校環境、経済背景、友人環境などを取りあげた。本研究では、これらの環境的背景が、女子高校生の心理に影響を与え、その心理が『援助交際』に対する態度や『援助交際』の経験に影響するという心理機制を仮定している。

心理的背景としては、現実感・充実感の不足、流行への同調、公的自意識などの、心理学において現代青年に特有な心理として注目されている諸特性を取りあげた。また、非行との関連が強いことが明らかになっている、精神的健康、問題行動念慮、非行規範なども取り入れた。

さらに、『援助交際』に強く関連すると推定されている、ミーイズム、寂しさ、ぬくもり希求、強迫的購入意欲など、従来の心理学では扱われることの少なかった特性も含している。

『援助交際』にかかる側面では、『援助交際』の直接的な経験だけでなく、『援助交際』をどう捉えているかという態度にも焦点を当ててみた。『援助交際』の経験や態度にかかる要因として、恋愛に対するイメージや、性風俗への接触、移動通信（携帯電話やPHS）などが含まれている。また、『援助交際』の経験のあるものに対しては、交際の理由や交際後の感想などについても回答を求めた。

本研究の第2の中心概念である「男女平等意識」については、性差の認識、平等に関する規範意識、性別行為への抵抗感、結婚と職業の関係に関する意識、男女平等への関心や情報交換の程度、性差別への不満など、多層的に調査を行う。こうした男女平等意識を規定する要因として、学校教育、家庭環境、性被害の経験などが取りあげられた。

Fig. 1-2-0-1 調査の枠組み

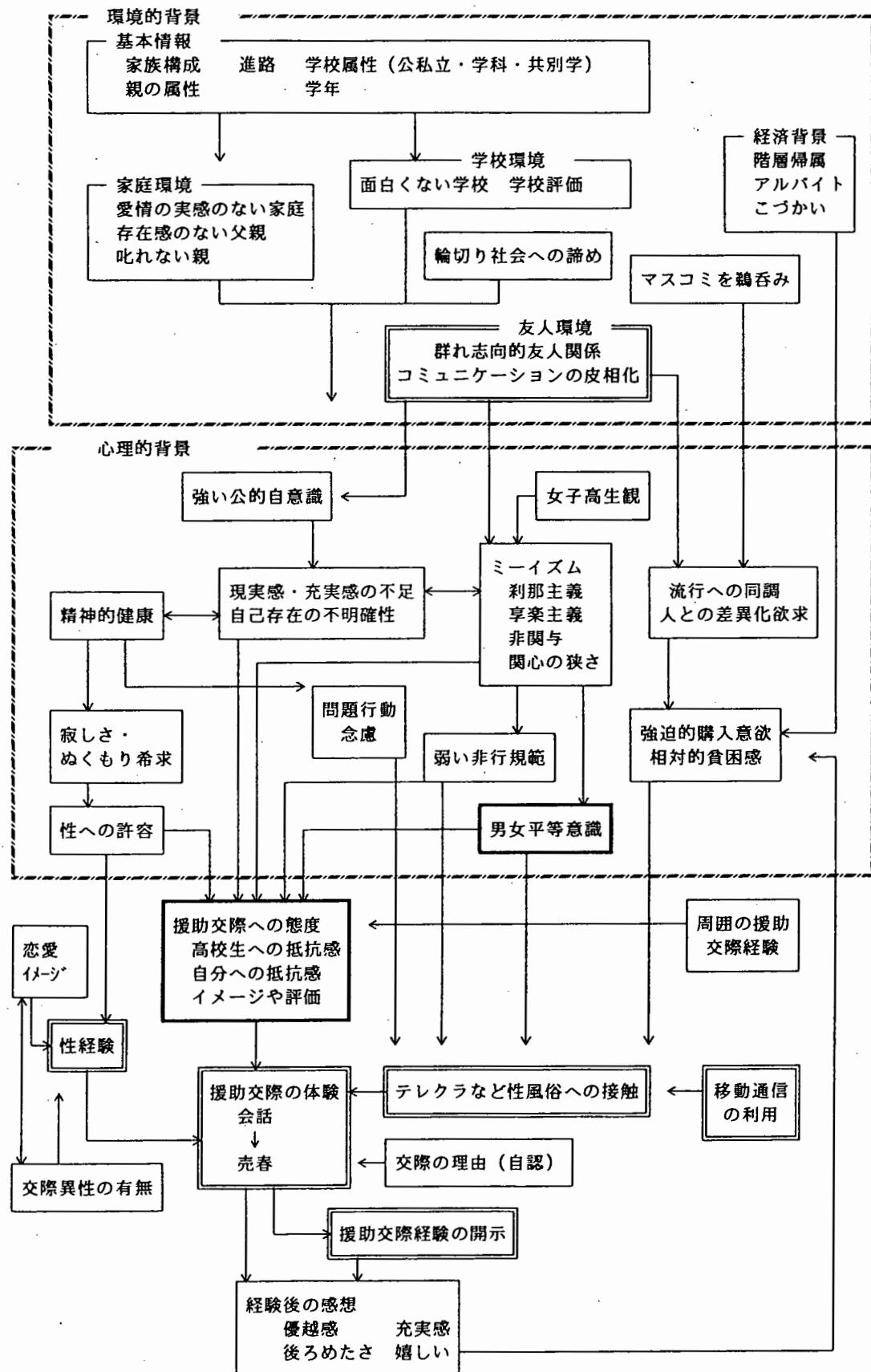
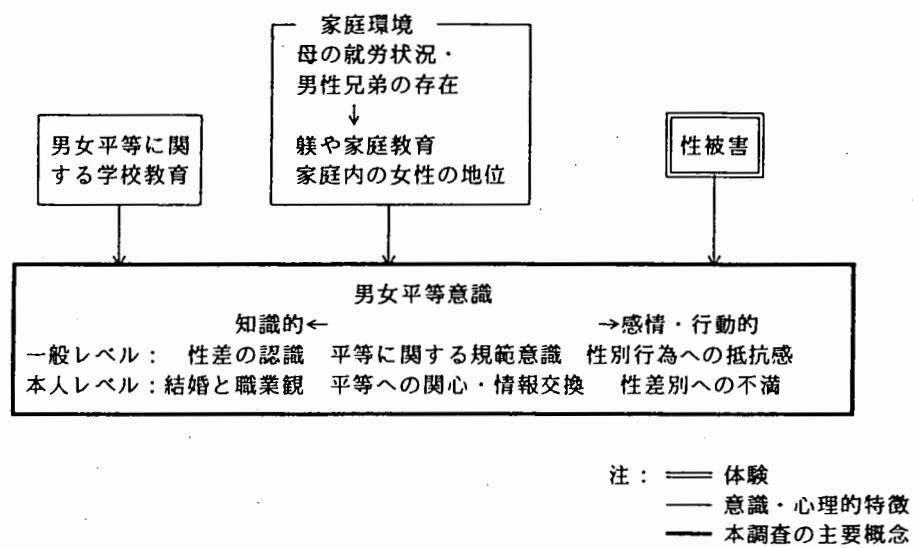


Fig. 1-2-0-1 続き



第3節 調査の実施状況

1. 調査地域と標本抽出方法

(1)調査地域

首都40キロ圏

(2)調査対象者

高校に在学する15歳から18歳の女子。

(3)標本抽出法

単純無作為2段抽出。対象地域を町丁単位に分けて、80地点を無作為抽出し（第1段）、各地点の住民基本台帳から該当年齢者を12名ずつ無作為抽出した（第2段）。ただし、面接時に対象者が高校に在学していないことが判明した場合には、対象外とした。

2. 調査方法と期間

(1)調査方法

訪問留置法。対象者の調査に対する警戒感を弱めるために、調査員は女性に限定した。調査員が各家庭を訪問した際には、対象者本人に会って対象者自身の記入を条件に調査を依頼した。回答は無記名で求めている。記入後に対象者自身の手によって調査票を密封していただき、回収時に調査員は密封した封筒を受け取った。

(2)調査実施期間

平成9年（1997年）10月9日（木曜）～10月28日（火曜）

(3)調査実施機関

（株）マーケッティング・サービス。

3. 調査数と回収数

(1)調査数

960名。

(2)有効回収数と未回収票の内訳

回収数608票。回収率63.3%。うち、途中拒否および投票が8名あり、有効回収数（回答者数）は600票であった。有効回収率は62.5%である。

未回収票の内訳は、表1-3-1の通りで、「拒否」が20%（調査数全体に対する比率、以下同じ）が多いほか、対象者「本人に会えない」が10%と多くなっている。

Table 1-3-3-1 未回収票の内訳(N=960)

理由	拒否	会えず	長期不在	病気中	住所不明	転居	対象
票数	196	94	8	2	34	10	8
比率	20.4%	9.8%	0.8%	0.2%	3.5%	1.0%	0.8%

注：比率は、調査数全体（960名）に対する比率である。

第4節 回答者の構成

回答者の基本的属性は以下の通りである。

Table 1-4-0-1 学年別構成

学年	1年	2年	3年
人数	185	206	209

Fig. 1-4-0-1 年齢構成 (N=600)

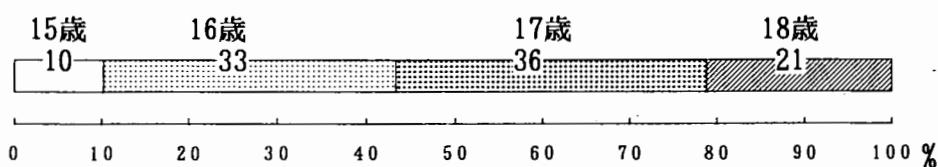


Fig. 1-4-0-2 公立・私立別 (N=600)

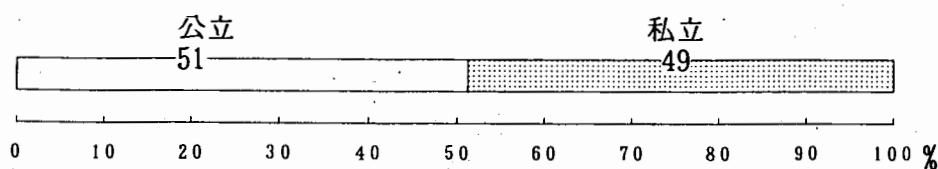


Fig.1-4-0-3 学校別 (N=600)

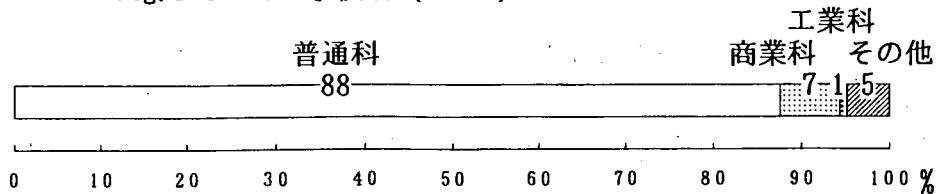


Fig. 1-4-0-4 男女共学・女子校別 (N=600)

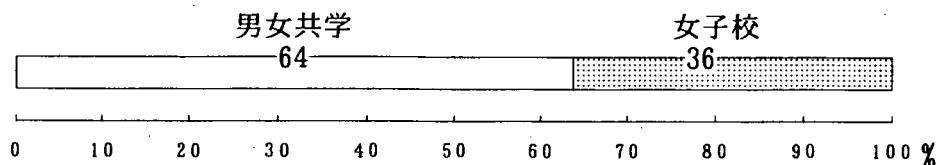


Fig. 1-4-0-5 居住地域別 (N=600)

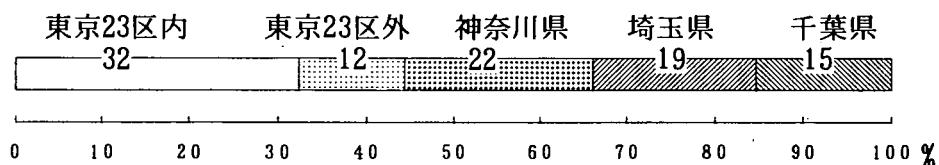


Table 1-4-0-2 親との同別居構成

関係	父				母			
	同居	別居	離死別	不明	同居	別居	離死別	不明
%	91.3	3.3	4.0	1.3	96.3	0.5	1.7	1.5

本報告所の表記法は、下記の原則に基づいている。

巻末の単純集計表および各項目に対する回答頻度の提示を除いて、本報告書の分析において示される数値は、原則として無回答の者（NA）を除外して算出してある。クロス集計などにおいても、NAを除いてあるため、各層の回答者の和は、回答者の全数とは一致しな

いものもある。

とくに記載していない限り図表中の数値は、%の値を示している。表中のNは、回答者の人数を示している。

統計的検定の結果記述は、有意水準5%を基準とし、5%水準に*印を1%水準に**印を付記した。表中の「SD」は、不偏標準偏差を示している。

第2章 尺度の作成

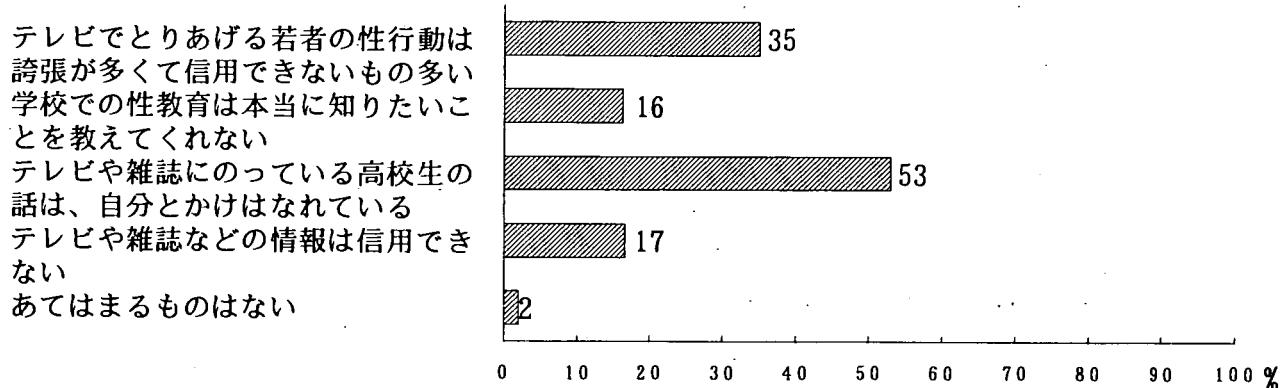
本研究では、女子高校生たちの様々な社会観、社会的態度、心理的傾向を明らかにするために各種尺度が用いられている。それらの中には、既存の尺度や本研究のために新たに設定されたものが含まれている。本章では、これらの尺度について、尺度を構成する項目や尺度作成の過程について述べる。

第1節 マスコミ鵜呑み尺度

1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量

マスコミに対する態度（マスコミの情報に流されない態度）を測定する項目として、東京都生活文化局(1985)の3項目を使用した。項目内容と各項目に対する肯定率をFig. 2-1-1-1に示す。項目ごとにみると、「テレビでとりあげる若者の性行動は、誇張が多くて信用できないものが多い」の肯定率が他の項目と比べて高いものの、全体的に肯定率が低かった。

Fig. 2-1-1-1 マスコミに対する態度 (N=600)



2. 尺度の作成過程

回答方法は、回答者自身の考え方や行動にあてはまるものを、いくつでも選択することを求める多重回答形式である。いずれの項目も、肯定された（○がつけられた）場合を2点、肯定されない（○がつけられていない）場合を1点として得点化した。

3項目の回答を主成分分析した結果、いずれも第1主成分に高い負荷量を示し、1次元性が確認された (Table 2-1-2-1)。本報告書ではこの尺度を「マスコミ鵜呑み尺度」と呼ぶ。

3. 尺度得点の分布と類型化

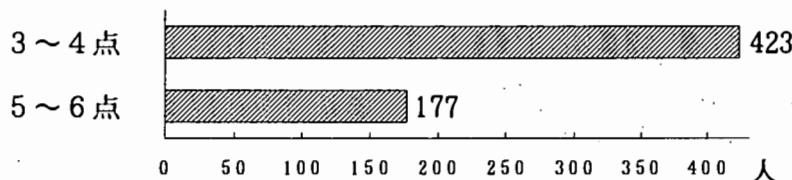
この3項目の得点を単純加算し、得点の分布を確認したところ、6点の該当者が少なく偏りがみられた（得点範囲は3～6点）。そこで、単純加算得点が、3～4点のものを1点、5～6点のものを2点と再カテゴリー化し、これを最終的な尺度得点とした。この尺度得点は、得点が高いほどマスコミに流されない態度をもっていることを示している。

マスコミ鵜呑み尺度得点の得点分布は、Fig. 2-1-3-1に示す通りである。

Table 2-1-2-1 マスコミ鵜呑み尺度に関する主成分分析結果

項目内容	成分 1
Q10 7. テレビでとりあげる若者の性行動は、誇張が多くて信用できないものが多い	74
8. テレビや雑誌にのっている高校生の話は、自分とかけはなれている	64
10. テレビや雑誌などの情報は信用できない	74
固有値	1.50
寄与率(%)	50.05

Fig. 2-1-3-1 マスコミ鵜呑み尺度(類型化)の頻数分布



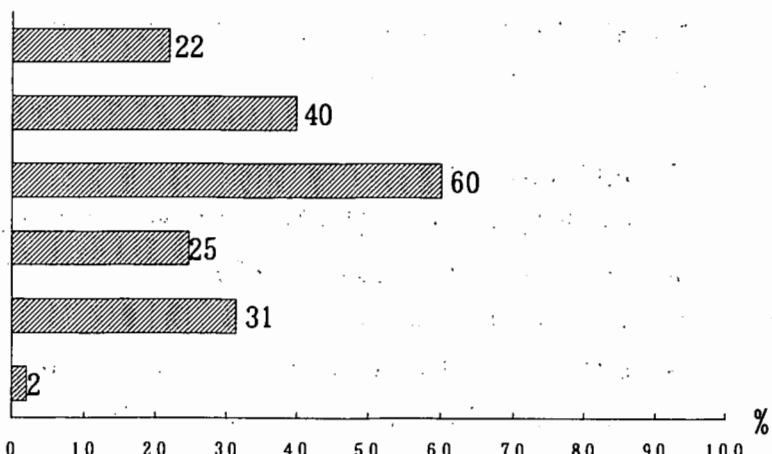
第2節 社会観に関する尺度

1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量

社会観を測定する項目として、東京都生活文化局(1985)の5項目を使用した。項目内容と各項目に対する肯定率をFig. 2-2-1-1に示す。「社会をよくするために一人一人が努力しなければならない」の肯定率が他の項目と比べ、非常に高いことがわかる。一方「よい学校を出ないと、よい生活ができる世の中である」と「自分たちの力では、社会のしくみは変わらないと思う」の肯定率は低く、社会に対する前向きな態度が伺われる。

Fig. 2-2-1-1 社会観 (N=600)

よい学校を出ないと、よい生活ができる世の中である
受験戦争は、今の世の中ではしかたのないことだと思う
社会をよくするには、一人一人が努力しなくてはならない
自分たちの力では、社会のしくみは変わらないと思う
社会をよくするために、自分も何かしたい
あてはまるものはない



2. 尺度の作成過程

回答方法は、回答者自身の考え方や行動にあてはまるものを、いくつでも選択することを求める多重回答形式である。いずれの項目も、肯定された（○がつけられた）場合を2点、肯定されない（○がつけられていない）場合を1点として得点化した。

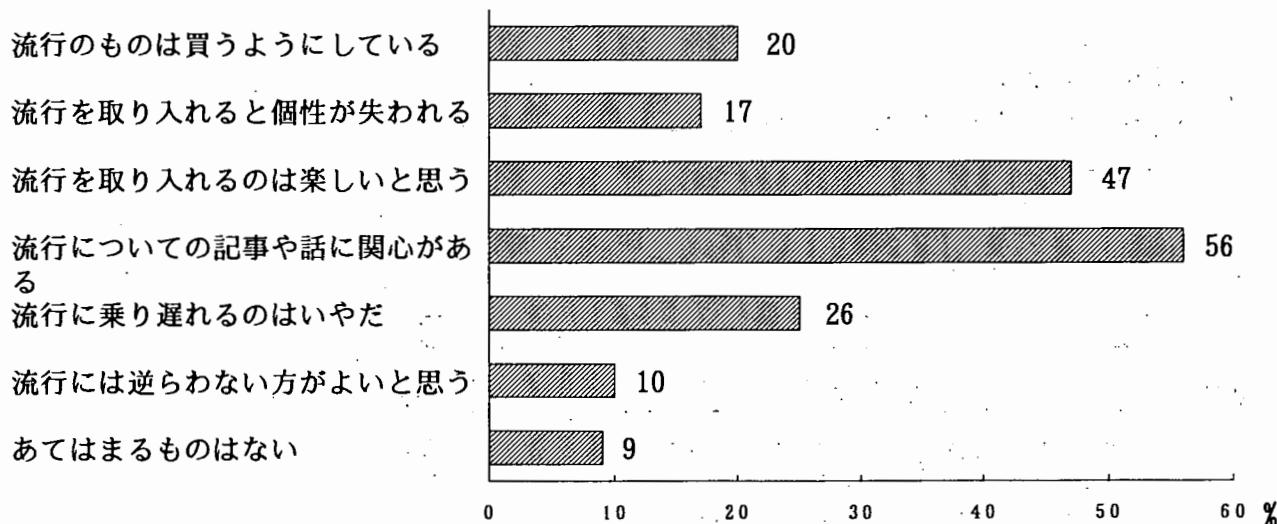
5項目の回答について主成分分析を行ったが、尺度の1次元性は確認されなかった。そこで、社会観尺度の作成を断念し、社会観の各側面をあらわす独立項目として個別に分析することとした。

第3節 流行意識に関する尺度

1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量

流行意識（流行の取り入れに関する態度）を測定する項目として、独自に作成した6項目を使用した。項目内容と各項目に対する肯定率をFig. 2-3-1-1に示す。項目ごとに見ると、まず「流行についての記事や話に关心がある」と「流行を取り入れるのは楽しい」の肯定率が高く、回答者の流行への関心の高さがみられた。その一方で、「流行には逆らわない方がよい」の肯定率は低く、流行だけに目をとらわれない回答者の特性が伺われる。

Fig. 2-3-1-1 流行に対する意識 (N=600)



2. 尺度の作成過程

回答方法は、回答者自身の考え方や行動にあてはまるものを、いくつでも選択することを求める多重回答形式である。質問項目のうち、1・3・4・5・6の5項目については、肯定された（○がつけられた）場合を2点、肯定されない（○がつけられていない）場合を1点として得点化した。逆転項目である2については、肯定された（○がつけられた）場合を1点、肯定されない（○がつけられていない）場合を2点として得点化した。

6項目の回答を主成分分析した結果、いずれも第1主成分に高い負荷量を示した。（Table 2-3-2-1）。そこで、この6項目を「流行意識尺度」と呼び、各項目得点の単純加算をもって尺度得点とした。得点が高いほど流行意識が高いことを示している。

本尺度の信頼性係数は、 $\alpha = .60$ である。

注) 信頼性係数とは、尺度得点の結果再現性を示す指標である。本報告書において信頼

性係数とは、Cronbachの α 係数を指している。 α は0～1の値を取り、1に近いほど信頼性が高い。

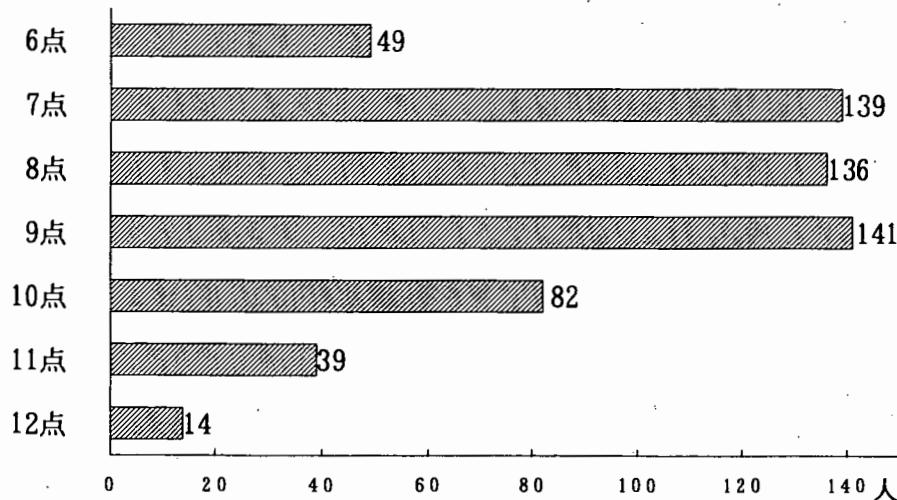
Table 2-3-2-1 流行意識に関する項目の主成分分析結果（値は主成分負荷量）

項目内容	成分1
Q9 1. 流行のものは買うようにしている	.72
2. 流行を取り入れると個性が失われる（逆転項目）	.36
3. 流行を取り入れるのは楽しい	.65
4. 流行についての記事や話に関心がある	.60
5. 流行に乗り遅れるのはいやだ	.71
6. 流行には逆らわない方がよい	.35
固有値	2.04
寄与率(%)	34.08

3. 尺度得点の分布

流行意識尺度の得点分布は、Fig. 2-3-3-1に示す通りである。

Fig. 2-3-3-1 流行意識尺度の頻数分布



第4節 金銭感覚に関する尺度(強迫的購買意欲尺度・金銭至上主義尺度)

1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量

本研究では、『援助交際』の経験や態度にかかわる要因として、高校生の金銭感覚に注目した。金銭感覚には多様な側面があるが、常に商品を買いたい衝動を抱くという「強迫的購買意欲」と、金銭を重要視する態度である「金銭至上主義」に焦点を当てて、質問項目が設定された。質問項目の作成は我々が独自に行ったが、一部は原岡（1990）を参考にした。

質問はいずれも回答者自身の考え方や行動にあてはまるものを、いくつでも選択することを求める多重回答形式である。2種類の態度を測定する項目内容と各項目の肯定率をFig. 2-4-1-1とFig. 2-4-1-2に示す。

Fig. 2-4-1-1 金銭感覚に関する項目 (Q9) に対する回答頻度 (N=600)

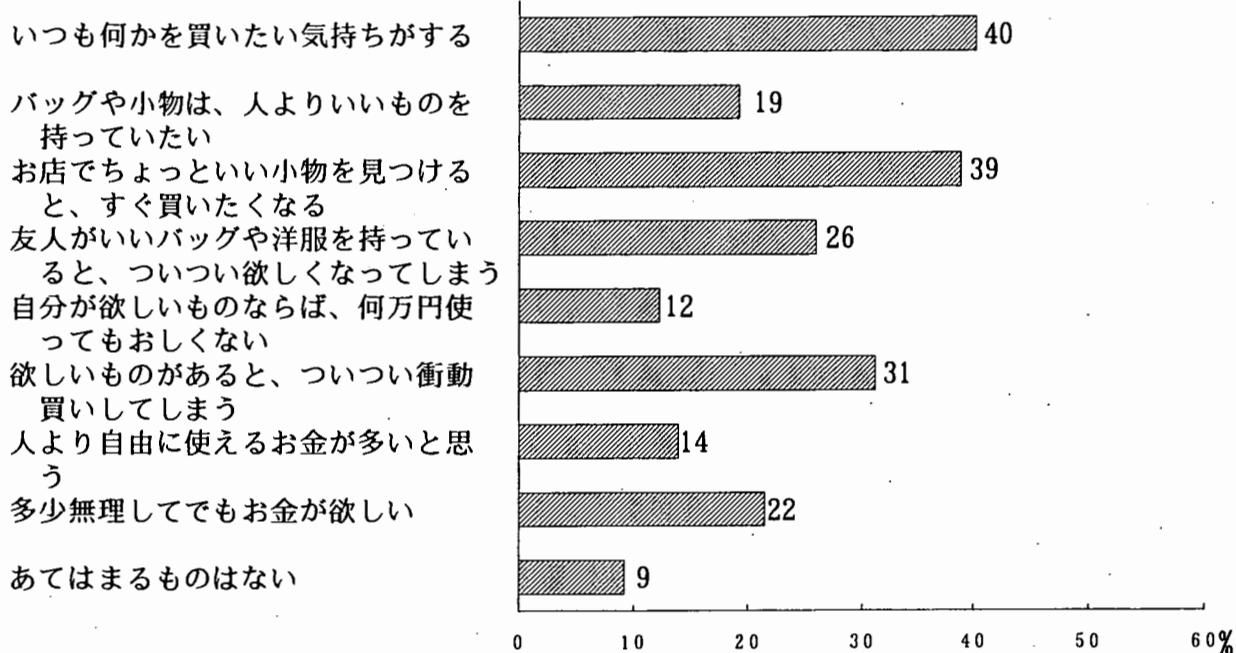


Fig. 2-4-1-2 金銭感覚に関する項目 (Q10) に対する回答頻度 (N=600)

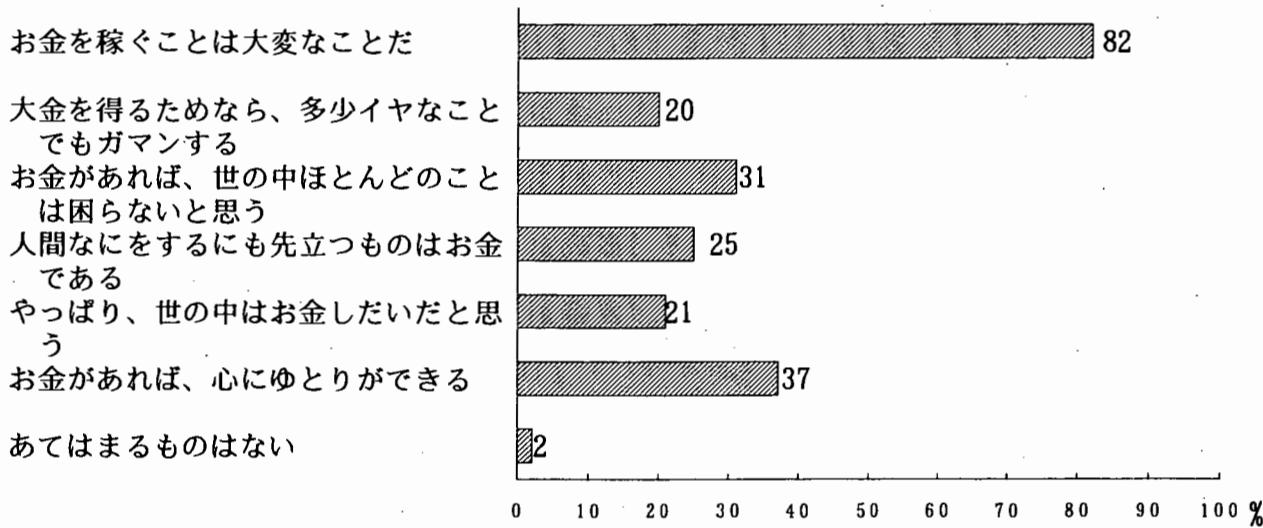


Fig. 2-4-1-1に示されるように、3～4割の回答者は、「いつも何か買いたい気持ちがする」「お店でちょっといい小物を見つけると、すぐ買いたくなる」「ほしいものがあると、ついつい衝動買いしてしまう」など、衝動的な購買傾向を有していた。

Fig. 2-4-1-2に示すように、8割以上の回答者は「お金を稼ぐことは大変なことだ」と認識していた。一方、「お金があれば、世の中のほとんどのことは困らないと思う」や「お金があれば、心にゆとりができる」など金銭を重視する項目は、3割以上の回答者が肯定していた。

2. 尺度の作成過程

Fig. 2-4-1-1及びFig. 2-4-1-2に示す14項目の構造を確認するために、因子分析を行った。因子分析は主成分解で2因子を抽出し、VARIMAX回転を行った。2因子までの累積寄与率は、31.3%であった。回転後の因子負荷量をTable 2-4-2-1に示す。

Table 2-4-2-1 金銭感覚に関する因子分析（回転後の因子負荷量）

	項目内容	因子1	因子2
Q9	7. いつも何かを買いたい気持ちがする 8. バッグや小物は、他の人よりいいものを持ってみたい 9. お店でいい小物を見つけると、すぐに買いたくなる 10. 友人がいいバッグや小物を持っていると、欲しくなってしまう 11. 自分が欲しいものためならば、何万円使ってもおしくない 12. 欲しいものがあると、ついつい衝動買いしてしまう 13. 人より自由に使えるお金が欲しいと思う 14. 少し無理をしてでもお金が欲しい	.64 .51 .60 .50 .42 .53 .16 .57	.11 .11 .10 .18 .04 .01 .07 .25
Q10	1. お金をかせぐのは大変なことだ 2. 大金を得るためならば、多少イヤなことでもガマンする 3. お金があれば、世の中のほとんどのことは困らないと思う 4. 人間何をするにも先立つものはお金である 5. やっぱり、世の中はお金次第だと思う 6. お金があれば、心にゆとりができる	.04 .36 .08 .01 .06 .26	.13 .30 .76 .70 .82 .35
		因子負荷量の2乗和 寄与率 (%)	2.29 16.36 2.09 14.93

Table 2-4-2-1の結果に基づき、第1因子に負荷の高い7項目（Q9-7～12およびQ9-14）を尺度に用いることとした。これらの項目を肯定した個数を数えて得点化した ($\alpha=.63$)。しかし、この得点には分布の偏りが見られたため、Fig. 2-4-2-1のようなカテゴリーまとめを行った。この尺度得点は、得点の高い回答者ほど、強迫的に物を購入する態度をもっていることを意味する。そこで、本報告書ではこの尺度を「強迫的購買意欲尺度」と呼ぶ。続いて、Table 2-4-2-1の第2因子に負荷の高い5項目（Q10-2～6）を尺度に用いることとした。これらの項目を肯定した個数を数えて得点化した ($\alpha=.61$)。しかし、この得点には分布の偏りが見られたため、Fig. 2-4-2-2のようなカテゴリーまとめを行った。この尺度得点は、得点の高い回答者ほど、金銭を重要視する態度をもっていることを意味する。そこで、本報告書ではこの尺度を「金銭至上主義尺度」と呼ぶ。

Fig. 2-4-2-1 強迫的購買意欲尺度頻数分布

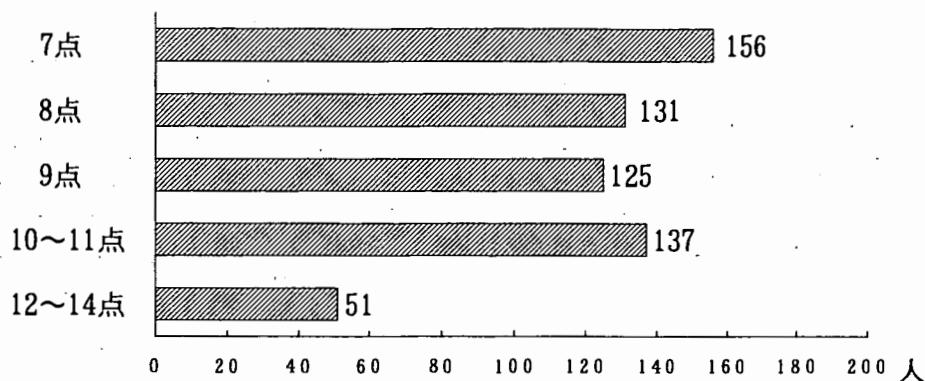
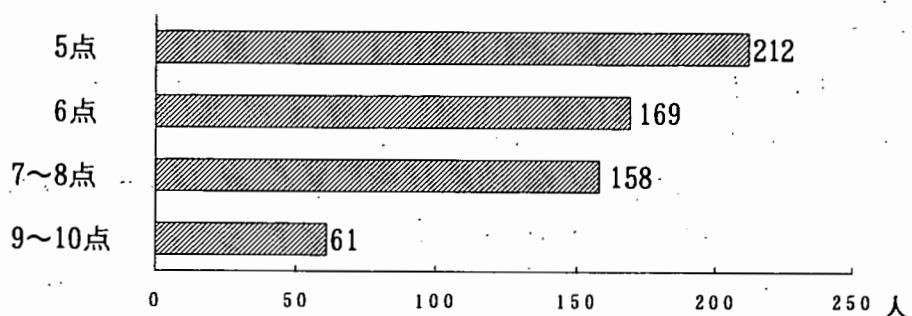


Fig. 2-4-2-2 金銭至上主義尺度の頻数分布



第5節 心理尺度

本研究では、『援助交際』に対する態度の差を明らかにするために、女子高校生たちの心理傾向を様々な心理尺度を用いて測定することを試みた。本節では、本研究で注目した心理傾向の概要と、その尺度作成過程について説明する。

1. 賞賛獲得欲求尺度

「人から認められたい」「人にはめられたい」という心理傾向を測定するために、賞賛獲得欲求の測定を試みた。

菅原（1986）は、人々が他者の目を気にする心理の背後に「賞賛獲得」「拒否回避」という2つの欲求があることを明らかにしている。賞賛獲得欲求とは人からほめられたいと願う欲求であり、拒否回避欲求とは人から嫌われたくないと願う欲求である。菅原（1986）は、この2つの欲求について測定する尺度を作成している。

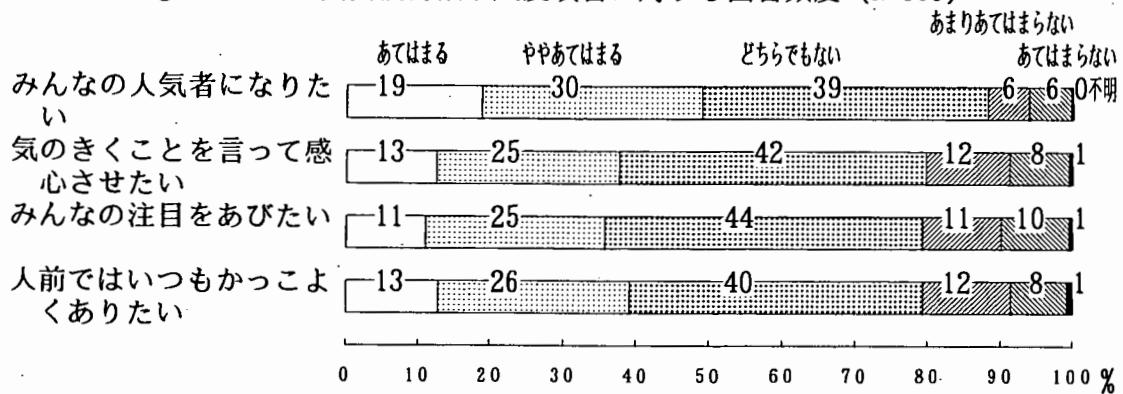
本研究では、このうちの賞賛獲得欲求に注目し、元論文の5項目の一部を尺度項目として使用した。

(1) 尺度項目および項目単位の基礎統計量

項目内容と各項目に対する回答頻度がFig. 2-5-1-1に示されている。

(2) 尺度の作成過程

Fig. 2-5-1-1 賞賛獲得欲求尺度項目に対する回答頻度 (N=600)



前述したように、本研究で使用した尺度項目は菅原（1986）の尺度5項目中の4項目を使用したものであるが、改めてこの4項目の1次元性の確認を行うとともに、信頼性および得点分布を検討することを試みた。

なお、回答方法は、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法である。いずれの項目も、「あてはまる」を5点～「あてはまらない」を1点として得点化した。

まず、主成分分析を行った結果をTable 2-5-1-1に示す。いずれも第一主成分に高い負荷量を示した。そこでこの4項目を賞賛獲得欲求を測定する尺度項目とし、回答の単純加算をもって尺度得点とした。従って、得点が高いほど、賞賛獲得欲求が高いことを示している。本尺度の信頼性係数は、 $\alpha=.86$ で信頼性は十分であると判断された。

Table 2-5-1-1 賞賛獲得欲求尺度に関する主成分分析結果

項目内容	負荷量
Q13 a. みんなの人気ものになりたい	.88
b. 何か気のきいたことをいって人を感心させたい	.80
c. みんなの注目をあびたい	.88
d. 人まえではいつもかっこよくありたい	.79
固有値	2.80
寄与率 (%)	69.94

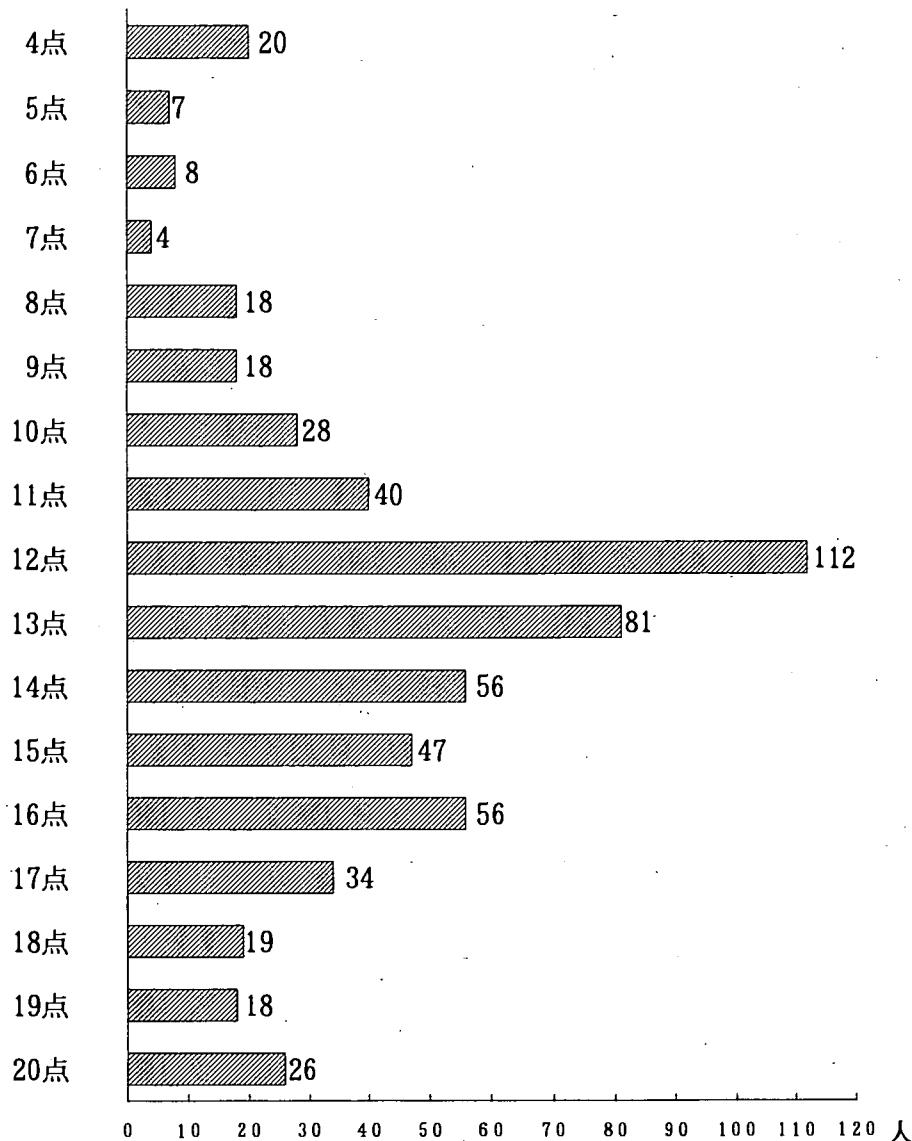
(3)尺度得点の分布

賞賛獲得欲求尺度の得点分布を、Figure 2-5-1-2に示す。

2. 公的自意識尺度

人からみられた自分をどの程度気にするか、他者がみた自己の側面に対する意識の強さを測定するために、公的自意識の測定を試みた。

Fig. 2-5-1-2 賞賛獲得欲求尺度の頻数分布



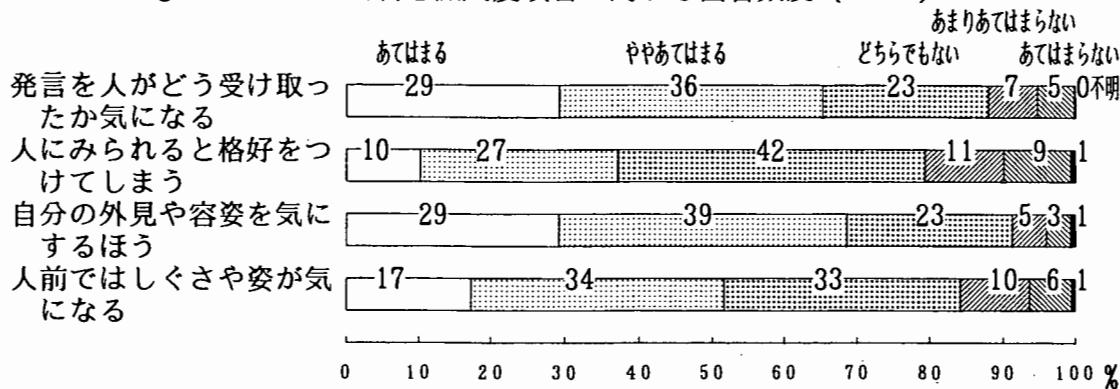
人間は他の多くの動物と異なり、自分を客観的な対象として考え、意識することができる。自分自身に向けられた意識は一般に自意識と呼ばれている。さらにこの自意識は、公的自意識と私的自意識という2側面に分かれることが明らかになっている。公的自意識とは、自分の容貌や服装、あるいは言動など、他者の目に映る自分の姿に向けられた意識である。私的自意識とは、自分の感情など他者からは直接見えない自分の内面に向けられた意識である。この両自意識をどの程度持ちやすいかには個人差があるが、公的自意識の強い人は、他者の目を気にすることから、自分の外見に常に気を使い、ファッショニに敏感であったり、その場の雰囲気に相応しいように振る舞いを変えていく傾向が強い。一方、私的自意識の強い人は、自分感情の変化に敏感であろうと努め、他者の意見に左右されるよりも自分自身の態度の一貫性を保とうとする傾向が強い。

この両自意識を測定する日本語の尺度として、菅原（1984）の自意識尺度日本語版がある。本研究では、公的自意識の測定に際し、菅原（1984）の公的自意識尺度を採用し、元尺度11項目のうち、一部を使用する。

(1) 尺度項目および項目単位の基礎統計量

項目内容と各項目に対する回答頻度をFig. 2-5-2-1に示した。

Fig. 2-5-2-1 公的自意識尺度項目に対する回答頻度 (N=600)



(2) 尺度の作成過程

本研究で使用した尺度項目は、菅原（1984）の尺度11項目中の4項目を使用したものである。また、原論文では「自分の容姿を気にするほうだ」の項目を、高校生にもわかりやすいように「自分の外見や容姿（ようし）を気にするほうだ」に改めた。そのため、改めてこの4項目の1次元性の確認を行うとともに、信頼性および得点分布を検討することを試みた。

なお、回答方法は、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法である。いずれの項目も、「あてはまる」を5点～「あてはまらない」を1点として得点化した。

まず、主成分分析を行った結果をTable 2-5-2-2に示す。いずれも第一主成分に高い負荷量を示した。そこでこの4項目を公的自意識を測定する尺度項目とし、回答の単純加算をもって尺度得点とした。従って、得点が高いほど、公的自意識が高いことを示している。本尺度の信頼性係数は、 $\alpha=.74$ で信頼性は十分であると判断された。

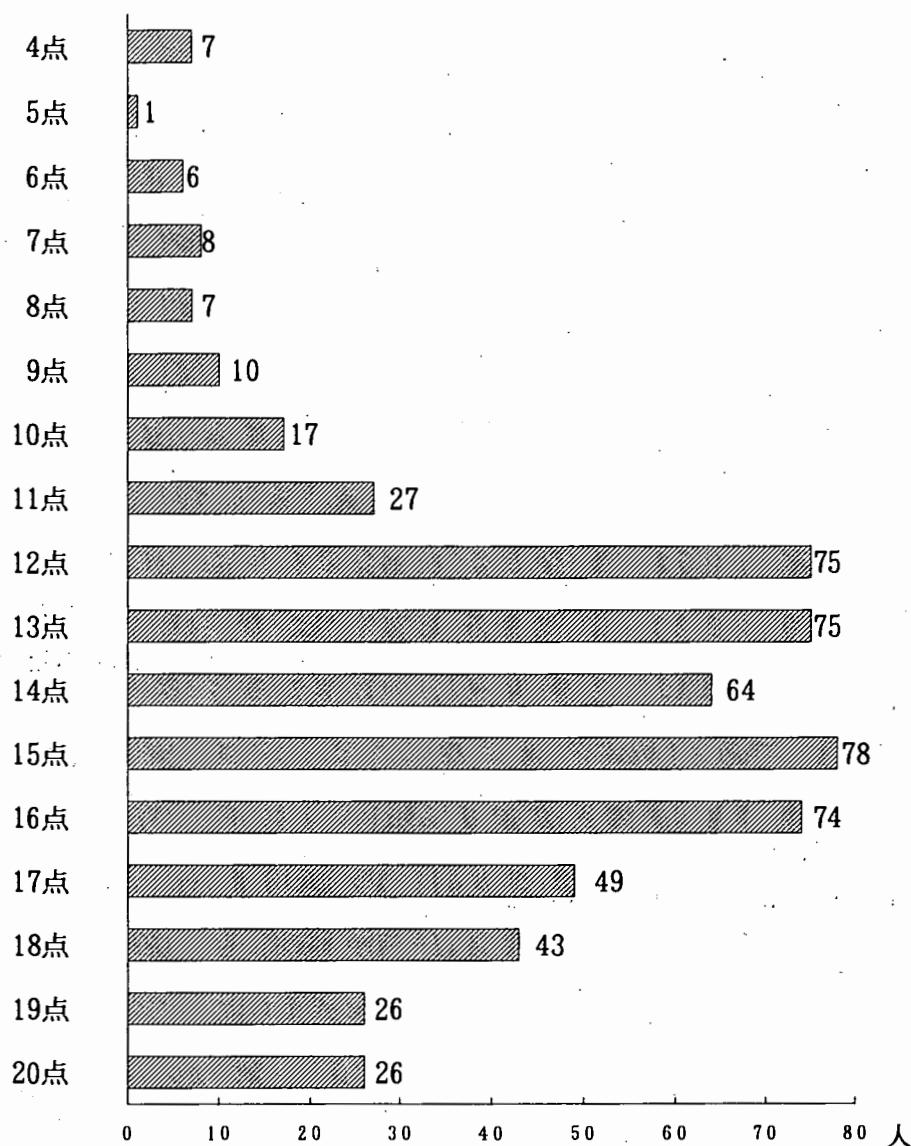
Table 2-5-2-1 公的自意識尺度に関する主成分分析結果

項目内容	負荷量
Q13 e. 自分の発言を他人がどう受け取つたか気になる	.69
f. 人にみられていると、ついかっこうをつけてしまう	.75
g. 自己の外見や容姿（ようし）を気にするほうだ	.76
h. 人まえで何かする時、自分のしぐさや姿が気になる	.81
固有値	2.27
寄与率(%)	56.64

(3) 尺度得点の分布

公的自意識尺度の得点分布を、Fig. 2-5-2-2に示す。

Fig. 2-5-2-2 公的自意識尺度の頻数分布



3. 私的自意識尺度

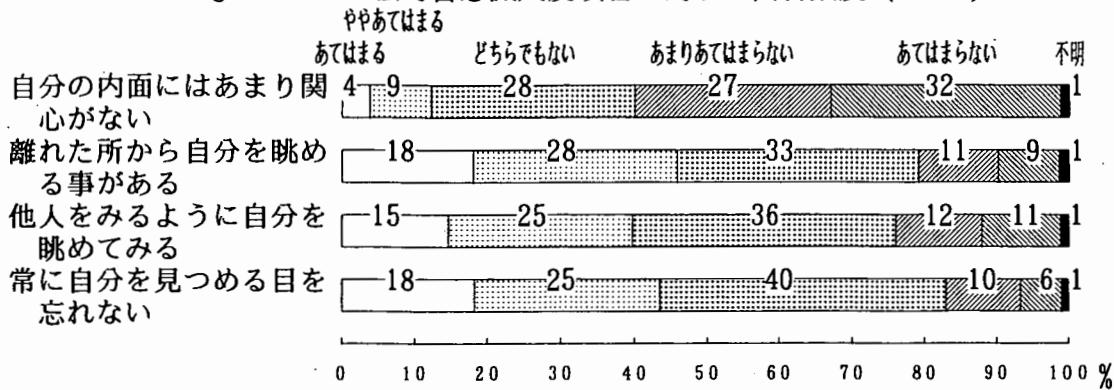
本研究では、自分の内面に向かう意識の強さを測定するために、私的自意識の測定を試みた。私的自意識は、自己に向けられる意識（自意識）の一側面であり、自分の感情など他者からは直接見えない自分の内面に向けられた意識である。前述の公的自意識の部分で述べたように、私的自意識の強い人は、自分の感情の変化に敏感であろうと努め、他者の意見に左右されるよりも自分自身の態度の一貫性を保とうとする傾向が強いことが示されている。

菅原（1984）は10項目からなる私的自意識尺度を作成しているが、本研究ではその一部を尺度項目として使用する。

(1) 尺度項目および項目単位の基礎統計量

項目内容と各項目に対する回答頻度をFig. 2-5-3-1に示した。

Fig. 2-5-3-1 私的自意識尺度項目に対する回答頻度 (N=600)



(2) 尺度の作成過程

本研究で使用した尺度項目は、菅原（1984）の尺度10項目中の4項目を使用したものであるが、改めてこの4項目の1次元性の確認を行うとともに、信頼性および得点分布を検討することを試みた。

回答方法は、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法である。4項目のうち、j・k・lの3項目は、「あてはまる」を5点～「あてはまらない」を1点として得点化し、逆転項目のiは「あてはまらない」を5点～「あてはまる」を1点として得点化した。

まず、主成分分析を行った結果をTable 2-5-3-1に示す。いずれも第一主成分に高い負荷量を示した。そこでこの4項目を私的自意識を測定する尺度項目とし、回答の単純加算をもって尺度得点とした。従って、得点が高いほど、私的自意識が高いことを示している。本尺度の信頼性係数は、 $\alpha=.77$ で信頼性は十分であると判断された。

Table 2-5-3-1 私的自意識尺度に関する主成分分析結果

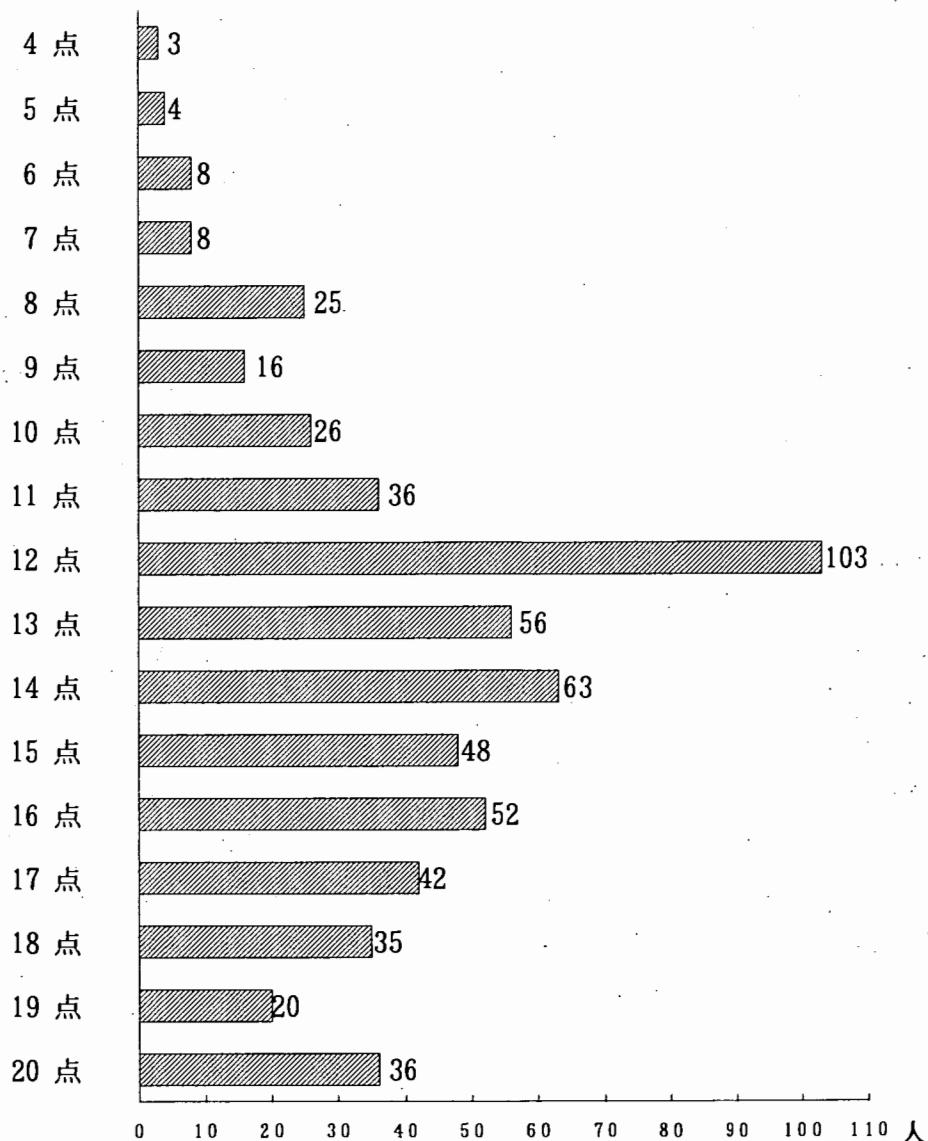
項目内容	負荷量
Q13 i. 自分自身の内面のことには、あまり関心がない	.48
j. ふと一步離れた所から自分をながめてみることがある	.88
k. 他人を見るように自分をながめてみることがある	.87
l. つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている	.82
固有値	2.42
寄与率(%)	60.53

(3) 尺度得点の分布

私的自意識尺度の得点分布を、Fig. 2-5-3-2に示す。

4. 充実感尺度

Fig. 2-5-3-2 私的自意識尺度の頻数分布



本研究では、女子高校生が、普段の生活の中でどの程度充実感をもっているのか測定することを試みた。白井（1997）は、時間的展望体験尺度のひとつとして充実感尺度を作成している。時間的展望とは、いわゆる「見通し」のことであるが、この時間的展望を検討する過程で白井（1997）は、現在に対する人々の態度を、「充実vs退屈・苦痛」としてまとめ、5項目からなる充実感測定尺度を作成している。本研究では、高校生用にこの5項目のうち一項目を変更し、さらに1項目を加え、新たに充実感尺度の作成を試みた。

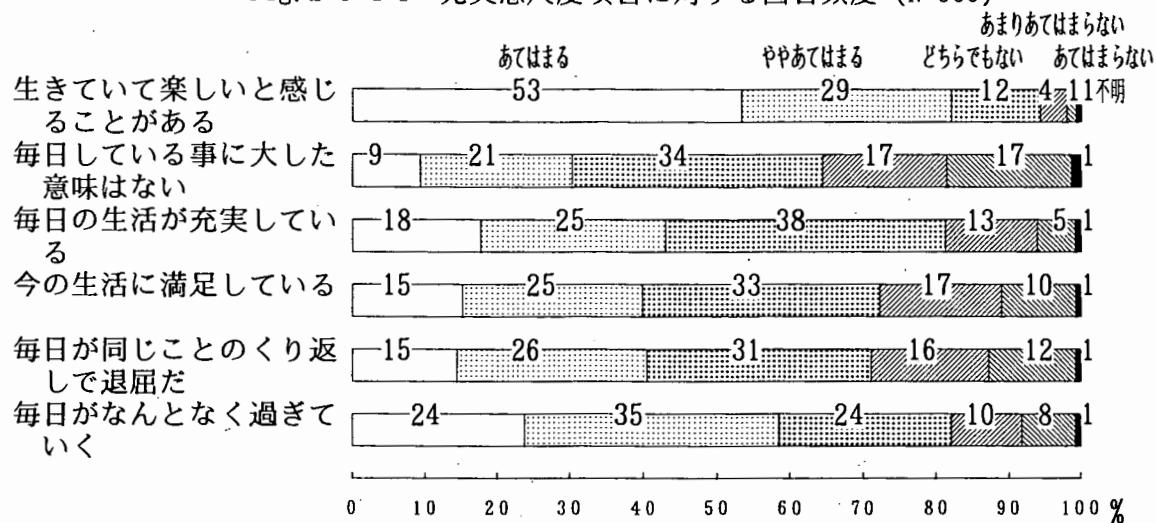
(1) 尺度項目および項目単位の基礎統計量

項目内容と各項目に対する回答頻度をFig. 2-5-4-1に示した。

(2) 尺度の作成過程

本研究で使用した尺度項目は、白井（1997）の時間的展望体験尺度から4項目（Q15b, c, d, f）を使用し、他に独自に2項目（Q15a, e）を作成したものである。そのため、改

Fig. 2-5-4-1 充実感尺度項目に対する回答頻度 (N=600)



めてこの6項目の1次元性の確認を行うとともに、信頼性および得点分布を検討することを試みた。

回答方法は、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法である。6項目のうちb・c・eの3項目は、「あてはまる」を5点～「あてはまらない」を1点として得点化し、逆転項目のa・d・fは「あてはまらない」を5点～「あてはまる」を1点として得点化した。

まず、主成分分析を行った結果をTable 2-5-4-1に示す。いずれも第一主成分に高い負荷量を示した。そこでこの6項目を充実感を測定する尺度項目とし、回答の単純加算をもって尺度得点とした。従って、得点が高いほど、充実感が高いことを示している。本尺度の信頼性係数は、 $\alpha=.80$ で信頼性は十分であると判断された。

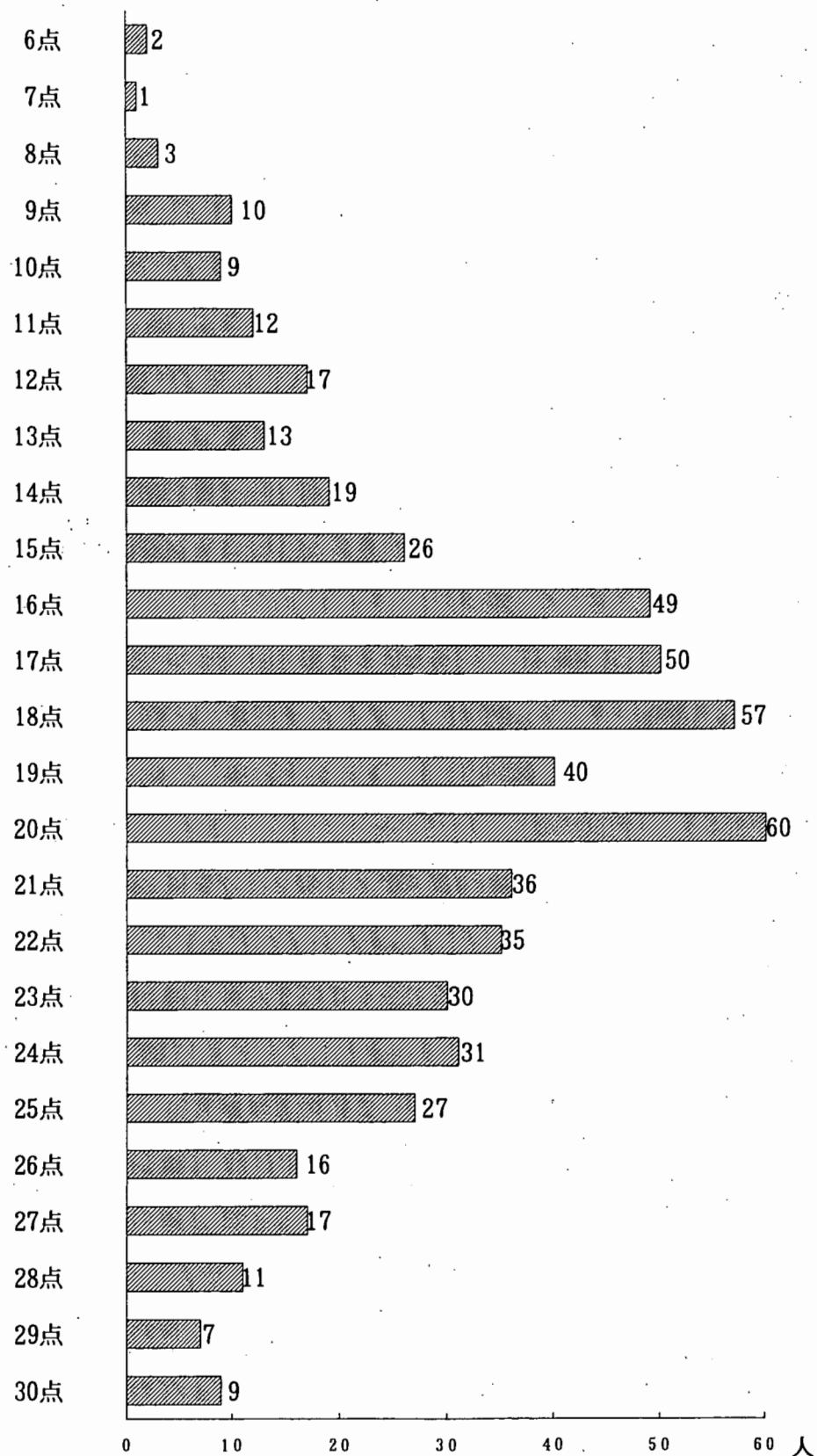
Table 2-5-4-1 充実感に関する主成分分析結果

項目内容	負荷量
Q15 a. 生きていて楽しいと感じる時がある	.56
b. 自分が毎日していることに、大した意味ないと感じる	.69
c. 毎日の生活が充実している	.77
d. 今の生活に満足している	.72
e. 毎日が同じことのくり返しで退屈（たいくつ）だ	.77
f. 每日がなんとなく過ぎていく	.72
固有値	3.01
寄与率(%)	50.09

(3)尺度得点の分布

充実感尺度の得点分布を、Fig. 2-5-4-2に示す。

Fig. 2-5-4-2 充実感尺度の頻数分布



5. 自己認識欲求尺度

女子高校生が、普段の生活の中でどの程度自分を知りたいと感じているのか、自己認識欲求の測定を試みた。

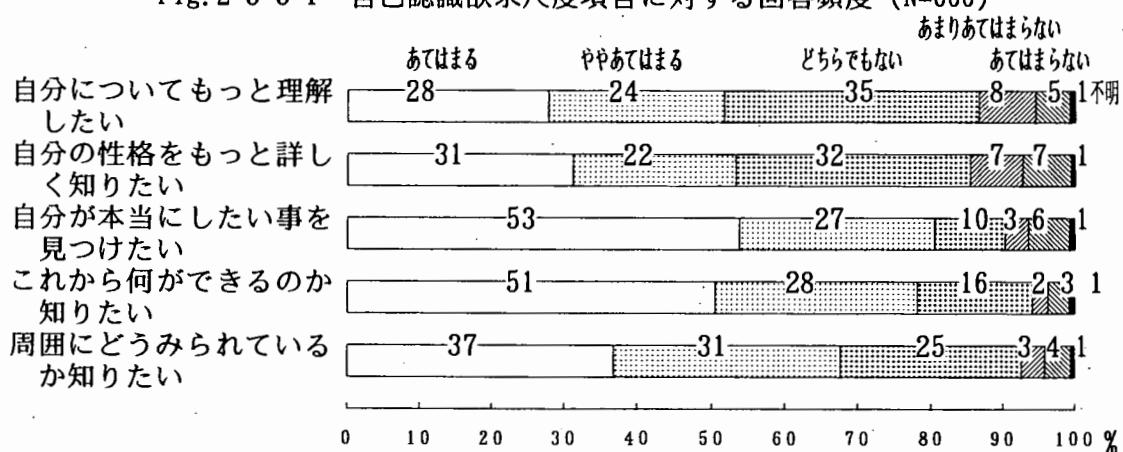
人は自分を知りたがり、自分に関する情報を取り入れようとする。上瀬（1992）は、人のもつ「自分を知りたい」とする欲求を自己認識欲求と名づけ、この強さを測定する尺度として自己認識欲求尺度を作成している。上瀬（1992）は、自己認識欲求が「自分がわからない」といった自己概念不明確感をもつ者に強く生じ、また、自己認識欲求が強いものは自分に関する情報を積極的に取り入れようとする事を示した。

自己認識欲求尺度は、大学生を対象としたもの（上瀬, 1992）や、中高年を対象としたもの（上瀬, 1995）があるが、福富（1996）は上瀬（1995）の5項目を用いて高校生の自己認識欲求を測定している。本研究では、この5項目の回答選択肢を一部変更して、自己認識欲求測定尺度として用いた。

(1) 尺度項目および項目単位の基礎統計量

項目内容と各項目に対する回答頻度をFig. 2-5-5-1に示した。

Fig. 2-5-5-1 自己認識欲求尺度項目に対する回答頻度 (N=600)



(2) 尺度の作成過程

本研究で使用した尺度項目 (Q15g, h, i, j, k) は、福富（1996）の自己認識欲求尺度5項目の表現および回答選択肢を変えて用いたものである。そのため、改めてこの5項目の1次元性の確認を行うとともに、信頼性および得点分布を検討することを試みた。

回答方法は、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法である。いずれの項目も、「あてはまる」を5点～「あてはまらない」を1点として得点化した。

まず、主成分分析を行った結果をTable 2-5-5-1に示す。いずれも第一主成分に高い負荷量を示した。そこでこの5項目を自己認識欲求を測定する尺度項目とし、回答の単純加算をもって尺度得点とした。従って、得点が高いほど、自己認識欲求が高いことを示している。本尺度の信頼性係数は、 $\alpha=.78$ となり、信頼性は十分であると判断された。

Table 2-5-5-1 自己認識欲求に関する主成分分析結果

項目内容	負荷量
Q15 g. 自分についてもっと理解したいと思うことがある	.77
h. 自分の性格についてもっとくわしく知りたい	.81
i. 自分が本当にしたいことを見つける	.65
j. これから的人生で、自分には何ができるのか知りたい	.77
k. 自分は周囲の人からどうみられているのか知りたい	.65
固有値	2.69
寄与率(%)	53.88

(3) 尺度得点の分布

自己認識欲求尺度の得点分布を、Fig. 2-5-5-2(次頁)に示す。

6 自己存在感のなさ尺度

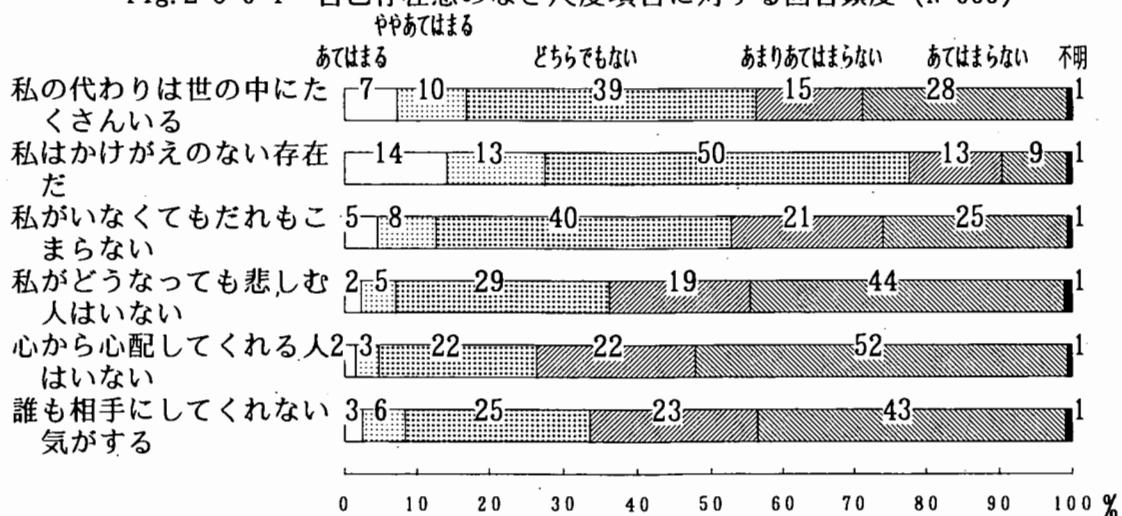
女子高校生たちは、自分たちをかけがえのない存在であると考えているのだろうか。あるいは自分はいなくてもいい存在であると、存在感のなさを感じているのだろうか。

本研究では、自己存在感のなさを測定するために、独自に6項目を作成し使用した。

(1) 尺度項目および項目単位の基礎統計量

項目内容と各項目に対する回答頻度をFig. 2-5-6-1に示した。

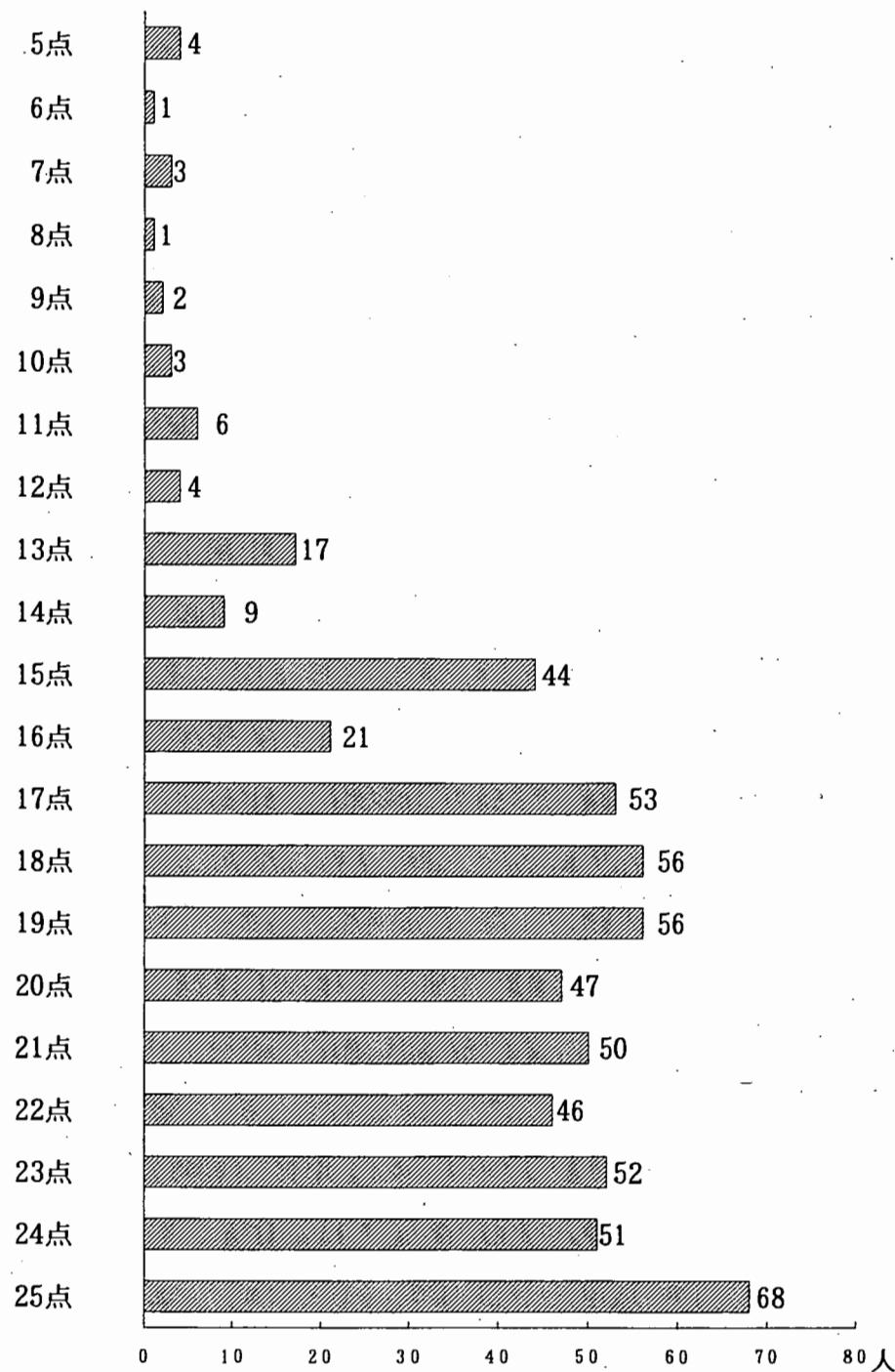
Fig. 2-5-6-1 自己存在感のなさ尺度項目に対する回答頻度 (N=600)



(2) 尺度の作成過程

本研究で使用した尺度項目は、独自に作成したものである。そのため、この6項目の1次元性の確認を行うとともに、信頼性および得点分布を検討することを試みた。

Fig. 2-5-5-2 自己認識欲求尺度の頻数分布



回答方法は、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法である。6項目のうち、1およびn～qの5項目は「あてはまる」を5点～「あてはまらない」を1点として得点化し、逆転項目のmは「あてはまらない」を5点～「あてはまる」を1点として得点化した。

まず、主成分分析を行った結果をTable 2-5-6-1に示す。いずれも第一主成分に高い負荷量を示した。そこでこの6項目を自己存在感のなさを測定する尺度項目とし、回答の単純加算をもって尺度得点とした。従って、得点が高いほど、自己存在感のなさが強いことを示している。本尺度の信頼性係数は、 $\alpha=.83$ で信頼性は十分であると判断された。

Table 2-5-6-1 自己存在感のなさに関する主成分分析結果

項目内容	負荷量
Q15 1. 私の代わりは世の中にたくさんいる	.65
2. 私はかけがえのない存在だ	.47
3. 私がいなくても、だれもこまらない	.84
4. 私がどうなっても悲しむ人はいない	.87
5. 私のことを心から心配してくれる人はいない	.81
6. だれも私を相手にしてくれないような気がする	.79
固有値	3.39
寄与率(%)	56.47

(3)尺度得点の分布

自己存在感のなさ尺度の得点分布を、Fig. 2-5-6-2(次頁)に示す。

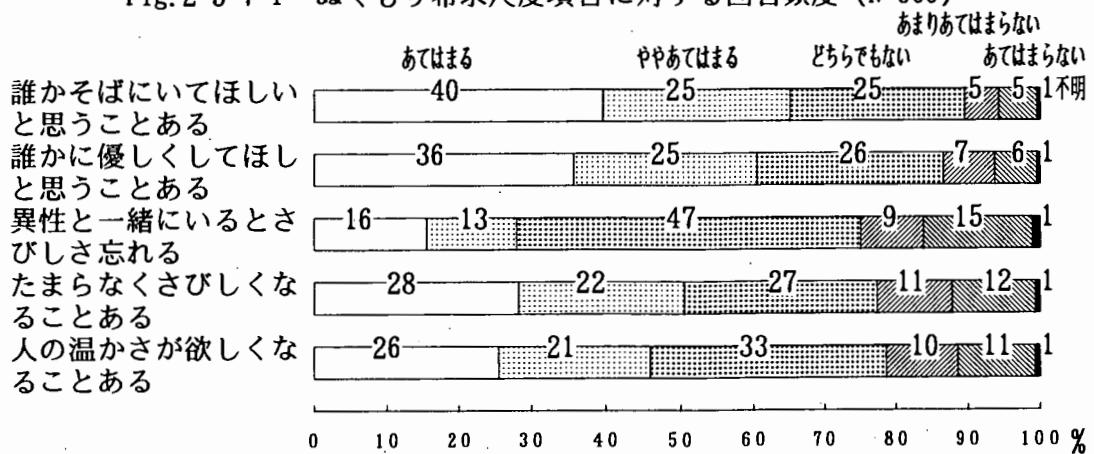
7. ぬくもり希求尺度

従来の青年心理研究では、進んだ異性交際を行う若者の心理的背景に、人とのぬくもりを求める気持ちがあることが指摘されている。本研究では、このぬくもりを求める気持ちをぬくもり希求と名付け、これを測定する尺度を独自に作成することを試みた。

(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量

項目内容と各項目に対する回答頻度をFig. 2-5-7-1に示した。

Fig. 2-5-7-1 ぬくもり希求尺度項目に対する回答頻度 (N=600)

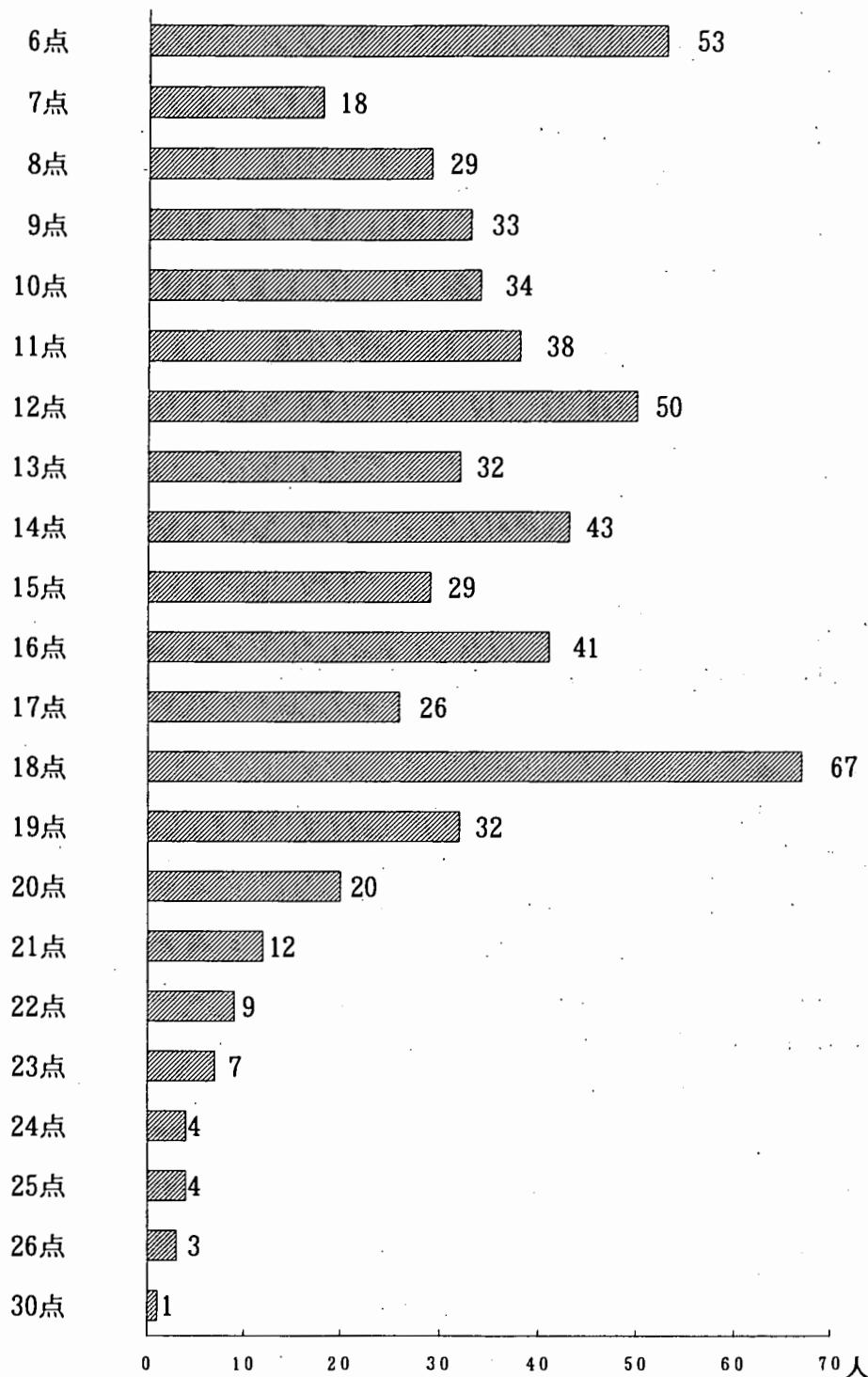


(2)尺度の作成過程

本研究で使用した尺度項目は、独自に作成したものである。そのため、この5項目の1次元性の確認を行うとともに、信頼性および得点分布を検討することを試みた。

回答方法は、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはま

Fig. 2-5-6-2 自己存在感の無さ尺度の頻数分布



らない」「あてはまらない」の5件法である。いずれの項目も、「あてはまる」を5点～「あてはまらない」を1点として得点化した。

まず、主成分分析を行った結果をTable 2-5-7-1に示す。いずれも第一主成分に高い負荷量を示した。そこでこの5項目をぬくもり希求を測定する尺度項目とし、回答の単純加算をもって尺度得点とした。従って、得点が高いほど、ぬくもり希求が高いことを示している。本尺度の信頼性係数は、 $\alpha=.88$ で信頼性は十分であると判断された。

Table 2-5-7-1 ぬくもり希求に関する主成分分析結果

項目内容	負荷量
Q15 r. 「だれかにそばにいてほしい」と思うことがある	.85
s. 「だれかにやさしくしてほしい」と思うことがある	.87
t. 異性とふれあっている時は、さびしさを忘れられる	.66
u. たまらなくさびしくなることがある	.83
v. 人のあたたかさがむしょに欲しくなることがある	.87
固有値	3.38
寄与率(%)	67.58

(3)尺度得点の分布

ぬくもり希求尺度の得点分布を、Fig. 2-5-7-2(次頁)に示す。

8. ミーイズムに関する尺度

本研究では、刹那的に今の自分のことのみを考え、社会や他者については考慮しない態度をミーイズムと名付け、現代の女子高校生にこれがどの程度みられるのか測定しようと考えた。

ミーイズムには、様々な側面が混在していると推測されるが、部分的には関連する既存研究がある。例えば白井（1997）は、時間的展望に対する個人の価値体系を時間的信念と呼び、これが「将来無関心」「現在重視」「満足遅延」の3側面から成ることを明らかにしている。そして、時間的信念を測定するものとして、それぞれに対応する3つの下位尺度を作成している。本研究では、白井の提出した3側面のうち将来無関心と現在重視がミーイズムとかかわっているものと考え、両側面を測定する下位尺度項目から数項目づつを抜き出して調査項目に含めた。

ただし、ミーイズムにはその他に、自分のことのみを考える傾向や、楽しければそれでいいといった自己中心的で享楽的な側面が含まれていると考えられる。そこで本研究では、ミーイズムに関連すると考えられる項目を独自に12項目作成し、それを白井（1997）の時間的信念尺度と併せて項目案とした。そして、ミーイズム自体の構造を明らかにした上で、心理尺度を使用することとした。

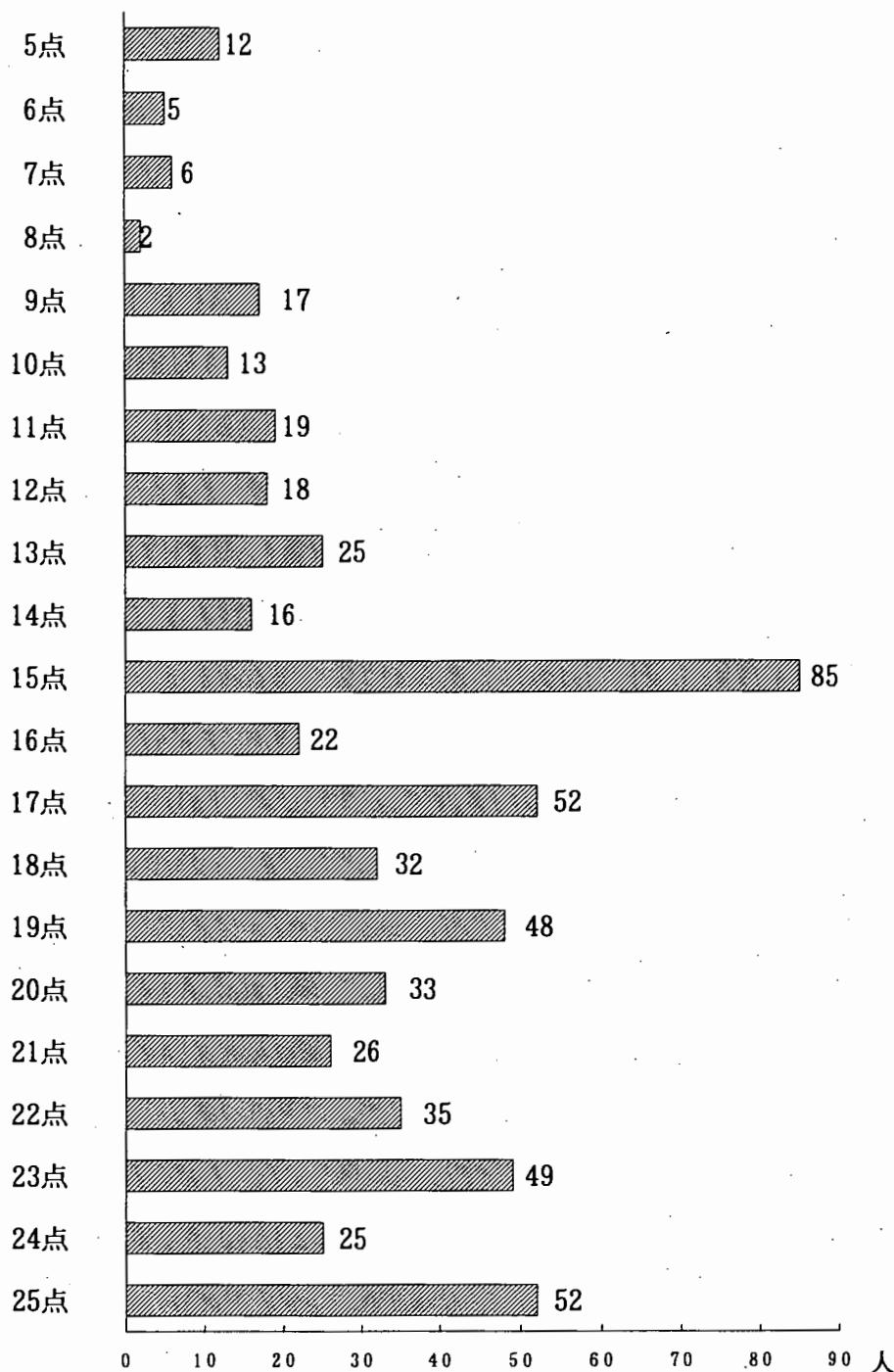
(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量

項目内容と各項目に対する回答頻度をFig. 2-5-8-1(次々頁)に示した。

(2)尺度の作成過程

本研究で使用した尺度項目のうち、4項目（Q16-a, b, c, d, e）は白井（1997）を使用したものであり、a・bは現在重視尺度項目、残りは将来無関心尺度項目の一部である。その

Fig.2-5-7-2 ぬくもり希求尺度の頻数分布

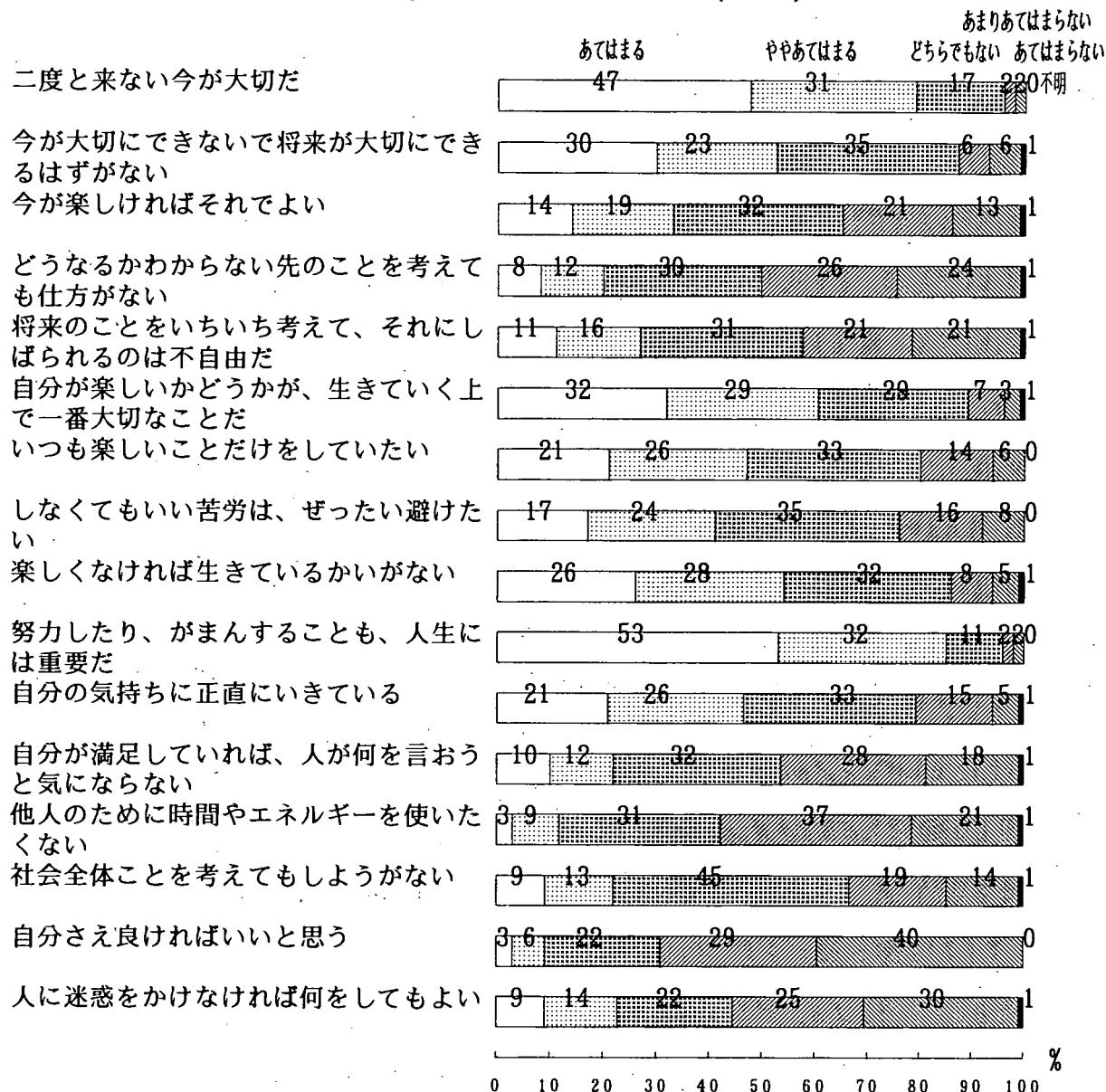


他12項目は独自に作成したものである。そのため、この16項目の構造を明らかにした後で、尺度化し、信頼性および得点分布を検討することを試みた。

回答方法は、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法である。いずれの項目も、「あてはまる」を5点～「あてはまらない」を1点として得点化した。

まず16項目の回答を因子分析した結果、固有値の変化から4因子を抽出し、これをVARIMAX回転にかけた結果、Table2-5-8-1に示すようになった。このうち、第1因子は「自分さえよければよいと思う」「他人のために時間やエネルギーを使いたくない」などに負荷

Fig. 2-5-8-1 ミーイズム (N=600)



量が高く、自己中心性や関心の狭さを示す因子と考えられた。第2因子は「楽しくなければ生きているかいがない」「いつも楽しいことだけをしてみたい」などに負荷量が高く、享楽的な考え方を示すものと考えられた。第3因子は、「二度と来ない今が大切だ」「今が大切にできないで将来が大切にできるはずがない」などに負荷量が高く、現在こそ大切だという考えを示すものと考えられた。第4因子は「どうなるかわからない先のことを考えても仕方がない」「将来のことをいちいち考えて、それにしばられるのは不自由だ」などに負荷量が高く、将来に対する無関心さを示す因子と考えられた。そこで、第1因子を「関心の狭さ」、第2因子を「享楽主義」、第3因子を「現在重視」、第4因子を「将来無関心」と名付け、それぞれの因子にのみ負荷量の高い項目の回答を単純加算する形式で、各傾向を測定する尺度得点とした。各尺度とも得点が高いほど、当該の心理傾向が強いことを示している。

Table 2-5-8-1 ミーイズム項目の因子分析結果（値はVARIMAX回転後の因子負荷量）

変数名	因子1	因子2	因子3	因子4
Q16 a. 二度と来ない今が大切だ	-.21	.10	.71	.11
b. 今が大切にできないで将来が大切にできるはずがない	-.10	.17	.61	-.19
c. 今が楽しければそれでよい	.21	.20	.15	.65
d. どうなるかわからない先のことを考えても仕方がない	.14	.10	-.08	.84
e. 将来のことをいちいち考えて、しばられるのは不自由	.07	.24	-.04	.74
f. 自分が楽しいかどうかが、生きていく上で一番大切だ	.00	.58	.31	.18
g. いつも楽しいことだけをしてみたい	.13	.66	-.02	.28
h. しなくともいい苦労はぜったいに避けたい	.20	.57	-.20	.18
i. 楽しくなければ生きているかいがない	.08	.69	.15	.0
j. 努力したり、がまんすることも、人生には重要だ	-.53	.16	.47	.17
k. 自分の気持ちに正直に生きている	.10	-.09	.70	.03
l. 自分が満足していれば人が何をいおうと気にならない	.54	-.10	.52	.16
m. 他人のために時間やエネルギーを使いたくない	.70	.15	-.08	.13
n. 社会全体のことを考えてもしようがない	.41	.34	-.18	.08
o. 自分さえよければよいと思う	.78	.20	.03	.08
p. 人に迷惑（めいわく）をかけなければ何をしてもよい	.53	.41	.12	.11
固有値 2.32 2.12 2.01 1.98				
寄与率(%) 14.49 13.27 12.57 12.38				

最終的に、下位尺度として使用した項目は以下の通りである。

<関心の狭さの項目>

- Q16 l. 自分が満足していれば、人が何を言おうと気にならない
 m. 他人のために時間やエネルギーを使いたくない
 n. 社会全体のことを考えてもしようがない
 o. 自分さえよければいいと思う
 p. 人に迷惑をかけなければ何をしてもよい

<現在重視の項目>

- Q16 a. 二度と来ない今が大切だ
 b. 今が大切にできないで将来が大切にできるはずがない
 k. 自分の気持ちに正直に生きている

<将来無関心の項目>

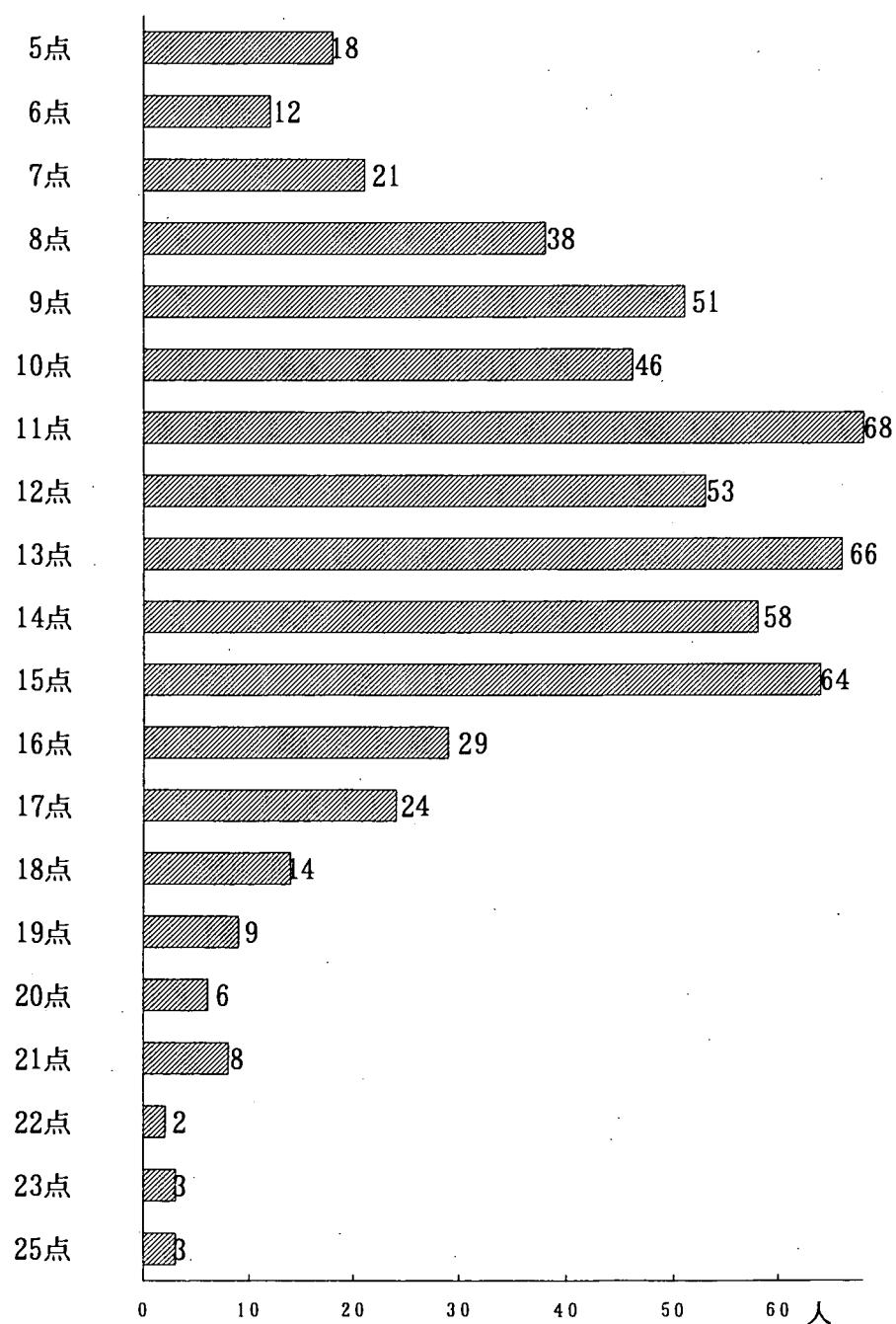
- Q16 c. 今が楽しければそれでよい
 d. どうなるかわからない先のことを考えても仕方がない

e. 将来のことをいちいち考えて、それにしばられるのは不自由だ
<享楽主義の項目>

- Q16 f. 自分が楽しいかどうかが、生きていく上で一番大切なことだ
g. いつも楽しいことだけをしてみたい
h. しなくともいい苦労は、ぜったいに避けたい
i. 楽しくなければ生きているかいがない

本尺度の信頼性係数は、関心の狭さが $\alpha=.67$ 、現在重視が $\alpha=.56$ 、将来無関心が $\alpha=.70$ 、享楽主義が $\alpha=.64$ となった。現在重視の信頼性が低めであるが、尺度として使用できる範囲判断し使用することとした。

Fig. 2-5-8-2 関心の狭さの尺度の頻数分布



(3) 尺度得点の分布

各下位尺度の得点分布を、Fig. 2-5-8-2(前頁)、Fig. 2-5-8-3(本頁)、Fig. 2-5-8-4(次頁)、Fig. 2-5-8-5(次々頁)に示す。

Fig. 2-5-8-3 現在重視尺度の頻数分布

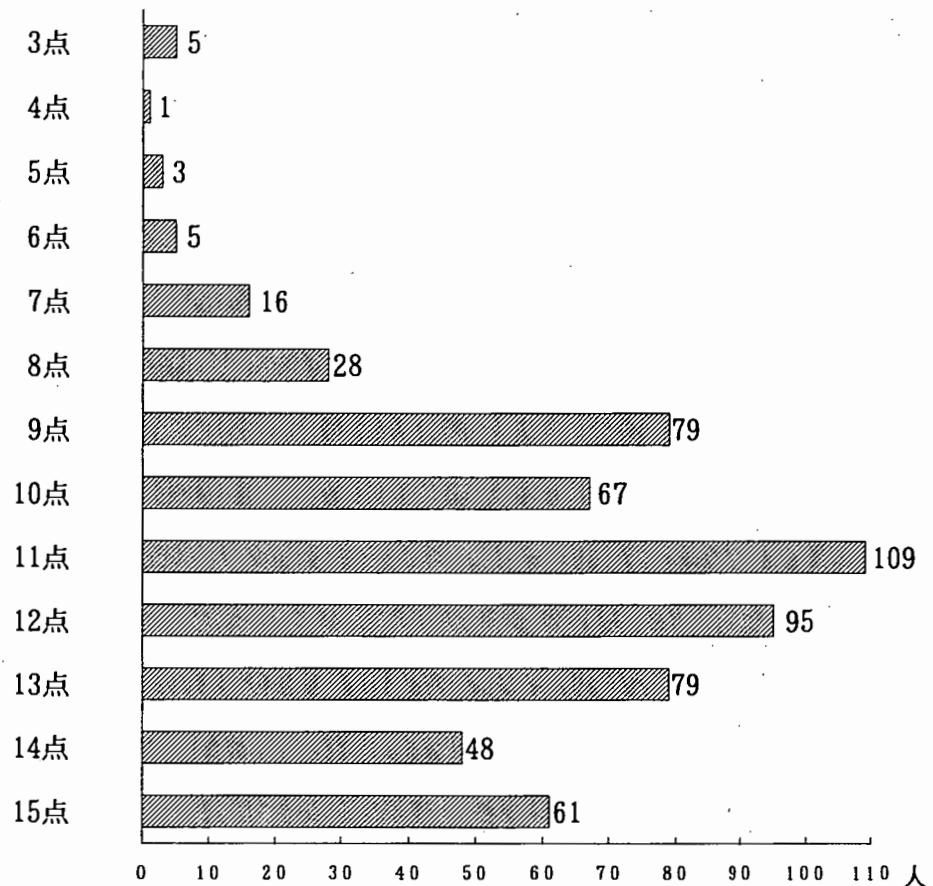


Fig. 2-5-8-4 将来無関心尺度の頻数分布

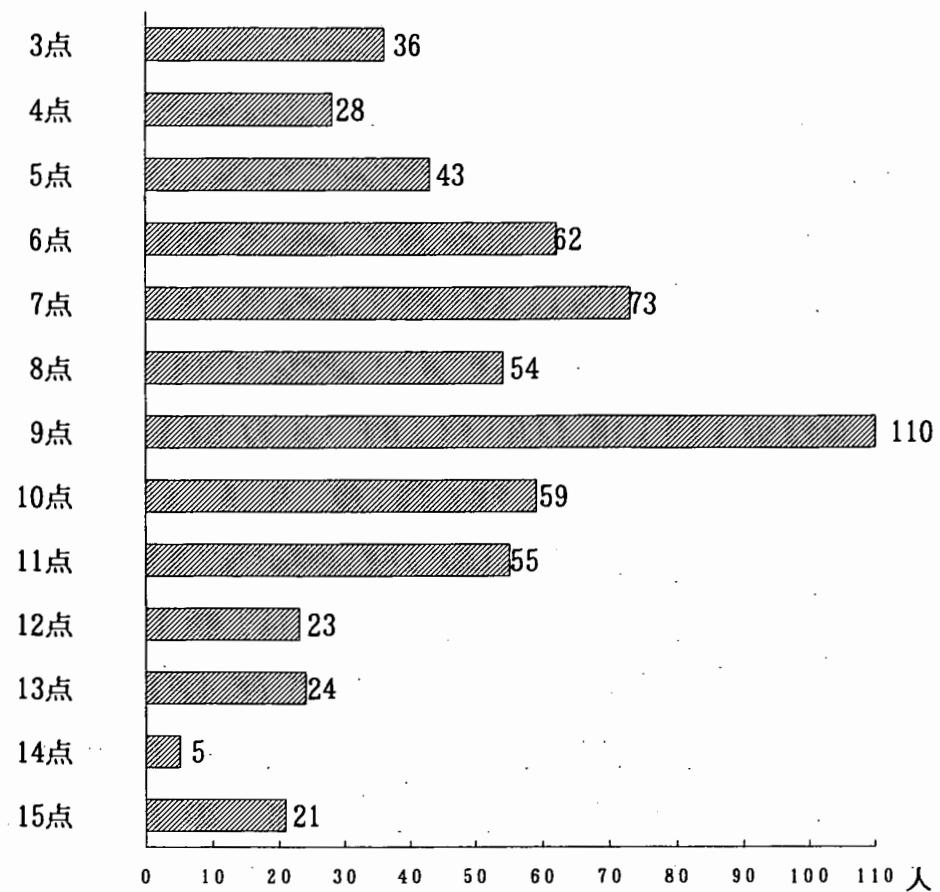
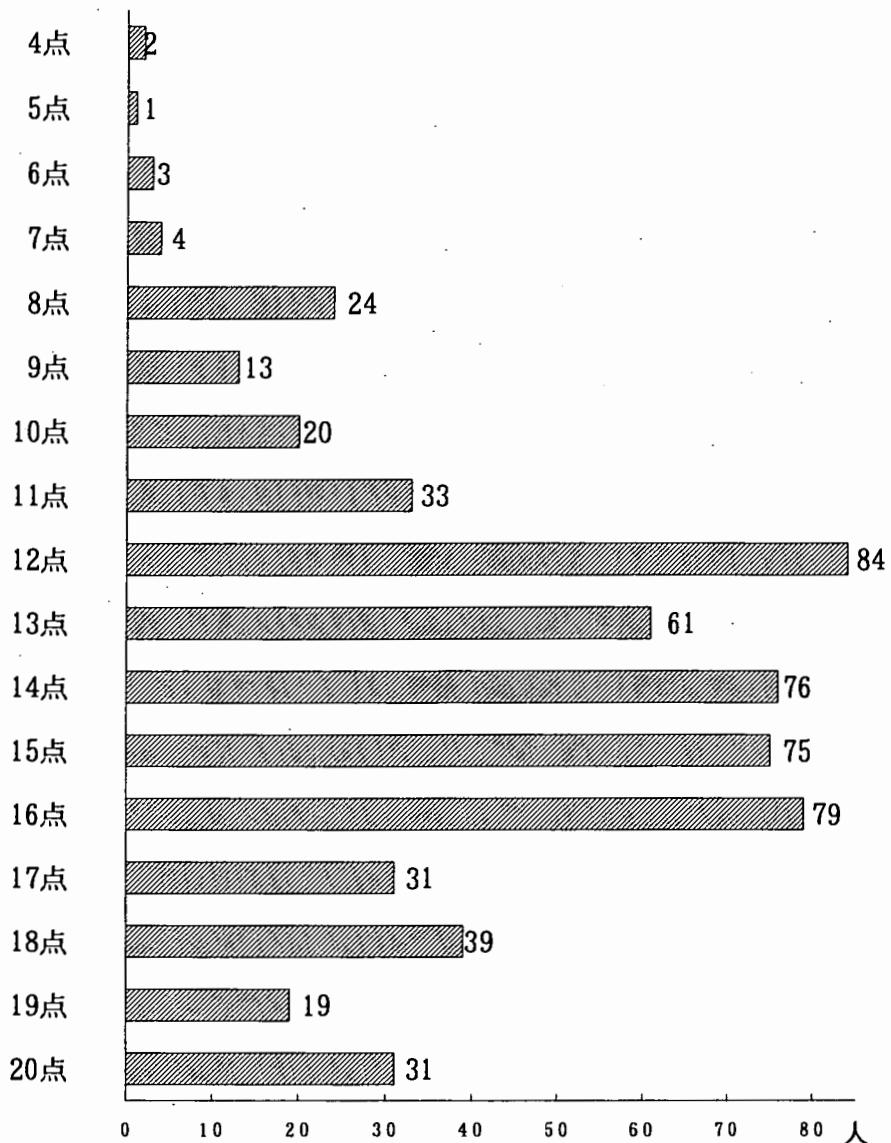


Fig. 2-5-8-5 享楽主義尺度の頻数分布



第6節 友人関係に関する尺度

1. 友人同調尺度

(1) 尺度項目および項目単位の基礎統計量

友人との同調傾向を測定する項目として、上野ら(1994)の4項目を使用した。項目内容と各項目に対する肯定率をFig. 2-6-1-1(次頁)に示す。項目ごとにみると、「仲間はずれにされるのはぜったいイヤだ」の肯定率の割合が他の項目と比べ高いことが分かる。一方、「仲間内で流行遅れになるのはイヤだ」の肯定率は低かった。

(2) 尺度の作成過程

回答方法は、回答者自身の考え方や行動にあてはまるものを、いくつでも選択することを求める多重回答形式である。いずれの項目も、肯定された（○がつけられた）場合を2点、肯定されない（○がつけられていない）場合を1点として得点化した。

4項目の回答を主成分分析した結果、いずれも第1主成分に高い負荷量を示し、1次元性が確認された (Table2-6-1-1)。

Fig. 2-6-1-1 友人との同調傾向に関する項目の肯定率(N=600)

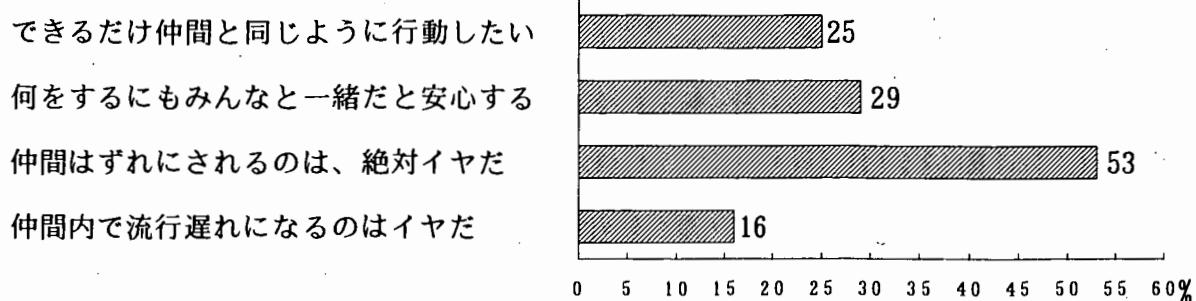


Table 2-6-1-1 友人との同調傾向に関する項目の主成分分析結果（値は主成分負荷量）

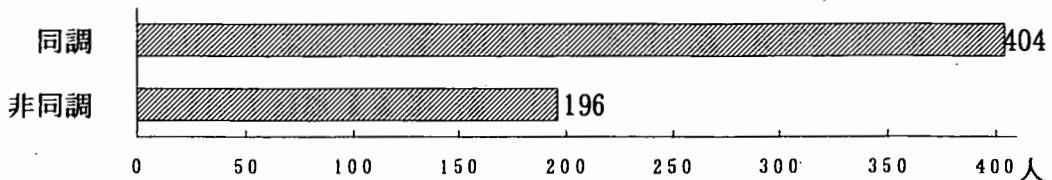
項目内容	成分 1
Q12 1. できるだけ仲間と同じように行動したい	.73
2. 何をするにもみんなと一緒にだと安心する	.74
3. 仲間はずれにされるのはぜったいイヤだ	.60
4. 仲間内で流行遅れになるのはイヤだ	.65
固有値	1.86
寄与率(%)	46.51

この4項目の得点を単純加算したところ、得点の分布に偏りがみられた。そこで、単純加算得点が、4～5点のものを1点、6～8点のものを2点と再カテゴリー化し、これを最終的な尺度得点とした。この尺度得点は、得点が高いほど友人と同調する傾向をもっていることを示している。よって、本報告書ではこの尺度を「友人同調尺度」と呼ぶ。

(3)尺度得点の分布

友人同調尺度の得点分布は、Fig. 2-6-1-2に示す通りである。

Fig. 2-6-1-2 友人関係 同調－非同調の頻数分布



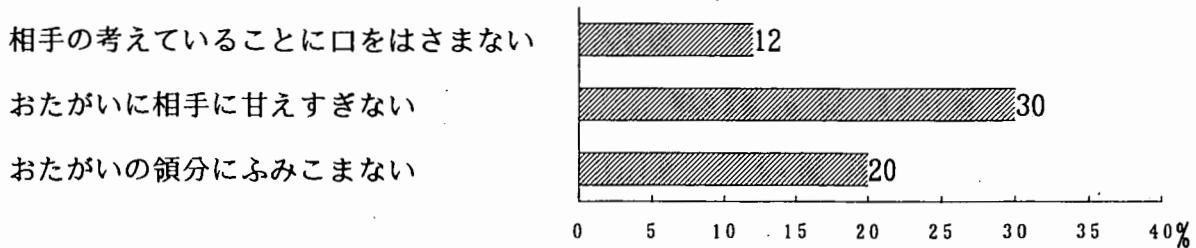
2. 友人非干渉尺度

(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量

友人への非干渉傾向を測定する項目として、上野ら(1994)の3項目を使用した。項目内容と各項目に対する肯定率をFig. 2-6-2-1に示す。項目ごとにみると、まず、いずれの項

目についても、肯定率が3割以下と低くなっていることがわかる。特に、「相手の考えていることに口をはさまない」の割合は低かった。

Fig. 2-6-2-1 友人との非干渉に関する項目の肯定率(N=600)



(2)尺度の作成過程

回答方法は、回答者自身の考え方や行動にあてはまるものを、いくつでも選択することを求める多重回答形式である。いずれの項目も、肯定された（○がつけられた）場合を2点、肯定されない（○がつけられていない）場合を1点として得点化した。

3項目の回答を主成分分析した結果、いずれも第1主成分に高い負荷量を示し、1次元性が確認された (Table2-6-2-1)。

Table2-6-2-1 友人との非干渉傾向に関する項目の主成分分析結果（値は主成分負荷量）

項目内容	成分 1
Q12 5. 相手の考えていることに口をはさまない	.72
6. おたがいに相手に甘えすぎない	.68
7. おたがいの領分（りょうぶん）にふみこまない	.78
固有値	1.57
寄与率(%)	52.50

この3項目の得点を単純加算したところ、得点の分布に偏りがみられた。そこで、単純加算得点が、3点のものを1点、4～6点のものを2点と再カテゴリー化し、これを最終的な尺度得点とした。この尺度得点は、得点が高いほど友人に対して干渉しない傾向をもつていていることを示している。よって、本報告書ではこの尺度を「友人非干渉尺度」と呼ぶ。

(3)尺度得点の分布

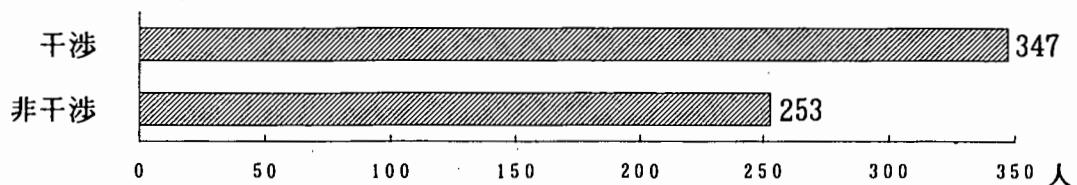
友人非干渉尺度の得点分布は、Fig. 2-6-2-2(次頁)に示す通りである。

3. 自己開示傾向

(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量

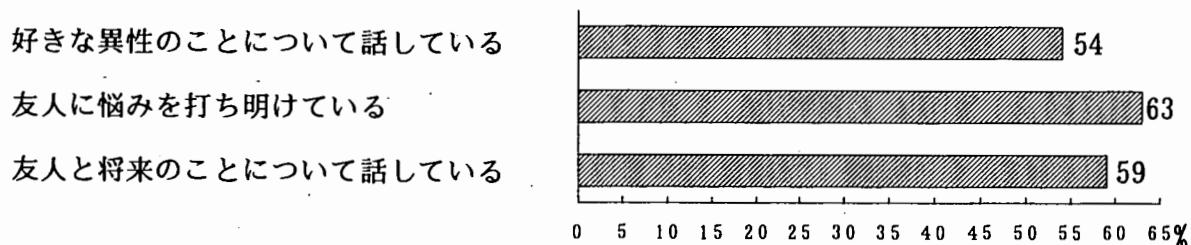
友人への自己開示の程度を測定する項目として、土野ら(1994)の3項目を使用した。項

Fig. 2-6-2-2 友人関係 干渉－非干渉の頻数分布



目内容と各項目に対する肯定率をFig. 2-6-3-1に示す。項目ごとにみると、回答者の半数以上がいずれの項目についても、肯定していることがわかる。

Fig. 2-6-3-1 友人との自己開示に関する項目の肯定率(N=600)



(2)尺度の作成過程

回答方法は、回答者自身の考え方や行動にあてはまるものを、いくつでも選択することを求める多重回答形式である。いずれの項目も、肯定された（○がつけられた）場合を2点、肯定されない（○がつけられていない）場合を1点として得点化した。

3項目の回答を主成分分析した結果、いずれも第1主成分に高い負荷量を示し、1次元性が確認された（Table 2-6-3-1）。そこで、この3項目を「友人自己開示尺度」と呼び、各項目得点の単純加算をもって尺度得点とした。従って、得点が高いほど友人に対して自己開示を行う傾向が高いことを示している。

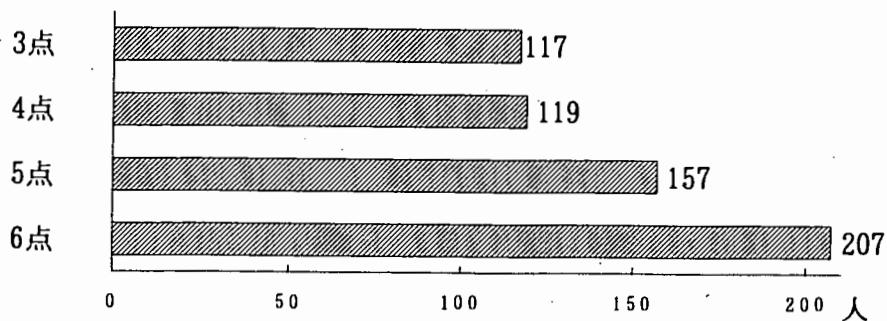
Table 2-6-3-1 自己開示傾向に関する項目の主成分分析結果（値は主成分負荷量）

項目番号	成分1
Q12 8. 好きな異性のことについて話している	.74
9. 友人に悩み（なやみ）を打ち明けている	.85
10. 友人と将来のことについて話している	.70
固有値	1.76
寄与率(%)	58.59

(3)尺度得点の分布

友人への自己開示尺度の得点分布は、Fig. 2-6-3-2に示す通りである。

Fig. 2-6-3-2 自己開示尺度の頻数分布



第7節 加齢への不安尺度

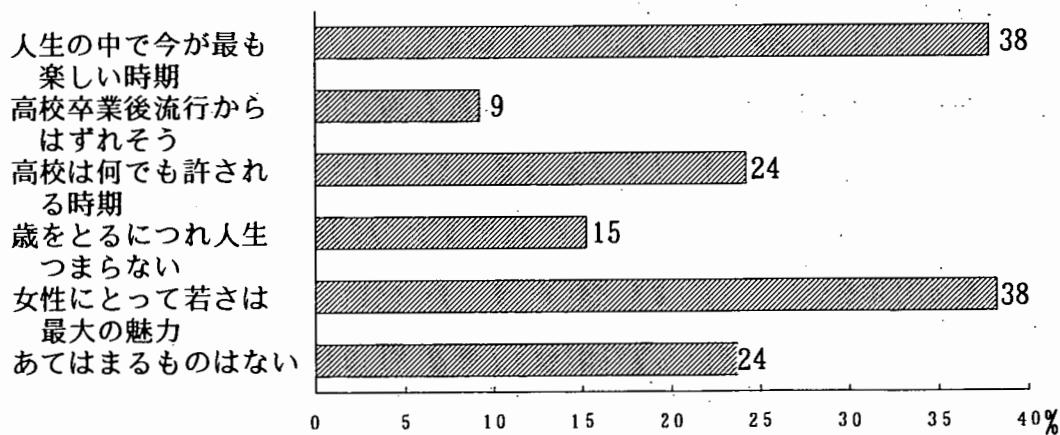
従来の研究から、女性の価値を若さにおく社会意識が存在し、この価値観から生じる歳をとることへの不安が青年期以降の女性の生き方に大きな影響を与えていていることが指摘されている（例えば、小笠原, 1997）。『援助交際』は、「女性の価値＝若さ」を端的に現したものである。ここには、若い女性に価値を認めてお金を払う男性側の意識と共に、お金を受け取り自らの若さの価値を認識する女性側の意識が共に存在している。

本研究では、援助交際への態度を構成する背景要因の一つとして、女性の価値を若さに置き加齢に不安に感じる傾向があると考えた。そしてこの傾向を加齢不安と名付け、これを測定する尺度を新たに作成した。

1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量

項目内容と各項目に対する回答頻度をFig. 2-7-1-1に示した。

Fig. 2-7-1-1 加齢不安尺度項目に対する回答頻度 (N=600)



2. 尺度の作成過程

本研究で使用した尺度項目は、独自に作成したものである。そのため、この5項目の1次元性の確認を行うとともに、信頼性および得点分布を検討することを試みた。

回答方法は、「あてはまる」ものに○をつけ、「あてはまらない」ものには○をつけない形の2件法である。いずれの項目も、○がついた場合を2点、○がつかない場合を1点として得点化した。

まず、主成分分析を行った結果をTable 2-7-2-1に示す。いずれも第一主成分に高い負荷量を示し、1次元性が確認された。

Table 2-7-2-1 加齢不安に関する主成分分析結果

項目内容	負荷量
Q14 1. 人生の中で、今が最も楽しい時だと思う	.52
2. 高校を卒業したら、流行の先端から外れてしまいそうでさびしい	.60
3. 高校生時代は、何をしても許される最後の時期だ	.62
4. 歳（とし）をとるにつれ、人生はつまらなくなりそうだ	.60
5. 女性にとって若さは、最大の魅力である	.66
固有値	1.81
寄与率(%)	36.14

さらに、この5項目の回答を単純加算し、得点の分布を求めた結果、Table 2-7-2-2に示すようになった。

Table 2-7-2-2 加齢不安項目の単純加算得点分布

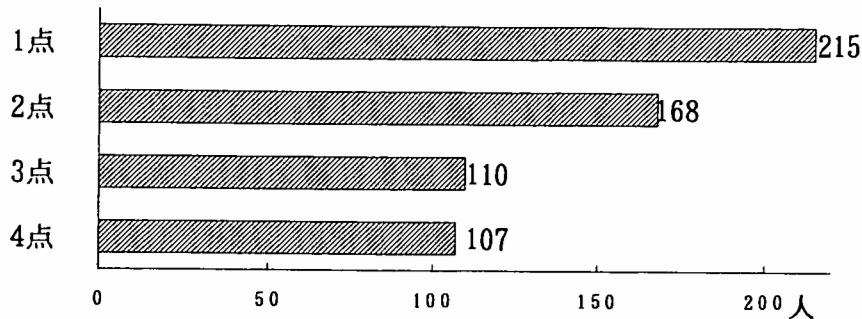
得点	度数 (%)
5点	215(35.83)
6点	168(28.00)
7点	110(18.33)
8点	75(12.50)
9点	26(4.33)
10点	6(1.00)

3. 尺度得点の再カテゴリー化とその分布

得点範囲は5～10点であるが9点以上の該当者が少なく、偏りがみられた。このため、単純加算得点が5点のものを1点、6点を2点、7点を3点、8～10点を4点と再カテゴリー化し、これを最終的な尺度得点とした。従って、加齢不安尺度の得点範囲は1～4点で、得点が高いほど加齢不安が強いことを示している。

加齢不安尺度の得点分布を、Fig. 2-7-3-1に示す。

Fig. 2-7-3-1 加齢不安尺度の頻数分布



8節 女子高校生観（女子高校生ブランド意識）

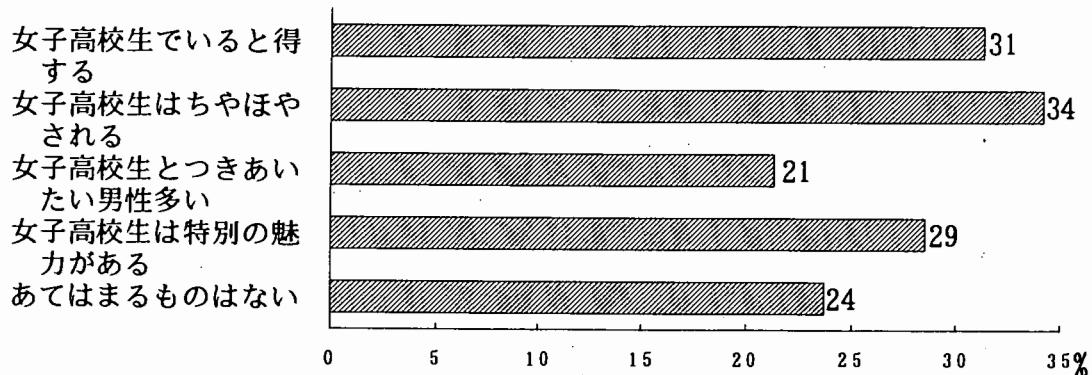
前節で記したように、『援助交際』は「女性の価値＝若さ」との価値観に基づいて成立する関係であり、お金を払う男性・受け取る女子高校生両方でこの価値が共有されている。また近年、女子高校生が様々な流行現象の中心に位置づけられ、マスメディアでは彼女たちを価値あるものとして登場させる機会が多くなった。

本研究では、女子高校生であることの特権意識を「女子高校生ブランド意識」と名付け、彼女たちがどの程度この意識をもっているのか独自の尺度を用いて測定することを試みた。

1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量

項目内容と各項目に対する回答頻度をFig. 2-8-1-1に示した。

Fig. 2-8-1-1 女子高校生ブランド意識尺度項目に対する回答頻度 (N=600)



2. 尺度の作成過程

本研究で使用した尺度項目は、独自に作成したものである。そのため、この4項目の1次元性の確認を行うとともに、信頼性および得点分布を検討することを試みた。

回答方法は、「あてはまる」ものに○をつけ、「あてはまらない」ものには○をつけない形の2件法である。いずれの項目も、○がついた場合を2点、○がつかない場合を1点として得点化した。

まず、主成分分析を行った結果をTable 2-8-2-1に示す。いずれも第一主成分に高い負荷量を示し、1次元性が確認された。

Table 2-8-2-1 女子高校生ブランド意識に関する主成分分析結果

項目内容	負荷量
Q14 6. 女子高校生でいると、得をすることが多い	.73
7. 「女子高校生だから」というだけで、ちやほやされている人が多い	.68
8. 女子高校生とつきあいたいと考えている男性はたくさんいる	.69
9. 女子高校生というだけで、特別の魅力がある	.76
固有値	2.05
寄与率(%)	51.36

さらに、この4項目の回答を単純加算し、得点の分布を求めた結果、Table 2-8-2-2に示すようになった。

Table 2-8-2-2 女子高校生ブランド項目の単純加算得点分布

得点	度数 (%)
4点	264(44.00)
5点	130(21.67)
6点	102(17.00)
7点	58(9.67)
8点	46(7.67)

3. 尺度得点の再カテゴリー化とその分布

得点範囲は4～8点であるが7点以上の該当者が少なく、偏りがみられた。このため、単純加算得点が4点のものを1点、5点を2点、6点を3点、7～8点を4点と再カテゴリー化し、これを最終的な尺度得点とした。従って、女子高校生ブランド意識尺度の得点範囲は1～4点で、得点が高いほど女子高校生ブランド意識が強いことを示している。

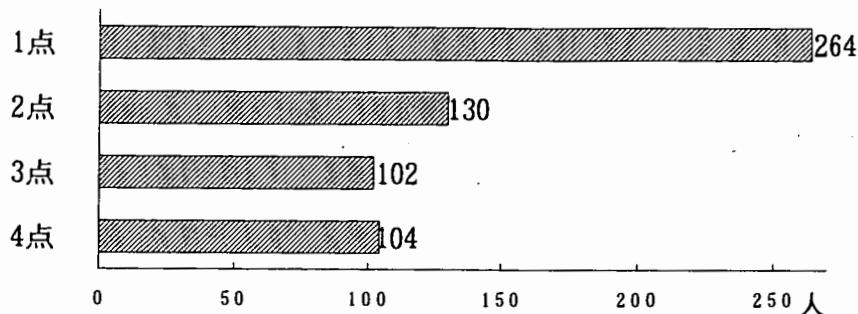
女子高校生ブランド意識尺度の得点分布を、Fig. 2-8-3-1(次頁)に示す。

第9節 恋愛観

1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量

回答者の『援助交際』に対する態度を規定する要因として、「恋愛」に対するイメージを測定した。項目は、宮武ほか(1995)の作成した14項目に、「2人だけの」「真剣(しんけん)な」の2項目を加えて、使用した。設問は「あなたは「恋愛」にどのようなイ

Fig. 2-8-3-1 女子高校生ブランド尺度の頻数分布



「イメージを持っていますか」とたずね、Table 2-9-1-1に示されている16選択肢を提示して、多重回答形式で回答を求めた。

Table 2-9-1-1 恋愛イメージの選択項目

1. 楽しい	2. 幸せ	3. おもしろそう	4. 明るい
5. はずかしい	6. わずらわしい	7. あこがれる	8. 好きならば当然
9. あたたかい	10. しばられる	11. いやらしい	12. こわい
13. 2人だけの	14. 真剣な	15. この中にあてはまるものはない	

各選択肢の選択率を、Fig. 2-9-1-1に示す。7割以上の回答者が恋愛に対して、「楽しい」や「幸せ」などの肯定的なイメージを持っており、「わずらわしい」「はずかしい」「しばられる」といった否定的なイメージを持つ回答者は1割台にとどまっていた。

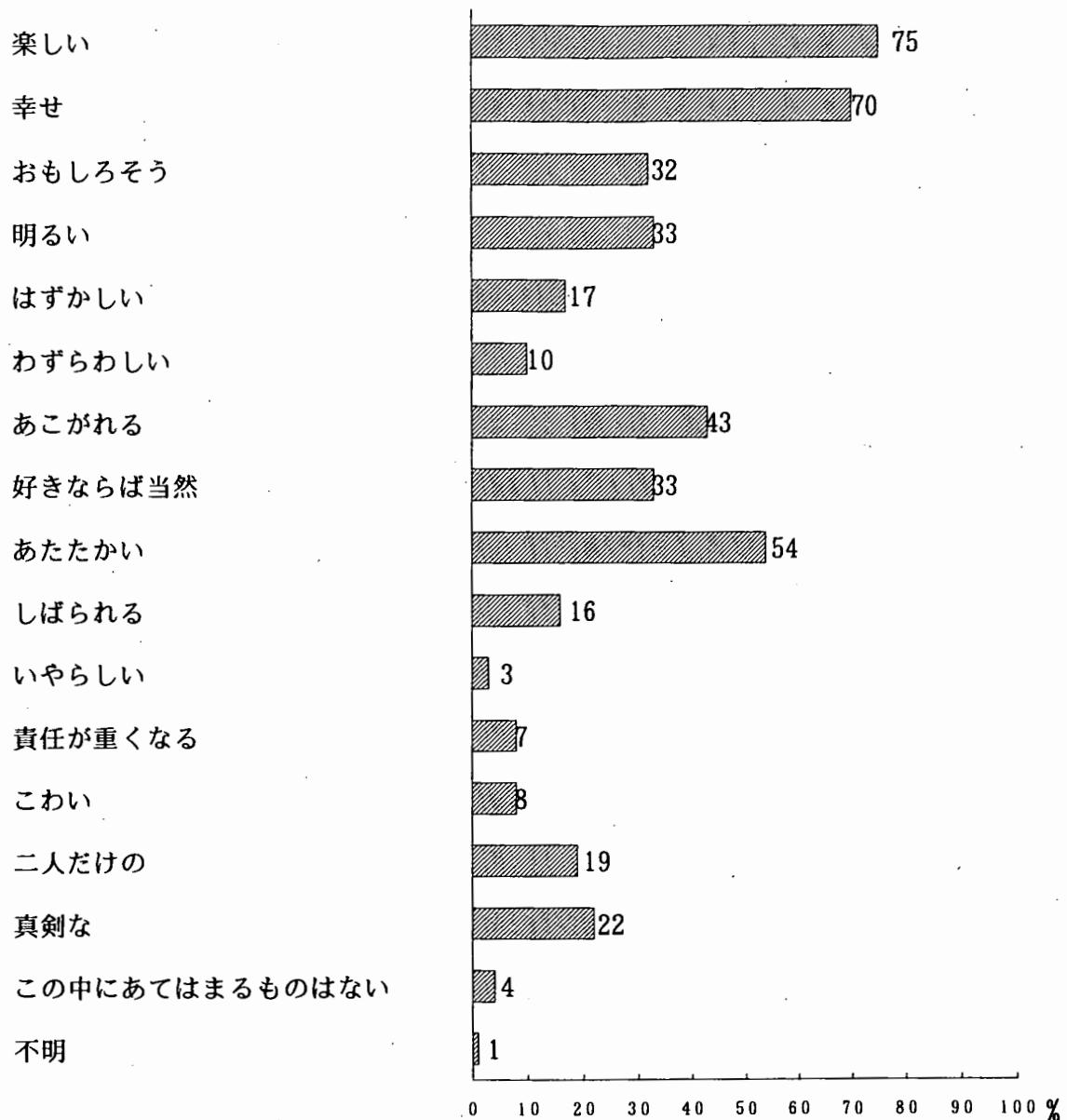
2. 尺度の作成過程

恋愛イメージの構造を検討するために、選択率の低かった「いやらしい」と「あてはまるものはない」の2選択肢をのぞく14選択肢への回答を取り上げ、数量化理論第III類（以下III類と略記する）によって回答の構造を分析した。

分析の結果、得られた固有値は順に、.21,.12,.09となった。第1軸と第2軸のカタゴリースコアのプロットを、Fig. 2-9-2-1(次々頁)に示す。この図では、第1軸を水平軸に、第2軸を垂直軸に図示してある。図から分かるように、第1軸のマイナス側（図の左側）には、「真剣な」「明かい」などの肯定的なイメージの選択肢を選択した回答が布置され、同軸のプラス側（右側）には肯定的なイメージを選択しなかった回答が布置されている。第2軸のプラス側（図上側）には、「責任が重くなる」「わずらわしい」「しばられる」「怖い」など、恋愛に伴う責任を感じ、否定的な態度を表す選択肢を選択した回答が布置され、マイナス側（図下側）にはそれらの選択肢を選択しなかった回答が布置している。

したがって、本研究で測定した恋愛のイメージは、肯定的なイメージや態度と否定的なイメージや態度に分離されることが明らかになった。

Fig. 2-9-1-1 恋愛のイメージ (N=600)



III類の結果に基づいて、恋愛に対する肯定的態度と否定的態度を表す2種の尺度を作成した。

まず、各回答を選択を2点、非選択を1点と得点化した。次に、肯定的態度を表す8項目（項目番号1, 2, 3, 4, 7, 8, 9, 14, 15）の合計得点と否定的態度を表す4項目（項目番号6, 10, 12, 13）の合計得点を算出した。これらの得点の分布を検討したところ、否定的態度得点に著しい偏りが見られたので、カテゴリーの分け方を変更することとした。

再カテゴリー化した後の、得点分布をFig. 2-9-2-2・Fig. 2-9-2-3(次々頁)に示す。

さらに、これらの2種類の尺度の組み合わせから回答者を4つの群に分けて、適宜分析を行った。

各群の設定方法と内容は、Table 2-9-2-1(次々頁)の通りである。

Fig. 2-9-2-1 恋愛イメージの構造（カテゴリースコアの散布図）

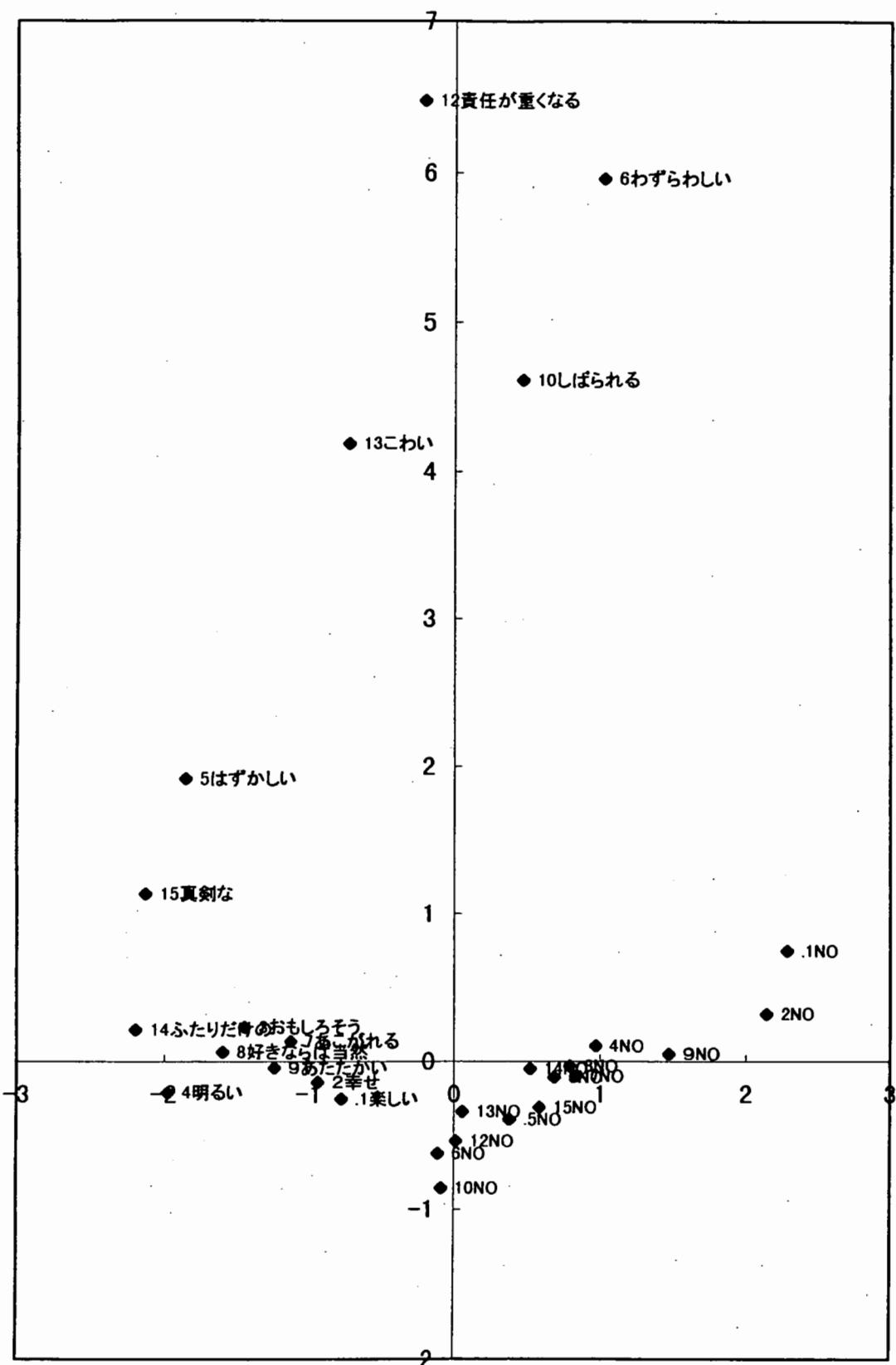


Fig. 2-9-2-2 肯定的恋愛態度尺度の頻数分布

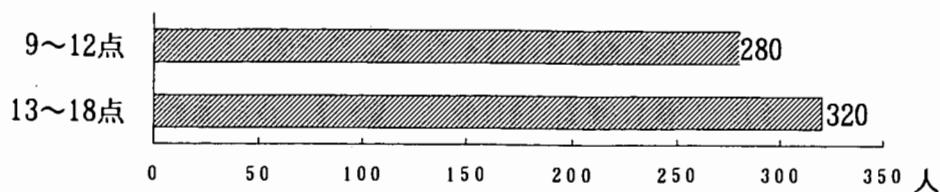


Fig. 2-9-2-3 否定的恋愛態度尺度の頻数分布

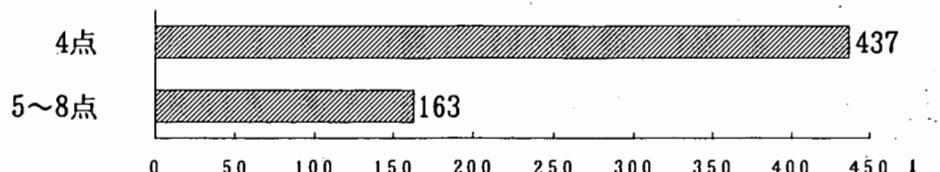


Table 2-9-2-1 恋愛イメージの群分け

群名	設定方法		群の内容
	肯定的態度	否定的態度	
弱い	低	低	恋愛に関するイメージが弱い
肯定	高	低	恋愛の良い面ばかりをイメージしている
否定	低	高	恋愛の責任だけを強く感じ、否定的に受け止めている
両価	高	高	恋愛の肯定的側面と否定的側面をともに意識している

第10節 男女平等意識に関する尺度

本研究に先立ってなされた面接調査（福富他、1997）において、具体的な性差別的現象に対して不満を述べる女子高校生は多いが、その差別的現象を現代の社会構造に位置づけて一般化して捉え、男女平等意識として内面化しているものは少なかった。そこで本調査では男女平等意識を4つの側面から多面的に測定することを試みた。男女平等不満及び男女平等関心、男女平等規範、ダブルモラルの4つである。

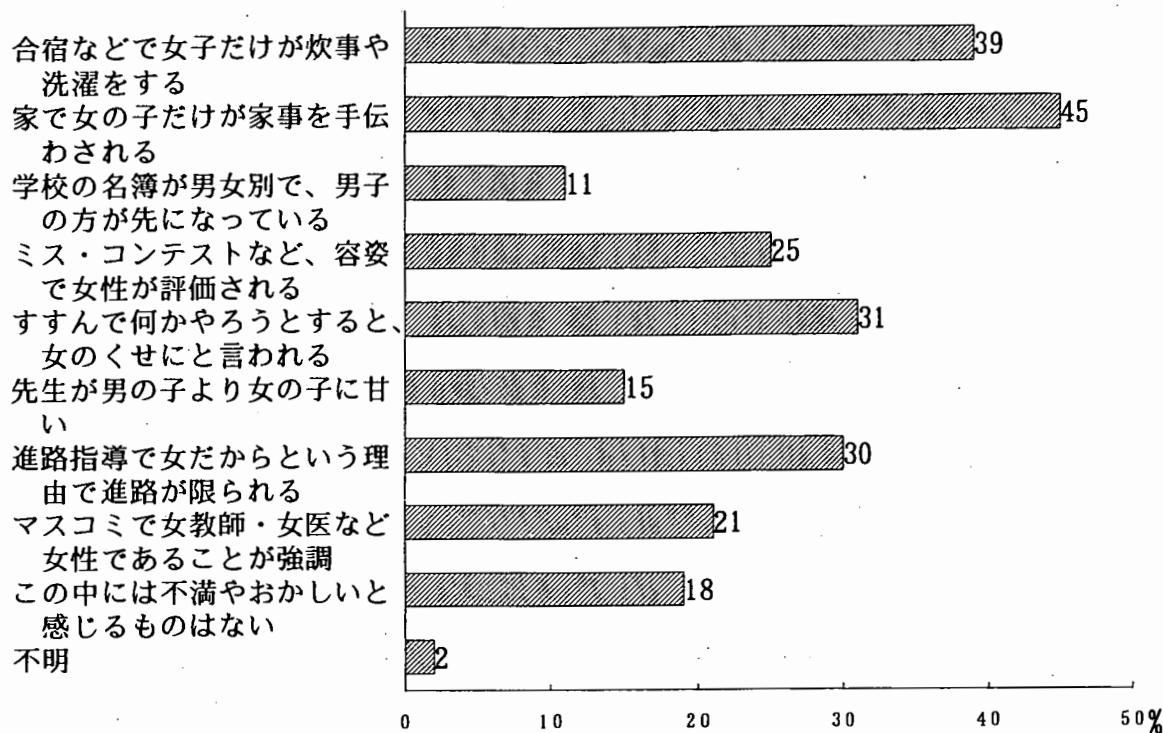
1. 男女平等不満尺度

(1) 尺度項目および項目単位の基礎統計量

男女平等不満とは、現代社会における性差別的状況に対して、不満やおかしいと感じたことがあるかどうかを意味する。その程度を測定するために、本調査では独自に項目が作成された。

項目内容と各項目に対する肯定率をFig. 2-10-1-1に示した。回答形式は回答者自身が不満やおかしいと感じたことのあるものを、いくつでも選択することを求める多重回答形式である。選択された項目には2点、選択されなかった項目には1点を与えて得点化した。

Fig. 2-10-1-1 性差別への不満 (N=600)



(2)尺度の作成過程

この尺度は本調査で独自に作成したものであるため、尺度として使用可能かどうかを検討した。Q28-9を除く8項目で因子分析（主成分解）を行い、1因子を抽出した。その結果をTable 2-10-1-1に示す。

Table 2-10-1-1 男女平等不満に関する8項目の因子分析

項目内容	因子1
Q28 1. 合宿などで女子だけが炊事（すいじ）や洗濯（せんたく）をする	.65
2. 家で女の子だけが家事を手伝わされる	.60
3. 学校の名簿が男女別で、男子の方が先になっている	.54
4. ミス・コンテストなど、容姿（ようし）で女性が評価される	.42
5. すすんで何かをやろうとすると、「女のくせに」と言われる	.63
6. 先生が男の子より女の子に甘い	.30
7. 進路指導で「女だから」という理由で進路が限られる	.50
8. マスコミで「女教師」「女医」など、女性であることが強調されて表現されている	.49
因子負荷量の2乗和	
寄与率(%)	

この8項目のうち、Q28-6の因子負荷量が低かったため、これを除いて再度因子分析したところ、Table 2-10-1-2の結果を得た。7項目すべてが第1因子に高い負荷量を示した。そこで、この7項目を「男女平等不満」の尺度項目とし、回答の単純加算をもって尺度得点とした。従って、尺度得点の高いものほど女性差別的現象に不満を感じていたことを示す。本尺度の信頼性係数は、 $\alpha= .62$ で尺度としての信頼性があると判断される。

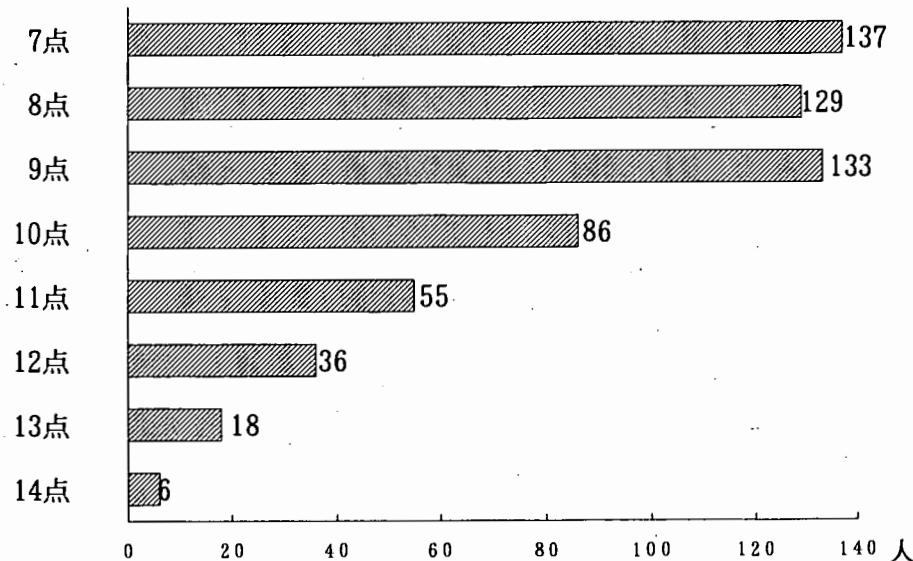
Table 2-10-1-2 男女平等不満に関する7項目の因子分析

項目内容	負荷量
Q28 1. 合宿などで女子だけが炊事（すいじ）や洗濯（せんたく）をする	.66
2. 家で女の子だけが家事を手伝わされる	.62
3. 学校の名簿が男女別で、男子の方が先になっている	.53
4. ミス・コンテストなど、容姿（ようし）で女性が評価される	.41
5. すすんで何かをやろうとすると、「女のくせに」と言われる	.64
7. 進路指導で「女だから」という理由で進路が限られる	.51
8. マスコミで「女教師」「女医」など、女性であることが強調されて表現されている	.48
因子負荷量の2乗和	
寄与率(%)	
	2.18
	31.08

(3) 尺度得点の分布

男女平等不満尺度の得点分布をFig. 2-10-1-2示す。

Fig. 2-10-1-2 男女平等意識(男女平等不満尺度)に対する頻数分布



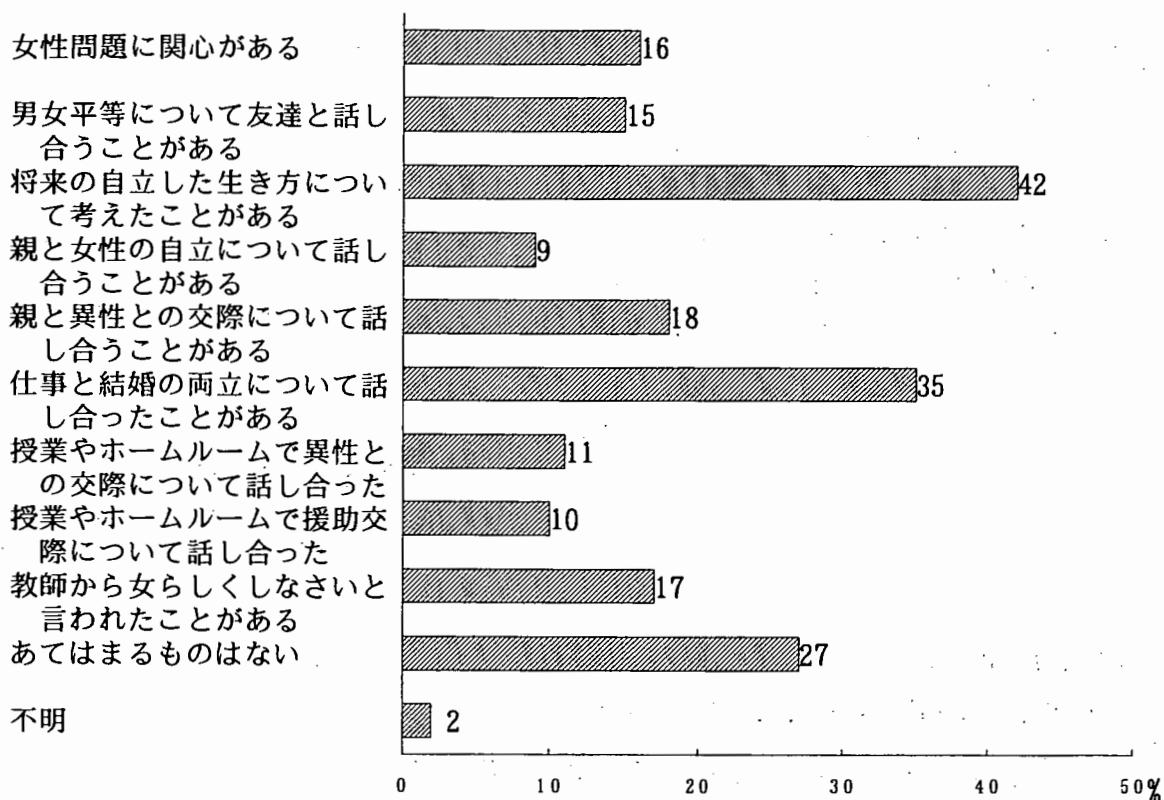
2. 男女平等関心尺度

(1) 尺度項目および項目単位の基礎統計量

男女平等関心とは、女性問題に常日頃関心を持ち、話し合っているかどうかを意味する。その程度を測定するために、本調査では独自に項目が作成された。

男女平等関心と各項目に対する肯定率をFig. 2-10-2-1に示した。回答形式は、これらの質問項目に対して、回答者自身に当てはまるものをいくつでも選択することを求める多重回答形式である。選択された項目には2点、選択されなかった項目には1点を与えて得点化した。

Fig. 2-10-2-1 男女平等への関心・情報交換 (N=600)



(2) 尺度の作成過程

この尺度は本調査で独自に作成したものであるため、尺度として使用可能かどうかを検討した。Q29の項目のうちQ29-7~Q29-9については、学校の授業内容について尋ねているものであり、女子高校生自身の意志の関与しないものであるので、尺度作成の際には除いた。

因子分析（主成分解）の結果（Table 2-10-2-1）が示すように、6項目すべてが第1因子に高い負荷量を示した。そこで、この6項目を「男女平等関心」を測定する尺度項目とし、回答の単純加算をもって尺度得点とした。したがって、得点が高いほど、男女平等に対する関心が高いことを示している。本尺度の信頼性係数は、 $\alpha=.59$ という結果になり、相対的に信頼性は低かった。

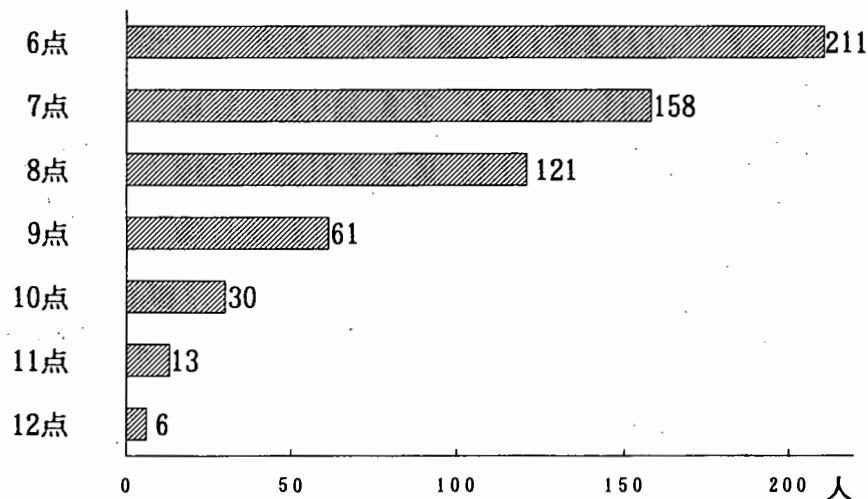
Table 2-10-2-1 男女平等関心項目の因子分析の結果

項目内容	因子1
Q29 1. 女性問題に关心がある	.63
2. 男女平等について友達と話し合うことがある	.58
3. 将来の自立した生き方について考えたことがある	.60
4. 親と「女性の自立」について話し合うことがある	.56
5. 親と「異性との交際」について話し合うことがある	.50
6. 仕事と結婚の両立について考えたことがある	.59
因子負荷量の2乗和	2.00
寄与率(%)	33.39

(3)尺度得点の分布

男女平等関心尺度得点の分布をFig. 2-10-2-2に示す。

Fig. 2-10-2-2 男女平等意識(男女平等関心尺度)に対する頻数分布



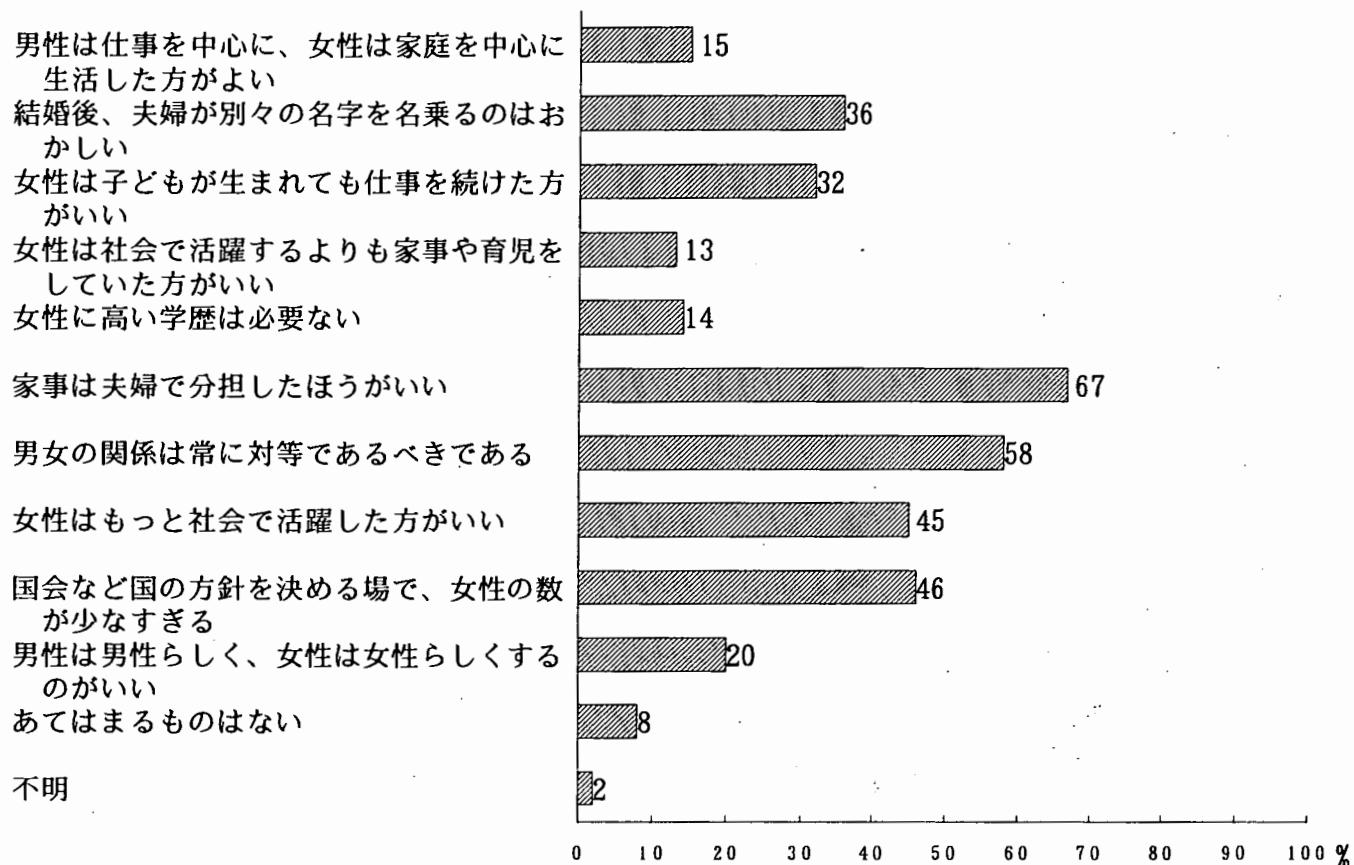
3. 男女平等規範尺度

(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量

男女平等規範とは、男女平等意識を内面化し、社会全体における男女平等を志向しているかどうかを意味する。その程度を測定するために、独自に項目が作成された。

項目内容と各項目に対する肯定率がFig. 2-10-3-1に示されている。回答形式は、これらの項目に対して、回答者自身の考えに当てはまるものをいくつでも選択することを求める多重回答形式である。選択された項目には2点、選択されなかった項目には1点を与えて得点化した。

Fig. 2-10-3-1 男女平等に関する規範意識 (N=600)



(2) 尺度の作成過程

この尺度は本調査で独自に作成したものであるため、尺度として使用可能かどうかを検討した。Q30-11を除く10項目で因子分析（主成分解）を行い、1因子を抽出した。その結果をTable 2-10-3-1に示す。

Table 2-10-3-1 男女平等規範に関する10項目の因子分析

項目内容	因子1
Q30 1. 男性は仕事を中心に、女性は過程を中心に生活した方がいい	- .65
2. 結婚後、夫婦が別々の名字（みょうじ）を名乗るのはおかしい	- .23
3. 女性は子どもが生まれても仕事を続けた方がいい	.50
4. 女性は社会で活躍（かつやく）するよりも 家事や育児をしていた方がいい	- .65
5. 女性に高い学歴は必要ない	- .40
6. 家事は夫婦で分担した方がいい	.61
7. 男女の関係は常に対等であるべきである	.51
8. 女性はもっと社会で活躍（かつやく）した方がいい	.66
9. 国会など国の方針を決める場で、女性の数が少なすぎる	.51

(Table 2-10-3-2 続き)

10. 男性は男性らしく、女性は女性らしくするのがいい	- .30
因子負荷量の2乗和	2.74
寄与率(%)	27.42

この10項目のうち、因子負荷量の低いQ30-2、Q30-10は除き、残りの8項目で1次元性が保たれるかを確認するため、再度因子分析を行ところ、Table 2-10-3-2の結果を得た。すべての項目が第1因子に高い負荷量を示し、1次元性が確認された。そこで、この8項目を「男女平等規範」を測定する尺度項目とし、回答の単純加算をもって尺度得点とした。（ただし、Q30-1、Q30-2、Q30-4、Q30-5は第1因子に負に負荷しているため逆転項目とする。）従って、得点が高いほど男女平等規範意識が高いことを示している。本尺度の信頼性係数は、 $\alpha = .71$ で尺度としての信頼性は充分であると判断される。

Table 2-10-3-2 男女平等規範に関する8項目の因子分析

項目内容	因子1
Q30 1. 男性は仕事を中心に、女性は過程を中心に行なった方がいい	- .60
3. 女性は子どもが生まれても仕事を続けた方がいい	.54
4. 女性は社会で活躍（かつやく）するよりも 家事や育児をしていた方がいい	- .61
5. 女性に高い学歴は必要ない	- .37
6. 家事は夫婦で分担した方がいい	.64
7. 男女の関係は常に対等であるべきである	.55
8. 女性はもっと社会で活躍（かつやく）した方がいい	.70
9. 国会など国の方針を決める場で、女性の数が少なすぎる	.56
固有値	2.67
寄与率(%)	33.34

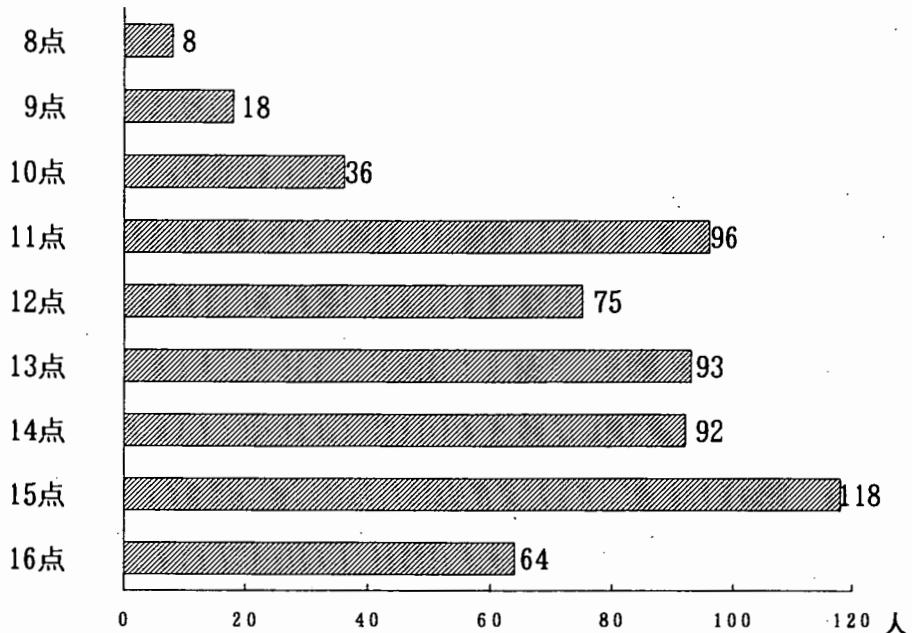
(3) 尺度得点の分布

男女平等規範尺度の得点分布をFig. 2-10-3-2(次頁)に示す。

4. 性別意識：ダブルモラル度について

われわれの日常行動には様々なものがある。しかし同じ行動であっても、男性が行う場合と女性が行う場合とで、異なった抵抗感を感じることがある。これは、男女で行動規範が違うとする認識に基づくもので、男女の行動に対するダブルモラルと呼ばれ、「男は○

Fig. 2-10-3-2 男女平等意識(男女平等規範尺度)に対する頻数分布



○」「女は〇〇」といった男女の両極化を生み出す土壤になっている。そこで、様々な行動に対する規範が男女それぞれで異なっているか否かを測定するために、ダブルモラル尺度の作成を試みた。

(1)尺度項目および項目単位の基礎統計量

ダブルモラル尺度を作成するために、先行研究（たとえば、東京都生活文化局、1987）を参考にして、男女それに関する6つの行動が項目として設定された。それぞれの項目に対して、「抵抗を感じる」、「少し抵抗を感じる」、「あまり抵抗を感じない」、「全く抵抗を感じない」の4段階で評定を求めた。

Fig. 2-10-4-1(次頁)は、項目内容と回答頻度を示したものである。

(2)尺度の作成過程

本調査対象者においてダブルモラルを測定するための男女別6項目の計12項目によって尺度として使用できるか否かを検討する。

まず全12項目を対象に因子分析（主成分法、VARIMAX解）を行った。固有値の変化パターン（第1因子より順に、4.64、1.53、1.06、0.99）および因子の解釈のしやすさから、妥当な因子数を検討してみた。その結果、複数の因子を仮定した場合、男女別の因子に分かれることはなく、むしろ行為そのものによって各因子が構成された。つまり同じ行為であれば（たとえば、Q32-aとQ32-g）、男女を問わず同一の因子に入る事が示された。ただし複数の因子を仮定した場合、妥当な解釈が難しかったので、ここでは1因子解の結果についてTable 2-10-4-1に示す。全ての項目が第一主成分に高い負荷を示している。

次に主成分分析を男女別の6項目それぞれに対して行った結果をTable 2-10-4-2～Table 2-10-4-3に示す。この場合もいずれの項目も第一主成分に高い負荷量を示した。

Fig. 2-10-4-1 性別意識への抵抗感に対する回答頻度 (N=600)

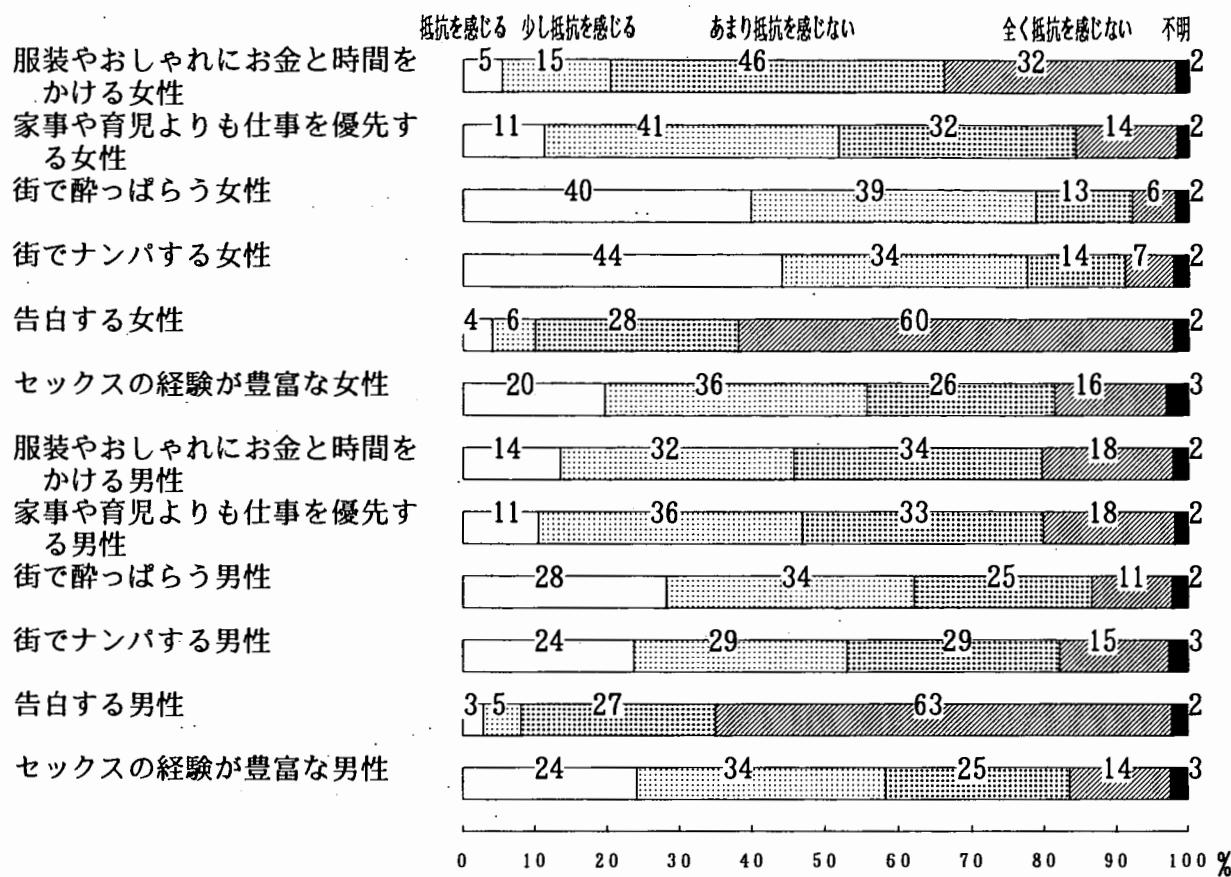


Table 2-10-4-1 ダブルモラル尺度項目の主成分分析結果：全体

項目内容	負荷量
j. 街でナンパする男性	.73
f. セックスの経験が豊富である女性	.73
l. セックスの経験が豊富である男性	.71
g. 服装やおしゃれにお金と時間をかける男性	.70
i. 街で酔っ払う（よっぱらう）男性	.67
d. 街でナンパする女性	.67
c. 街で酔っ払う（よっぱらう）女性	.65
a. 服装やおしゃれにお金と時間をかける女性	.58
k. 告白する（1対1の交際を申し込む）男性	.49
e. 告白する（1対1の交際を申し込む）女性	.49
b. 家事や育児よりも仕事を優先する女性	.47
h. 家事や育児よりも仕事を優先する男性	.46

(Table 2-10-4-1 続き)

固有値	4.64
寄与率(%)	38.67

Table2-10-4-2 ダブルモラル尺度項目の主成分分析結果：女性

項目内容	負荷量
d. 街でナンパする女性	.76
f. セックスの経験が豊富である女性	.74
c. 街で酔っ払う（よっぱらう）女性	.73
a. 服装やおしゃれにお金と時間をかける女性	.58
b. 家事や育児よりも仕事を優先する女性	.56
e. 告白する（1対1の交際を申し込む）女性	.49
固有値	2.54
寄与率(%)	42.23

Table2-10-4-3 ダブルモラル尺度項目の主成分分析結果：男性

項目内容	負荷量
j. 街でナンパする男性	.79
i. 街で酔っ払う（よっぱらう）男性	.74
l. セックスの経験が豊富である男性	.71
g. 服装やおしゃれにお金と時間をかける男性	.67
h. 家事や育児よりも仕事を優先する男性	.55
k. 告白する（1対1の交際を申し込む）男性	.49
固有値	2.68
寄与率(%)	44.61

これらの結果は、ここで用いた項目が、男女を問わない、構成概念としての一種の「行動規範」を測定しているという可能性を示唆するものである。

しかし本調査の主たる目的は、「行動規範」のあり方に男女で差が見られる尺度を構成することにある。そこで、同じ行動について男女間で抵抗感の差を求め、それをダブルモラルの指標とする可能性を検討した。

まず伝統的性役割観から見て男性的か女性的かという点を考慮して逆転項目を設定した（項目Q32-aとQ32-g）。次に女性側から男性側の項目を引き算し（たとえば、Q32-b - Q32-h）、項目単位で差を算出した。この場合、項目単位での差の算出方法に関してもいくつかの方法があり得る。具体的には、Table 2-10-4-4に示される8種類の方法が考えられる。

Table 2-10-4-4 ダブルモラル項目における差の算出方法

1. 回答者の評定値をそのまま用いる

2. 回答者の評定値を直接変換する

(1) 抵抗を感じるか、それ以外かという観点

抵抗を感じる場合に1、それ以外には0を与える

(2) 抵抗を感じるか、感じないかという観点

感じる、少し感じるに1、あまり感じない、全く感じないに0

(3) 抵抗を全く感じないか、それ以外かという観点

抵抗を全く感じない場合に1、それ以外には0を与える

3. 回答者の評定値の差を変換する

(1) 差の方向性を無視し、差の量を保つという観点

絶対値に変換する（上記の1、2それぞれの方法で）

(2) 差の方向性を無視し、差の量を無視するという観点

十を問わず差があれば1、無ければ0を与える

(3) 差の方向性を保ち、差の量を無視するという観点

十の差があれば1、一の差があれば-1、無ければ0を与える

(4) 差の方向性を一部保ち、差の量を無視するという観点

①一の差があれば1、それ以外（差がないか十の差）は0を与える

②十の差があれば1、それ以外（差がないか一の差）は0を与える

これらの8種類の方法それぞれによって項目単位の差を求め、それを指標として主成分分析を行うとともに信頼性係数を算出した。その結果、いずれの方法を用いても、尺度化するには十分な値を得ることができなかった。すなわち、主成分分析においては、全ての差項目に関しても十分な負荷量を得ることができなかつた。さらに α 係数も0.5を超えることがなかつた。従って、ダブルモラルの指標として今回設定された6項目の差得点はどのような方法を用いたとしても、尺度としては使用することができないと言えよう。そこで本研究では、一つ一つの項目単位で検討していくこととする。

(3) ダブルモラル各項目に対する回答頻度の男女差

ダブルモラル尺度は一つの尺度として成立し得なかつたので、分布に関する記述はでき

ない。各項目単位での回答頻度については前記のFig. 2-10-4-1に示している。次のTable 2-10-4-5は、回答パターンの男女差について検定結果（ χ^2 検定）とともに示したものである。

各行動（項目）単位で、男女別に評定頻度の差について χ^2 検定を行ってみた。すると「服装やおしゃれにお金と時間をかける女性と男性（Q32-aとg）」、「街で酔っ払う女性と男性（Q32-cとi）」、「街でナンパする女性と男性（Q32-dとj）」の3項目でのみ有意差が見られた。「服装やおしゃれ」に関しては男性に対して、「酔っぱらう」ことや「ナンパする」ことについては女性に対して、相対的により抵抗感が大きいことが示された。これ以外の項目に対しては回答頻度に有意な差は見られなかった。すなわち、行動の内容によって、男女で抵抗感に差が生じる項目と差が生じない項目が見られており、ここにも尺度化が困難であったことの一因が見て取れるだろう。

Table 2-10-4-5 ダブルモラル尺度項目の回答頻度

	N	抵抗を感じる じる	少し抵抗を感じ ない	あまり抵抗を感じ ない	全く抵抗を感じ ない
ag. 服装やおしゃれにお金と時間をかける					
女性	588	32	90	275	191
(%)	(100.0)	(5.44)	(15.31)	(46.77)	(32.48)
					$\chi^2(3)=91.7$ **
男性	587	81	193	204	109
(%)	(100.0)	(13.80)	(32.88)	(34.75)	(18.57)
bh. 家事や育児よりも仕事を優先する					
女性	589	68	243	194	84
(%)	(100.0)	(11.54)	(41.26)	(32.94)	(14.26)
					$\chi^2(3)=4.8$
男性	588	63	218	198	109
(%)	(100.0)	(10.71)	(37.07)	(33.67)	(18.54)
ci. 街で酔っ払う（よっぱらう）					
女性	588	239	233	80	36
(%)	(100.0)	(40.65)	(39.63)	(13.61)	(6.12)
					$\chi^2(3)=43.2$ **
男性	586	169	203	147	67
(%)	(100.0)	(28.84)	(34.64)	(25.09)	(11.43)

(Table 2-10-4-6 続き)

dj. 街でナンパする

女性	587	264	201	81	41
(%)	(100.0)	(44.97)	(34.24)	(13.80)	(6.98)

 $\chi^2(3)=91.2 **$

男性	583	142	176	174	91
(%)	(100.0)	(24.36)	(30.19)	(29.85)	(15.61)

ek. 告白する（1対1の交際を申し込む）

女性	587	24	36	168	359
(%)	(100.0)	(4.09)	(6.13)	(28.62)	(61.16)

 $\chi^2(3)=2.0$

男性	586	17	32	161	376
(%)	(100.0)	(2.90)	(5.46)	(27.47)	(64.16)

f1. セックスの経験が豊富である

女性	581	118	216	154	93
(%)	(100.0)	(20.31)	(37.18)	(26.51)	(16.01)

 $\chi^2(3)=3.6$

男性	585	145	204	152	84
(%)	(100.0)	(24.79)	(34.87)	(25.98)	(14.36)

第11節 親に対する態度（親への愛情尺度）

女子高校生の生活環境の中で家庭は重要な場となっている。特に親子関係は、彼女たちの意識や行動に対して多大の影響を及ぼしていると考えられる。『援助交際』に関わる要因の1つとして、家庭環境、特に親との関係があげられることも多い。本調査においても、愛情の実感のない家庭、存在感のない父親、叱れない親などを関連要因と考え、その他の親への感じ方と合わせて検討した。

1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量

親への態度に関する尺度作成に用いた項目と各項目の肯定率をFig. 2-11-1-1、Fig. 2-1-1-2、Fig. 2-11-1-3に示す。これらの項目は、父親に対する感じ方、母親に対する感じ方、親（両親）に対する感じ方の3つからなっている。なお父親に対する感じ方と母親に対する感じ方は「父はよく家事を手伝っている」の1項目を除き全て対応している。質問は、あてはまるものをいくつでも選択する多重回答形式である。自身にあてはまるものと

して○をつけたものを2点、○をつけなかったものを1点として得点化した。

Fig. 2-11-1-1 父親に対する感じ方 (N=600)

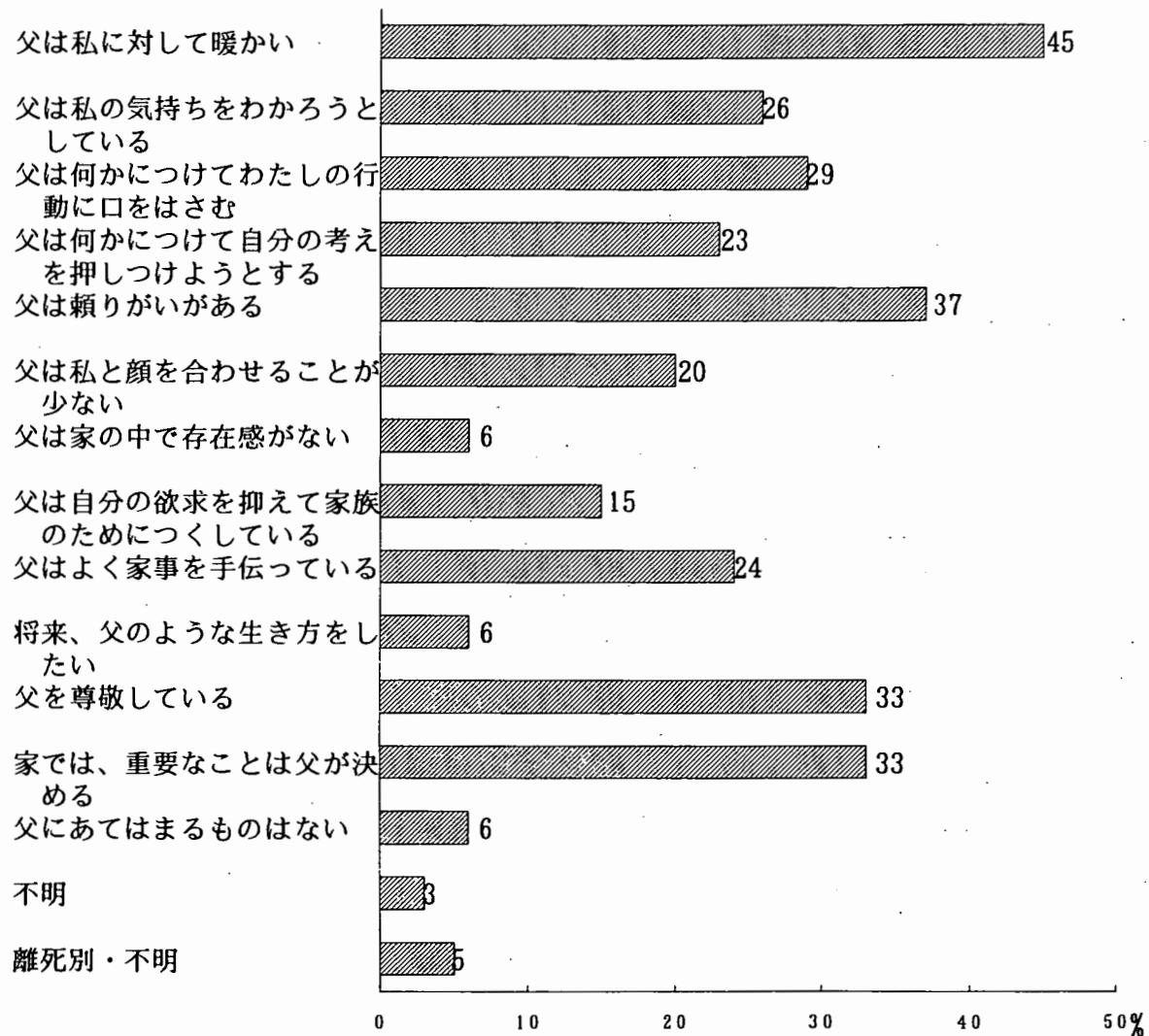


Fig. 2-11-1-2 母親に対する感じ方 (N=600)

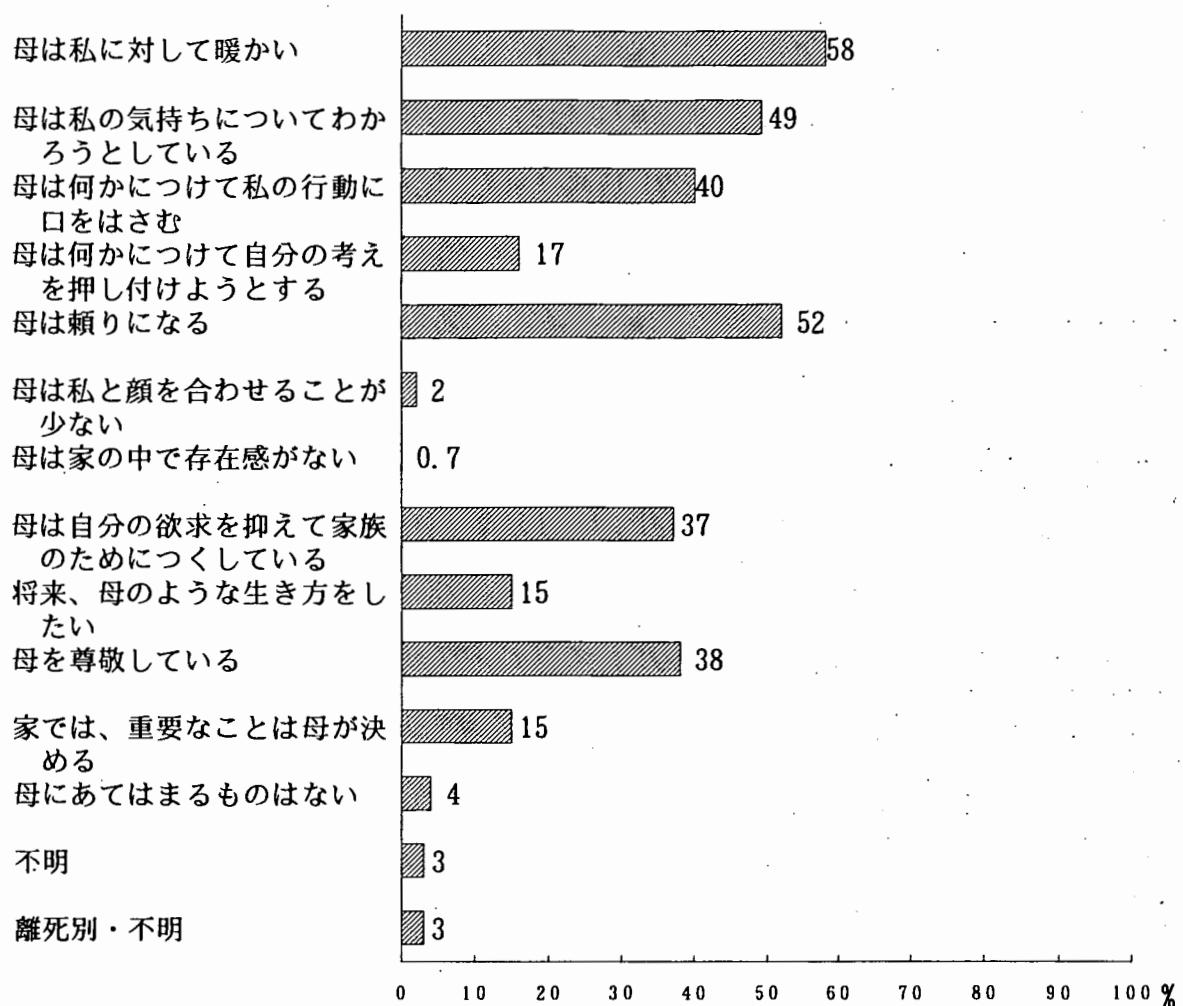
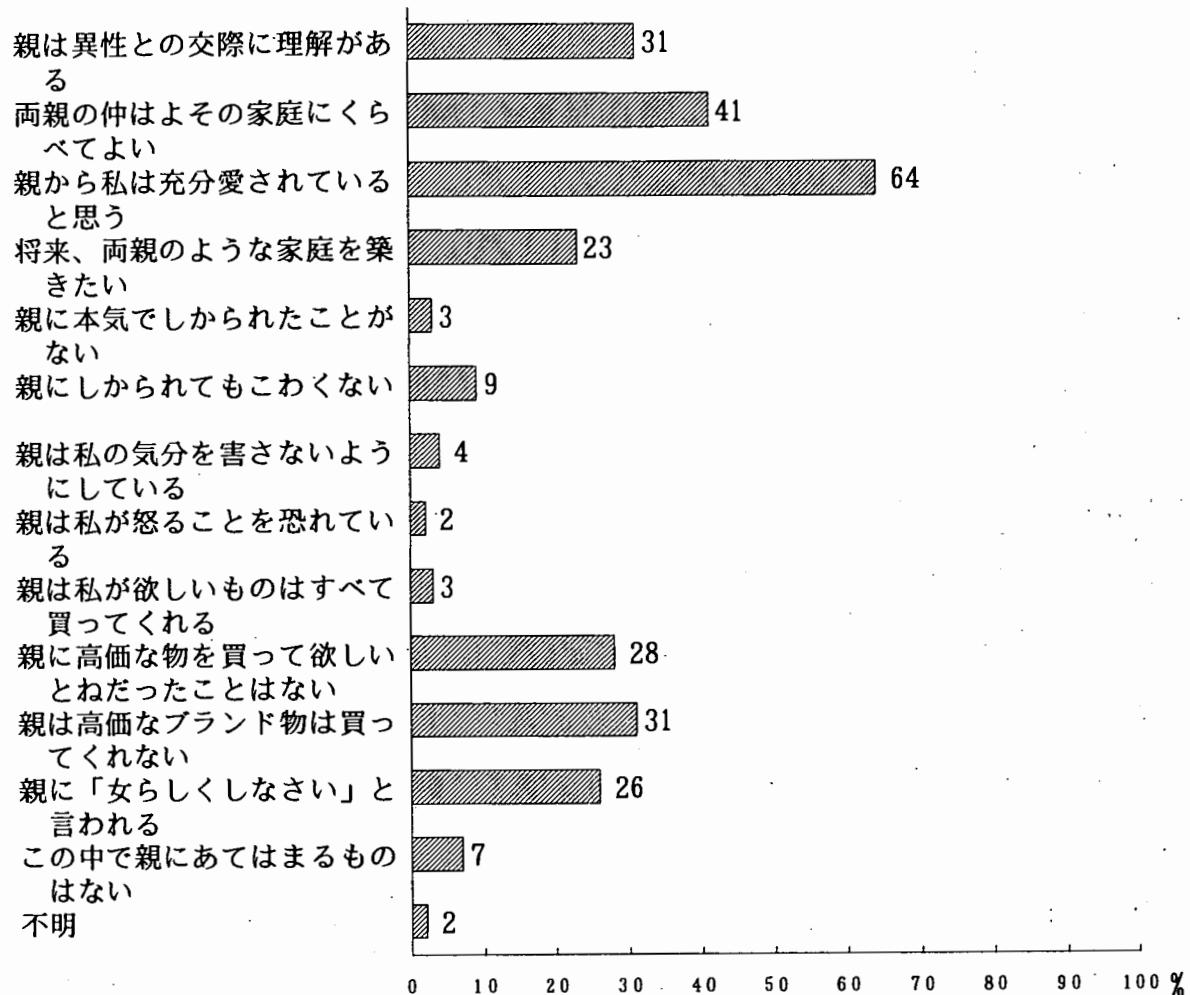


Fig. 2-11-1-3 親に対する感じ方 (N=600)



2. 尺度の作成過程

親への態度に関する項目の構造を見るため、主因子法による因子分析を行った。1因子解から5因子解を求めたところ、第1因子に高い負荷量を示す項目がほぼ安定して現れ、またそれらの項目は全て親との愛情関係を示していると解釈された。第2因子以降に解釈可能な因子が現れることもあったが、 α 係数の低さや含まれる項目の肯定率の低さなどから尺度化には不適当であると判断された。これらのことから、本研究では1因子解において第1因子に高い負荷量 (.35以上) を示した項目を親への態度に関する尺度作成に用いたことにした。Table 2-11-2-1に親への態度に関する項目に対する因子分析の結果を示す。さらに第1因子に高い負荷量を示した項目のみに対して1因子解の因子分析を行ったところ、全て高い負荷量を示した (Table 2-11-2-2)。そこでこれらの項目を単純加算したものを「親への愛情尺度」として用いる。本尺度の信頼性係数は、 $\alpha=.85$ と尺度化に充分な値を得た。

Table 2-11-2-1 親への態度に関する因子分析（全項目）

	項目内容	因子 1
Q37S3.	1 父は私に対して暖かい	.64
	2 父は私の気持ちをわからうとしている	.52
	3 父は何かにつけて私の行動に口をはさむ	-.07
	4 父は何かにつけて自分の考えを押し付けようとする	-.17
	5 父は頼りがいがある	.66
	6 父は私と顔を合わせることが少ない	-.17
	7 父は家の中で存在感がない	-.25
	8 父は自分の欲求をおさえて家族のためにつくしている	.25
	9 父はよく家事を手伝っている	.26
	10 将来、父のような生き方をしたい	.36
	11 父を尊敬している	.69
	12 家では、重要なことは父が決める	.35
Q38S4.	1 母は私に対して暖かい	.68
	2 母は私の気持ちについてわからうとしている	.57
	3 母は何かにつけて私の行動に口をはさむ	-.19
	4 母は何かにつけて自分の考えを押し付けようとする	-.23
	5 母は頼りになる	.54
	6 母は私と顔を合わせることが少ない	-.06
	7 母は家の中で存在感がない	-.10
	8 母は自分の欲求をおさえて家族のためにつくしている	.22
	9 将来、母のような生き方をしたい	.50
	10 母を尊敬している	.67
	11 家では、重要なことは母が決める	-.03
Q39.	1 親は異性との交際に理解がある	.30
	2 両親の仲はよその家庭にくらべてよい	.55
	3 親から私は充分（じゅうぶん）愛されていると思う	.63
	4 将来、両親のような家庭を築きたい	.68
	5 親に本気でしかられたことがない	-.00
	6 親にしかられてもこわくない	-.17
	7 親は私の気分を害さないようにしている	.04
	8 親は私が怒る（おこる）ことを恐れて（おそれて）いる	-.09
	9 親は私が欲しいものはすべて買ってくれる	.12
	10 親に高価なものを買って欲しいとねだったことはない	.06
	11 親は高価なブランド物は買ってくれない	-.14
	12 親に「女らしくしなさい」と言われる	-.04

(Table 2-11-2-1 続き)

因子負荷量の2乗和 5.36

寄与率(%) 15.30

Table 2-11-2-2 親への愛情尺度項目の因子分析（13項目）

	項目内容	因子 1
Q37S3.	1 父は私に対して暖かい 2 父は私の気持ちをわかろうとしている 5 父は頼りがいがある 10 将来、父のような生き方をしたい 11 父を尊敬している	.65 .52 .66 .38 .70
Q38S4.	1 母は私に対して暖かい 2 母は私の気持ちについてわかろうとしている 5 母は頼りになる 9 将来、母のような生き方をしたい 10 母を尊敬している	.68 .58 .55 .51 .70
Q39.	2 両親の仲はよその家庭にくらべてよい 3 親から私は充分（じゅうぶん）愛されていると思う 4 将来、両親のような家庭を築きたい	.55 .64 .68
		因子負荷量の2乗和 4.79 寄与率(%) 36.87

3. 尺度得点の分布

親への愛情尺度得点の頻数分布をFig. 2-11-3-1（次頁）に示す。

第12節 非行規範に関する尺度

1. 尺度項目及び項目単位の基礎統計量

非行規範意識を測定する項目として、内山(1992)を参考に作成した8項目を使用した。項目内容と各項目ごとの回答頻度をFig. 2-12-1-1(次頁)に示す。項目ごとにみていくと、まず窃盗や恐喝に対する規範意識が非常に強いことがわかる。一方、飲酒については、半数近くの回答者が「悪くない」または「どちらかといえば悪くない」と答えており、飲酒に対して悪いとする比率が低く、他の行動に比べて規範意識が弱かった。

2. 尺度の作成過程

回答方法は、「悪い」「どちらかといえば悪い」「どちらかといえば悪くない」「悪く

Fig. 2-11-3-1 親への愛情尺度の頻数分布

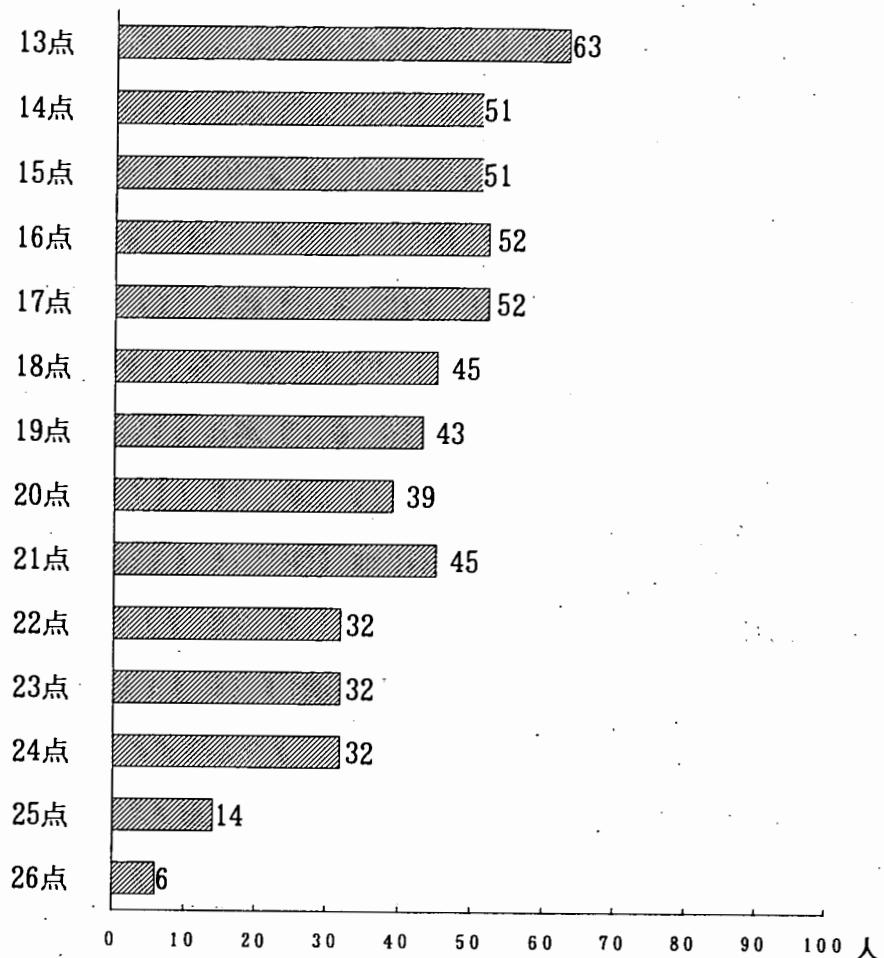
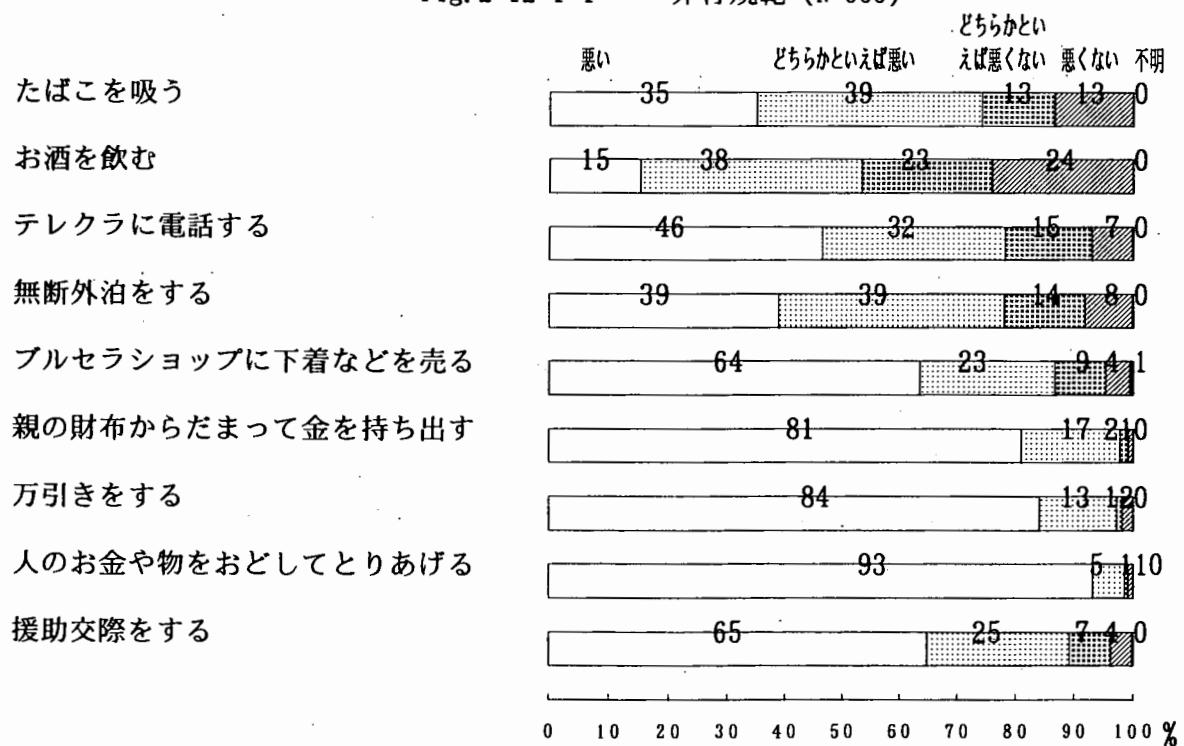


Fig. 2-12-1-1 非行規範 (N=600)



ない」の4件法である。いずれの項目も「悪い」を4点～「悪くない」を1点として得点化した。ただし、「援助交際をする」項目を除いて分析した。

8項目の回答を主成分分析した結果、いずれも第1主成分に高い負荷量を示した。(Table 2-12-2-1)。そこで、この8項目を「非行規範尺度」と呼び、各項目得点の単純加算をもって尺度得点とした。得点が高いほど非行規範意識が高いことを示している。本尺度の信頼性係数は、 $\alpha = .83$ と尺度化に充分な値を得た。

Table 2-12-2-1 非行規範意識項目の主成分分析結果（値は主成分負荷量）

項目内容	負荷量
Q18 1. たばこを吸う	.73
2. お酒を飲む	.70
3. テレクラに電話をする	.75
4. 無断外泊をする	.70
5. ブルセラショップに下着などを売る	.72
6. 親の財布（さいふ）からだまつて金を持ち出す	.60
7. 万引きをする	.68
8. 人のお金や物をおどしてとりあげる	.59
固有値	3.77
寄与率(%)	47.12

3. 尺度得点の分布

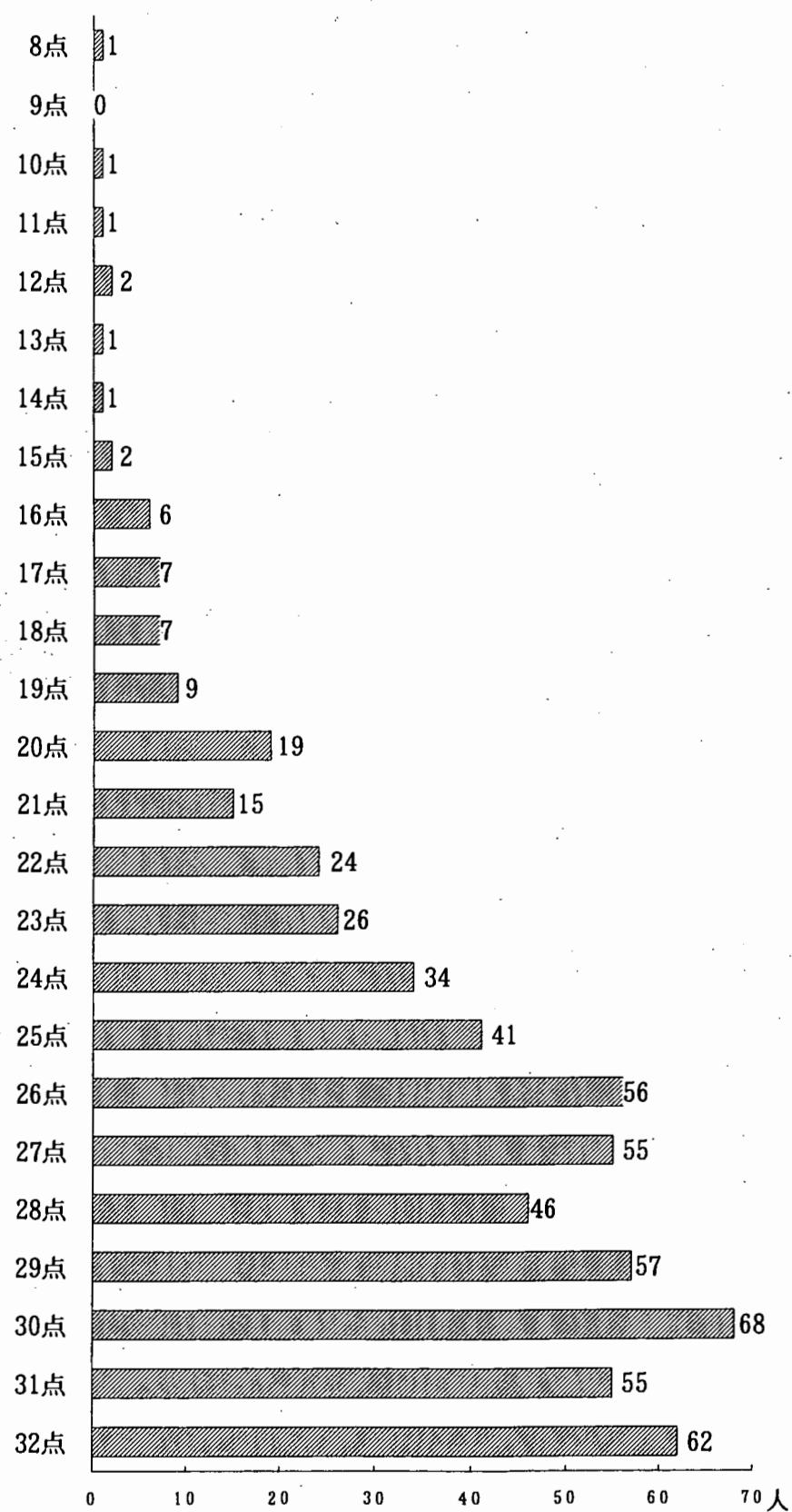
非行規範尺度の得点分布は、Fig. 2-12-3-1(次頁)に示す通りである。

第13節 精神的健康尺度

女子高校生の精神的健康を測定するために精神健康調査票 (The General Health Questionnaire : 以下GHQと略称) を用いた。GHQは、Goldberg(1972)が作成した60項目からなる非器質性、非精神病性の精神障害のスクリーニングテストである。わが国も含め世界中で標準化が試みられており、精神的健康の指標としてあらゆる世代の人々を対象にして使用されている(中川・大坊, 1985)。

GHQは60項目からなる原版以外にも、項目数が異なる(12、20、28、30項目など)複数の短縮版が作成され、多くの研究で用いられている。本調査では、Goldberg & Hillier(1979)が60項目版に探索的因子分析を行った結果として作成された28項目版(以下、GHQ-28)を用いる。GHQ-28は4つの因子(下位尺度)で構成されており、それぞれ1)身体的症状、2)不安と不眠、3)社会的活動障害、4)うつ状態と名づけられている。GHQ-28は各下位尺度ごとに精神的健康の状態を評価できることが大きな利点であり(Goldberg et al., 1997)、同時に尺度の信頼性や妥当性も十分に高いと言われている(中川・大坊, 1985)。

Fig. 2-12-3-1 非行規範尺度の頻数分布



1. 尺度項目および項目単位の基礎統計量

本調査では、精神的健康の指標としてGHQ-28を用いた。これは、わが国で標準化されている60項目版からGoldberg & Hillier(1979)の示す28項目を選択したものである。項目内容と各項目に対する回答頻度をFig. 2-13-1-1およびFig. 2-13-1-2に示した。ただし、本調査では回答者の応答のしやすさを考慮し、項目および回答方法に若干の修正を加えた。

Fig. 2-13-1-1 精神的健康尺度 (Q35) に対する回答頻度 (N=600)

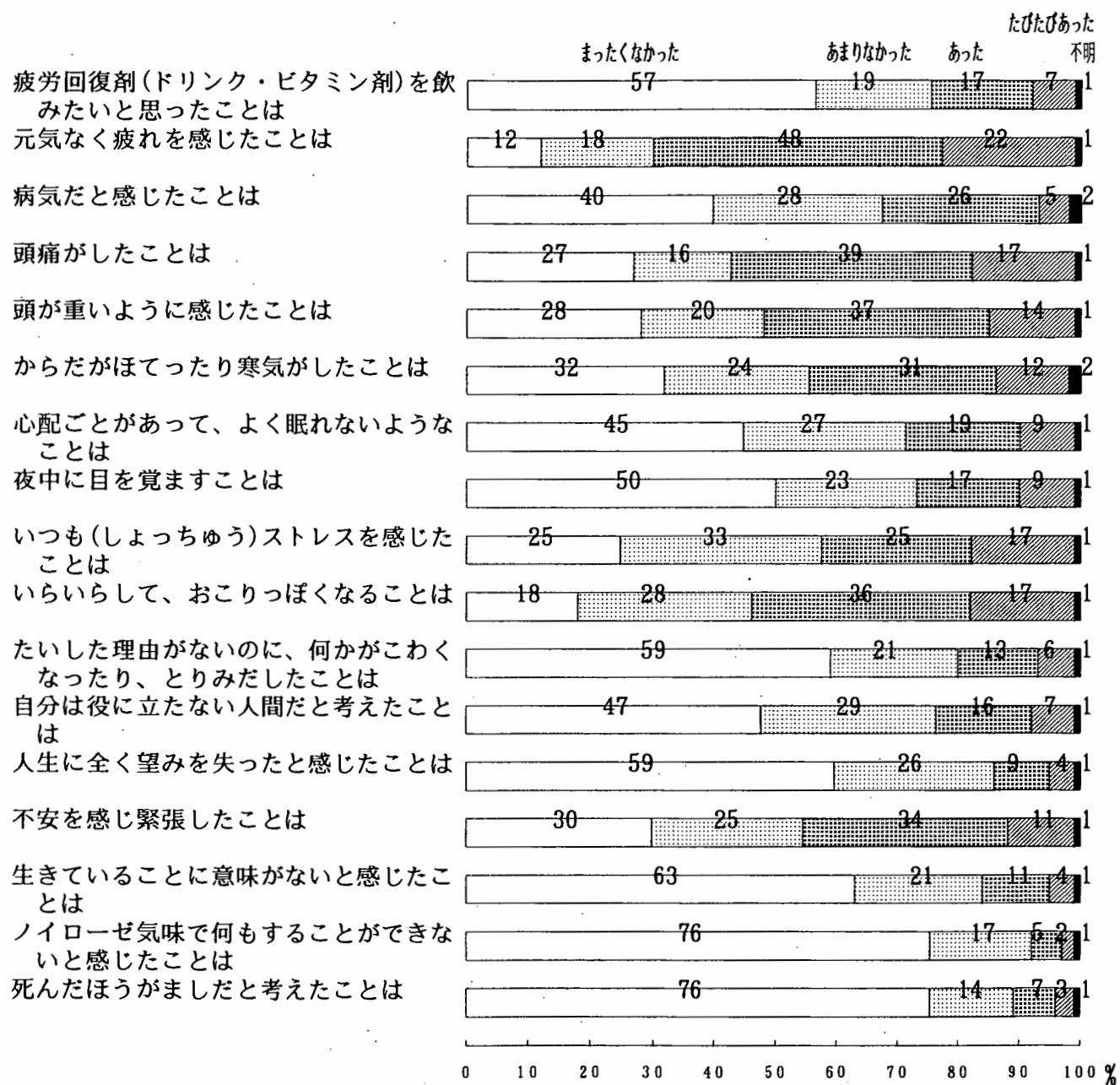
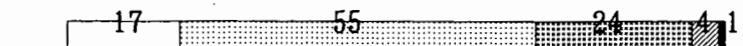


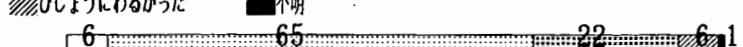
Fig. 2-13-1-2 精神的健康尺度 (Q36) に対する回答頻度 (N=600)

気分や精神状態は

よかった いつもとかわらなかった わるかった
毎日している勉強（仕事）は



ひょうにうまくいった いつもとかわらなかった うまくいかなかった
いつもより忙しく活動的な生活を送ることが



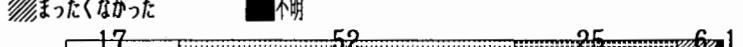
たびたびあった いつもとかわらなかった なかった
いつもよりすべてがうまくいっていると感じることが



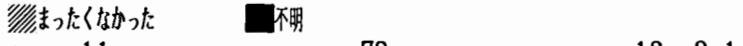
たびたびあった いつもとかわらなかった なかった
いつもより自分のしていることに生きがいを感じることが



あった いつもとかわらなかった なかった
いつもより容易に物事を決めることが



できた いつもとかわらなかった なかった
いつもより日常生活を楽しく送ることが



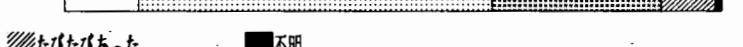
できた いつもとかわらなかった できなかった
いつもより何かするのによけい時間がかかることが



まったくなかった いつもとかわらなかった あった
いつもよりいろいろなことを重荷と感じたことは



まったくなかった いつもとかわらなかった あった
この世から消えてしまいたいと考えたことは



まったくなかった なかった いっしゅんあった
自殺しようと考えたことは



まったくなかった なかった いっしゅんあった



2. 尺度の作成過程

GHQ-28は標準化された尺度であるが、本調査では若干の修正を加えている。そのため、本調査の回答者においても原版同様に各下位尺度ごとに尺度得点を用いることが可能であるか否かを検討した。まず主成分分析を各下位尺度別に行った結果をTable 2-13-2-1～Table 2-13-2-4に示す。いずれも第一主成分に高い負荷量を示した。そこで各尺度を構成する項目は原版通りの項目を採用し、各下位尺度得点を求ることとした。

なおGHQ-28の評定は1～4の4件法であったが、本研究では1～4の各評定に対して、0、0、1、1の得点をそれぞれ与えるGHQ採点法を用いた。得点が高いほど、精神的に不健康であることを示す。Goldberg(1972)は信頼性、併存的妥当性、得点化の簡便さ、症例認定での優越性などから、この採点法の使用を推奨している。またわが国、諸外国を問わず多くの研究でGHQ採点法が採用されている。

Table 2-13-2-1 身体的症状尺度に関する主成分分析結果

項目内容	負荷量
Q36 a. 気分や健康状態は	.57
Q35 a. 疲労回復剤（ドリンク・ビタミン剤）を 飲みたいと思ったことは	.46
b. 元気なく疲れを感じたことは	.60
c. 病気だと感じたことは	.67
d. 頭痛がしたことは	.72
e. 頭が重いように感じたことは	.77
f. からだがほてったり寒気がしたことは	.67
固有値	
寄与率(%)	
	2.89
	41.23

Table 2-13-2-2 不安と不眠尺度に関する主成分分析結果

項目内容	負荷量
Q35 g. 心配ごとがあって、よく眠れないようなことは	.61
h. 夜中に目を覚ますことは	.49
i. いつも（ショッちゅう）ストレスを感じたことは	.67
j. いろいろして、おこりっぽくなることは	.63
k. たいした理由がないのに、何かがこわくなったり とりみだしたり（落ち着かなくなり、混乱する）したことは	.64
Q36 i. いつもより（ふだんより）	

(Table 2-13-2-2 続き)

いろいろなことを重荷（負担）と感じたことは	.59
Q35 n. 不安を感じ緊張（きんちょう）したことは	.60
固有値	2.58
寄与率(%)	36.89

Table 2-13-2-3 社会的活動障害尺度に関する主成分分析結果

項目内容	負荷量
Q36 c. いつもより（ふだんより）忙しく活動的な生活を送ることが	.47
h. いつもより（ふだんより）何かするのによけいに時間がかかることが	.45
d. いつもより（ふだんより）すべてがうまくいっていると感じることが	.74
b. 毎日している勉強（仕事）は	.55
e. いつもより（ふだんより）自分のしていることに生きがいを感じることが	.78
f. いつもより（ふだんより）容易に（簡単に）物事を決めることができ	.71
g. いつもより（ふだんより）日常生活を楽しく送ることが	.68
固有値	2.85
寄与率(%)	40.78

Table 2-13-2-4 うつ状態尺度に関する主成分分析結果

項目番号	項目内容	負荷量
Q35 l. 自分は役に立たない人間だと考えたことは	.68	
m. 人生に全く望みを失ったと感じたことは	.65	
o. 生きていることに意味がないと感じたことは	.80	
Q36 j. この世から消えてしまいたいと考えたことは	.75	
Q35 p. ノイローゼ気味で何もすることができないと考えたことは	.47	
q. 死んだ方がましたと考えたことは	.80	
Q36 k. 自殺しようと考えたことは	.73	

(Table 2-13-2-4 続き)

固有値	3.47
寄与率(%)	49.64

GHQ-28全体および各下位尺度別に α 係数を用いて信頼性を検討した。その結果、精神的健康尺度、すなわちGHQ-28全体では $\alpha=.87$ という比較的高い値を得た。各下位尺度別に検討しても、身体的症状尺度 ($\alpha=.76$)、不安と不眠尺度 ($\alpha=.71$)、社会的活動障害尺度 ($\alpha=.74$)、うつ状態尺度 ($\alpha=.82$) の全ての下位尺度で十分な値を得た。ここで得られた α 係数の値は、わが国の成人を対象とした場合をはじめ、諸外国における女子高校生をサンプルとした場合とも極端に変わるものではない。むしろ若干ではあるが、高い値を示していた。したがって本調査においても、GHQ-28の信頼性は全項目また各下位尺度とともに、それぞれ十分であると言えるだろう。

3. 尺度得点の分布

GHQ-28の得点分布をFig. 2-13-4-1に、また各下位尺度得点分布をFig. 2-13-4-2~Fig. 2-13-4-5にそれぞれ示す。ここではこの分布そのものの詳細については触れず、後の第4章『援助交際』の背景要因、第2節心理的背景、3. 精神的健康の箇所で得点とともに考察したい。

Fig. 2-13-3-1 GHQ総合得点の頻数分布

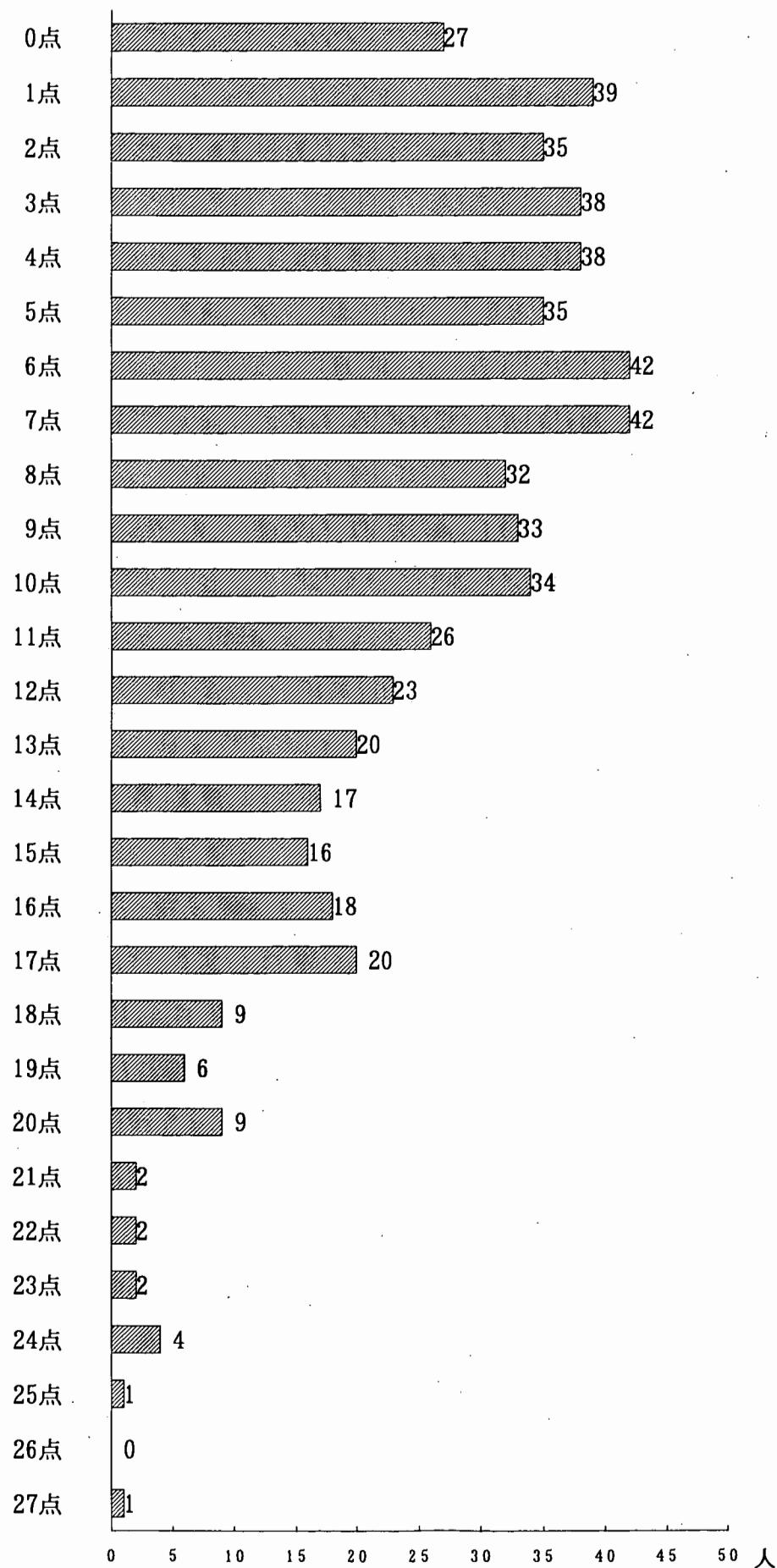


Fig.2-13-3-2 身体的症状尺度の頻数分布

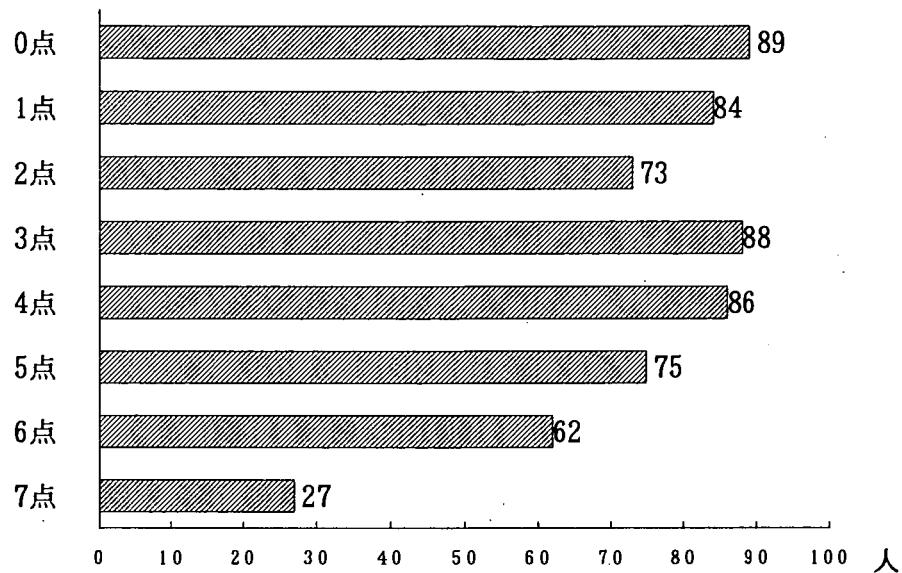


Fig. 2-13-3-3 不安と不眠尺度の頻数分布

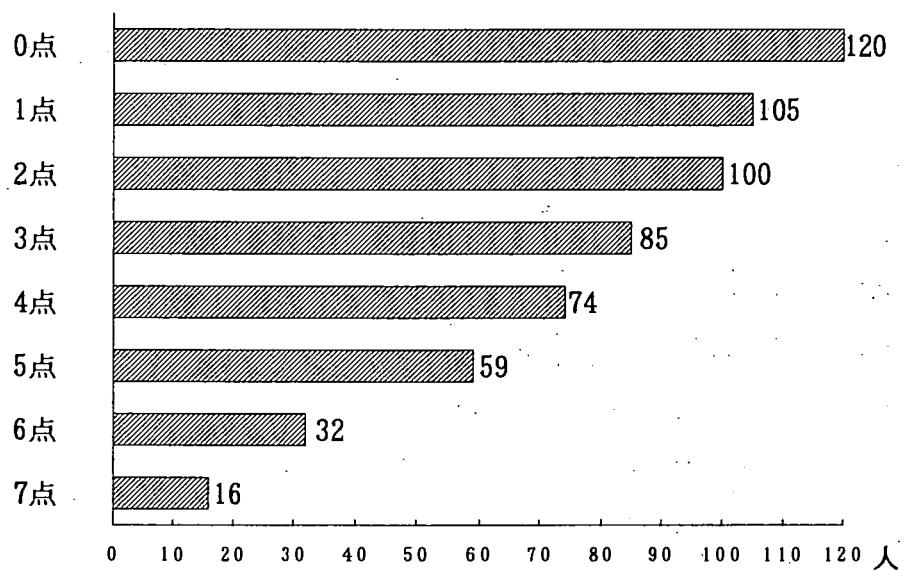


Fig. 2-13-3-4 社会的活動障害尺度の頻数分布

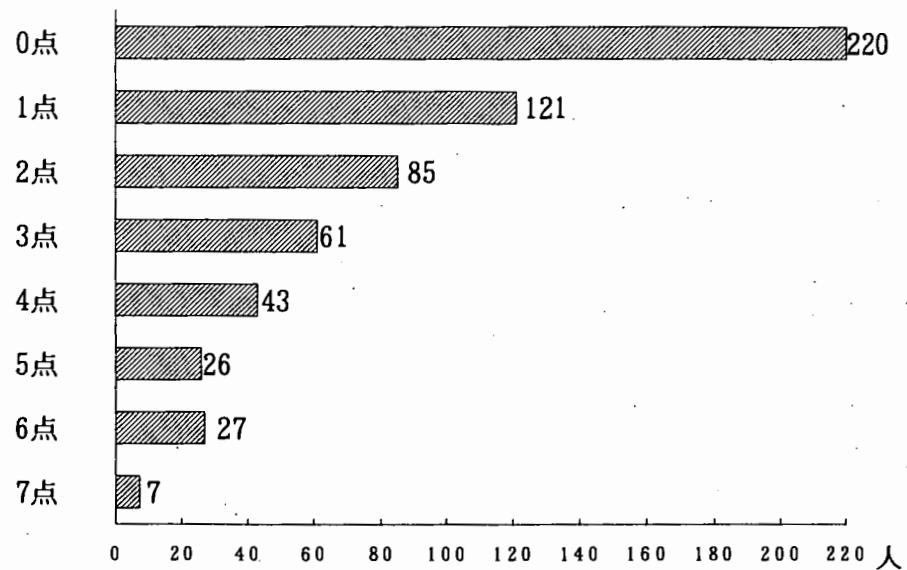
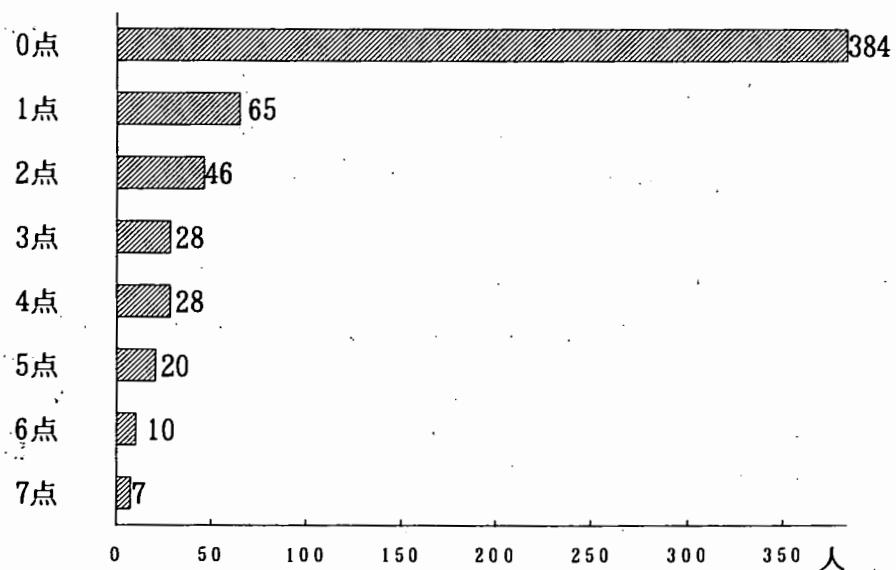


Fig. 2-13-3-5 鬱状態尺度の頻数分布



第3章 『援助交際』に対する態度や経験

第1節 『援助交際』に対する抵抗感

1. 項目の構成

本研究では『援助交際』に対する態度を多角的に捉えるために、回答者に『援助交際』に対する抵抗感をたずねる一連の設問が用意された。大学1・2年生を対象に実施した予備調査の結果からも、『援助交際』がどのような行動を含むかについての青少年のイメージは一定していない。そこで、本研究における設問では『援助交際』という言葉を直接用いず、以下のような具体的行動として記述した。

「金品と引き換えにお茶やデートをすること」（以下「お茶」と略記）

「金品と引き換えにセックス（性交）以外の性的行為をすること」（「性交以外」）

「金品と引き換えにセックス（性交）すること」（「性交」）

回答者には、それぞれの行為にどの程度抵抗を感じるかをたずねた。さらに行行為主体を、「あなた自身」（以下「自分」と略記）と「あなた以外の女子高校生」（以下「他者」と略記）に分けて、それぞれの行為についてたずねた。したがって、設問では行為内容（お茶・性交以外・性交）と行為主体（自分・他者）の6種の行為それぞれについて、回答者が感じる抵抗感を尋ねている。『援助交際』（自分・お茶）とは、行為主体が自分であり、行為内容が「金品と引き換えにお茶やデートをすること」を意味する。

回答は「抵抗を感じる」「少し抵抗を感じる」「あまり抵抗を感じない」「全く抵抗を感じない」の4つの選択肢の中から一つを選ぶ单一回答形式で求めた。

2. 女子高校生の『援助交際』に対する抵抗感

Fig. 3-1-2-1 あなた自身がすることに対する抵抗感 (N=600)

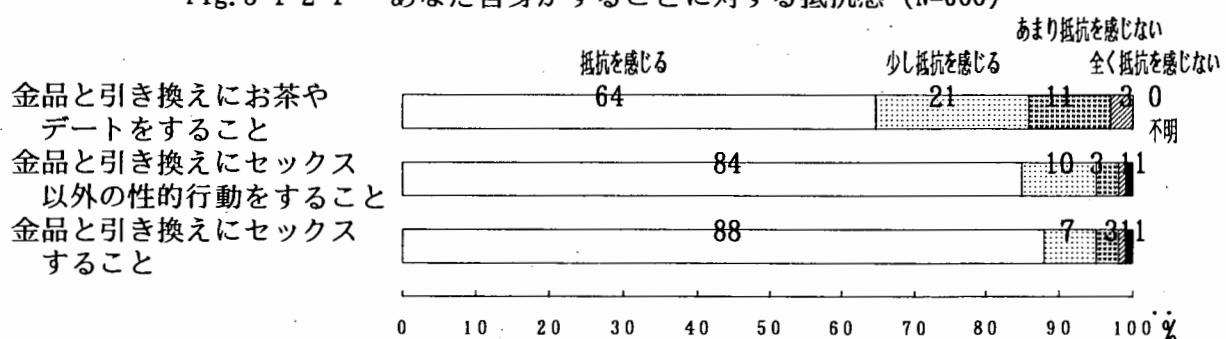
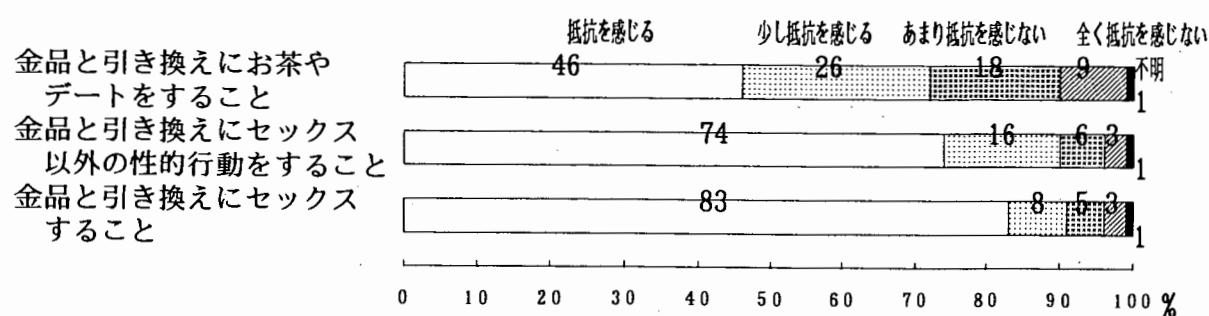


Fig. 3-1-2-2 あなた以外の女子高校生がすることに対する抵抗感 (N=600)



6つの設問に対する全回答者の回答結果が、Fig. 3-1-2-1とFig. 3-1-2-2に示されている。図から分かるように、『援助交際』に対する抵抗感は、行為の内容と行為の主体によって大きく異なっている。

自分が行為者の場合 (Fig. 3-1-2-1) には、どの行為であっても「抵抗を感じる」回答がもっとも多い。とくに自分が「金品と引き換えにセックスを行う」ことに対しては、9割近い回答者が「抵抗を感じ」ており、「全く抵抗を感じない」者は1%しかいなかった。しかし、セックスを含まない「お茶やデートをする」や「セックス以外の性的行動」については、抵抗感が薄くなっている。回答者自身が「金品と引き換えにお茶やデートをする」行為は、「抵抗を感じる」者は6割台にとどまり、「全く抵抗を感じない」者は3%になっている。「全く抵抗を感じない」と「あまり抵抗を感じない」を合わせると、25%に達する。「金品と引き換えにお茶やデートをする」ことに対しては、4分の1の高校生が抵抗を感じていない。

自分以外の女子高校生がこれらの行為を行う場合 (Fig. 3-1-2-2) には、抵抗感がいっそう弱まる。「金品と引き換えにセックスすること」は8割の高校生が「抵抗を感じ」ているが、「お茶やデートすること」に対しては、「抵抗を感じる」者は5割を切っており、約1割(9%)が「全く抵抗を感じない」と受け止めている。

高校生全体から見れば、『援助交際』に対する抵抗感は強いが、「お茶やデート」の交際であれば、許容してしまう高校生が4人に1人もいるのである。

3. 『援助交際』の抵抗感の構造

6つの設問に対する回答の構造を検討するために、数量化理論第III類によって回答を解析した。解析に当たっては、回答を「抵抗を感じる」と「少し抵抗を感じる」「あまり抵抗を感じない」「全く抵抗を感じない」とに2分し、6項目計12カテゴリーを投入した。

解析の結果、固有値は順に、.60、.16、.10となった。第一軸と第二軸のカテゴリー・コアが、Fig. 3-1-3-1に示されている。

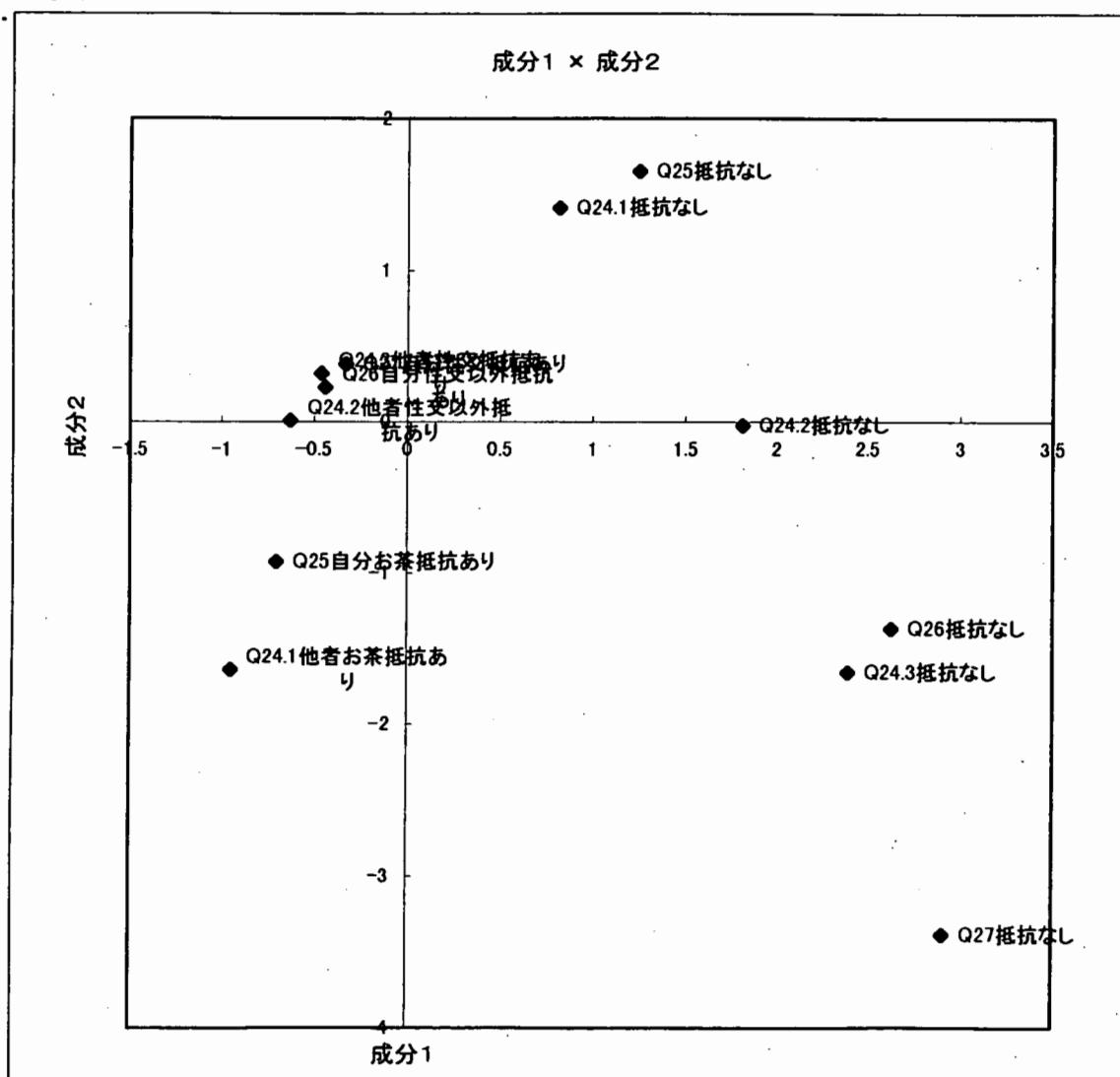
図から分かるように、第一軸マイナス側(図左側)から、プラス側(図右側)にかけて逆U字型にカテゴリーが並んでいる。この結果は、これらのカテゴリーが1次元になっていることを意味している。すなわち、

- 「Q24. 1他者がお茶やデートをする『援助交際』に抵抗を感じる」から順に、
- 「Q25 自分がお茶やデートをする『援助交際』に抵抗を感じる」
- 「Q24. 2他者がセックス以外をする『援助交際』に抵抗を感じる」
- 「Q26 自分がセックス以外をする『援助交際』に抵抗を感じる」
- 「Q24. 3他者がセックスをする『援助交際』に抵抗を感じる」
- 「Q27 自分がセックスをする『援助交際』に抵抗を感じる」
- 「Q24. 1他者がお茶やデートをする『援助交際』に抵抗を感じない」
- 「Q25 自分がお茶やデートをする『援助交際』に抵抗を感じない」
- 「Q24. 2他者がセックス以外をする『援助交際』に抵抗を感じない」
- 「Q26 自分がセックス以外をする『援助交際』に抵抗を感じない」
- 「Q24. 3他者がセックスをする『援助交際』に抵抗を感じない」
- 「Q27 自分がセックスをする『援助交際』に抵抗を感じない」まで、

この順番に、『援助交際』への抵抗感が弱まることが明らかになった。

Fig. 3-1-3-1 『援助交際』への抵抗感の構造
(III類のカテゴリー・スコア)

項目	成分1	成分2
Q24.1他者お茶抵抗あり	-0.948	-1.64
Q24.1抵抗なし	0.817	1.414
Q24.2他者性交以外抵抗あ	-0.626	0.009
Q24.2抵抗なし	1.815	-0.025
Q24.3他者性交抵抗あり	-0.462	0.32
Q24.3抵抗なし	2.394	-1.659
Q25自分お茶抵抗あり	-0.7	-0.929
Q25抵抗なし	1.246	1.654
Q26自分性交以外抵抗あり	-0.439	0.229
Q26抵抗なし	2.632	-1.372
Q27自分性交抵抗あり	-0.329	0.383
Q27抵抗なし	2.91	-3.388
		-2.739



『援助交際』に対する抵抗感の低さを『援助交際』を許容する度合いと捉えると、上記の結果は、以下のように解釈することができる。

『援助交際』の許容は、『援助交際』でどのような行為をとるかによって異なっている。『セックス』や『セックス以外の性的行為』に対しては、高校生の抵抗感は強いが、「お茶やデート」に対しては許容的である。しかし、これらの行動への許容感は段階を経て連続している。すなわち、「お茶やデート」を許容することは、「セックス以外の性的行為」の許容につながり、「セックス以外の性的行為」の許容は、「セックス」を許容する態度へつながっているのである。『援助交際』において「お茶やデート」を行った者の4分の1が、交際の理由として「セックスさえしなければ問題ないから」と回答している（本章第2節参照）が、実際には、「お茶やデート」が売買春へと結びついていることが、このデータからも確認される。

また、「他の高校生が『援助交際』を行うこと」に抵抗感を感じなくなることは、自分がその行動をとることへの抵抗感を失う前段階になっていることも明らかになった。

高校生の中には、「他の高校生が援助交際をやっていても、自分には関係がない」という意識が強い（54%）が（本章第2節）、実際には他の高校生の非行的行動を許容することが、本人の非行行動を誘発する準備状態になっているのである。

4. 『援助交際』に対する抵抗感の尺度化

『援助交際』に対する抵抗感を整理して捉えるために、本研究では尺度（正確に言えば類型）を用意した。第1は、「Q24. 1他の高校生が金品と引き換えにお茶やデートすること」に抵抗を感じるか否かという尺度で、第2は、「Q27（回答者自身が）金品と引き換えにセックスすること」に抵抗を感じるか否かという尺度である。いずれも、「抵抗を感じる」と「少し抵抗を感じる」「あまり抵抗を感じない」「全く抵抗を感じない」との2群に分けている。

これら二つの項目は、前項で示したIII類の結果に基づいて選定された。「Q24. 1他の高校生が金品と引き換えにお茶やデートすること」（「抵抗感（他者・お茶）」）は、もっとも抵抗感の弱い行為であり、他方「Q27（回答者自身が）金品と引き換えにセックスすること」（「抵抗感（自分・性交）」）は、もっとも抵抗感の強い行為である。後者は前者に比べて、非行的行為への結びつきが強いものと予想される。

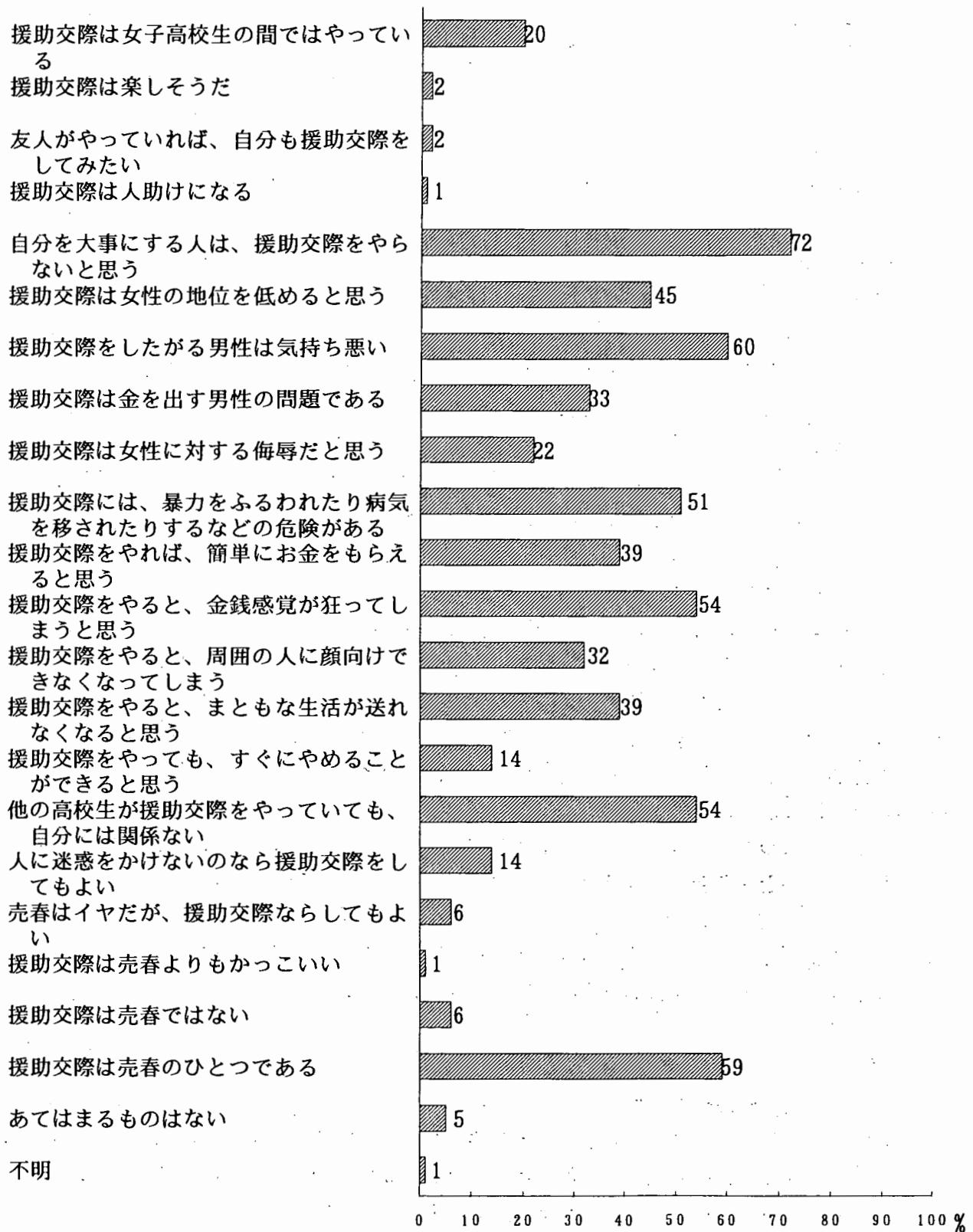
第2節 『援助交際』に対する態度

1. 項目の構成と基礎統計量

女子高校生の『援助交際』に対する態度を調べるために、本研究に先立って実施された女子高校生の面接調査（福富他、1997）で女子高校生が『援助交際』に対して抱いていると考えられたもの、さらに男女平等意識の視点から『援助交際』を捉えたものを考慮しながら質問項目が設定された。

Fig. 3-2-1-1は、本調査で設定された項目内容と各項目に対する肯定率を示したものである。回答は回答者自身の考えに当てはまるものを、いくつでも選択することを求める多重回答形式によって求めた。選択された項目には2点、されなかつた項目には1点を与えて得点化した。

Fig. 3-2-1-1 援助交際に対する態度 (N=600)



2. 尺度の作成過程

Q23-22を除く21項目の構造を見るために、因子分析を行った。因子数を1～5まで変化

させて検討し、解釈可能なものとして2因子解（主成分解、VARIMAX回転）を採択した。その結果をTable 3-2-2-1に示す。

Table 3-2-2-1 『援助交際』に対する態度に関する因子分析（回転後の因子負荷量）

項目内容	因子1	因子2
Q23 1. 援助交際は女子高校生の間ではやっている	.02	.33
2. 援助交際は楽しそうだ	-.09	.43
3. 友人がやっていれば、自分も援助交際をしてみたい	-.02	.63
4. 援助交際は人助けになる	-.06	.31
5. 自分を大事にする人は、援助交際をやらないと思う	.56	-.15
6. 援助交際は女性の地位を低めると思う	.68	-.12
7. 援助交際をしたがる男性は気持ち悪い	.55	-.09
8. 援助交際は金を出す男性の問題である	.37	.28
9. 援助交際は女性にたいする侮辱（ぶじょく）だと思う	.53	-.15
10. 援助交際には、暴力をふるわれたり 病気を移されたりするなどの危険がある	.54	.14
11. 援助交際をやれば、簡単（かんたん）に お金もらえると思う	.28	.51
12. 援助交際をやると、金銭感覚が 狂って（くるって）しまうと思う	.59	.16
13. 援助交際をやると、 周囲の人に顔向けできなくなってしまう	.58	-.16
14. 援助交際をやると、 まともな生活が送れなくなると思う	.61	-.08
15. 援助交際をやっても、 すぐにやめることができると思う	.01	.44
16. 他の高校生が援助交際を やっていても、自分には関係ない	.39	.19
17. 人には迷惑（めいわく）を かけないのなら援助交際をしてもよい	-.04	.55
18. 売春はイヤだが、援助交際ならしてもよい	-.07	.70
19. 援助交際は売春よりかっこいい	-.06	.38
20. 援助交際は売春ではない	-.12	.61
21. 援助交際は売春のひとつである	.51	-.18
因子負荷量の2乗和	3.48	2.74
寄与率(%)	16.57	13.03

第1因子、第2因子に、40以上負荷している項目を尺度項目として採択した。第1因子は『援助交際』に対する否定的な態度や『援助交際』にまつわる病気等に対する不安を表す「援助交際に対する否定・不安」と名付け、第2因子は『援助交際』に対する積極的な態度を表す「援助交際に対する積極的許容」と名付けた。

それぞれの因子に高く負荷する項目が、1次元性を保つかを確認するため、各因子に高い負荷を示す項目だけで再度因子分析（主成分解）を行ったところ、いずれも第1因子として高い負荷を示し、1次元性が確認された（Table 3-2-2-2、Table 3-2-2-3）。そこでこれらの項目を尺度項目とし、回答の単純加算をもって尺度得点とした。『援助交際』に対する否定・不安尺度は尺度得点が高いほど『援助交際』に対して否定的態度や不安を持っていることを示し、『援助交際』に対する積極的許容尺度は尺度得点が高いほど『援助交際』に対して許容的な態度を持っていることを示す。

Table 3-2-2-2 『援助交際』に対する態度(否定・不安)に関する因子分析

項目内容	因子1
Q23 5. 自分を大事にする人は、援助交際をやらないと思う	.57
6. 援助交際は女性の地位を低めると思う	.72
7. 援助交際をしたがる男性は気持ち悪い	.55
9. 援助交際は女性に対する侮辱(ぶじょく)だと思う	.58
10. 援助交際には、暴力をふるわれたり病気を移されたりする等の危険がある	.53
12. 援助交際をやると、金銭感覚が狂って(くるって)しまうと思う	.55
13. 援助交際をやると、周囲の人に顔向けできなくなってしまう	.63
14. 援助交際をやると、まともな生活が送れなくなると思う	.64
21. 援助交際は売春のひとつである	.52
因子負荷量の2乗和	
寄与率(%)	
	3.12
	34.68

Table 3-2-2-3 『援助交際』に対する態度（積極的許容）に関する因子分析

項目内容	因子1
Q23 2. 援助交際は楽しそうだ	.46
3. 友人がやっていれば、自分も援助交際をしてみたい	.67
11. 援助交際をやれば、簡単(かんたん)にお金をもらえると思う	.48
15. 援助交際をやっても、すぐにやめることができると思う	.46
17. 人には迷惑(めいわく)をかけないのなら援助交際をしてもよい	.54
18. 売春はイヤだが、援助交際ならしてもよい	.72

(Table 3-2-2-3 続き)

- | | |
|--------------------|----|
| 19. 援助交際は売春よりかっこいい | 43 |
| 20. 援助交際は売春ではない | 62 |

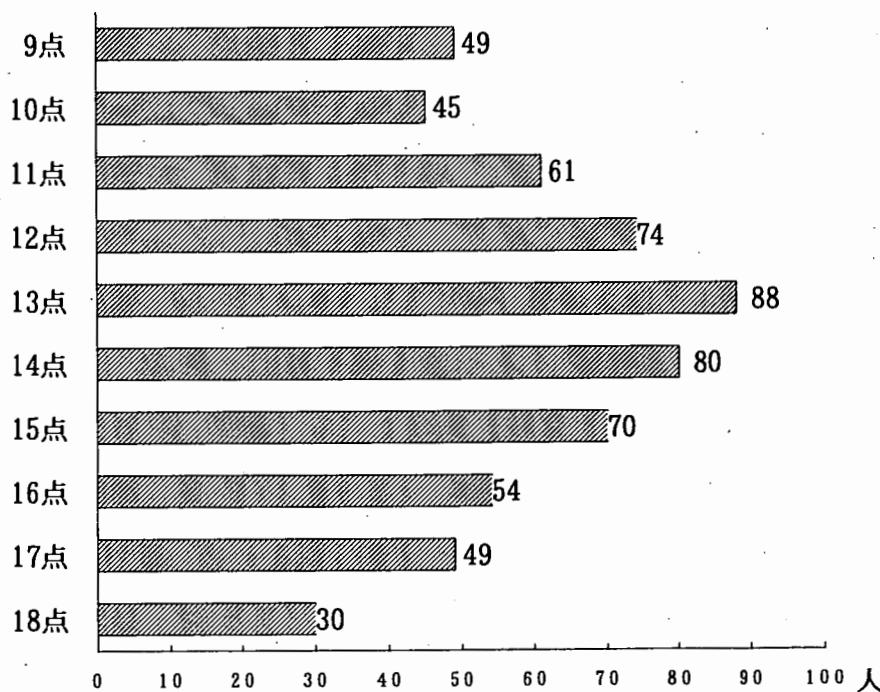
因子負荷量の2乗和	2.49
寄与率(%)	31.11

各尺度の信頼性を α 係数を用いて検討した。『援助交際』に対する否定・不安尺度は $\alpha = .76$ 、『援助交際』に対する態度(積極的許容)尺度は $\alpha = .61$ となり、尺度としての信頼性はあると考えられる。

3. 尺度得点による類型化

各尺度の得点分布をFig. 3-2-3-1及びFig. 3-2-3-2(次頁)に示す。それぞれの尺度得点の中央値に注目して上位群と下位群に類型化した。『援助交際』に対する否定・不安尺度の場合には、13点以下を低群、14点以上を高群とした。『援助交際』に対する積極的肯定尺度の場合には、8点を低群、9点以上を高群とした。

Fig. 3-2-3-1 『援助交際』に対する態度(否定・不安)尺度に対する回答頻度

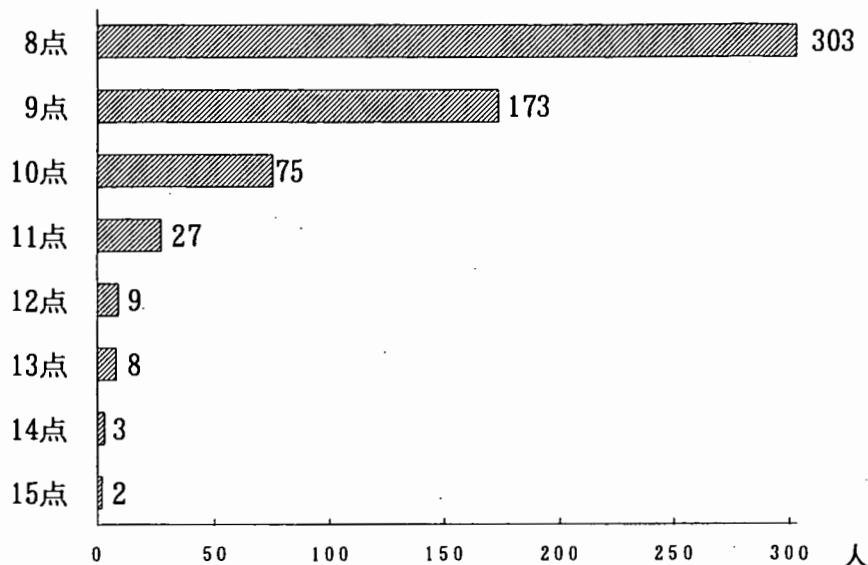


第3節 『援助交際』の経験

1. 『援助交際』経験の実態

本調査では、前節で分析してきた『援助交際』に対する抵抗感や『援助交際』に対する態度に加えて、友達から『援助交際』の体験談を聞いたことがあるかどうか、自分自身が経験したことがあるか、あるならば友達に話したか、『援助交際』をする時の気持ちや理

Fig. 3-2-3-2 『援助交際』に対する態度(積極的許容)尺度に対する回答頻度



由、及び『援助交際』を経験した後の感想はどのようなものだったかが設問されている。

まず、『援助交際』の経験について見てみよう。

前述したように、本調査では『援助交際』という言葉を直接用いずに、「お茶やデート」「性交以外の性的行為」「性交」という3つの具体的行為として質問が設定されている。これら3つの行為のいずれかを経験したとするものは600人中30人(5%)であり、そのうち「お茶やデート」の経験者数は29人、「性交以外の性的行為」14人、「性交」14人であった。さらにそれぞれの経験の詳細な内訳がTable 3-3-2-1に示されている。

Table 3-3-1-1 『援助交際』の経験あるもの(600人中の%)

『援助交際』(お茶・デート)	29(4.8%)	内 訳	有	有	有	有	無	無	無
『援助交際』(性交以外の性的行動)	14(2.3%)		無	有	無	有	有	有	無
『援助交際』(性交)	14(2.3%)		無	無	有	有	無	有	有
3つのいずれかを経験したもの	30(5.0%)		13	3	2	11	0	0	1

2. 友達からの体験談

次に、『援助交際』経験者と未経験者で、友達から『援助交際』の体験談を聞いたことがある人の割合に違いがあるかを検討した。その結果をFig. 3-3-2-1に示す。図に示されているように、どの段階においても有意差がみられ、『援助交際』経験者は未経験者よりも、友達の体験談を聞いたことがある割合が高い(「お茶やデート」:経験者93.1%、未経験者33.0%、「性交以外の性的行為」:経験者85.7%、未経験者21.9%、「性交」:経験者85.

7%、未経験者18.6%）。経験者の周りには『援助交際』をしている友達が多いと言えよう。また本調査では、『援助交際』経験者が友達に自分の経験を話しているかについても質問しているが、この割合も高く（「お茶やデート」79.3%、「性交以外の性的行為」64.3%、「性交」64.3%、Fig. 3-3-2-2）、『援助交際』経験者の周囲では、『援助交際』が日常的な話題として会話されている可能性が予測される。先に実施された面接調査でも指摘されたように、『援助交際』の話題との接触は、『援助交際』に対する感覚を「麻痺」させる効果を持っている。おそらく、こうした『援助交際』の話題との日常的な接触が、抵抗感を低める1つの要因として働いているだろう。

Fig. 3-3-2-1 『援助交際』の経験の有無×友達から聞いたことの有無

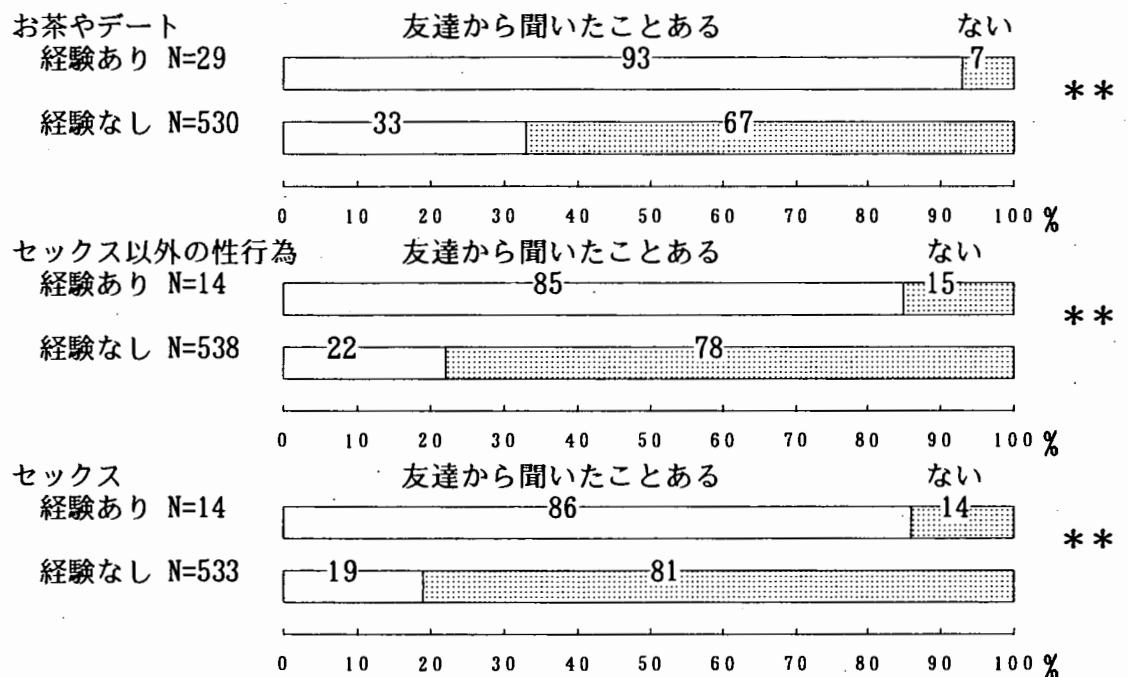
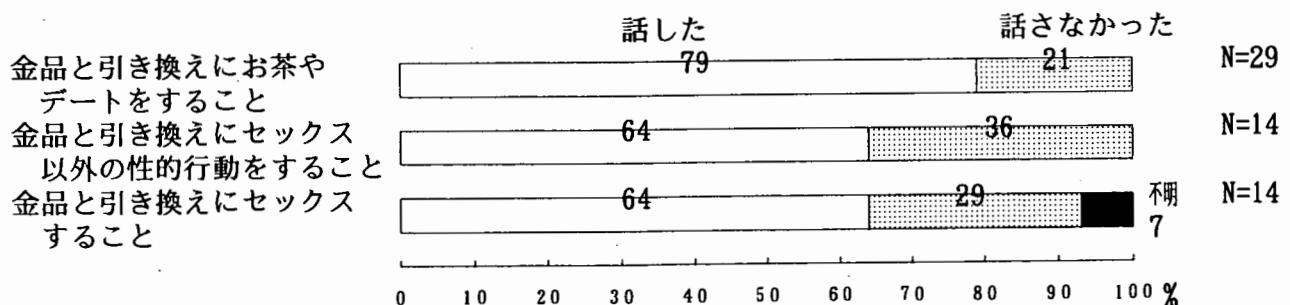


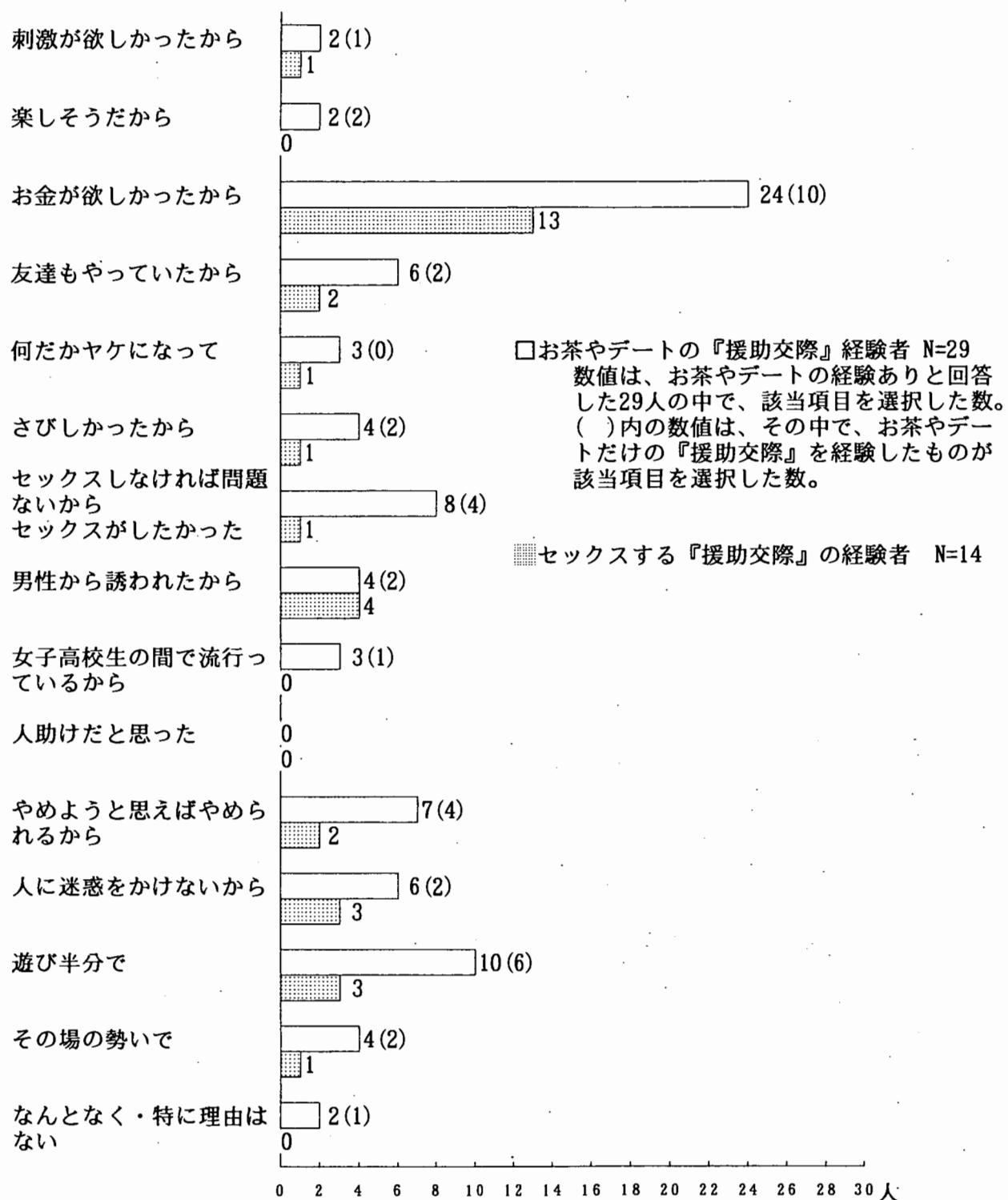
Fig. 3-3-2-2 あなたの経験を友だちに話したか



3. 『援助交際』をする時の気持ちと理由

「お茶やデート」と「性交」について、『援助交際』をする時の気持ちと理由をたずねた。設定された具体的な項目及びその肯定率をFig. 3-3-3-1に示す。なお回答は、回答者自身にあてはまるものをいくつでも選択することを求める多重回答形式により求めた。

Fig. 3-3-3-1 『援助交際』を経験する時の気持ちや理由



まず「お茶やデート」経験者29人の『援助交際』をする時の気持ちと理由について見てみると、1番多かった理由は「お金が欲しかったから」で24人である。次に多いのは「遊び半分で」で10人である。3番目に多いのが「セックスさえしなければ問題ないから」で8人である。これらは、お金を手っ取り早く稼ぐ手段として、気軽に『援助交際』をしていることを示すものだろう。またセックスさえしなければ問題ないという背景には、『援助交際』は売春ではないという合理化が微妙に作用しているのかもしれない。

「性交」を伴う『援助交際』経験者14人について、『援助交際』をする時の気持ちと理由を見ると、1番多い理由は「お金が欲しかったから」(13人)で、金銭欲求が強く見られる。次に多いのは「男性から誘われたから」で4人、3番目は「人には迷惑をかけないから」、「遊び半分で」で3人である。また「お茶やデート」で選択された「楽しそうだから」、「女子高校生の間で流行っているから」、「なんとなく・特に理由はない」は、ここでは選択されなかった。

4. 『援助交際』経験後の気持ち

『援助交際』経験後の気持ちを調べるために用意した項目及びそれとの項目に対する回答頻度をFig. 3-3-4-1(次頁)に示す。「お茶やデート」「性交」それぞれに用意した項目はほぼ同じものであるが、「性交」には「妊娠・病気が心配になった」を加えた。回答は、多重回答形式で求めた。

「お茶やデート」をした後の感想として1番多かったのは、「相手の男性は気持ち悪かった」で15人、次に多いのは「親に悪いと思った」、「後悔した」で11人であった。相手の男性に対する嫌悪感とともに、『援助交際』をしたことの罪悪感が示されている。しかし一方で、「得した気分になった」、「またやろうと思った」(それぞれ6人)が次に多く選択されている。おそらく「お茶やデート」をしただけで、手軽に金品を受け取ることが出来るという意識の現れであろう。さらにその手軽さから再度『援助交際』をしようとする意識も伺うことが出来る。

次に「性交」を伴う『援助交際』を見てみると、1番多かったのは「後悔した」と「相手の男性は気持ち悪かった」で9人、次に多かったのは「妊娠・病気が心配になった」で6人であった。「お茶やデート」と同様に相手の男性に対する嫌悪感と後悔が示されている。「お茶やデート」で選択されていた「得した気分になった」、「相手の男性はいい人だった」、「友達に自慢したい」といったポジティブな感想は、ここでは誰も選択していなかった。「得した気分になった」が選択されなかったのは、「お茶やデート」とは異なり、手軽ではないということだろう。

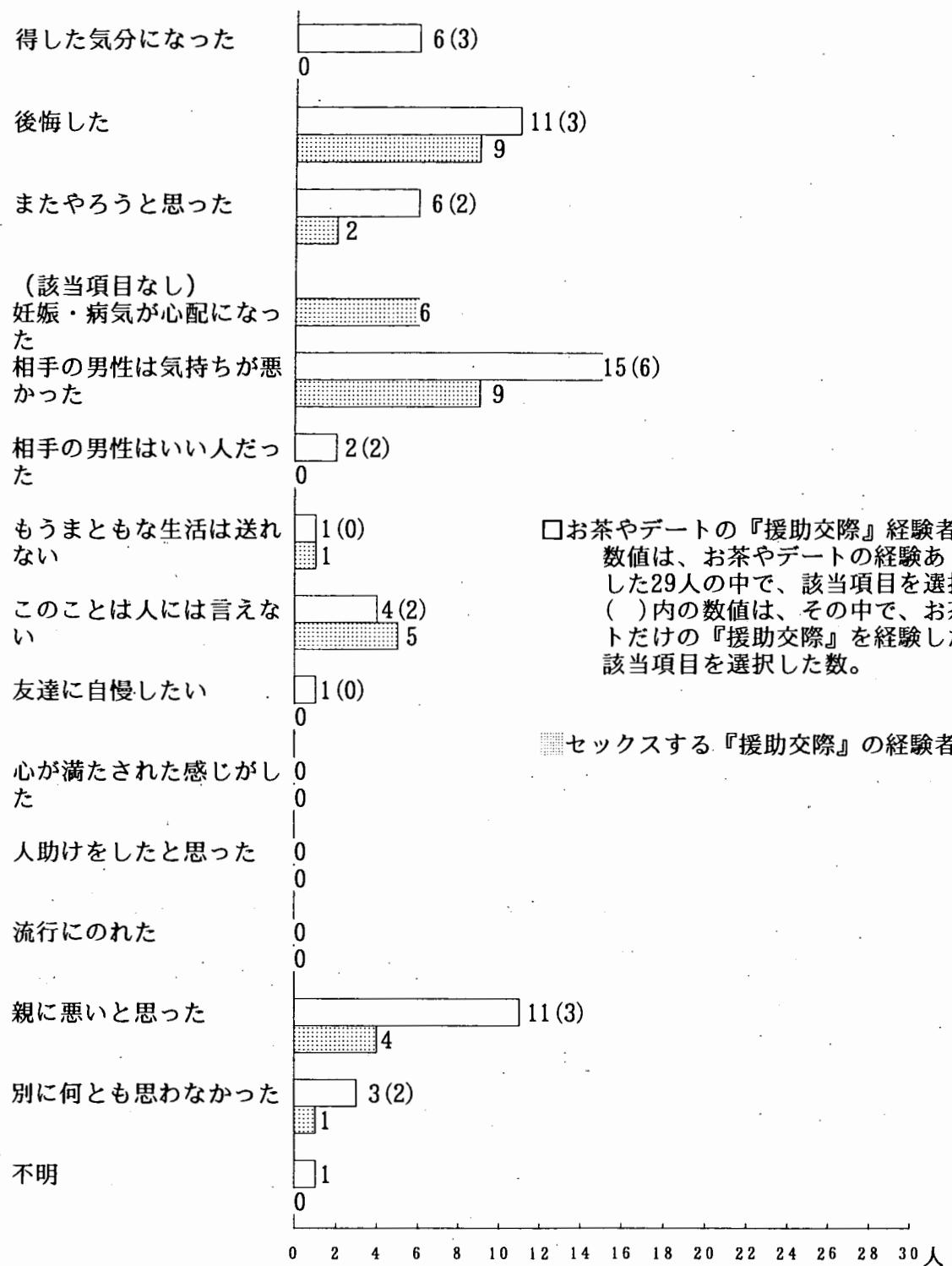
第4節 『援助交際』に対する抵抗感・態度・経験との関連

1. 『援助交際』に対する抵抗感・経験と『援助交際』態度との関連

『援助交際』に対する抵抗感や経験と『援助交際』に対する態度との関連を見てみよう。

ここでは、『援助交際』に対する抵抗感を『援助交際』(他者・お茶)、『援助交際』(自分・お茶)、『援助交際』(他者・性交以外)、『援助交際』(他者・性交以外)、『援助交際』(他者・性交)、『援助交際』(自分・性交)の全てについて検討した。さらに『援助交際』の経験については、3つの『援助交際』のいずれかの経験があるものについて検討

Fig. 3-3-4-1 『援助交際』を経験した後の気持ち



した。Table 3-4-1-1は、それぞれの『援助交際』に対する抵抗感の高低と二つの『援助交際』に対する態度の高低をクロスしたものである。 χ^2 検定の結果、全ての『援助交際』に対する抵抗感が弱い人は、『援助交際』に対する否定的な態度が弱く、許容的な態度が強いことが明らかになった。さらに、『援助交際』経験群についても、否定的な態度が弱く、許容的な態度が強かった。

Table 3-4-1-1 『援助交際』への抵抗感、経験別にみた『援助交際』態度尺度(%)

	『援助交際』否定・不安尺度		『援助交際』積極的許容尺度		
	高(N=283)	低(N=311)	高(N=295)	低(N=299)	
抵抗感 (他者・お茶)	高(N=276) 低(N=318)	59.1 37.7	40.9 ** 62.3	29.0 67.6	71.0 ** 32.4
抵抗感 (自分・お茶)	高(N=382) 低(N=216)	53.9 35.7	46.1 ** 64.3	35.1 75.5	64.9 ** 24.5
抵抗感 (他者・性交以外)	高(N=441) 低(N=152)	54.9 27.0	45.1 ** 73.0	41.5 73.0	58.5 ** 27.0
抵抗感 (自分・性交以外)	高(N=505) 低(N= 87)	52.3 20.7	47.7 ** 79.3	44.8 78.2	55.2 ** 21.8
抵抗感 (他者・性交)	高(N=496) 低(N= 97)	52.4 23.7	47.6 ** 76.3	44.2 77.3	55.8 ** 22.7
抵抗感 (自分・性交)	高(N=530) 低(N= 63)	50.6 20.6	49.4 ** 79.4	45.7 84.1	54.3 ** 15.9
『援助交際』経験	無(N=544) 有(N= 30)	49.1 26.7	50.9 ** 73.3	47.8 93.3	52.2 ** 6.7

次に『援助交際』に対する態度尺度を作成するために用意した項目のうち、不安・否定尺度、積極的許容尺度からもれた項目について見る。尺度からもれた項目は、Q23_1「援助交際は女子高校生の間ではやっている」、Q23_4「援助交際は人助けになる」、Q23_8「援助交際は金を出す男性の問題である」、Q23_16「他の高校生が援助交際をやっていても、自分には関係がない」の4項目であった。

まず、それぞれの項目について、回答者全員を対象とした肯定率をみてみると、Fig. 3-2-1-1に示すように、「援助交際は女子高校生の間ではやっている」(20.3%)、「援助交

際は人助けになる」（1.3%）、「援助交際は金を出す男性の問題である」（33.0%）、「他の高校生が援助交際をやっていても、自分には関係ない」（54.0%）であった。

これは約2割が援助交際を一種の流行と捉え、社会問題として捉える視点を持っていない可能性を示唆している。さらに先の面接調査（福富他、1997）で指摘されたように、約5割が同じ女子高校生の問題でありながら、傍観者的に自分とは切り離して捉えていることが分かる。また、マスコミ等で『援助交際』が扱われる際には、女子高校生に焦点を当てられがちであるが、約3割の女子高校生が買う側である男性の問題に目を向けている。

さすがに『援助交際』は人助けであると、『援助交際』を文字通りに援助する関係として捉えているものは少なかった。

『援助交際』への抵抗感の高低、経験の有無による各群ごとに、これら4つの項目それぞれの肯定率をTable 3-4-1-2に示す。

Table 3-4-1-2 『援助交際』への抵抗感、経験別にみた『援助交際』に対する態度(%)

援助交際は女子高校生の間ではやっている				
	N	肯定率		
抵抗感（他者・お茶）	高	276	14.1	**
	低	318	25.8	
抵抗感（自分・性交）	高	530	17.7	**
	低	63	41.3	
『援助交際』経験	無	544	66.7	**
	有	30	17.1	
援助交際は人助けになる				
	N	肯定率		
抵抗感（他者・お茶）	高	276	0.0	**
	低	318	2.5	
抵抗感（自分・性交）	高	530	0.9	*
	低	63	4.8	
『援助交際』経験	無	544	0.7	*
	有	30	6.7	
援助交際は金を出す男性の問題である				
	N	肯定率		

(Table 3-4-1-2 続き)

抵抗感（他者・お茶）	高	276	30.1	
	低	318	35.9	
抵抗感（自分・性交）	高	530	32.3	
	低	63	39.7	
『援助交際』経験	無	544	31.8	**
	有	30	63.3	
他の高校生が援助交際をやっていても、自分には関係がない				
	N		肯定率	
抵抗感（他者・お茶）	高	276	48.2	**
	低	318	60.1	
抵抗感（自分・性交）	高	530	54.9	
	低	63	47.6	
『援助交際』経験	無	544	55.9	*
	有	30	33.3	

『援助交際』への抵抗感の低い群、経験のある群は、「援助交際は女子高校生の間ではやっている」への肯定率が有意に高かった。本章第2節でも指摘したように、『援助交際』経験者は友達の体験談を聞く割合が高い。周囲に経験者がいることにより『援助交際』経験者は、「女子高校生の間で流行っている」という感覚を抱く1つの要因となっているだろう。また、『援助交際』を社会問題としてではなく、一種の流行と捉えることが、『援助交際』の抵抗感を低める要因として働いているとも考えられる。

また『援助交際』への抵抗感の低い群、経験のある群は、「援助交際は人助けになる」への肯定率が有意に高かった。『援助』という言葉づかいが「人助け」という認識を生み出しているのだろう。このように『援助交際』を人助けと認識し、合理化することが、『援助交際』への抵抗感を低める1つの要因として働いていると考えられる。

次に「援助交際は金を出す男性の問題である」についてみてみると、経験のある群の方が経験のない群よりも、有意に肯定率が高かった。先に女子高校生だけに焦点をあてられがちな『援助交際』において、男性側の問題も目を向けている者もいると述べた。しかしながら、『援助交際』経験群について考えた場合、男性側だけに責任を転嫁していると捉えた方がいいのかもしれない。

最後に「他の高校生が援助交際をやっていても、自分には関係がない」の項目をみてみ

ると、『援助交際』（他者・お茶）に対して抵抗感の低い群は高い群よりも肯定率が有意に高く、逆に経験のある群はない群よりも肯定率が低かった。この項目は、抵抗感の低い群と経験のある群では、異なる意味を持つのではないだろうか。『援助交際』（他者・お茶）への抵抗感が低い群については、自分以外の女子高校生が『援助交際』をしていても、傍観者的に自分とは切り離して捉えているので抵抗を感じない。一方、『援助交際』経験群については、本章第2節でも述べたように、友達から体験談を聞いたことがある割合が高い。これは「他の高校生=友達」という可能性があることを示すものであり、友達であるから自分には関係がないと思えないということではないだろうか。

本章では、『援助交際』への抵抗感、経験及び『援助交際』に対する態度の関連を見てきた。次章からは、抵抗感及び経験に関する背景要因を詳細に分析していく。

2. 『援助交際』の経験と抵抗感

『援助交際』の経験と『援助交際』に対する抵抗感を検討するために、抵抗感高群と抵抗感低群の割合を χ^2 検定した。Table 3-4-2-1に示すように、いずれの段階においても有意差が見られた。

まず「お茶やデート」を見てみると、経験者群は『援助交際』（他者・お茶）に対する抵抗感においても、『援助交際』（自分・お茶）に対する抵抗感においても、抵抗感低群の割合が抵抗感高群よりも大きい。次に、「セックス（性交）以外の性的行為」をみると、ここでも経験者群は他者、自分が『援助交際』することに対する抵抗感のいずれにおいても、抵抗感低群の割合が抵抗感高群よりも大きい。さらに「セックス（性交）」においても、同様の結果が見られた。以上より、経験者の抵抗感は低いことが分かる。

以上のように、『援助交際』に対する経験の有無は、『援助交際』に対する抵抗感と強く結びついていた。自分の行為だけでなく、他者の『援助交際』行為を許容することも、『援助交際』の経験につながっていることが明らかになった。

なお、年齢別や学年別にも抵抗感群の分析を行ったが、有意な差はみられなかった。

Table 3-4-2-1 『援助交際』（お茶）経験別にみた『援助交際』（お茶）への抵抗感(%)

	抵抗感（他者・お茶）		抵抗感（自分・お茶）	
	高(N=273)	低(N=316)	高(N=378)	低(N=215)
『援助交際』（お茶）経験 無(N=560)	48.6	51.4 **	66.5	33.5 **
（お茶）経験 有(N= 29)	3.5	96.7	10.3	89.7

Table 3-1-5-2 『援助交際』（性交以外）経験別にみた

『援助交際』（性交以外）への抵抗感

	抵抗感（他者・性交以外）		抵抗感（自分・性交以外）	
	高(N=431)	低(N=149)	高(N=496)	低(N= 87)

(Table 3-4-2-1 続き)

『援助交際』	無(N=566)	76.0	24.0 **	86.6	13.4 **
(性交以外) 経験	有(N= 14)	7.1	92.9	21.4	78.6

Table3-1-5-3 『援助交際』(性交) 経験別にみた『援助交際』(性交)への抵抗感

		抵抗感(他者・性交)		抵抗感(自分・性交)	
		高(N=483)	低(N= 92)	高(N=519)	低(N= 61)
『援助交際』	無(N=562)	85.8	14.2 **	91.2	8.8 **
(性交) 経験	有(N= 13)	7.7	92.3	21.4	78.6

第4章 『援助交際』の背景要因

本章では、女子高校生たちの『援助交際』に対する意識や行動の背景要因を探るために、環境的背景、心理的背景、社会意識や行動的背景の3側面から分析する。環境的背景として家庭環境、学校環境、友人環境、経済環境、情報環境を、心理的背景として各種の自己意識、問題行動念慮、非行規範、精神的健康を、社会意識と行動として各種の社会意識、異性交際、性意識や性行動、性風俗との接触を設定した。これらの諸要因について『援助交際』に対する意識や行動との関連から分析する。『援助交際』に対する意識や行動については、基本的に第3章第1節で分析された『援助交際』に対する抵抗感や経験を独立変数として用いた。

第1節 環境的背景

1. 家庭環境

家庭環境が『援助交際』に及ぼす影響を明らかにするため、同居家族、親に対する態度、家庭への感じ方、男女問題に関する親との話し合い、母親の就労状況といった様々な点から『援助交際』に対する抵抗感・経験との関連を検討する。

(1) 同居家族

① 同居家族の実情

父親との同居率、母親との同居率および父母以外の家族の同居率をそれぞれ、Fig. 4-1-1-1、Fig. 4-1-1-2、Fig. 4-1-1-3に示す。父母以外に同居している者はいないと答えたのは約1割で、ほとんどの者は祖父母や兄弟姉妹など父母以外の家族と同居している。祖父母のいずれか1人でも同居していると答えたものは25.2%、異性の兄弟が1人でも同居しているとした者、同性の姉妹が1人でも同居しているとした者はそれぞれ51.0%、44.8%である。兄弟姉妹が1人でも同居していると答えたものは83.2%になる。

Fig. 4-1-1-1 父親との同居有無 (N=600)

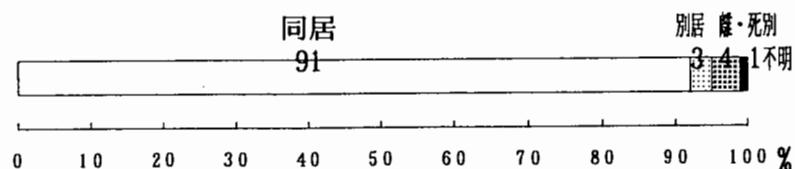


Fig. 4-1-1-2 母親との同居有無 (N=600)

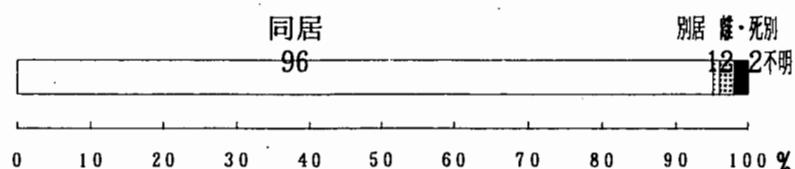
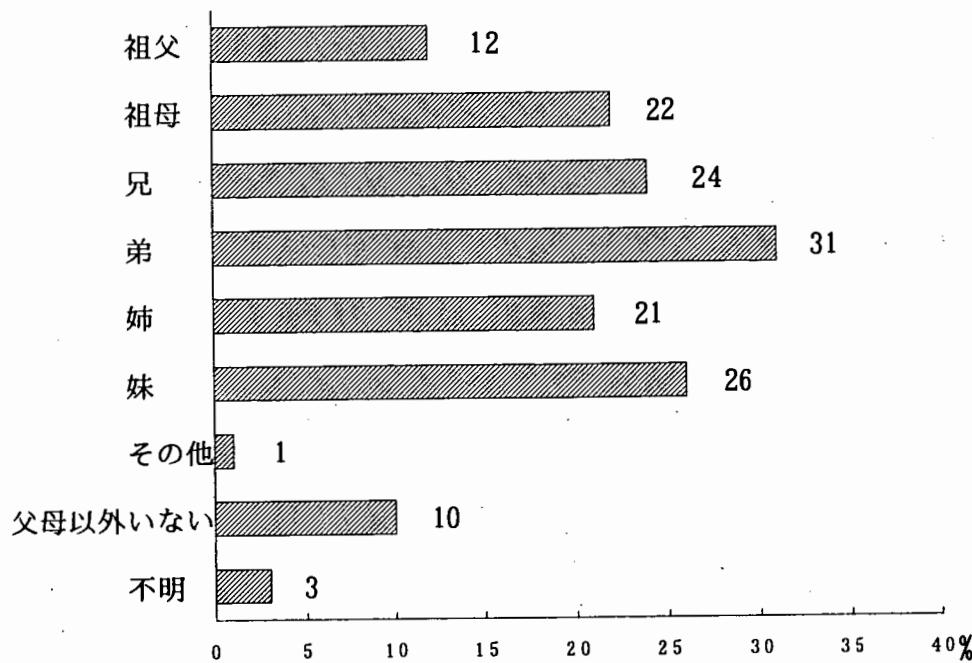


Fig. 4-1-1-3 同居家族 (N=600)



②『援助交際』に対する抵抗感・経験と同居家族

『援助交際』への抵抗感の高低群および経験の有無群（群分けの方法は第II部第3章第1節参照、以下同様）ごとに、父母以外の同居家族のいる率をTable 4-1-1-1に示す。なお祖父母が同居しているとした場合、祖父母のいずれか1人でも同居している者、兄弟、姉妹では異性の兄弟または同性の姉妹が一人でもいる者を示す。

父母以外の家族の同居率は、『援助交際』への抵抗感と経験のいずれの群においても有意差を示さなかった。父母以外の同居家族の有無と『援助交際』との関連は薄いと言える。もし父母以外の家族が『援助交際』への抵抗感や経験に影響を及ぼすとしたら、それは同居または存在の有無それ自体ではなく、今回の調査では取り扱わなかった本人との関係または家庭内の雰囲気への影響であろう。

Table 4-1-1-1 『援助交際』への抵抗感・経験と父母以外の家族の同居率 (%)

		N	祖父母	兄弟	姉妹
抵抗感（他者・お茶）	高	276	26.8	51.1	43.1
	低	318	23.6	50.6	46.2
抵抗感（自分・性交）	高	530	25.7	52.5	44.5
	低	63	19.0	39.7	47.6
『援助交際』経験	無	544	24.8	51.8	44.9
	有	30	40.0	43.3	50.0

(2)親に対する態度

① 親への愛情尺度

親への愛情尺度の基礎統計量をTable 4-1-1-2に示す。この尺度は得点が高いほど、親との愛情・信頼関係を本人が高く認知していることを示す。なお可能な特徴範囲は13~26点である。この尺度に含まれる父親に関する項目と母親に関する項目は全て対応している。これらの項目が1つの因子に現れたことから、父親に対して愛情を感じている者は母親に対しても同様の傾向があり、それが親（両親）に対する愛情・信頼につながっていると考えられる。

Table 4-1-1-2 親への愛情尺度の基礎統計量

	N	平均	S D
親への愛情	557	18.10	3.61

②『援助交際』に対する抵抗感・経験と親への愛情

『援助交際』と親への愛情との関連を検討するため、『援助交際』への抵抗感の高低および経験の有無によって群分けをし、親への愛情尺度得点に対してt検定を行った。その結果をTable 4-1-1-3に示す。3つの群分け全てにおいて有意差が見られた。

『援助交際』の抵抗感の低い者、『援助交際』の経験のある者は、抵抗感の高い者、経験のない者に比べ、親への愛情・信頼が低いと言える。親との愛情・信頼関係を本人がどのように認知しているかは『援助交際』に対して抵抗感を持つこと、実際に行うことの両方に関わってくることが分かる。

Table 4-1-1-3 『援助交際』への抵抗感・経験と親への愛情

	N	親への愛情			t値
		平均	S D		
抵抗感（他者・お茶）	高	257	18.77	3.69	4.01**
	低	295	17.55	3.46	
抵抗感（自分・性交）	高	494	18.35	3.61	5.48**
	低	57	16.07	2.89	
『援助交際』経験	無	510	18.17	3.62	2.08*
	有	25	16.64	3.05	

③親に対する感じ方

高校生は自身の親についてどのように感じているのであろうか。父親に対する感じ方、母親に対する感じ方、親（両親）に対する感じ方をそれぞれ見ていく（各項目の肯定率に関しては第II部第2章第11節のFig. 2-11-1-1、Fig. 2-11-1-2、Fig. 2-11-1-3を参照）。

父親に対しては「父は私に対して暖かい」「父は頼りがいがある」「父を尊敬している」といった好意的項目の肯定率が比較的高い。「父は私と顔を合わせることが少ない」とする者は19.7%いるが「父は家の中で存在感がない」とする者は5.8%と低い。「父は私の気持ちをわかろうとしている」「父は何かにつけて私の行動に口をはさむ」「父は何かにつけて自分の考えを押し付けようとする」がそれぞれ20%を超え、それが好意的に受け止められているにせよそうでないにせよ、何らかの形で娘と積極的に関わろうとする父親は少なくないと言える。しかし母親と比べて「私の気持ちをわかろうとしている」が著しく低いのに対し「何かにつけて自分の考えを押し付けようとする」が母親を上回り、母親に比べその接し方は否定的に受け止められている。家族の中の役割としては「父はよく家事を手伝っている」が24.0%ある一方、「父は自分の欲求をおさえて家族のためにつくしている」が母親より低く「家では、重要なことは父が決める」は反対に母親を上回っており、伝統的な家族が今でも多いと考えられる。

母親に関しては「母は私に対して暖かい」「母は頼りになる」「母は私の気持ちについてわかろうとしている」「母は何かにつけて私の行動に口をはさむ」「母を尊敬している」などの肯定率が高く、父親と比べ娘との密接な関係が推定される。これらの項目に比べ「母は何かにつけて自分の考えを押し付けようとする」は16.5%とそれほど多くなく、その接し方も好意的に受け止められている。「母は私と顔を合わせることが少ない」「母は家の中で存在感がない」はそれぞれ1.8、0.7%と非常に少ない。しかし家庭における役割としては「家では、重要なことは母が決める」は15.3%と低く「母は自分の欲求をおさえて家族のためにつくしている」とする者が37.3%と高い。

親に対しては「親から私は充分愛されていると思う」「両親の仲はよその家庭にくらべてよい」「親は異性との交際に理解がある」といった項目の肯定率が比較的高い。「親に本気でしかられたことがない」「親にしかられてもこわくない」「親は私の気分を害さないようになっている」「親は私が怒ることを恐れている」「親は私が欲しいものはすべて買ってくれる」といった項目の肯定率は低く、子どもを叱れない親、子どもに気を遣う親というのは多くない。現代の高校生にとっても親の存在は大きいことが分かる。「親は高価なブランド物は買ってくれない」は31.0%であるが「親は私が欲しいものはすべて買ってくれる」の3.2%と比べて考えても、選択しなかった者の親がブランド物を買ってくれるわけではなく、この項目を選択しなかった者の中にはブランド物に興味がない、または買って欲しいと頼んだことのない者がふくまれていると考えられる。「親に高価なものを買って欲しいとねだったことはない」は27.8%である。「親に『女らしくしなさい』と言われる」は25.5%であり、伝統的な価値観を持った親は今でも少なくない。

④『援助交際』に対する抵抗感・経験と親に対する感じ方

親への愛情尺度に用いられなかった親への態度に関する各項目の中から、ここでは『援助交際』への抵抗感の高低、経験の有無による群分けにおいていずれか1つでも有意差が

見られた項目について特に述べる。それらの項目における、各群ごとの肯定率をTable 4-1-1-4に示す。

父親に関して、「父は何かにつけて自分の考えを押し付けようとする」は全ての群分けにおいて有意差が見られた。『援助交際』への抵抗感の低い者、経験のある者ほど父親が自分の考えを押し付けようとしている者が多い。

母親に関して、「母は何かにつけて私の行動に口をはさむ」と「母は何かにつけて自分の考えを押し付けようとする」がともに『援助交際』（他者・お茶）で有意差を示した。他者の行う『援助交際』に対して抵抗感の低い者は、より母親が干渉的であるとするものが多い。

これらの項目の選択は本人の主観によるものであるため、親の行動それ自体が『援助交際』の抵抗感・経験と関わっているのか、または抵抗感の低い者、経験のある者はより親の干渉に不満を感じやすいのかは分からぬ。しかし、特に「父は何かにつけて自分の考えを押し付けようとする」は抵抗感・経験の全てに関わっており、子どもから見て一方的に考え方を押し付ける親というは『援助交際』を促す要因の1つになり得ると考えられる。

「父は私と顔を合わせることが少ない」は『援助交際』（他者・お茶）への抵抗感においてのみ有意差を示した。他者の行う『援助交際』に対して抵抗感の低い者はより父親と顔を合わせることが少ないと感じている。いわゆる「父親不在」が『援助交際』において悪影響を及ぼしていると考えられるが、『援助交際』（自分・性交）への抵抗感と経験には差が見られず、今回の調査のみでは『援助交際』との関連を明確に述べることはできない。

「親は私が欲しいものはすべて買ってくれる」は経験の有無において「親は高価なブランド物は買ってくれない」は『援助交際』（他者・お茶）への抵抗感においてそれぞれ有意差を示した。『援助交際』の経験のある者に親が欲しいものは全て買ってくれるとする者が多く、他者の行う『援助交際』に対して抵抗感の低い者に親は高価なブランド物は買ってくれないとする者が多い。これらは逆の傾向を示している。しかし『援助交際』の経験と直接関わっているのは「親は私が欲しいものはすべて買ってくれる」であり、親のそのような態度は『援助交際』を抑制するどころか逆効果をもたらしていると言える。

最後に「親に『女らしくしなさい』と言われる」が『援助交際』（他者・お茶）において有意差を示した。他者の行う『援助交際』において抵抗感の低い者に親に「女らしくしなさい」と言われるとする者が多い。「女らしくしなさい」というのは、いわば既存の価値観の押し付けであるとも考えられ、子どもに不満を感じさせるものなのかもしれない。

Table 4-1-1-4 『援助交際』への抵抗感・経験と親への感じ方

	N	「父・考え押し付ける」「父・顔を合わせる事少ない」			
		肯定率	χ^2 値	肯定率	χ^2 値
抵抗感（他者・お茶）	高	259	19.3	5.86*	15.8
	低	303	28.1		24.8

(Table 4-1-1-4 続き)

抵抗感 (自分・性交)	高	503	22.5	6.36*	20.9	0.04
	低	59	37.3		22.0	
『援助交際』経験	無	544	22.6	9.90**	21.7	0.00
	有	30	48.3		20.7	
			「母・口をはさむ」 「母・考え押し付ける」			
	N		肯定率	χ^2 値	肯定率	χ^2 値
抵抗感 (他者・お茶)	高	268	35.8	4.80*	12.7	6.65**
	低	308	44.8		20.8	
抵抗感 (自分・性交)	高	514	40.7	0.09	17.1	0.03
	低	61	42.6		18.0	
『援助交際』経験	無	533	40.5	0.33	17.3	0.25
	有	26	46.2		23.1	
			「欲しいものは全て買ってくれる」		「ブランド物買ってくれない」	
	N		肯定率	χ^2 値	肯定率	χ^2 値
抵抗感 (他者・お茶)	高	276	2.5	0.39	26.8	4.86*
	低	318	3.8		35.2	
抵抗感 (自分・性交)	高	530	2.8	1.26	30.0	1.73
	低	63	6.3		38.1	
『援助交際』経験	無	544	2.8	6.91**	30.7	0.75
	有	30	13.3		40.0	
			「らしくしないと言われる」			
	N		肯定率	χ^2 値		
抵抗感 (他者・お茶)	高	276	21.7	4.35*		
	低	318	29.2			
抵抗感 (自分・性交)	高	530	26.0	1.46		
	低	63	19.0			

(Table 4-1-1-4 続き)

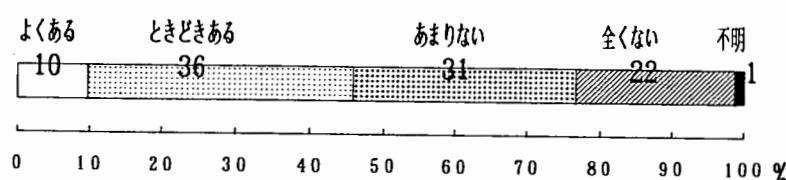
『援助交際』経験	無	544	25.7	0.50
	有	30	33.3	

(3)家庭への感じ方

① 家庭への感じ方

「この家に生まれてイヤだと思ったことがある」かどうかについて、「よくある」「ときどきある」「あまりない」「全くない」の4件法で回答を求めた。その回答頻度をFig. 4-1-1-4に示す。半数近くの者が「よくある」「ときどきある」と回答しており、家庭に不満を感じているものは少なくないことが分かる。

Fig. 4-1-1-4 家庭がイヤだと思ったこと (N=600)



② 『援助交際』に対する抵抗感・経験と家庭への感じ方

『援助交際』への抵抗感の高低、経験の有無の各群ごとに、家庭への感じ方の回答頻度をTable 4-1-1-5に示す。家庭への感じ方はこれらの全ての群分けにおいて有意差を示した。『援助交際』への抵抗感の低い者、経験のある者ほど、自身の家庭に不満を持っている者が多いことが分かる。青年期の問題行動の原因の1つとして家庭への不満があげられるることは多い。今回の結果はそれを裏付けるものと言える。

Table 4-1-1-5 『援助交際』への抵抗感・経験と家庭への感じ方

			N 「よくある」「ときどき」「あまり」「全くない」 χ^2 値			ある	ない
			ある	ない	値		
抵抗感（他者・お茶）	高	271	10.0	26.9	33.6	29.5	27.03**
	低	316	9.5	45.6	29.1	15.8	
抵抗感（自分・性交）	高	524	9.2	35.1	32.3	23.5	10.77*
	低	63	15.9	49.2	23.8	11.1	
『援助交際』経験	無	541	9.8	34.9	32.3	22.9	12.37**
	有	30	13.3	63.3	10.0	13.3	

(4)男女問題に関する親との話し合い

① 男女問題に関する親との話し合い

男女平等関心尺度の中から、特に親との会話に関する2項目「親と『女性の自立』について話し合うことがある」「親と『異性との交際』について話し合うことがある」について見ると、「『女性の自立』について話し合う」が9.2%、「『異性との交際』について話し合う」が17.5%と両項目とも肯定率は高くない（第II部第2章第10節参照）。高校生の中で、『援助交際』に関する諸問題について親と自由に話し合える状況にある者は少ないと言える。

②『援助交際』に対する抵抗感・経験と男女問題に関する親との話し合い

『援助交際』への抵抗感の高低、経験の有無による各群ごとに「親と『女性の自立』について話し合うことがある」「親と『異性との交際』について話し合うことがある」のそれぞれの肯定率をTable 4-1-1-6に示す。両項目とも、いずれの群分けにおいても有意差は見られなかった。女性の自立や異性交際にに関する親との話し合いは、『援助交際』に直接影響を及ぼしていないことが分かる。

Table 4-1-1-6 『援助交際』への抵抗感・経験と男女問題に関する親との話し合い(%)

		N 「女性の自立」「異性との交際」		
		「女性の自立」	「異性との交際」	
抵抗感（他者・お茶）	高	276	11.6	17.0
	低	318	7.2	17.9
抵抗感（自分・性交）	高	530	9.6	18.1
	低	63	4.8	14.3
『援助交際』経験	無	544	9.6	18.0
	有	30	6.7	10.0

(5)親の属性

① 親の属性

父親の学歴、母親の学歴、母親の就労状況をそれぞれ、Fig. 4-1-1-5、Fig. 4-1-1-6、Fig. 4-1-1-7に示す。

Fig. 4-1-1-5 父親の学歴 (N=600)

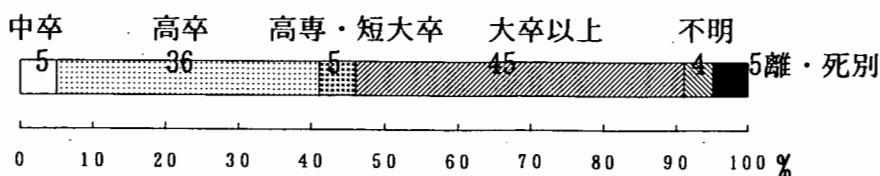


Fig. 4-1-1-6 母親の学歴 (N=600)

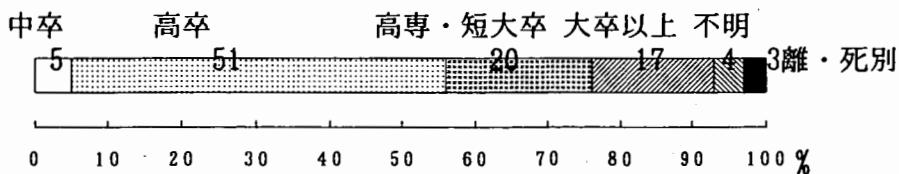
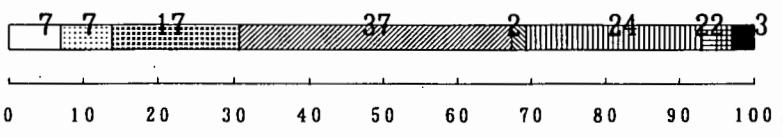


Fig. 4-1-1-7 母親の就業状況 (N=600)



- 家で店や会社をやっている 家の仕事の手伝いをしている
- フルタイムで勤めに出てている パートタイムで勤めに出ている
- 内職をしている 専業主婦
- その他 不明
- 離・死別

②『援助交際』に対する抵抗感・経験と母親の就労状況

『援助交際』への抵抗感の高低、経験の有無による各群ごとの母親の就労状況をTable 4-1-1-7に示す。

Table 4-1-1-7 『援助交際』への抵抗感・経験と母親の就労状況(%)

	N	家で仕事	フルタイム	パートタイム	専業主婦	χ^2 値	
抵抗感（他者・お茶）	高	254	17.3	16.5	38.6	27.6	1.71
	低	298	15.8	19.1	41.3	23.8	
抵抗感（自分・性交）	高	493	16.4	17.0	40.6	26.0	3.08
	低	58	20.7	24.1	34.5	20.7	
『援助交際』経験	無	510	16.5	18.6	39.8	25.1	2.65
	有	26	26.9	11.5	42.3	19.2	

「家で仕事」は「家で店や会社をやっている」「家の仕事の手伝いをしている」「内職をしている」の3つをまとめたものである。なお分析から「その他」は除いた。母親の就労状況は、いずれの群分けにおいても有意差を示さなかった。『援助交際』と母親の就労状況は直接関連がないと言える。

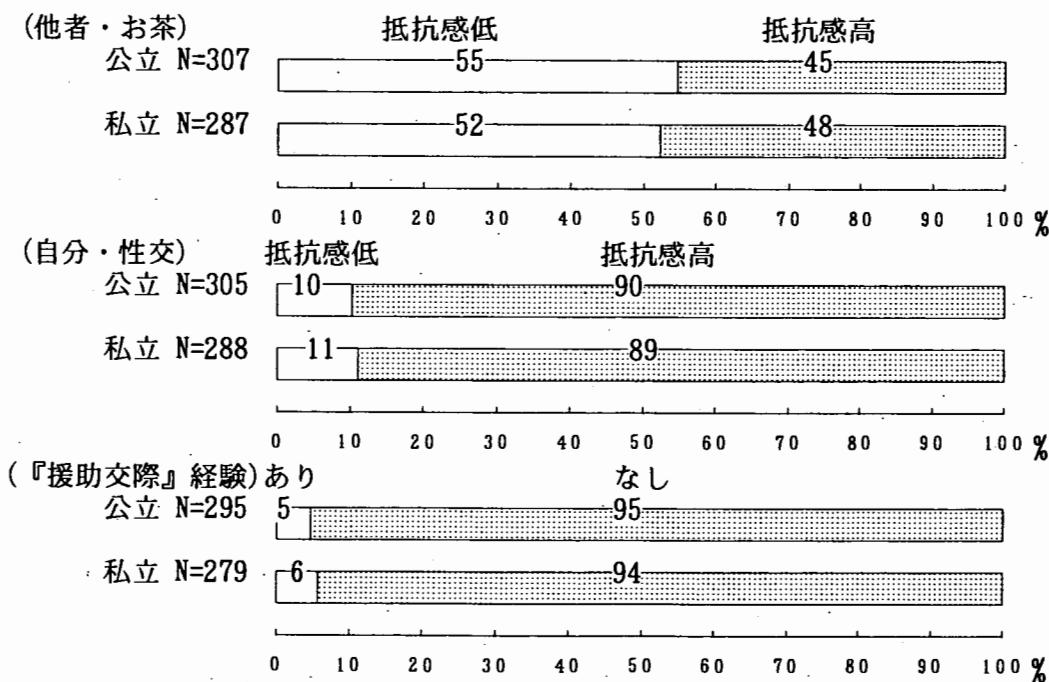
2. 学校環境

最近、中高校生による犯罪・問題行動が社会問題としてクローズアップされ、改めて学校のあり方が問われている。実際、女子高校生に対して学校はどのような影響を及ぼしているのであろうか。学校属性や学校への感じ方、特に学校を楽しいと感じているかどうかという点から『援助交際』に対する抵抗感や経験との関連を検討する。さらに、学校環境と関係があると思われる授業やホームルームでの『援助交際』や「異性交際」等についての話し合いと『援助交際』に対する抵抗感・経験との関連について検討する。

(1) 『援助交際』に対する抵抗感・経験と学校属性および学年

学校属性、学年別の『援助交際』に対する抵抗感の高低と経験の有無をFig. 4-1-2-1～Fig. 4-1-2-4に示す。

Fig. 4-1-2-1 『援助交際』の抵抗感や経験×公立・私立



公立・私立、男女共学・女子校による区分では、『援助交際』への抵抗感・経験のいずれの群分けにおいても有意な差は見られなかった。学校が公立であるか私立であるか、また男女共学であるか女子校であるかということは『援助交際』と直接的な関連がないと言える。

学年では、経験のみ有意な差が見られた ($\chi^2=12.70$)。抵抗感に差がないことから、これは『援助交際』を経験する機会が高校に在籍する期間が長いほど多くなるためであろう。またこの結果から、大半の者は高校に入ってから『援助交際』を経験すると推定され

Fig. 4-1-2-2 『援助交際』の抵抗感や経験×学校種

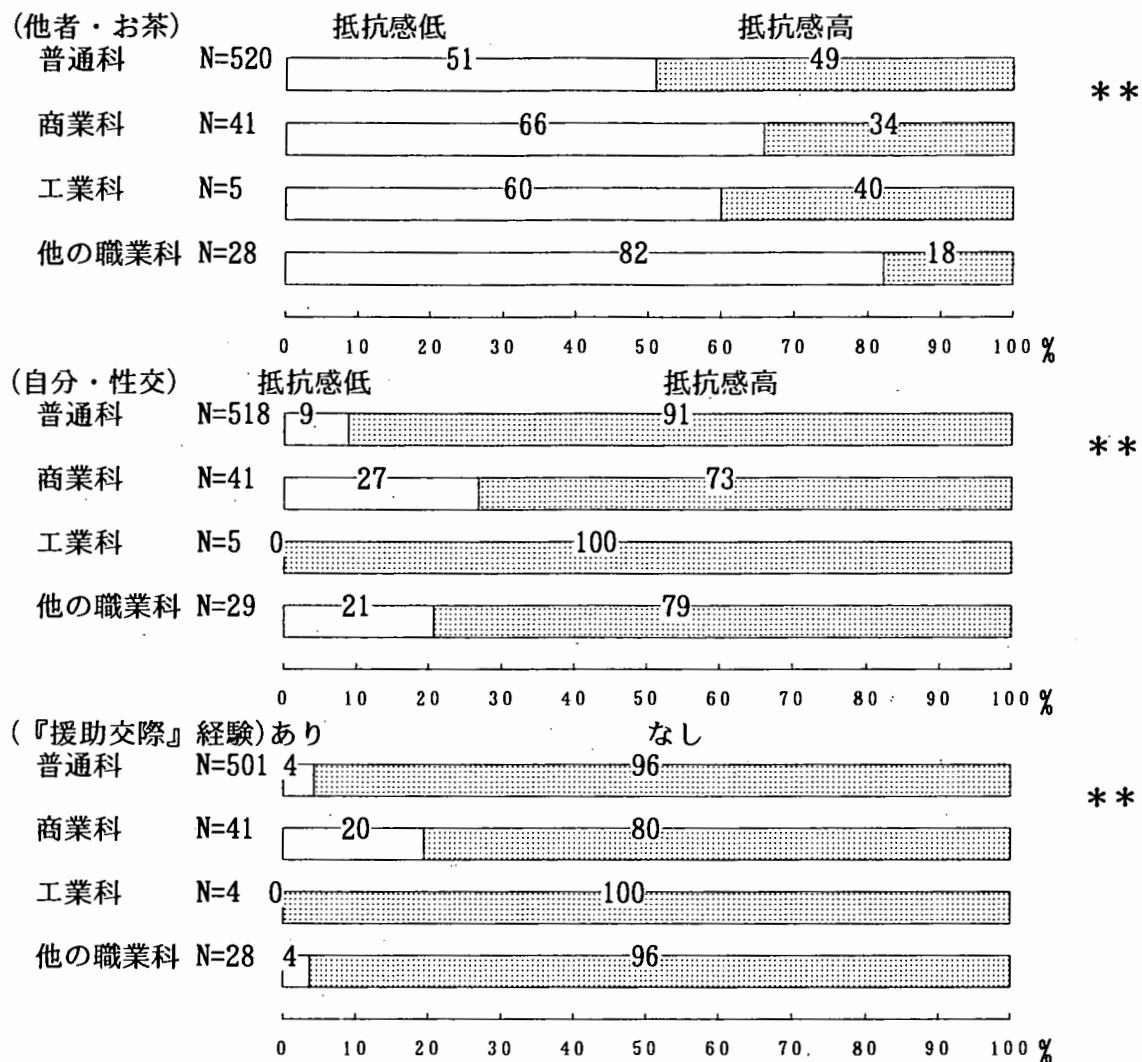


Fig. 4-1-2-3 『援助交際』の抵抗感や経験×共学・女子校

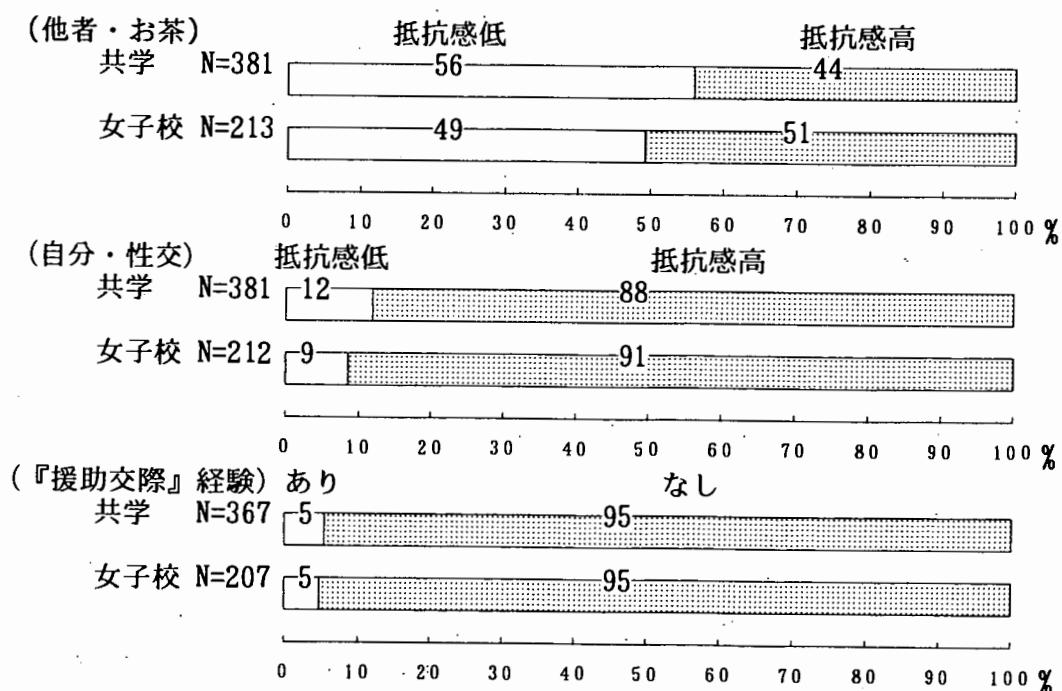
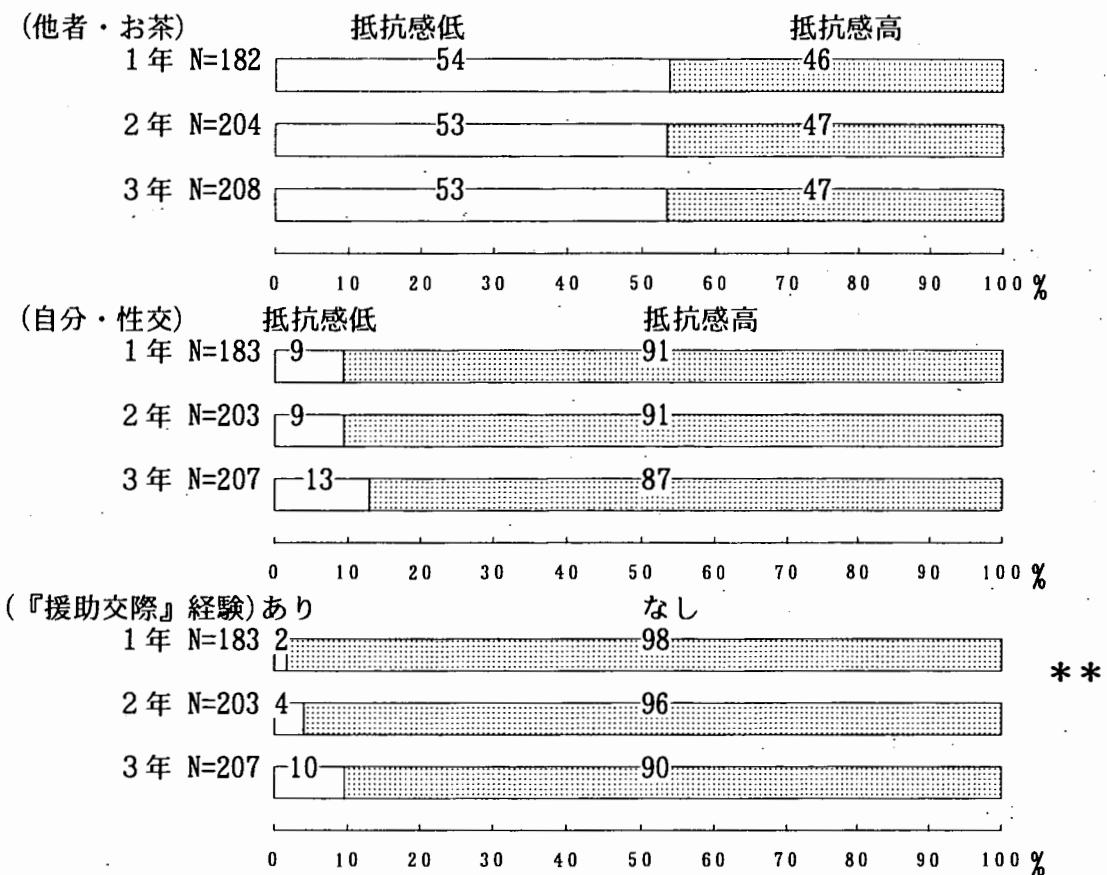


Fig. 4-1-2-4 『援助交際』の抵抗感や経験×学年



る。

学校種別では、全ての群分けにおいて有意な差が見られた。抵抗感（他者・お茶）においては「その他の職業科」に ($\chi^2=13.18$) 、抵抗感（自分・性交）では「商業科」に抵抗感の低い者の割合が高い ($\chi^2=16.69$) 。経験では「商業科」に経験ありとする者の割合が高い ($\chi^2=18.35$) 。

(2)学校に対する感じ方

① 学校に対する感じ方

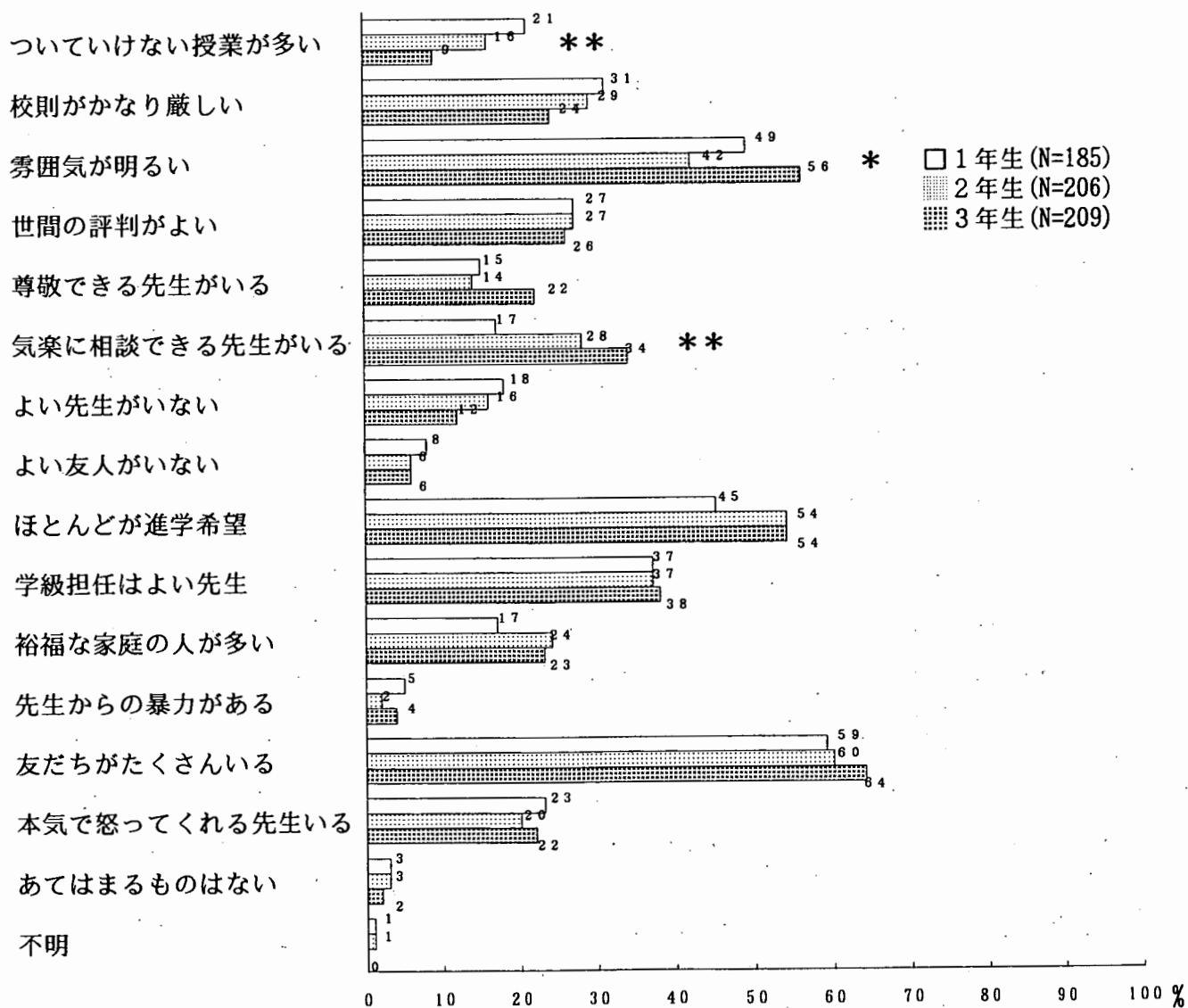
学校に対する感じ方を見るため、「ついていけない授業が多い」「校則がかなり厳しい」「雰囲気（ふんいき）が明るい」「世間の評判がよい」「尊敬できる先生がいる」「気楽に相談できる先生がいる」「よい先生がない」「よい友人がいない」「私の高校はほとんどが進学希望である」「学級担任はよい先生である」「私の高校には裕福な家庭の人が多い」「先生からの暴力（体罰）がある」「友達がたくさんいる」「本気で怒って（おこって）くれる先生がいる」の14項目について、自身にあてはまるものにいくつでも○をつける多重回答形式で質問した。Fig. 4-1-2-5に各項目の肯定率を学年別に示す。

回答者全体では「友達がたくさんいる」の肯定率は61.0%と高く「よい友人がいない」は6.5%と少ない。学校での友人関係に満足している者が多いと言える。「雰囲気が明るい」も49.0%と高い。教師に対しては「尊敬できる先生がいる」「気楽に相談できる先生がいる」「学級担任はよい先生である」「本気で怒ってくれる先生がいる」といった項目

が「よい先生がいない」を上回っており、教師に対して好意的な者の方が多い。しかし「先生からの暴力（体罰）がある」を選択した者が3.7%おり、数は少ないが注目すべき問題である。「ついていけない授業が多い」は15.0%、「校則がかなり厳しい」は28.0%と少なくなく、学校の授業や制度に対する不満は高いと思われる。学校に対するイメージとしては「世間の評判がよい」「私の高校はほとんどが進学希望である」「私の高校には裕福な家庭の人が多い」にそれぞれ26.3、51.3、21.3%の者が回答しており、これらが『援助交際』とどのように関わってくるかは興味深い。

学校への感じ方の中で学年間で有意差が見られたのは「ついていけない授業が多い」($\chi^2=10.35$) 「雰囲気が明るい」 ($\chi^2=7.31$) 「気楽に相談できる先生がいる」 ($\chi^2=15.87$) の3項目である。3年生に比べ1・2年生に授業についていけないと感じている者が多い。受験勉強に重点が置かれる3年生と異なり1・2年生では授業中心であるためであろうか。また3年生では、学校によっては授業のいくつかを選択できるためであるかも

Fig. 4-1-2-5 学校に対する感じ方(学年別)



しれない。「雰囲気が明るい」は2年生の選択率が低い。2年生は学校にも慣れ、また受験の不安もまだ低いはずである。なぜこのような結果が得られたのかについては更なる分析が必要である。「気楽に相談できる先生がいる」は学年が高くなるにつれ肯定率が高く、これはより多くの教師と接する機会ができるためであると考えられる。

②『援助交際』に対する抵抗感・経験と学校への感じ方

『援助交際』への抵抗感の高低、経験の有無による群分けを行い、学校への感じ方との関連を検討した。いずれかの群分けにおいて1つでも有意差がみられたものをTable 4-1-2-1に示す。

「ついていけない授業が多い」は、『援助交際』の経験においてのみ有意差を示した。経験のある者はない者に比べ、ついていけない授業があると感じている者が多い。学校への感じ方に関して、経験による群分けにおいて有意差を示したのはこの項目のみである。このことは、学校生活における授業の重要性の高さを示していると言える。

「雰囲気が明るい」と「友達がたくさんいる」はともに『援助交際』（自分・性交）への抵抗感においてのみ有意差を示した。自身の『援助交際』に対して抵抗感の低い者は抵抗感の高い者に比べて、雰囲気が明るいと感じている者が少なく、友達がたくさんいるとする者も少ない。

「私の高校はほとんどが進学希望である」は『援助交際』（他者・お茶）への抵抗感と『援助交際』（自分・性交）への抵抗感の両方において有意差が見られた。いずれも抵抗感の低い者は、自身の高校に対して進学希望者が多いとする者が少ない。

「学級担任はよい先生である」では『援助交際』（他者・お茶）においてのみ有意差が見られた。他者の行う『援助交際』に対して抵抗感の低い者は学級担任をよい先生だと思うものが少ない。教師に関する項目で有意差が見られたものはこの項目のみであり、学級担任の存在が特に重要であると言える。

「よい先生がいない」「先生からの暴力（体罰）がある」はいずれの群分けにおいても有意差が見られず、教師への不満と『援助交際』との関連は低い。「尊敬できる先生がいる」「気楽に相談できる先生がいる」「本気で怒ってくれる先生がいる」も同様に関連が見られない。教師の存在は、『援助交際』の抑制に結びついていないのだろうか。「世間の評判がよい」「私の高校には裕福な家庭の人が多い」も『援助交際』との関連が見られない。学校の評判や学校に裕福な人が多いかどうかは、『援助交際』と関連がないと言えよう。

Table 4-1-2-1 『援助交際』への抵抗感・経験と学校への感じ方

抵抗感（他者・お茶）	N	「授業についていけない」「雰囲気が明るい」			
		肯定率	χ^2 値	肯定率	χ^2 値
抵抗感（他者・お茶）	高	276	12.3	2.87	52.9
	低	318	17.3		45.3

(Table 4-1-2-1 続き)

抵抗感（自分・性交）	高	530	14.5	1.63	50.8	5.65*
	低	63	20.6		34.9	

『援助交際』経験	無	544	14.0	5.79*	50.2	2.08
	有	30	30.0		36.7	

	N	「ほとんどが進学希望」「学級担任はよい先生」		肯定率	χ^2 値	肯定率	χ^2 値
		肯定率	χ^2 値				
抵抗感（他者・お茶）	高	276	58.3	9.60**	43.1	7.71**	
	低	318	45.6				
抵抗感（自分・性交）	高	530	53.6	12.37**	38.5	1.67	
	低	63	30.2				
『援助交際』経験	無	544	52.9	1.91	37.9	0.75	
	有	30	40.0				

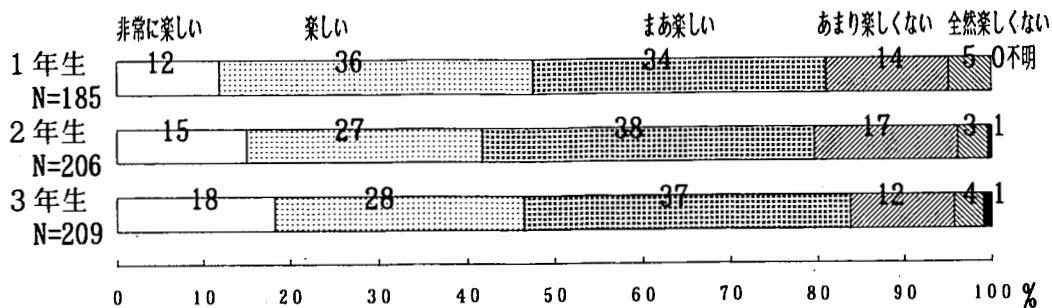
	N	「友達がたくさんいる」		肯定率	χ^2 値
		肯定率	χ^2 値		
抵抗感（他者・お茶）	高	276	63.0	1.11	
	低	318	58.8		
抵抗感（自分・性交）	高	530	62.1	3.91*	
	低	63	49.2		
『援助交際』経験	無	544	61.6	0.04	
	有	30	63.3		

③学校の楽しさ

学校の楽しさについて「非常に楽しい」「楽しい」「まあ楽しい」「あまり楽しくない」「全然楽しくない」の5件法で回答を求めた。Fig. 4-1-2-6は、学校の楽しさに対する回答頻度を学年別に示したものである。回答者全体では「非常に楽しい」「楽しい」「まあ楽しい」を合わせると81.5%になる。ほとんどの者が学校に行くのを楽しいと思っているが「まあ楽しい」という消極的な回答が36.3%と最も多く、学校に何らかの不満を持っている者、または自身にとって学校があまり重要でない者が多いと考えられる。「あまり楽しくない」「全然楽しくない」も18.0%と決して少なくない。なお学年間の有意差

は見られなかった。

Fig. 4-1-2-6 学校の楽しさ



④『援助交際』に対する抵抗感・経験と学校の楽しさ

『援助交際』への抵抗感の高低、経験の有無による群ごとの学校の楽しさの回答頻度をTable 4-1-2-2に示す。学校の楽しさはいずれの群においても有意差が見られなかった。学校の楽しさと『援助交際』は直接関連がないと言える。学校を楽しいと感じることが『援助交際』を抑制する効果を持っていないと考えられる。

Table 4-1-2-2 『援助交際』への抵抗感・経験と学校の楽しさ

	N	「非常に楽しい」	「楽しい」	「まあ楽しい」	「あまり楽しくない」	「全然楽しくない」	χ^2 値	
抵抗感（他者・お茶）	高	275	17.8	29.8	37.8	10.9	3.6	6.25
	低	316	13.3	30.7	35.1	17.1	3.8	
抵抗感（自分・性交）	高	527	15.4	31.5	36.4	13.1	3.6	9.05
	低	63	15.9	19.0	34.9	25.4	4.8	
『援助交際』経験	無	541	15.2	30.7	36.6	13.7	3.9	4.62
	有	30	20.0	16.7	43.3	20.0	0.0	

(3)授業やホームルームでの話し合い

授業やホームルームでの話し合いは、女子高校生たちの『援助交際』に対する抵抗感や経験にどのように影響を及ぼしているのだろうか。今回の調査では、次の3項目が質問されている。

- 「授業やホームルームで異性交際について話し合ったことがある」
 - 「授業やホームルームで『援助交際』について話し合ったことがある」
 - 「教師から女らしくしなさいと言われたことがある」
- これらの項目はいずれも、男女平等関心尺度の作成（第2章10節）に際して除かれたものである。回答頻度については、Fig. 2-10-2-1に示されている。

①「授業やホームルームで異性交際について話し合った」

『援助交際』との関連を分析するために、『援助交際』に対する抵抗感や経験による群分けに基づいて、「授業やホームルームで異性交際について話し合った」の肯定比率を比較した。Table 4-1-2-3は結果を示したものであるが、いずれの場合にも、有意な関連は示されなかった。

Table4-1-2-3 『援助交際』抵抗感・経験別「授業などで異性交際を話し合った」肯定率(%)

	N	肯定率
抵抗感（他者・お茶）	高 276	11.6
	低 318	9.8
抵抗感（自分・性交）	高 530	11.3
	低 63	4.8
『援助交際』経験	無 544	13.3
	有 30	10.7

次に、『援助交際』に対する否定・不安との関連を見てみよう。「授業などで異性交際について話し合った」ことを選択したものと選択しなかったものについて、『援助交際』否定・不安尺度の得点の差を分析した(Table 4-1-2-4)。

Table4-1-2-4 「授業などで異性交際について話し合った」と『援助交際』否定・不安

	『援助交際』否定・不安尺度			
	N	平均	S D	t 値
「授業などで異性交際について話し合った」選択	63	14.11	2.29	2.81 **
非選択	537	13.24	2.54	

結果は、話し合ったことがある群の方が高い値を示している。抵抗感との関係が見られなかったことを合わせて考えてみると、授業等で「異性交際」を話し合うことは、『援助交際』に対する不安感を喚起させる効果はあるが、抵抗感や経験には作用していないのかかもしれない。

②「授業などで『援助交際』について話し合った」

『援助交際』との関連を分析するために、『援助交際』に対する抵抗感や経験による群分別に基づいて、「授業やホームルームで『援助交際』について話し合った」の肯定比率

を比較した(Table 4-1-2-5)。

Table 4-1-2-5 『援助交際』抵抗感・経験別「授業などで援助交際を話し合った」肯定率(%)

	N	肯定率
抵抗感（他者・お茶）	高	276 8.70
	低	318 10.69
抵抗感（自分・性交）	高	530 10.00
	低	63 6.35
『援助交際』経験	無	544 9.56
	有	30 13.33

ここでも、『援助交際』に対する抵抗感と有意な差は示されない。授業などで『援助交際』について話し合うことは、『援助交際』に対する抵抗感に影響を及ぼさないのだろうか。

次に、『援助交際』に対する否定・不安との関連を見るために、「授業などで援助交際について話し合った」ことを選択したものと選択しなかったものについて、『援助交際』否定・不安尺度の得点の差を分析した(Table 4-1-2-6)。

Table 4-1-2-6 「授業などで援助交際について話し合った」と『援助交際』否定・不安

	『援助交際』否定・不安尺度			
	N	平均	SD	t 値
「授業などで援助交際について話し合った」選択	58	14.22	2.16	3.23 **
非選択	542	13.24	2.54	

授業やホームルームでの『援助交際』についての話し合いは、否定・不安の高さに関連が見られる。話し合ったことがある群の方が『援助交際』否定・不安が高い。ここでも、「異性交際」についての話し合いと同様に、不安の喚起に作用していると考えられる。

どうやら、授業やホームルームで「異性交際」や『援助交際』について話し合うことは、不安感を高める作用は及ぼすものの、『援助交際』に対する抵抗感を高めたり、経験を低めさせる上で効果的な力を発揮していないと言えよう。もちろん、教師がどのような姿勢で話すか、どのような内容が話されるのかを検討しなければ、早急に結論づけるわけにはいかない。さらに、回答する側の姿勢や態度にも影響がある。話し合ったことがあると回

答したものは、男女交際や『援助交際』に関心が高かったから印象に残っていたのかもしれない。逆に、関心が無ければ印象に残らず、話し合ったことがあると回答しないかもしれない。いずれにせよ、今回の結果からは学校に『援助交際』の抑止力があるとはいえない。

③「教師から女らしくしなさいと言われた」

『援助交際』との関連を分析するために、『援助交際』に対する抵抗感や経験による群別に基づいて、「教師から女らしくしなさいと言われた」の肯定率を比較した(Table 4-1-2-7)。

Table 4-1-2-7 『援助交際』抵抗感・経験別「教師から女らしくしなさい」肯定率(%)

	N	肯定率
抵抗感（他者・お茶）	高 276	13.41 *
	低 318	19.81
抵抗感（自分・性交）	高 530	16.23
	低 63	20.63
『援助交際』経験	無 544	20.00
	有 30	17.10

ここでは、『援助交際』（他者・お茶）に対する抵抗感と有意差が示されている。しかし、抵抗感の低いものの方が言われたことがある割合が多い。そもそも学校や学級の雰囲気が『援助交際』に対する抵抗感が低かったから、こうした教師の発言を生み出したのかもしれない。さらに、「女らしくしなさい」という発言そのものに対する反抗が『援助交際』に対する抵抗感の低さと結びついたのかもしれない。いずれにせよ、今日の学校教育の中で『援助交際』に対して効果的な抑止力を発揮するためには、検討しなければならない課題が多いと言えよう。

『援助交際』に対する否定・不安との関連では、有意差が示されなかった(Table 4-1-2-8)。

Table 4-1-2-8 「教師から女らしくしなさいと言われた」と『援助交際』否定・不安

	『援助交際』否定・不安尺度			
	N	平均	SD	t 値
「授業などで援助交際について話し合った」選択	100	13.64	2.40	1.38

(Table 4-1-2-8 続き)

非選択 500 13.27 2.55

(4)『援助交際』に対する抵抗感・経験と学歴社会や受験戦争に対する考え方

学歴社会や受験戦争に対する諦めを示す2項目「よい学校を出ないと、よい生活ができない世の中である」「受験戦争は、今の世の中ではしかたのないことだと思う」と『援助交際』への抵抗感・経験との関連を検討した。抵抗感の高低と経験の有無による群分け別に各項目の肯定率をTable 4-1-2-9 に示す。

検定の結果、いずれの群分けにおいても有意差は見られなかった。『援助交際』と学歴社会や受験戦争への考え方には直接的な関連はないと考えられる。

Table 4-1-2-9 『援助交際』への抵抗感・経験と学歴社会や受験戦争に対する考え方(%)

	N	「よい学校を出ないと、よい生活ができない」	「受験戦争は仕方がない」
抵抗感（他者・お茶）	高	276	20.3
	低	318	23.3
抵抗感（自分・性交）	高	530	21.3
	低	63	25.4
『援助交際』経験	無	544	21.3
	有	30	33.3

3. 友人環境

(1)『援助交際』に対する抵抗感・経験と友人関係に関する尺度との関連

第II部第2章6節において作成した友人関係に関する3尺度（友人同調尺度・友人非干渉尺度・友人自己開示尺度）と、『援助交際』の抵抗感・経験との関連を検討した。

①友人同調尺度と友人非干渉尺度

まず、友人同調尺度であるが、この尺度の得点範囲は1ないしは2点である。得点が2点の者は、1点の者に比べて、友人に同調する傾向を持つ。回答者600人のうち、1点の割合は67.3%（404人）、2点の割合は32.7%（196人）であった（第2章6節Fig. 2-6-1-2を参照）。

次に、友人非干渉尺度であるが、この尺度の得点範囲も1ないしは2点である。得点が2点の者は、1点の者に比べて、友人に干渉しない傾向を持つ。回答者600人のうち、1点の割合は57.8%（347人）、2点の割合は42.2%（253人）であった（第2章6節Fig. 2-6-2-2を参照）。

なお、これら2尺度は、得点範囲が1点ないし2点の2値であるため、これ以降、友人同調尺度については1点「非同調群」、2点「同調群」とし、友人非干渉尺度については1点「干渉群」、2点「非干渉群」とするカテゴリー変数として用いる。

Table 4-1-3-1は、『援助交際』の抵抗感や『援助交際』経験における、同調群と非干渉群の割合を示したものである。分析方法には、Fisherの直接確率法を用いた。その結果、同調群は、『援助交際』の抵抗感と経験のすべてにおいて、有意差が示された。

Table 4-1-3-1 『援助交際』の抵抗感・経験における同調群・非干渉群の割合(%)

	N	同調群	非干渉群
抵抗感（他者・お茶）	高	276 27.9 *	43.5
	低	318 36.2	41.5
抵抗感（自分・性交）	高	530 31.1 *	43.0
	低	63 44.4	36.5
『援助交際』経験	無	544 31.4 **	43.8
	有	30 56.7	30.0

『援助交際』抵抗感低群は高群に比べ、また、『援助交際』経験群は非経験群に比べ、友人に同調する傾向が高い。特にこの傾向は、『援助交際』経験群に強くみられ、友人関係における同調傾向という側面が、『援助交際』と深い関連があることが示された。なお、非干渉群の割合については、いずれにおいても有意な差はみられなかった。

②同調傾向・非干渉傾向の4類型化

上野ら(1994)に従い、先述した同調傾向と非干渉傾向の2特性を同時に検討するため、これら2尺度を組み合わせた「非同調・干渉群」、「非同調・非干渉群」、「同調・干渉群」、「同調・非干渉群」の4類型を設定した。Fig. 4-1-3-1に4類型の頻数分布を示す。

Fig. 4-1-3-1 同調・干渉の組み合わせの頻数分布

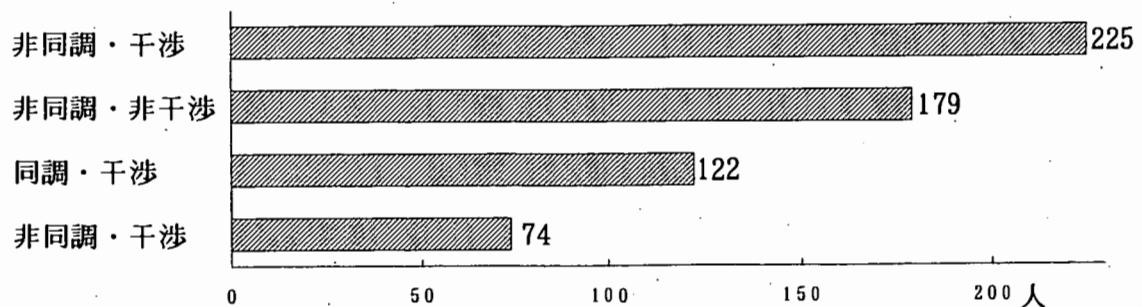


Table 4-1-3-2は、『援助交際』の抵抗感や『援助交際』経験における、同調・非干渉

の4類型の割合を示したものである。分析方法としては、 χ^2 検定を用いた。その結果、『援助交際』経験においてのみ4類型の割合に有意な差がみられた。

Table 4-1-3-2 『援助交際』の抵抗感・経験における同調・非干渉4類型の割合(%)

	N	非同調干渉	非同調非干渉	同調干渉	同調非干渉	χ^2 値
抵抗感（他者・お茶）	高 276	38.4	33.7	18.1	9.8	5.86
	低 318	36.8	27.0	21.7	14.5	
抵抗感（自分・性交）	高 530	37.7	31.1	19.2	11.9	5.86
	低 63	36.5	19.0	27.0	17.5	
『援助交際』経験	無 544	37.9	30.7	18.4	13.1	18.07**
	有 30	20.0	23.3	50.0	6.7	

『援助交際』経験の有無における4類型の割合をみると、『援助交際』経験群における同調・干渉群の割合が50.0%と非常に高く、同調・非干渉群の割合は6.7%と低かった。非干渉傾向は、先ほど個別に検討した際には『援助交際』との関連はみられなかったが、この結果より、同調傾向と組み合わせた場合において『援助交際』経験と関連があることが示された。

③友人自己開示尺度

第II部第2章6節において作成した友人関係に関する3尺度のうち、友人自己開示尺度と、『援助交際』の抵抗感や経験との関連を検討した。友人自己開示尺度の分布は、第2章6節(Fig. 2-6-3-2)に示されているが、平均=4.76 SD=1.12(得点範囲は3点～6点)である。

『援助交際』の抵抗感・経験と、友人自己開示尺度との関係をt検定によって分析した(Table 4-1-3-3)。

Table 4-1-3-3 『援助交際』の抵抗感・経験における自己開示尺度得点

	N	友人への自己開示尺度		
		平均	S D	t値
抵抗感（他者・お茶）	高 276	4.61	1.12	3.05 **
	低 318	4.89	1.12	

(Table 4-1-3-3 続き)

抵抗感（自分・性交）	高	530	4.76	1.13	0.25
	低	63	4.79	1.12	
『援助交際』経験	無	544	4.74	1.13	2.03 *
	有	30	5.17	1.05	

『援助交際』に対する抵抗感（他者・お茶）、『援助交際』経験において、友人自己開示尺度得点の有意な差がみられた。すなわち、抵抗感（他者・お茶）低群は高群に比べ、また『援助交際』経験群は非経験群に比べ、友人自己開示傾向が強いということが明らかとなった。なお、抵抗感（自分・性交）においては友人自己開示傾向に有意な差はみられなかった。

(2)周囲の『援助交際』経験との関連

『援助交際』に対する抵抗感や経験と、周囲の『援助交際』との関連を分析する。分析に用いた質問項目はTable 4-1-3-4の通りである。

Table 4-1-3-4 周囲の『援助交際』に関する項目

- Q23 3 友人がやっていれば、自分も援助交際をしてみたい
 Q24 SQ 友人から以下のような体験談を聞いたことがある
 a. 「金品と引き換えに、お茶やデートをすること」
 b. 「金品と引き換えに、セックス(性交)以外の性的行為をすること」
 c. 「金品と引き換えに、セックス(性交)すること」

まず、『援助交際』に対する抵抗感と、周囲の『援助交際』に関する項目との関係を、比率の差の検定（Fisherの直接確率法）によって分析した（Table 4-1-3-5）。その結果、まず、全体的に肯定率が低いことがわかる。抵抗感（他者・お茶）高群においては、本項目内容を肯定した者は276人中1人もおらず、抵抗感（自分・性交）低群においても、肯定率は7.9%にとどまっていた。このことは、『援助交際』の抵抗感が低いことが、必ずしも『援助交際』へ積極的に関わろうとする態度に直結しないことを示していると思われる。

Table 4-1-3-5 「友人がやっていれば、自分も援助交際をしてみたい」項目の肯定率(%)

抵抗感（他者・お茶）	高	276	0.0	**
			N 「友人がやっていれば、自分も援助交際をしてみたい」	

(Table 4-1-3-5 続き)

	低	318	3.5
抵抗感（自分・性交）	高	530	1.3
	低	63	7.9

続いて、『援助交際』の抵抗感・経験における、友人の『援助交際』体験談聴取経験の割合を、比率の差の検定（Fisherの直接確率法）によって検討した（Table 4-1-3-6）。

Table 4-1-3-6 『援助交際』の抵抗感・経験における友人の『援助交際』体験談聴取の割合

	N	お茶・デート	N	性交以外	N	性交
抵抗感（他者・お茶）	高	255 20.4 **	254	12.2 **	255 8.6 **	
	低	307 49.5	308	32.8	307 30.9	
抵抗感（自分・性交）	高	497 33.0 **	497	19.7 **	497 17.1 **	
	低	62 64.5	61	54.1	61 50.8	
『援助交際』経験	無	515 32.8 **	513	20.5 **	513 17.5 **	
	有	29 93.1	30	73.3	30 76.7	

抵抗感（他者・お茶）、抵抗感（自分・性交）、『援助交際』経験のすべての群分けにおいて、3種すべての友人の『援助交際』体験談聴取割合の有意な差がみられた。すなわち、抵抗感（他者・お茶）低群は高群に比べ、抵抗感（自分・性交）低群は高群に比べ、『援助交際』経験群は非経験群に比べ、友人の『援助交際』体験談聴取割合が高いことが明らかとなった。援助交際経験群については、特にその割合が高く、お茶やデートに至っては9割を超えており、これは『援助交際』経験者の友人に、『援助交際』を経験している者が非常に高い割合で存在するということを示している。

4. 経済環境や経済的な意識との関連

(1)高校生の経済環境

『援助交際』の原因を分析した多くの評論は、『援助交際』を行う女子高校生たちの金銭感覚の変容を指摘している。それらの評論では、『援助交際』をしている女子高校生は、遊んだり、ブランド品を買ったりするために、手軽に金を稼ぐことができる『援助交際』に走っているという論調がとられている。朝日新聞が1997年12月に全国の有権者3000名を対象に実施した世論調査（有効回答者2,304名）においても、『援助交際』の原因是「子どもをしつけられない親」（34%）と並んで、「物欲をあおる世間」（30%）が高くあ

がっていた（安達、1998）。

本項では、高校生の経済環境や経済的な意識が、『援助交際』への抵抗感や経験とどのように関連するかを分析する。

まず、本調査の回答者全体の経済状況を見てみよう。

親からもらっている小遣い額（Fig. 4-1-4-1）は、月に「5千円以上、1万円未満」が半数（47.5%）を占め、「5千円未満」（26.5%）が続いている。「3万円以上」の高額をもらっている高校生はわずか（2.3%）であった。

アルバイトをしている女子高校生は約半数（52.7%）で、アルバイトで得ている金額は、年額で「1万円以上、5万円未満」（アルバイト経験者の内の比率：25.9%）や「5万円以上、10万円未満」（同25.3%）が大半を占めている（Fig. 4-1-4-2）。ただし、年額で「2万円以上」と高額を稼ぐ女子高校生も2割以上（同21.2%）に達している。

Fig. 4-1-4-1 1カ月のお小遣いの額（N=600）

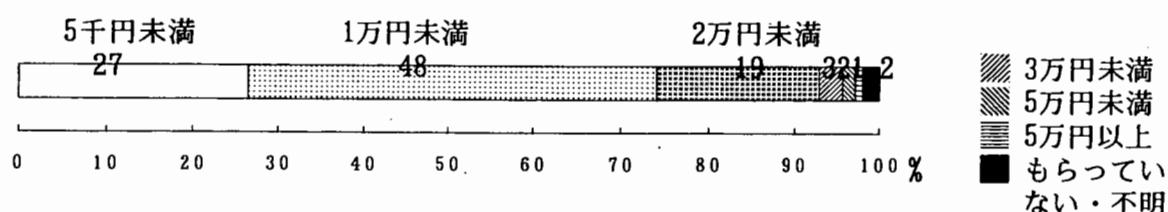
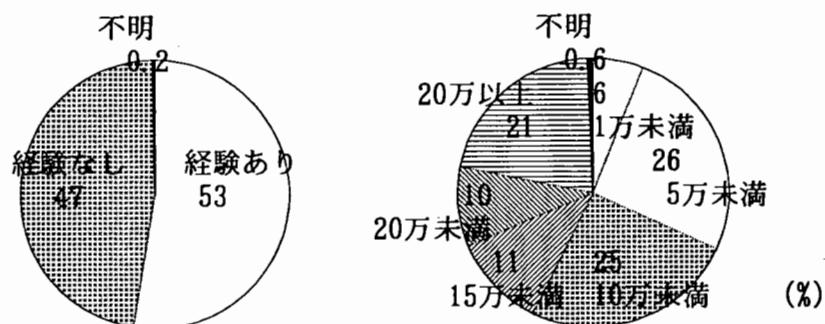


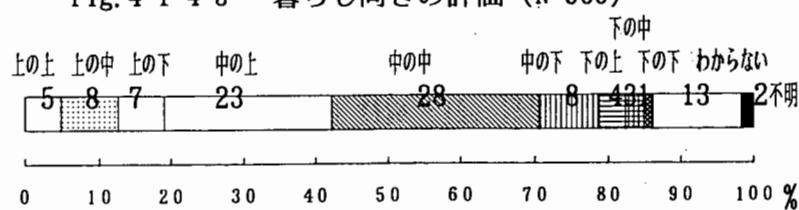
Fig. 4-1-4-2 アルバイト経験と年間のアルバイト収入（N=600）



本調査では家庭の階層帰属意識を調べるために、「あなたの家の暮らし向きは、次のうちのどれにあたると思いますか」という質問に「上の上」から「下の下」までの9段階の選択肢を設けて、単一回答法で回答を求めた。

高校生が認識する階層は、「中の中」（28.2%）と「中の上」（23.2%）が多く、回答者の半数以上がこの階層に含まれていた（Fig. 4-1-4-3）。「上の上」「上の中」「上の下」を合わせた上層意識を持つ高校生は2割（19.1%）で、「下の上」「下の中」「下の下」を合わせた下層意識を持つ高校生は1割弱（7.5%）であった。

Fig. 4-1-4-3 暮らし向きの評価（N=600）



金銭に関する意識については、第2章第4節で説明した項目を用いて、強迫的購買意欲尺度と金銭至上主義尺度を構成した。同節で述べたように、3～4割の高校生は「いつも何か買いたい気持ちがする」などの衝動的な購買傾向を示し、3割以上の高校生は「お金があれば、世の中のほとんどのことは困らないと思う」などのと金銭を重視する意見を持っていた(Fig. 2-4-1-1とFig. 2-4-1-2を参照)。

(2)『援助交際』に対する抵抗感・経験と経済環境との関連

以上の経済環境や経済的意識への回答と、『援助交際』に対する抵抗感や『援助交際』の経験との関連を分析した。

親からもらっている小遣い額は『援助交際』の抵抗感や経験と、有意な関連を示さなかった。家庭の階層帰属意識とも、関連は見られなかった。分析結果の一部をTable 4-1-4-1に示す。

Table 4-1-4-1『援助交際』経験別にみた階層帰属意識

	N	上	中の上	中の中	中の下	下
援助交際経験 無	473	22.4	26.6	31.9	9.9	9.1
有	24	20.8	29.2	37.5	4.2	8.3

Table 4-1-4-1からわかるように、『援助交際』経験のある24名のうち、家庭が上層であると意識している者は21%であり、下層であると意識している者は1割弱で、いずれも『援助交際』の経験のない者とほぼ同率であった。

このように、『援助交際』への態度や経験は、親の階層や親が与えている小遣いとは、関連していない。売春が成立する社会背景として、従来は女性の生活力のなさや家庭の貧困が重視されてきた。本調査の結果は、現代の『援助交際』がこうした経済的な背景を基盤にしていないことを明らかにしている。

親の経済環境は『援助交際』と関連しなかったが、本人のアルバイト経験は『援助交際』と密接に関連していた。

『援助交際』に対する抵抗感や経験別に、アルバイト経験率を比較したところ(Table 4-1-4-2)、すべての群で有意な差が見られた。『援助交際』に抵抗感をもたない群や『援助交際』の経験のある群は、抵抗感をもっている群や経験のない群に比べ、アルバイトの経験率が高かった。

こうしたアルバイト経験率の差が生じた理由はいくつか考えられる。第一に、『援助交際』の経験者が『援助交際』をアルバイトと見なして回答したために、『援助交際』を許容する者の経験率が高まったと解釈することができる。しかし、抵抗感群別にみた経験率の差が1～2割に達している結果を見ると、『援助交際』経験の有無だけが経験率の差を生んでいるとは考えにくい。このため、アルバイト経験が高校生の生活空間を家庭や学校以外に広げて、性風俗への接触を増させたため、『援助交際』への抵抗感を弱め、『援助

交際』経験を促したという第二の解釈も可能であろう。

なお、アルバイトで稼いだ年額と『援助交際』への抵抗感や経験との関連も分析したが、有意な群間差は見られなかった。

Table 4-1-4-2 『援助交際』抵抗感・経験別にみたアルバイトの経験率

	N	経験率	
抵抗感(他者・お茶)	高	276	44.2 **
	低	317	59.9
抵抗感(自分・性交)	高	529	50.9 **
	低	63	69.8
援助交際経験	無	543	51.6 *
	有	30	73.3

(3) 『援助交際』に対する抵抗感・経験と経済的な意識との関連

『援助交際』への抵抗感や経験と高校生の経済的な意識との関連を分析するために、抵抗感・経験の群別に、強迫的購買意欲尺度と金銭至上主義尺度の得点を算出し、平均値の差の検定を行った。結果はTable 4-1-4-3に示す。

『援助交際』に抵抗感が低い群は高い群に比べて、『援助交際』経験のある群は経験のない群に比べて、それぞれ、強迫的購買意欲が強く、金銭至上主義の態度が強かった。とくに、『援助交際』の経験のある群は、これらの得点が目立って高かった。

『援助交際』の経験のある者は、人よりいいバッグや小物をもってみたいと願い、いつも何かを買っていたい気持ちをもち、衝動買いをするような、強迫的な購買意欲を持っている。また、世の中はお金次第だと認識し、お金があれば心にゆとりができ、世の中のこととはほとんどのことは困らないと考える、金銭至上主義ももっている。他の高校生と比較して自分の持ち物の善し悪しを判断し、常に購買に駆り立てられ、金銭の価値を最重要視している高校生たちが、『援助交際』を通して自分の「夢」を叶えている様子がうかがえる。

Table 4-1-4-3 『援助交際』抵抗感・経験別にみた金銭に関する態度尺度

	強迫的購買意欲尺度				金銭至上主義尺度				
	N	平均	S D	t値	N	平均	S D	t値	
抵抗感 (他者・お茶)	高	276	2.30	1.22	6.35 **	276	1.95	0.97	3.89 **
	低	318	2.97	1.31		318	2.27	1.02	

(Table 4-1-4-3 続き)

抵抗感	高	530	2.61	1.29	2.83	**	530	2.07	1.00	3.67	**
(自分・性交)	低	63	3.10	1.35			63	2.56	1.03		
援助交際経験	無	544	2.60	1.29	4.84	**	544	2.07	1.00	4.80	**
	有	30	3.77	1.17			30	2.97	0.93		

上記2尺度に含まれなかった「お金をかせぐのは大変なことだ」の項目への肯定率を、『援助交際』の抵抗感や経験の群別に比較した。結果を、Table 4-1-4-4に示す。

『援助交際』(自分・性交)に抵抗を感じていない群は感じている群より、『援助交際』の経験のある群はない群に比べて、それぞれ「お金をかせぐことは大変」という認識が弱かった。

『援助交際』経験者は、『援助交際』を簡単に金を稼ぐ手段と認識されている様子が窺えた。

Table 4-1-4-4 『援助交際』抵抗感・経験別「お金をかせぐのは大変なことだ」の肯定率

N 肯定率			
抵抗感(他者・お茶)	高	276	82.6
	低	318	80.5
抵抗感(自分・性交)	高	530	83.6 **
	低	63	68.3
援助交際経験	無	544	82.7 *
	有	30	66.7

以上のような結果から、『援助交際』を行っている女子高校生たちの経済環境には、「貧困な家庭を助けたり、貧しさから抜け出すために身を売る」という、売春に関して從来指摘されてきた経済的背景を見いだすことはできない。家庭の貧しさや小遣いの少なさは、『援助交際』の直接的な原因にはなっていない。むしろ、他の高校生とや友人と比べて、自分の持ち物や服が「いい」ものであるかどうかという、周囲と比較した相対的な貧困感が『援助交際』の基本的な動機になっていた。これは、從来の売春の背景となっていた貧困と区別して、「相対的貧困感」と呼ぶことができよう。

友人と比較した相対的貧困感に動機づけられて、高度消費社会の中で購買に驅り立てられた女子高校生が、簡単に高額な金品を得る手段として『援助交際』を行うという図式が、浮かび上がってくる

5. 情報環境

(1)『援助交際』に対する抵抗感・経験とマスコミに流されない態度との関連

第II部第2章1節において作成したマスコミ鵜呑み尺度と、『援助交際』の抵抗感や経験との関連を検討する。マスコミ鵜呑み尺度の分布はFig. 2-1-3-1に示されているように得点範囲は、1点ないしは2点であり、得点が2点の者は、1点の者に比べて、マスコミの情報に流されない傾向を持っている。回答者600人のうち、1点の割合は70.5%（423人）、2点の割合は29.5%（177人）であった。なお、マスコミ鵜呑み尺度は、得点範囲が1点ないし2点の2値であるため、分析を行なう際、1点を「マスコミ鵜呑み群」、2点を「マスコミに流されない群」とするカテゴリー変数として用いることにする。

Table 4-1-5-1は、『援助交際』に対する抵抗感や経験における、マスコミ鵜呑み群の割合を示したものである。分析方法には、Fisherの直接確率法を用いた。

Table 4-1-5-1 『援助交際』の抵抗感・経験におけるマスコミ鵜呑み群の割合

	N	マスコミ鵜呑み群の割合
抵抗感（他者・お茶）	高 276	66.3 *
	低 318	73.9
抵抗感（自分・性交）	高 530	68.9 *
	低 63	82.5
『援助交際』経験	無 544	69.5
	有 30	83.3

抵抗感（他者・お茶）と抵抗感（自分・性交）において、マスコミ鵜呑み群の割合が有意に異なることが示された。『援助交際』への抵抗感が低い群は、抵抗感の高い群に比べて、マスコミを鵜呑みにする傾向が高い。また、『援助交際』の経験の有無における有意差はみられなかったものの、『援助交際』経験者におけるマスコミ鵜呑み群の割合は83.3%と高かった。このことから、マスコミを鵜呑みする傾向の高い女子高校生は、マスコミによる過剰な『援助交際』報道等によって、『援助交際』に対する抵抗感を麻痺させていると推測される。

(2)通信機器の所有

①通信機器の所有の状況

本研究では、『援助交際』の背景要因として、通信機器（携帯電話やP.H.S等）の使用に注目し、その所有の有無をたずねている。調査項目として用いたのは6項目で、回答方法は、回答者自身が所有しているものを、いくつでも選択することを求める多重回答形式である。Table 4-1-5-2は、調査項目と所有率を示したものである。

「携帯電話」は4.2%、「P H S」については29.3%、「ポケベル」に至っては過半数の50.2%の所有率を示していた。また、上記3種類の移動体通信機器のいずれも有していない回答者は33.5%であり、66.5%の回答者が、屋外において使用可能な通信機器を所有していた。一方「自分の部屋に自宅の電話の子機」を所有している者は27.5%おり、「持っているものはひとつもない」と回答したものは25.5%おり、回答者の74.5%が、何らかの自分専用の通信機器を所有していることが示された。

Table 4-1-5-2 通信機器の所有率

通信機器の所有に関する項目		所有率(%)
Q11	1. 携帯（けいたい）電話	4.2
	2. P H S（自宅の電話の子機として使えるものも含む）	29.3
	3. ポケベル	50.2
	4. 自宅に自分専用の電話（子機は含まない）	2.8
	5. 自分の部屋に自宅の電話の子機	27.5
	6. この中で持っているものはひとつもない	25.5
		(不明 0.5%)

②『援助交際』に対する抵抗感・経験と通信機器の所有

『援助交際』に対する抵抗感・経験と通信機器の所有の割合を、比率の差の検定 (Fisherの直接確率法) によって分析した (Table 4-1-5-3、Table 4-1-5-4)。

Table 4-1-5-3 『援助交際』の抵抗感・態度における通信機器の所有(%)

	N	携帯電話	P H S	ポケベル	専用電話	子機
抵抗感（他者・お茶）	高	276	2.2 *	24.6 *	40.9 *	2.9
	低	318	5.7	33.0	57.9	2.5
抵抗感（自分・性交）	高	530	3.4	27.7 *	49.2	2.8
	低	63	11.1	42.9	55.6	3.2
『援助交際』経験	無	544	3.7	28.5 *	49.6	3.1
	有	30	13.3	46.7	56.7	0.0
						46.7

「P H S」「何らかの通信機器」「何らかの移動体通信機器」については、すべての群

分けにおいて、所有率に差がみられた。「携帯電話」と「ポケベル」の所有率は、抵抗感（他者・お茶）においてのみ有意な差がみられた。また、「自分の部屋に自宅の電話の子機」がある者の割合は、抵抗感（他者・お茶）と『援助交際』経験において有意な差がみられた。それらはいずれも、抵抗感が低い群あるいは『援助交際』経験群ほど、その所有率がそうでない群に比べて高くなっていた。なお、「自宅に自分専用の電話」を持つ者の割合は、いずれにおいても差はみられなかった。

通信機器別にみると、「携帯電話」や「自分専用の電話」といった回答者全体における所有率が低いものや、「ポケベル」のように回答者の過半数が所有しているものについては、『援助交際』との関連が必ずしも示唆されてはいない。しかし、全体として、通信機器の使用による交際範囲の拡大や情報の流入が、『援助交際』への態度を変容させる一要因となっていると考えることができる。

Table 4-1-5-4 『援助交際』の抵抗感・態度における何らかの通信機器の所有(%)

	N	何らかの 通信機器の所有	何らかの 移動体通信機器の所有
抵抗感（他者・お茶）	高 276	64.1 **	55.1 **
	低 318	83.3	76.4
抵抗感（自分・性交）	高 530	72.6 **	64.5 **
	低 63	88.9	82.5
『援助交際』経験	無 544	73.2 *	65.1 *
	有 30	93.3	90.0

第2節 心理的背景

1. 自己意識

(1)女子高校生の自己意識の状況

『援助交際』に対する態度は、自分に対する意識や生活意識とどのように関連しているのだろうか。本研究では、女子高校生たちが普段感じている欲求や不安などを、様々な自己意識尺度を用いて測定している。本項では、『援助交際』を経験したり抵抗なく感じたりする者と、そうでない者との間で、背景となる心理の何が異なるのかを、これらの自己意識尺度を用いて明らかにする。

自己意識を測定する尺度として使用されたものは、Table 4-2-1-1に示す12尺度である。これらの尺度のうち、賞賛獲得欲求・公的自意識・私的自意識・自己認識欲求は既存の尺度を利用したものであり、現代の女子高校生がどの程度これらの心理傾向をもっているのかが明らかになっている（例えば福富, 1996など）。しかしそ他の尺度は、本研究で独自に作成したものであるため、女子高校生が全体としてこれらの意識をどの程度抱いてい

るのかは不明である。そこで、まずこれらの尺度の回答傾向について記述し、その後で『援助交際』への態度別に自己意識のあり方を検討する。なお、各尺度の項目別の回答分布、尺度得点の分布については、第2章5節を参照されたい。

<充実感>(Fig. 2-5-4-2参照)

充実感測定項目のうち、「生きていて楽しいと感じる時がある」については、肯定層（「あてはまる」「ややあてはまる」をあわせたもの）が8割に達している。しかし一方で、「毎日がなんとなく過ぎていく」「毎日が同じことのくり返しで退屈だ」の肯定層も6～4割で、一瞬一瞬の楽しさが充実感には結びつかず、なんとなく生きていると感じている者が多いようだ。この結果が、「毎日の生活が充実している」の肯定層4割という結果に集約されている。

<自己存在感のなさ>(Fig. 2-5-6-2参照)

「私のことを心から心配してくれる人はいない」「だれも私を相手にしてくれないような気がする」は7割近くのものが「あてはまらない」「あまりあてはまらない」と回答しており、切実な自己存在感の無さを抱くものは少ない。多くの女子高校生は、人間関係の中で自分の存在を確認しながら生きているといえる。ただし、「私はかけがえのない存在だ」の肯定層は3割で、自分の存在価値を自信をもって主張できるものは限られている。

<ぬくもり希求>(Fig. 2-5-7-2参照)

「だれかにそばにいてほしいと思うことがある」が6割以上、「たまらなくさびしくなることがある」が5割の肯定層を示し、女子高校生の過半数は、日常的に寂しさを感じ、誰かに甘えたい、ぬくもりが欲しいという気持ちをもっていることがわかる。「異性とふれあっている時は、さびしさを忘れられる」が約3割であることから、ぬくもりを求める気持ちを異性によって満たしている者も少なくないことが指摘できる。

<ミーイズム>(Fig. 2-5-8-2～Fig. 2-5-8-5参照)

本研究では、自己中心的で現在の自分のことのみを考える傾向をミーイズムとし、因子分析の結果から、現在重視・将来無関心・享楽主義・関心の狭さという4つの側面を持つことが示された。これら4側面のうち最も多くの女子高校生にみられた傾向は、現在重視である。「二度と来ない今が大切だ」の肯定層は8割近くに達しており、『今を大切にしたい』という感覚が、彼女たちの間に共通した心理であることが見て取れる。続いて強いのが享楽主義の傾向である。「自分が楽しいかどうかが、生きていく上で一番大切なことだ」「楽しくなければ生きているかいがない」「いつも楽しいことだけをしてみたい」といった項目の肯定層は5～6割である。現在重視・享楽主義の心理を併せた『今を楽しむ』という感覚が、彼女たちの間に強く存在していることが指摘できる。

一方、「今が樂しければそれでよい」「将来のことをいちいち考えて、それにしばられるのは不自由だ」の肯定層は3割程度である。上記の『今を楽しむ』ことの意味は、将来を視野に入れるか否かで大きく異なってくる。享楽主義的な色彩が強いとはいえ、将来に無関心なものは多数派ではない。また、「人に迷惑をかけなければ何をしてもよい」「他

人のために時間やエネルギーを使いたくない」と、自己中心的な関心の狭さを示すものも1～2割と少数である。なお、複数の侧面にかかわるものとして尺度項目からは除かれた「努力したり、がまんする事も、人生には重要だ」は、肯定層が85%に達している。この点からも現在重視・享楽主義的心理が現代の女子高校生の共通心理だとしても、それか必ずしも否定的な心理傾向を生むものではないといえるだろう。彼女たちの多くは、周囲のことや将来のことなどを念頭におき、限られた中で今を楽しもうとしているようだ。

<加齢不安>(Fig. 2-7-1-2参照)

「歳をとるにつれ、人生はつまらなくなりそうだ」「高校を卒業したら、流行の先端から外れてしまいそうでさびしい」の肯定率(あてはまると○をつけたものの割合)は1～2割以下で、全体としては、これ以上歳をとることを不安に感じる加齢不安はさほど強くない。さらに、「女性にとって若さは、最大の魅力である」の肯定率は約4割で、加齢を不安に感じるというよりも、若い自分に価値を置きそれを謳歌しようとする姿勢がうかがわれる。

以上本研究で独自に作成した自己に関する意識尺度について、全体的傾向を述べた。これを含め、本研究で使用した自己意識尺度の基本統計量をTable 4-2-1-1に記す。可能な得点範囲が尺度ごとに異なるため、平均値などをこのまま比較することはできない。なお、ある尺度に含まれる尺度項目に欠損値を一つでも持つ回答者の評定値は当該の尺度得点の算出の際に取り除いたため、欠損値の有無によって尺度ごとに回答者数が異なっている。

Table 4-2-1-1 自己意識に関する各尺度の基礎統計量

(可能得点範囲)	N	平均	S D
・賞賛獲得欲求 (4～20点)	592	13.14	3.57
・公的自意識 (4～20点)	593	14.31	3.18
・私的自意識 (4～20点)	581	13.73	3.47
・充実感 (6～30点)	587	19.24	4.80
・自己認識欲求 (5～25点)	594	19.62	4.00
・自己存在感のなさ (6～30点)	585	13.69	4.81
・ぬくもり希求 (5～25点)	592	17.58	5.00
・現在重視 (5～25点)	596	11.30	2.34
・将来無関心 (3～15点)	593	8.28	2.91
・享楽主義 (3～15点)	595	14.11	3.11
・関心の狭さ (4～20点)	593	12.34	3.69
・加齢不安 (5～10点)	600	2.18	1.11

(2) 『援助交際』に対する抵抗感・経験と自己意識との関連

『援助交際』に対する抵抗感・経験による群分けに基づいて、『援助交際』に対する抵抗感や経験と、自己意識との関連を検討した。具体的には、『援助交際』に対する抵抗感と援助交際の経験の有無を独立変数とし、各自己意識尺度を従属変数としたt検定を行った。その結果が、Table 4-2-1-2に示されている。

これら3パターンの分析は、全体としていずれも類似した傾向を示しているが、有意差が多くみられたのは抵抗感（他者・お茶）別である。『援助交際』（他者・お茶）に対する抵抗感の低いものは、賞賛獲得欲求・公的自意識・ぬくもり希求・将来無関心・享楽主義・関心の狭さ・加齢不安が高く、自己存在感のなさを感じ、その一方で充実感が低いことが示されている。

抵抗感（自分・性交）別では差の示された項目はやや少ないが、『援助交際』（自分・性交）に対する抵抗感の低いものほど将来無関心・享楽主義・関心の狭さ・加齢不安が高く、自己存在感のなさを感じ、自己認識欲求が有意に低かった。

『援助交際』経験別の結果は、抵抗感（他者・お茶）別の結果と類似しており、経験者ほど、賞賛獲得欲求・公的自意識・将来無関心・享楽主義・関心の狭さ・加齢不安・ぬくもり希求が高く、自己存在感のなさを感じることが示されている。

これらを通してみると、3パターンいずれの分析においても、『援助交際』に抵抗の低いものたちは、将来無関心・享楽主義・関心の狭さというミーアイズムの3側面が高かった。このことから『援助交際』を肯定する心理は、“先のことは考えず” “楽しく” “私が” 過ごすことを優先させる姿勢と結びついているといえる。前述のように、享楽主義的な傾向は現代女子高校生全体にみられるものだが、他者の『援助交際』を認めるものは、この享楽主義的傾向がさらに強いと共に、将来無関心と関心の狭さと結びついているといえるだろう。

その一方、『援助交際』に抵抗感の低いものは、自己存在感のなさ、ぬくもり希求の高さ、充実感の低さといった、“満たされない思い”が高いことも示されている。毎日の生活で感じる空虚感を、瞬間的な享楽によって満たそうとすることが『援助交際』に向かわせる原因のひとつなのかもしれない。また、『援助交際』に抵抗の低いものほど、賞賛獲得欲求・公的自意識が強いという結果から、他者からよく思われたいという欲求が、『援助交際』に向かわせる流れが推測される。『援助交際』を認める女子高校生達の意識において、『援助交際』は、空虚な日常の中で、他者に認められる方法、しかも苦労せずに今だけを楽しく過ごしたいという気分を損なわない有効な方法として位置づけられているのだろう。

また『援助交際』に対する抵抗感の低さが、加齢不安と結びついていることも注目される。女性の価値を若さにおき、若い今が一番楽しい時であるという考え方があるが、将来に対して継続的な視点をもつ機会を失わせ、楽しむのは今しかないという享楽主義と結びついた時に、『援助交際』を認める結果になるのではないだろうか。

以上の結果から、『援助交際』に対する抵抗の高低は彼女たちの生き方に対する姿勢と深く関連していると結論づけられる。将来に対する時間的展望をもたないこと、若さに対する執着心、享楽的な生活志向が、『援助交際』を肯定する姿勢につながるとともに、充

実感や自己存在感を感じられない彼女たちが、他者から認められるための一つの手段として『援助交際』を位置づけていると考えられる。

なお、他人が『援助交際』をすることに心理的抵抗を感じないものの心理傾向は、『援助交際』を経験したものとほぼ同様であった。本調査において実際に『援助交際』を経験したものはごくわずかであるが、『援助交際』をしたことがなくても、他者がそれを行うことに抵抗のない女子高校生の心理状態は、『援助交際』を経験しているものと近いといえるだろう。

Table 4-2-1-2 『援助交際』への抵抗感・経験と自己意識

		賞賛獲得欲求				公的自意識			
		N	平均	S D	t値	N	平均	S D	t値
抵抗感	高	271	12.71	3.68	3.04 **	273	14.02	3.06	2.12 *
(他者・お茶)	低	315	13.59	3.37		316	14.57	3.25	
抵抗感	高	522	13.09	3.54	1.1	524	14.28	3.11	0.73(Welch)
(自分・性交)	低	63	13.62	3.81		62	14.65	3.77	
『援助交際』	無	537	13.05	3.50	3.96 **	538	14.26	3.17	2.76 **
経験	有	30	15.63	3.19		29	15.93	3.34	
		私的自意識				充実感			
		N	平均	S D	t値	N	平均	S D	t値
抵抗感	高	270	13.82	3.42	0.49	267	19.71	4.78	2.19 *
(他者・お茶)	低	306	13.68	3.51		314	18.84	4.75	
抵抗感	高	513	13.81	3.42	1.17	519	19.40	4.71	1.93
(自分・性交)	低	61	13.26	3.89		61	18.15	5.39	
『援助交際』	無	529	13.86	3.42	1.30	532	19.31	4.75	1.10
経験	有	29	13.00	4.19		29	18.31	5.50	
		自己認識欲求				自己存在感のなさ			
		N	平均	S D	t値	N	平均	S D	t値
抵抗感	高	272	19.79	3.83	0.79	269	13.07	4.89	2.71 **
(他者・お茶)	低	316	19.54	4.08		310	14.14	4.65	